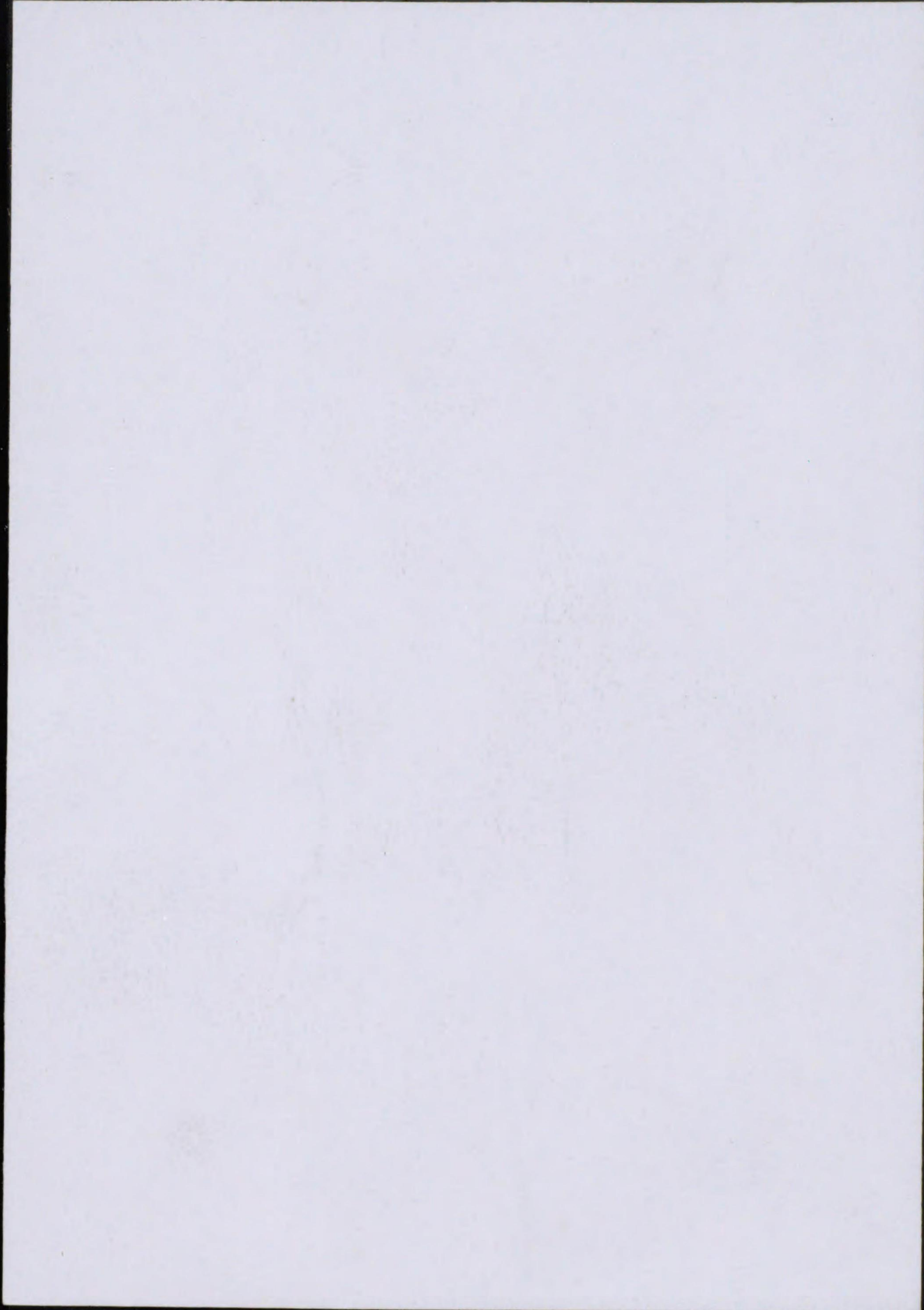


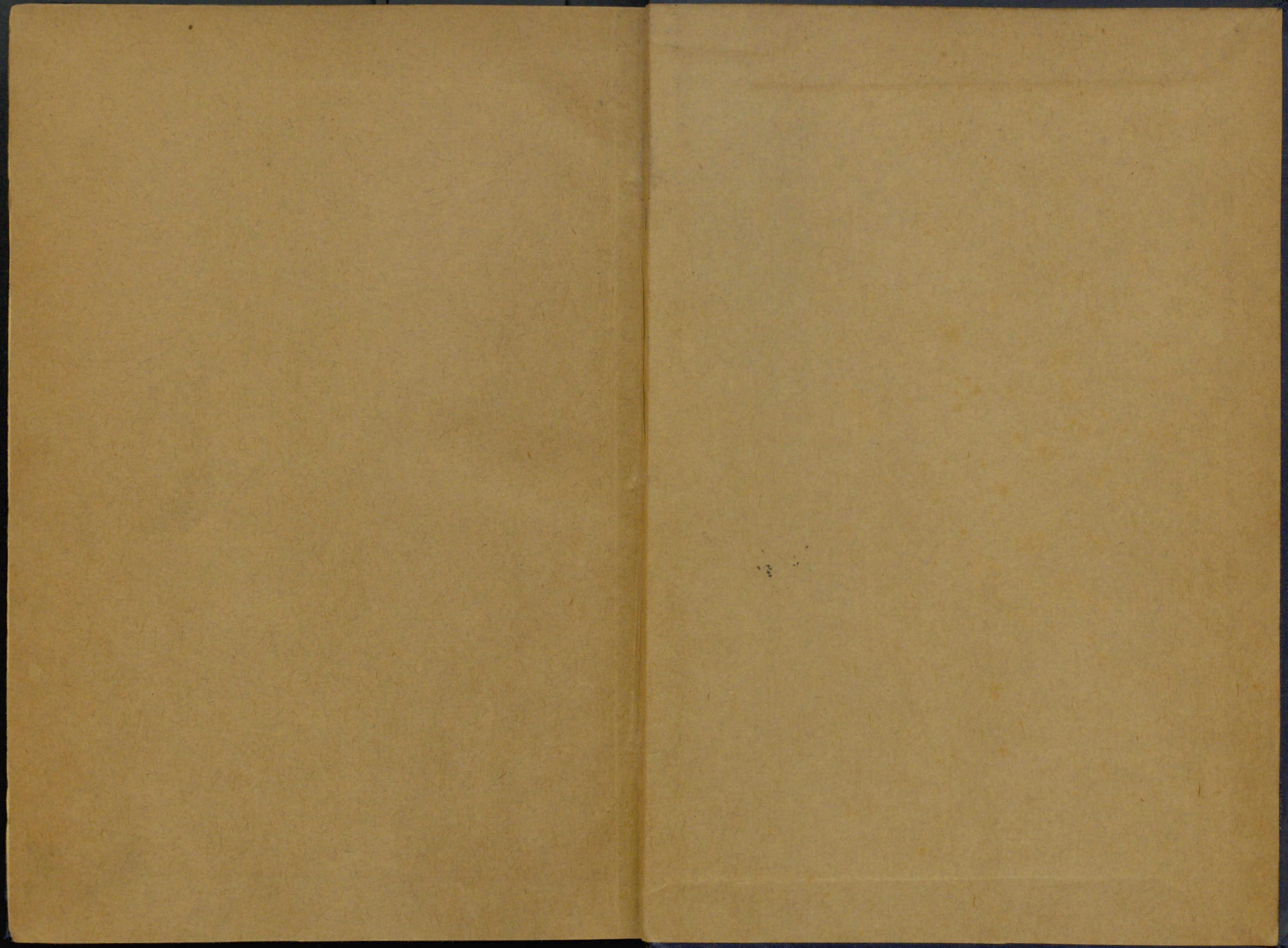
583

583-15



1200501523060





水谷不倒校訂



訂改
脚本
傑作集

帝國文庫
第廿五篇



脚本

東京
博文館版

解題

水谷不倒

歌舞伎の脚本は昔から餘り刊行されなかつたものである。江戸期に在つては、僅に二度公開の機會があつただけだ。第一の場合、元祿を中心とする狂言本の刊行された時、第二の場合、文化文政の頃、上方に於いて、根本が刊行された時である。前は我歌舞伎の第二の發展期であり、後は寶曆寛政から延長された全盛時代で、此脚本の公開は即ち芝居繁榮の象徴であつたとも云へる。其外はすべて脚本は封鎖されて、一般には見ることの出来なかつたものである。されば長い蓄積の間に、散佚もし焼失もして、後世に傳はらなかつたのがどれだけあつたか、蓋し夥しい數に上つたことであらう。兎も角狂言本なり根本なり、たとへ一小部分であつても、今に傳はつたのは慶ぶべき事とはいはねばならぬ。此の狂言本から根本に至るまでの推移について、一言したいと思ふ。

狂言本は今知れてをるものでは、貞享元年刊、都方太夫座上場の『大名なぐさみ會我』及び同年の『百夜小町』、『夕霧七年忌』などが最も古いやうだ。其他元祿初年に刊行されたものは、近松門左衛門の作が過半を占めてをる所を見ると、近松が直接もしくは間接に刊行の機會を與へたものと思はれる。勿論當時は文學、出版の興隆時代であつたから、其氣運に促されたものであらうが、兎に角是等最初の二三に就いて見ると、三番續きの狂言で、大體お家騒動が骨子となり、其れに武勇事、傾城事、所作事等を以て配色され、狂言の脚色上既に一定の型があつた。而して概ね時代物であつて、純世話劇はまだ一向流行するに至らなかつたが、併し前記『夕霧七年忌』は、唯一幕ではあるが、

獨立した世話狂言であり、なほ是より以前、延寶六年の二月、夕霧の歿した後直ちに、坂田藤十郎が大坂荒木與次兵衛座に於いて、『夕霧名残の正月』といふ狂言を上演したとすれば、世話狂言は實に延寶に濫觴したのである。而して時代物の内でも、傾城事の場面は遊廓の現實描寫であつたから、上方では可なり早くから世話狂言が發達してゐたと云へる。併し之は役者に、坂田藤十郎といふ傾城買の開山があり、作者に近松があつたからである事はいふまでもない。

當時近松は坂田藤十郎、水木辰之助等の爲に、多く狂言を作り、又同時に富永平兵衛といふ作者があり、其他白石彦十郎、福岡彌五郎、安達三郎左衛門、榊山勘助、佐渡嶋三郎右衛門などの作者の名が見えてをる。尤も彼等の中には、役者で作者を兼ねた人が多かつた。今刊行本の狂言本に就いて見ると、近松門左衛門の作が最も多く、其他は一二種に過ぎないものもある。

江戸は上方に比すれば、すべてが少し遅れてゐたが、狂言本は殆んど同時に發行された。其作者には元祖市川團十郎、宮崎傳吉、藤本平左衛門、津打次兵衛、中村清五郎等が前後に出た。中にも團十郎は荒事の開山として、自家の狂言を脚色する爲に作者を兼ね、演技上に多くの型を傳へた。此荒事は原來團十郎の專賣ではあつたが、併し江戸歌舞伎一般の風潮をなし、曾我、小栗其他金平系の狂言が行はれた。尤も一方には傳統的に所作事が迎へられ、又中村七三郎の如き和事師があつて、『淺間獄』の狂言では、坂田藤十郎をも凌いだのであるが、江戸の特色は主として武勇事にあつて、上方の傾城事に對比した。以上は其一班に過ぎないが、要するに狂言本の刊行があつて、はじめて元祿劇の概畧が知れるのである。

正徳以後に至りては、此狂言本の刊行が中絶された。廢刊の理由が何であつたか詳でないが、前の反動から來た歌舞伎衰微に起因してゐる事は疑ひない。殊に上方に於いては、操芝居即ち義太夫節の全盛時代であつたから、其壓迫を受けた事少からず。狂言作者として花やかな生活を見せた近松門左衛門も、疾くに見切りを附けて、彼れは竹本座の立作者に納り、其他苟も文才ある者は皆竹豊二座に走つて、歌舞伎の作者部屋に其人なく、劇作の不振が此結果を招來したものに外なるまい。されば正徳以後姑くは、脚本については何も云ふべき材料がない。由つて以下三四十年を一跨ぎにして、延享、寛延に到着する。既に時代が一變して、一時榮えた操芝居の人氣も去つて、歌舞伎が勢力を盛返し、殊に劇作新興の氣運が動き、其所に一人の登場人物が現はれた。登場人物とは即ち奇傑並木正三である。

並木正三は道頓堀の芝居町に産れ、幼少から人形、操、歌舞伎すべて劇界の雰圍氣に人と爲り、文藝の才能に恵まれ、父正兵衛が出羽芝居の關係から、まだ十四五歳の久太と云つた頃、既に「若水千歳狐」と云ふ、手妻水からくりの仕掛を工夫して其片鱗を閃し、寛延元年八月、中村喜代十郎芝居にて、當時戀愛の纏れから、鍛冶屋の娘が傷けられた一件を、三番續きの狂言に仕組み、狂言作者泉屋正三」と名乗つたが、彼れが作者生活に入る第一歩で、時に彼れは十九歳の青二才であつた。いかに彼れが秀才であり又其頃作者に缺乏してゐたか判かる。其後並木宗輔の門人となり、並木正三と改め、姑く淨瑠瑠を作つてゐたが、やがて歌舞伎に復り、爾來狂言作者として目覺しい活動を續け、生涯の述作七十餘種に及んだ。中にも『大和國井出下紐』、『けいせい天羽衣』、『天竺徳兵衛聞書往來』、『霧太郎天狗酒盛』、『桑名屋徳藏入船嶮』、『日本一和刈神事』、『三十石體始』、『宿無團七時雨傘』等は、彼れの當り作であると同時に、又其頃の代表作であつた。彼れは新事實を扱ふことを好み、世上に發生する事件、即ち社會種はいつも看過しなかつた。されば彼れは割合に世話狂言を多く書き、而して其世話狂言には、三面記事的双傷沙汰を脚色したものが多かつた。時代物といへども、近代的の題材を選び、現實に觸れて一種社會劇の傾向を帶び、在來のお家騒動、敵討の上に、新しい何物かを取入れることを怠らなかつた。例せば天竺徳兵衛、桑名屋徳藏、川村瑞軒の如き近代的人物を主役に扱ふた如き、又『天羽衣』に於いて「キノニノヤノハノモノ北川惣左衛門宿」といふ流行病の呪の宣傳

されるを見て、北川惣左衛門、本名足利某が、赤松四郎と謀り足利家を滅さんと企て、四郎は疫病神の姿に變じて諸國を忍び歩き、互ひの暗號に「キノニノヤノハノモノ」を利用した意匠の如き、其着想の斬新にして常に人意の表に出んとした如き、一方から云へば、彼れは場當りの天才、又際物師でもあつたが、併し脚色の奇抜なる點に於いては、何人も追従を許さなかつた。なほ彼れは舞臺裝置構造にまで于渉し、左右の大臣柱を除き、せり出、引き道具、廻り舞臺等幾多技術上の發明をなした事は有名な事實である。惜い哉頗る短命で、安永二年四十四歳で歿した。併し彼れに由りて築かれた大阪の劇壇は、全く舊來の面目を一新して、寶曆、明和、寛政の全盛時代を打出する動機となつた。されば又文才が歌舞伎に集り、正三の門下からは並木五瓶、奈河龜助、辰岡萬作等が出て、龜助の門人には七五三助、篤助、晴助、近松徳三等の作者が輩出して、浪花劇壇空前の賑ひを呈し、新作脚本は堆積山をなし、其れが横溢して爰に再び脚本の刊行を見る事になつた。而して是等刊行の脚本は、繪入稗史の體裁に倣ひたるもので、之を一般に根本と稱し、恰も享和二三年から文化文政天保に及び、其數約六七十に達し、寶曆以後の佳作、代表作はほゞ刊行されるに至つた。

江戸に於いても、正徳以後狂言本は中絶した。併し其事情は上方とおのづから異なるものがあらう。而も元祿の反動で一時不振に陥つた事は同じで、但江戸は、明和寛政の黄金時代に入つて、金井三笑、堀越榮陽、櫻田治助等の作者が出た時も、再び脚本は公開しなかつた。其後南北の作が二三上方式の根本に刊行された外は、寫本として残存したものは別として、刊本は殆んど傳はらなかつたが、文化以後のものは、讀切合巻として筋書様の刊本は若干あるが、脚本として刊行されたものは、上記元祿の狂言本と根本との二種類で、其數は二百種に足らず。尤も寫本の儘傳存したものは詳知するを得ぬ。

此「脚本傑作集」に收めたものは、寶曆以後歌舞伎全盛時代に於ける代表者の又代表作を選抜した九種で、之を見れば當時の劇作の大體が判かる。以下順次解説することにする。

三十石船始

並木正三の作、此狂言は河村瑞軒が淀川を浚渫したといふ事件を扱つたものであるが、事實に由つたのではなく、瑞軒を川浦遊軒として實惡に仕立、又神道源八、關口平太の兩立物の如きも、淀川筋にある源八渡、平太堤の地名から案出した人物で皆架空の構想である。遊軒が職權を濫用して獅子飛の險を切り、淀與三右衛門を脅迫する所は、貧吏の性格を描いて世を諷し、釣花生から、曳船の工夫を發明するは、例の水からくりの意匠に出て、作者が正三だけに意義があるやうに思はる。上場は寶曆八年の春、角芝居の二の替りて、當時人氣役者の中山文七が神道源八、三耕大五郎が關口源太で、劍術試合の場合は最も評判よく、四幕目「淀與三右衛門屋敷の場」で、敵討になり、舞臺が回る工夫は見物を驚したといふ。前にも記した如く、廻り舞臺は正三の工夫で此時から始つたのである。

宿無團七時雨傘

これも正三の當り作の一。明和五年八月廿二日、岩井風呂の殺人事件を、正三が一夜附の急作で、直ちに若太夫芝居で上場したといふ、際物で有名な作である。作中の人物に、正三が出てをる事については、書卸しの際は正三でなく、高砂屋平左衛門であつたと云ふ。尤も平左衛門は、正三の通稱であつたといふから、どちらでも同じ理屈であるが、何故か作者の歿後に正三に改めたものらしい。又正三が出てをるからでもあらうが、此狂言は正三の作でないといふ説もあるが、之に限らず社會種を扱つて、狂言に急作するは、むしろ彼れの得意であつたから、やはり彼れの作に相違あるまい。殊に役者に對する態度、之は正三の平常を現はしたものであらう。

五大力戀緘

並木五瓶の作である。五瓶は初名五八と云ひ、正三の門人となつて、並木五瓶又五兵衛とも稱してをる。通稱は和泉屋、曾て今宮邊に煙草屋を出し、又居酒屋をして生活の資としてゐたことがある。上方作者中の俊才で、世話狂言を得意とした『五大力戀緘』、『けいせい倭莊子』、『天満宮榮種御供』、『金門五三桐』、『隅田春妓者容性』等著名な作である。『五大力』は元文二年、北の新地の五人斬を仕組んだもので、之が五瓶の作になるまでには、迂折曲折の由來があつた。最初は事件後二十一年目の寶曆七年に、近松半二が竹本座の淨瑠璃に作り、『薩摩歌妓鑑』と稱したが、其後歌舞伎にも操にも上場されて、安永六年濱芝居にて『初嵐元文斬』で上場した時は、佐久間源五兵衛を、敵役柴崎林左衛門が演じ、菊野殺しは吉田文三郎の型を取つて實惡に成り果せ、凄慘鬼氣人に迫るものがあつたのを、五瓶が作の性根を一變して、源五兵衛を立役に改作したのが彼れの技巧といはれてをる。五瓶の作として上場したのは、寛政四年四月、中の芝屋の切狂言に『五人切五十年廻』と題して出したのが始めて、二度目は寛政六年二月中の芝居で、『鳥廻戲聞書』と題し、三幕目までは島津の琉球征伐と組合せになつてゐた所、此時代物の所は評判餘り香しからず、四幕目以下富田屋の場になると毎日大入であつたから、次の興行に富市以下を獨立の狂言として、『五大力戀緘』と改題したといふ。然るに五瓶は同年の冬、給金三百兩にて江戸に招聘せられ、都座にて翌七年の春狂言の二番目に『五大力』を出し、小萬は瀬川菊之丞、源五兵衛は澤村宗十郎で、宗十郎の五人殺しが大評判で、七十五日打続け、『五大力』と共に、作者並木五瓶の名が江戸中に廣まつた。

隅田春妓者容性

翌寛政八年の春、五瓶は桐座で、やはり宗十郎に附いて、『曾我大福帳』の二番目に此『妓者容性』を上場した。宗十郎の梅の由兵衛、菊之丞の女房お梅と丁稚長吉の二役、宗十郎の長吉殺しは無類の出來で、是又大評判、ますく五瓶の名が揚がつた。當時江戸には、堀越榮陽、櫻田治助等老功の作者があり、五瓶は新下りでありながら、彼等の間に介在して一方の勢力となり、能く其地位を保つたのは、宗十郎といふ有力な背景があつたからであらうが、併し彼れの非凡な手腕には服せざるを得なかつたのであらう。されば彼れは上方趣味と江戸趣味との調和を計り、更に一流を立て、江戸の人氣に投じ、長く足を留ることになつた。

伊勢音頭戀寢刃

近松徳三の作である。徳三又徳叟とも記す。大阪伏見坂町の娼家大榭屋の主人で、俳名雅亮と稱す。芝居を好み、近松半二の門人となり。寛政中頃から狂言作者となつた。『伊勢音頭』は彼れの當り作で、伊勢の御師齋宮が、古市油屋の女郎おこんと痴情の果、大勢を殺害した事件を、當時彼地より詳細通信した者があつたので、直ちに潤色して狂言に仕組みたる事は世の周知する所である。『宿無團七』といひ、『五大力』といひ、双傷沙汰を狂言に脚色する事は當時一ツの流行となつてゐた。

傾城筑紫歌

作者は奈河暗助。暗助は龜助の門人、篤助事一洗の弟子で、後豊勝助とも稱した。京都の産で通稱宮島屋喜兵衛。もとは素人狂言や俄の作者であり、中頃京道場芝居に關係してゐたのを、西澤一鳳の父利兵衛が大阪に呼下したと『傳奇作書』は記してをる。『筑紫歌』は原來芝屋司馬叟が長話(一種の講談)中に『葬』と題する話があつたのを、曾て歌

舞伎に上せたき希望あり、依て近松徳三が、宮城阿曾次郎（駒澤次郎左衛門）を嵐吉三郎（璃寛）に宛て、大體書卸したが、深雪を勤むる女形なきたため、筐底に了ひ四五年経過する内に、司馬叟も徳三も故人となり、其後文化十一年に至り、澤村田之助が大阪に下つた時、容色は優れ、殊に琴三味線に堪能にして、深雪をする者は、當時田之助を措いて、他に適當の女形なしといふ定評であつたから、晴助をして故人の遺稿を潤色して『けいせい筑紫嶽』と外題を据ゑ、吉三郎の駒澤に、田之助の深雪で大當りを取り、扇子團扇其他種々の模様を、一時悉く朝顔化したといふ由來附の狂言である。されば晴助の作とはいひながら、原作者は近松徳三であつた。

敵討浦朝霧

これも晴助の作である。説經チヨンガレで語る「女盜賊」と「巡禮殺し」とを取合せて脚色した狂言であるが評判が好かつたといふ。

御ひいき勸進帳

櫻田治助作。治助は通稱中村平吉といひ、狂言堂、又左交と號した。堀越菜陽の門人で、寶曆から文化にわたり、江戸作者の巨臂である。世話狂言を得意とし、作る所の淨瑠瑠百餘番に及ぶ。『御ひいき勸進帳』は安永二年中村座の顔見世狂言に上場したもので、三建目は團十郎（五代目）の「暫く」、四建目は半四郎の忍の前、幸四郎（四代目）の義經、團十郎の御馬屋喜三太で、淨瑠瑠「色手綱戀の關札」五建目の「安宅關」は團十郎の富樫、幸四郎の義經、海老藏の辨慶で勸進帳。名優揃ひの大芝居として好評を博した脚本で、荒事所作の見本を集めたともいふべき、江戸狂言の特色を發揮したものである。

東海道四谷怪談

作者鶴屋南北は初名勝俵藏と云つて、狂言作者金井三笑の門人である。三世南北の女婿となり、後に舅の名を襲いて四世鶴屋南北と改稱した。尤も三世までは役者であつて、作者は彼れが初めてである。滑稽頓才、世話物に長じ、殊に怪談狂言を得意とした。初世尾上松助は怪談狂言の元祖で早替りの名人と稱せられたが、南北の才を認め、文化元年特に南北をして『天竺徳兵衛韓斬』を書かしめ大當りを取り、之が出世の端緒となり、累進して立作者となり、文化文政を盛時として述作百餘番の多きに達し、幕末掉尾の大作者と稱せられた。當時役者には尾上松助、其子菊五郎（三代目）五世松本幸四郎、五世岩井半四郎、澤村田之助、坂東三津五郎、七代目團十郎など名優揃ひであつたが、南北は各其特長に宛て狂言を書卸し、常に好評を博した。就中幸四郎、菊五郎の藝風に對しては、意氣の投合するものあつて、其妙技を發揮したと云ふ。『四谷怪談』は、文政八年七月廿七日より、中村座の二番目に上場し、團十郎の民谷伊右衛門、幸四郎の鰻ほり權兵衛、菊五郎のお岩で好評を博し、今屢々繰返さるゝこと周知の通りである。

—— 解題終 ——

目次

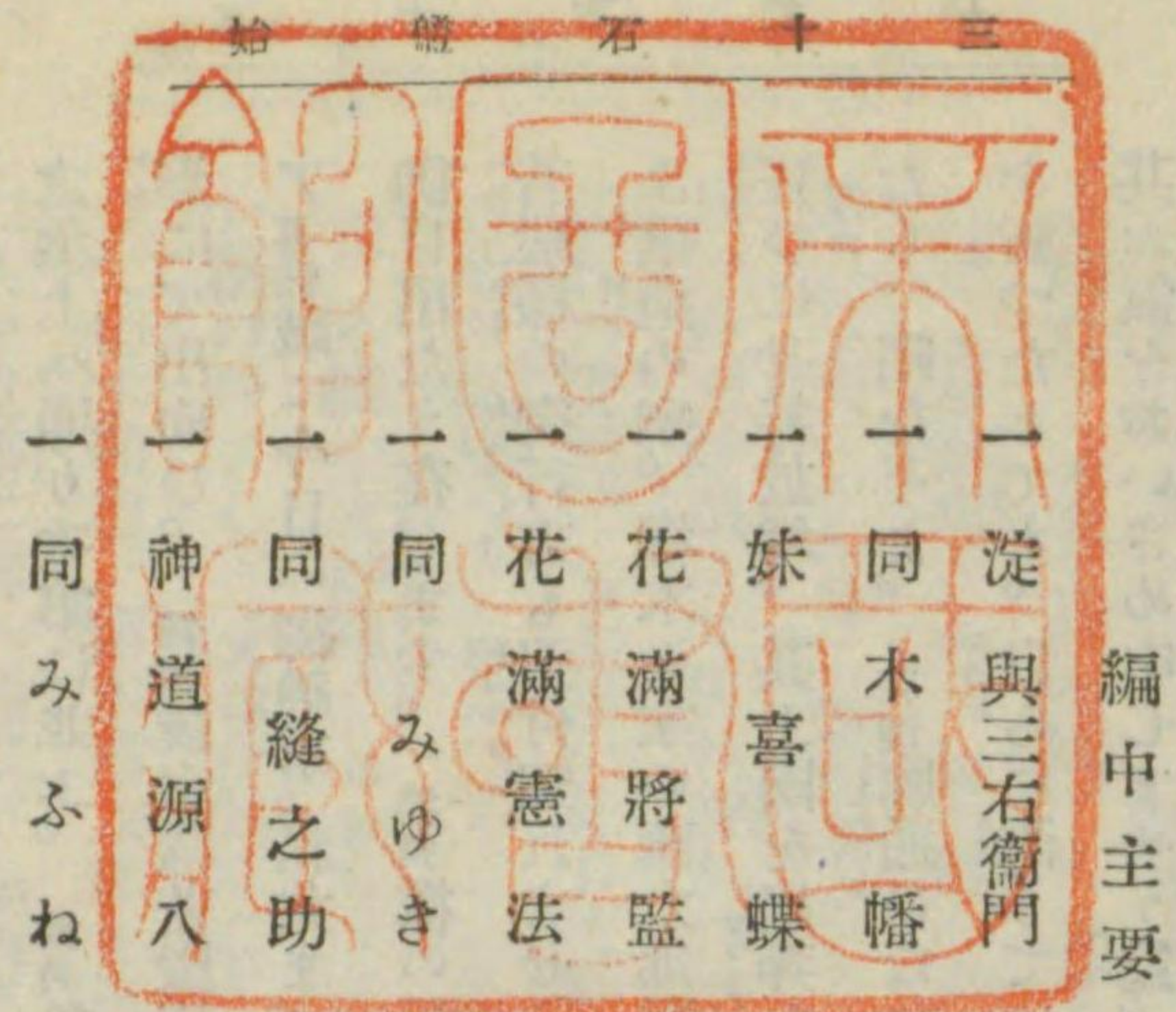
✓三	十石燈始	一
宿無團	七時雨傘	七
✓五	大力戀絨	一三
隅田	春妓女容性	一九
✓伊勢	音頭戀寢刃	二四
傾城	筑紫鞞	三二
敵討	浦朝霧	四九
✓御	ひいき勸進帳	五九
東海道	四谷怪談	六七

—— 目次終 ——

三十石燈始

三十石燈始

狂言作者 並 木 正 三



編中主要人名

一 淀	一 與三右衛門	一 記	一 内	一 榛	一 揚屋才兵衛
一 同	一 木	一 小姓紋之丞	一 彌五原三平	一 彌五原三平	一 權九郎
一 妹	一 喜	一 志賀左近	一 古川十内	一 古川十内	一 茂治兵衛
一 花	一 滿將監	一 熊本辨之作	一 まき山新治	一 まき山新治	一 與九郎
一 花	一 滿憲法	一 關口平太	一 津田伴之進	一 津田伴之進	一 おおふね
一 同	一 みゆき	一 玉淵久馬	一 傾城花浦	一 傾城花浦	一 おおまつ
一 同	一 縫之助	一 石橋中將	一 同	一 同	一 勅使辨の中將
一 神	一 道源八	一 圖	一 幫間小市	一 幫間小市	一 其
一 同	一 みふね	一 川浦遊軒	一 山家屋太郎右衛門	一 山家屋太郎右衛門	一 他

序 幕 御殿の場 (座敷狂言)

造物三間の間に社壇一面の玉垣。前に櫻幕引くと太鼓打ち懸る。面白や三保の津の浪といふ歌になる。向ふより

紋之丞花浦唐子大勢太鼓にて踊り出る。跡より總角喜蝶ふり袖にて、喜蝶は烏帽子釣鯛持ち悪比須の心にて出る。總角は唐子打連れ。はうろく頭巾。袋かたげ槌を持ち。大黒の形にて。少しえびす大黒三社の様な歌にて所作事有りて仕舞かぐらになる。ト

内より後室様のお入。喜蝶いざお入遊ばされませう。ト記内後室の形。中將は山伏玄妙院。才兵衛上下にて出る。花浦。紋之丞上へ通り次第に並ぶ。總角後室様には御參詣でござりまする。記内一家中のもの大儀にこそあれ。ト圖書神主の形にて出向ひ。圖書後室様若殿様姫君様御參詣でござりまするか。紋之神主右京今日は神事勤大儀にこそあれ。圖書ハア喜蝶誠に今日の御神事。私共まで斯様な悦ばしい儀はござりませぬ。追付御願が成就させようと思存する故。たゞ御目出たう存じます。總角槇の戸さんの云はしやんす通り。わけて此の度の御神事は。一しほ神も納受と存じます。若殿様の御行方も追付知れませうと存じまして。お目出度う存じます。記内誠に此妹脊山の家事は。外に並ばなき歌道の家。櫻木の家の藤太郎殿を聲に取り。是なる生駒姫に娶はせ。家を繼がせんと思ひし所に。藤太郎には傾城狂ひに身持放埒。其上國を出奔なされたとある。何卒行方を尋ね出し。家を繼がせん爲神いさめ。皆も神慮を仰いでたも。頼むぞよ。花浦廊通ひなざるゝとあつて格氣する氣はなけれど。見ぬ戀にあこがれた藤太郎様。なんぼう神様を祈つたとても。自らに添うては下さんすまいと思つて。私や悲しうござりますワイな。△なぜ其やうに覺召ます。其お氣をおいさめ申しませう爲。皆も神慮を祈りまするではござりませぬか。紋之それ〳〵主水が申します通り。皆神慮を祈りまするも。御氣色がわるうござれば母様への不幸。姉様なぞお氣をいさめさつしやりませぬ。記内いやモウとかく姫の歎きやるが悲しきゆゑ。先達て玄妙院を頼み。祈禱を誂へ置いたが。玄妙院は怠らず祈禱をしやるて有らうの。中將仰の通り。三七日が間壇を飾り。大聖不動明王に祈をかけ。姫君安全家繁昌の御祈禱を致します。記内オ、大儀〳〵。才兵衛何ぼう若殿の行方が知れても。傾城ぐるひに國を出奔する程の大だはけ。何の神も納受こ

ざらうぞ。コリヤやはり玄妙院の勸の通りになされたがよからう。總角軍藏殿今のお詞のはし何とやら藤太郎様を蔑したる一言。何すればお家が治りまするな。才兵衛菊女女のしつた事でない。すつこんでみやれ。總角外記之進が娘妻菊。申す事は申さねばなりません。才兵衛うて聞さう。若殿が此お家繼さしやつたというて。役に立たぬ藤太郎殿。さつばりと縁を切り。後室様の里の子。大藏様をつがすが上分別さ。總角そりやどなたの御捌で。中將此玄妙院が申上げた。喜蝶玄妙院殿。スリヤこなさんがお家の指圖さつしやるのぢやの。中將御家が大切に申上げたが何んとした。喜蝶妻菊さん。總角槇の戸さん。喜蝶モウ詮議せにやならぬワイな。總角大方様子が知れて来た。喜蝶玄妙院殿。總角ちよつとお目に懸りませう。中將身どもにか。ト向ふへ出る。何の用ぢや。總角繩懸ける。手をまはしや。中將だまれ。此玄妙院には何の咎あつて繩かけける。總角いふまい里の子戸根五郎と同腹になつて。お家を吞うとする大悪人。遁れぬ覺悟。喜蝶黒い此目でにらんで置いた。中將此玄妙院には悪逆といふ何ぞ證據があるか。總角神主右京。さいぜん箱是へ。圖書ハア。と神主右京箱を持出る。總角此箱覺があらうかの。中將此箱を。ト立廻り有る。總角掛奉る願主玄妙院。中將もううぬを。ト切懸ける。箱にて受る。箱しかけて破る。中より藁人形。願書出る。總角ソレ槇の戸さん。喜蝶合點でござんす。ト願書を取る。才兵衛を。ト槇の戸にかゝる。立廻あつて軍藏を押へ。喜蝶敬つて申す願書。櫻木藤太郎を三七日の間に命を取りたまへ。玄妙院是を承る。願主何某。才。中夫を。ト立廻あつて。二人を見事に押へ括る。記内まで〳〵。大切な玄妙院になせ繩を懸けたぞ。喜蝶後室様。あまり賢人だて仰るな。若殿様をのろうた玄妙院。夫に組する軍藏繩かけたが誤りか。圖書スリヤ御詮議を其元がなざるゝぢやまで。喜蝶急度いたしてお目に懸ませう。此詮議したら。此何がしと書いてある願主も大かた知さうなもの。ナア後室様。記内されば。ト氣味わるくいふ。總角喜サア有様にいへ。中將しらぬ。總角喜しらねば斯ぢや。ト刀の鞘にてこじる。兩人苦しき思入。記内やれまで〳〵。エ、憎い奴らぢやなア。此様な文をくれた事を企むやつらぢやによつて。事あらはれたら

コリヤ後室様の云付ぢやと。自に譲らん爲であらうがナ。怖いやつぢやなア。去ながら身に取つて覺えのない事。必ず疑ふてばし下さるなや。喜蝶そりやさうありさうなものぢやてや。ト兩人顔見合せ。紋之こりや〜兩人。餘り強う詮議して。姉様某を不孝ものに致すなよ。花浦兎にも角にもみづからがある故。多勢の難儀。さらば。ト自害せうとする。靱負留める。圖書おまちなされ妻菊どの。姫君様が自害なされますと。忠臣かへつて不忠となりませうぞ。記内オ、さうぢや。強う詮議すると姫は死ぬ。そちは主殺となるがや。總角エ、槇の戸さんコリヤまあ何とせうぞいな。喜蝶現在しれてある事を。ハテ仕合な後室様ぢやなア。記内やれ嬉しやの。ト侍走り出て。侍申上げます。珍しきぼうのし力持を致します。中々面白い事でござります。お姫様のお慰にと存じ。ひかへさし置ましてござりまするが。返しませうか。いかゞ仕りませう。圖書幸ひ〜。姫君のよいお慰み。是へ通さつしやい。侍ハア。圖書靱負之丞様後室様には奥へお入られませう。記内オ、足元の明いうちに奥へ行きませう。喜蝶エ、仕合な。記内コリヤたつていふと姫は死ぬぞや。皆々先お入なされませう。ト神樂になりみな〜入る。花浦唐子残りある。子供アレ今の力持がくるワイなア。子供ほんになア。ト輕業の三味線になる。ト總之助力持の形。小手脚半にて樽をかたげ。其後に黒き衣裳を著け小市出る。總之サア〜評判の力持ひやうばんの〜。圖書コリヤ〜姫君へのお慰に。曲持を致してお目につけい。總之畏りました。侍お氣にさへ入れば褒美はいか程でも下さる。早く〜。總之東西〜。是迄力持はあまたござれども。重い物をさし上げますばかり。此度は曲さしてござりまする。ハリトウ、ト輕業の三味線になり。小市後にて使ふ。圖書よいよ〜。總之と留めました處が野中の一本杉。返して参りますとあまの釣舟。ハリトウ〜。ト三味線にてとめる。御はうびにとつと褒めた。圖書よいよ〜。總之是より山がらの餌おとし。鶯の谷わたり。あなたこなたへ通うて参る。ハリトウ〜。ト是よりいろ〜樽を使ふ。トいろいろをかしき事あるべし。總之助女形にぬれる。小市一人にて曲持してゐる。圖書悔りして反打ちにらむ。小市三味線

に合せ頼ひ〜樽をつかふ。力持女形に突飛され。圖書に抱つく。圖書何ひろく大盗人め。總之ごゆるされませ〜。ト橋懸りへ通る。圖書おのれらは人をうつけにした奴ぢや。總之力持でござんすワイの。圖書まだ〜めんえうふしぎな事をすると思へば。後から黒いものを著て遣ひをる。あれで何でもなる筈ぢや。大盗人めが。こゝには叶はぬ出てうせう。うせぬか。まつ二ツにするぞよ。總之アイ〜さつぱりとしくじつた。花浦これアノ男にちよと尋ねたい事がある。爰へ招てたも。圖書お召なされる。ずつと出ませい。總之ハイ〜御用でござりまするか。花浦此守袋はそなたのか。總之ハイ私がのござりまする。エ、今の内に落したさうにござります。すこつちへ下さりませ。花浦云號の袋にて藤太郎様參る陸奥と書いてあるから。そんならお前は藤太郎様ぢやナ。總之夫をしつたこなたは。花浦云號の生駒姫でござんすワイなア。總之南無三寶。ト遁んとする。花浦それをソレ止めてたも〜。皆々マア〜お待なされませ。花浦エ、聞えませぬ藤太郎様。お前がお館へお入なされませぬゆゑ。母様がさま〜の悪逆。お前をのけて私や外に男を持つ氣はござんせぬ。是ほどに思うてゐるものを。胴慾なお心入でござりますなア。總之身持放埒ゆゑに國を出奔して。所々方々とさまよふうち。言かはした陸奥も死ぬ。何面目に妹脊山の家へ世繼に入らうぞと。心は出家になつて居る。何面目にと存じたに。恥かしい對面をしますワイのう。花浦かうお目に懸りますから。何ぼうでも離しは致しませぬ。お止りなされて下さりませ。但し死にませうか。總之サアそれは。花浦死にませうか。サアサア〜。皆々何でござりまする。圖書扱は櫻木藤太郎殿ぢやナ。此通り戸根五郎様へ注進。トかけ出る。小市圖書を切り止め刺す。皆々これは。小市御不審御尤。私儀は先年御勘當を蒙りし谷坂兵内が倅。和田右衛門と申す者でござりまする。若殿出奔なされたと承り。所々方々を尋廻り。何卒勘當お詫の願ひ。父が存念を立てんと存じて。若殿とも存じませず。只今まで附添ひをりましてござるも武運を開くべき瑞相。何卒昔の勘當御赦免下さりませうならば。有難う存じまする。總之ムウ扱は先年勘當したる谷坂兵内が倅和田右衛門で有つたよな。勘當ゆるさいて何と

せう。随分忠義を勵んでくれよ。小市エ、有難うござりまする。總喜様子は残らず承りました。ト兩人出る。縫之ア二人の衆か。喜蝶たとへいかやうに思召しても。姫君様をお心根不使と思召し。お止りなさらねば武士の道は立ませぬ。總角其上お前が國へお入なされませぬゆゑ。後室様の悪心。里の子戸根五郎様を世に立てんとさまぐの企。お前のお心一ツで國が亂れます。サアなんと。縫之成程姫の心といひあやまつて。姫と夫婦になつて此家國を治めうワイの。總角スリヤ御得心でござりまするか。花浦エ、嬉うござりまする。小市若殿御得心の上からは。御祝言の壽き御祝儀。トすりがね太鼓。女房よんだ川へぼつこめ。ト辨之作家來多勢引連れ。水あぶせのなり。もみの頭巾にて手桶持出る。總角戸根五郎様。心得ぬてい何故これへお出。辨之何ゆゑでもない。若殿藤太郎殿と姫と祝言めさるゝと聞いたによつて。祝うて水をさし上る。縫之まつた藤太郎是にをりまするぞ。辨之さう見たによつて家來共。侍女房よんだ川へぼつこめ。小市まつた最前より。若様を附廻し何とする。寄つたら爲にならぬぞ。辨之よい推量。姫と夫婦になつて家を繼がうと思つた所に。思ひよらぬ藤太郎。打殺して家國治める。早く残らず腹を切れ。腹を切れ。小市さう有らうと思つた。遁れぬ所覺悟せい。辨之家來ども合點か。侍畏まつた。トみなく立になる。三味線太鼓入皆々おひ込みおうて出て敵役を押へて。縫之國の敵覺えたか。小市若殿めてたうお國入り。先づ此場はおたちら。

トわき幕になる。内よりしやぎり太鼓。みなく道具片付ける。内に打ませうしやんくんと手を打ち黒幕引くト一面の障子屋たい揚屋の座敷の體。残らず衣裳著流し。東山はしの寮座敷のてい。向ふより川浦遊軒。花滿憲法出て。

憲法出來た。けうといものであつた。遊軒イヤモウけうといの何のと。かやうなものではござらなんだ。憲法お銚子わつさりと是で一ツ呑みませう。遊軒さて。皆々まつい名人。わけて縫之助殿はなか。あぢをおやりなさる。本の役者と見えます。憲法弟はえらうようござりまする。ハ、ハ、ハ、遊軒今の妻菊になつたは傾城の總角ぢやな。總角オ、恥し。遊軒なんの恥しい事はない。身は禁裏の御用相勤める。川浦遊軒といふもの。折々は廊へ行くであらう。よく見知つたがよいぞよ。總角かねんお名は噂してをりやんす。ちつと廊へもお出なさんせえ。オ兵イヤもうやつて見やうと思へども。サア狂言にかゝるが否や。一口もいける物ぢやござりませぬ。小市く。小市エ、オ兵貴様は太鼓持程有つて。面の皮が厚うてえらうえい。小市何を才兵衛さんのいはんすやら。私やモウお前のばちくものをいはんすやうに云つて見やうと思つても。ねからいくものぢやござりませぬ。イヤ夫はさうと。太夫様がたの唐子踊。皆出來ました出來ました。○ほんにこちらの兄様はようものをいはんす。私やモウ恥しうてなるこつちやなかつたワイな。オ兵何を吐すやら。千代菊さんや禿共をみやい。傾城花浦いやモウ餘りほめて下さんな。冷汗が出るワイなア。同△モウ今度の狂言は。かるい役に使つて下さんせ。記内ひよつと若し仕損はうと存じて。手に汗を握りましてござります。圖書扱かの辨之作が敵役はしぶとてえらふ可い。辨之何圖書様のいやがらすやうな事仰ります。私が主人縫之助殿さへなされませぬもの。己れやれ當てくれうと存じまして。とんと出ると夢中でござります。圖書いやわれはわれとも思ふが。中將様にはいつの間にか稽古なされました。中將何とえらいものであらうがな。自由に芝居は見にゆく事ならず。茶屋へ往て役者を招びよせ。芝居事ばかりはさす物ぢやない。記内惣じてお前様は常平生に。斯様な遊所へお出なさるゝ事はならぬでござりませう。中將イヤもう近年は役人どもが詮議してどうもならぬ。それを無理に遊びにゆくと。おいらには得構はず。先の茶屋へ祟りをるに依て。いつぞやのやうに川東のものになるてや。憲法イヤ折々にはチト遊興にお出なされたがようござりまする。遊軒いやモウ貴方がたを手になしますると。一向方圖がござりませぬ。中將あれ御所の内から彼のやうに云ふによつて。外の者はなほいふが。憲法聞てたも。此

間も和泉式部の梅山が所へ楊弓にいたれば。役人共に逢うて何がいちつてこました。此方がやうな公家はさむしい。ちつと遊ばねばたのしみがない。憲法最前ちらりと見れば。淀の城預り與三右衛門が妹の喜蝶でないか。此東山へは何してお来やつた。喜蝶アイお前は今度鎌倉より室町様へ。御参内にお立なされます。定めし道中何かと御苦勞にござりませう。殊に縫之助様もお供に上京なさると有る。ちよつと御見舞にゆけと。兄與三右衛門殿の云付られまして。河原町へ参りましたれば。此東山へお出と承りました。憲法見舞に來た所を直にひつ捕へて狂言に遣うたぢやまで。酷いものぢや。種之何のむごい事がござりませう。廓の者さへ呼よせませるもの。コリヤ貴方への御馳走でござります。憲法ぢやと云うて。明日か明後日此方へ嫁入する大事の花嫁を。ハ、イヤ御引合せ申しませう。是は喜蝶と申して。淀與三右衛門が妹でござります。則ち弟縫之助と娶せまして。一兩日のうち此方の國へ嫁入いたします。箱入の娘を狂言に出して御目に懸けました。遊軒イヤハヤもう此間から種々の御馳走。今日は祇園町。明日は島原の御馳走にあきみちましてござる。憲法さやう仰つて下さると結句迷惑に存じます。圓書いやモウ拙者も山岡新田開發ぢやの。錢座名目錢などさま／＼のねがひを取次いたしましたれども。此様な御馳走に逢うた事はござりませぬ。其代りには中將様。明日の儀を宜しうなされて遣されませい。中將なさらいでよいものか。諸事金でふいてあるもの。イヤナニ憲法。昔から使者にたつた首尾のよい天上はわが身であらうワイなう。憲法夫は有難うござります。遊軒ちつと口廣い申分ぢやが。大内の事は立てうと伏せうと拙者が儘でござる。しくじらさうと思ふと。是に中將様がござるが。夫は／＼酷い目に合はせませる。憲法兎角遊軒様宜しくお指圖を頼みます。遊軒拙者が其元の領分。獅子飛を切落し。淀川へ流しましたゆゑに。五畿内とも水損とんとござらぬ。其元には關西往來の朱印を頂戴してござる故。定めて往來の御工夫でござらうのう。憲法サア其儀に就きまして。私家内の騒動。記内一通り話しやれ、記内いやモウ遊軒様が獅子飛をお切なされてより。湖は淀川へ落ちます。只今までよりは十倍の水の早さ。船を立てましても權を立てましても。一向舟は上りませぬ故、長柄堤に舟を拵へ。あれより往來致させまするつもり。主人存じ付きましてござる。憲法時に家中に關口平太。神道源八と申して屈強の若者二人ござりまするが。兩人ともに兎角火を摺つて中がわるうござりまする。中圓ハテナア。記内それゆゑ源八方には渡しを渡したらば。平太方の堤が成就致しまする故に。渡し普請を引延します。まつた。平太方には堤を築かば。源八方の渡しが自由致します。故堤の儀を引延します。兩方挑み争ひますから。自由に普請成就はいたしますまいと存じます。憲法此兩人の中のあるいは。兵術の流義を争ひまする故でござりまする。なれども武士の身ては不届な儀とも申されず。一方に片付きますれば生害にも及びます。外に致し様もなし。お上へ對しては延引に及びます。背中に腹とやら。何れ一人はすてねばなりませぬ。何とも困つた物でござりまする。遊軒其平太と申すは拙者が弟でござる。憲法ハテナア。遊軒拙者は算術に妙を得ましたる故。大内に相勤めします。弟めは武藝に心掛けまする故。其元のお屋敷を勤めします。狀通の使ばかりを致します。憲法左様とも存せず粗相な儀申しましてござる。遊軒なんの／＼。此上は平太源八兩人にはお構ひなく共。關西往來を致しまする用には。拙者割出し置きましてござる。明日参内の折から書付を以てさし上げさつしやつたらば。こなたの抜群のお手柄になりませう。拙者がよろしう仕りませう。お氣遣ひなされませ。憲法是はあまりのお志。然らば宜しうお頼み申します。種之然らば中將様。また跡の狂言の稽古。此間に與て致しませう。中將さうしよう／＼。憲法きてふコレサ喜蝶。何をうつかかりとして居る。河原町の屋敷から送らさう。早う往にやれ。ト喜蝶小市耳語き居る。喜蝶イヤ私はもそつと居りませう。記内お前が左様仰るは。殿縫之助様に名残を惜まつしやれてか。殿にも一兩日の内には此方のお國へお入りなさる。マアお歸りなされたがようござりまする。ナア縫之助様。ト縫之助總角と話して居る。種之オ、何ぢやいな。記内何をなされてござりまする。種之イヤは何を。オ、跡狂言は淺間が嶽。其けいこしてゐるのぢや。辨之イヤ申し喜蝶様を淀へ歸しませうと申す事でござります。

ても權を立てましても。一向舟は上りませぬ故、長柄堤に舟を拵へ。あれより往來致させまするつもり。主人存じ付きましてござる。憲法時に家中に關口平太。神道源八と申して屈強の若者二人ござりまするが。兩人ともに兎角火を摺つて中がわるうござりまする。中圓ハテナア。記内それゆゑ源八方には渡しを渡したらば。平太方の堤が成就致しまする故に。渡し普請を引延します。まつた。平太方には堤を築かば。源八方の渡しが自由致します。故堤の儀を引延します。兩方挑み争ひますから。自由に普請成就はいたしますまいと存じます。憲法此兩人の中のあるいは。兵術の流義を争ひまする故でござりまする。なれども武士の身ては不届な儀とも申されず。一方に片付きますれば生害にも及びます。外に致し様もなし。お上へ對しては延引に及びます。背中に腹とやら。何れ一人はすてねばなりませぬ。何とも困つた物でござりまする。遊軒其平太と申すは拙者が弟でござる。憲法ハテナア。遊軒拙者は算術に妙を得ましたる故。大内に相勤めします。弟めは武藝に心掛けまする故。其元のお屋敷を勤めします。狀通の使ばかりを致します。憲法左様とも存せず粗相な儀申しましてござる。遊軒なんの／＼。此上は平太源八兩人にはお構ひなく共。關西往來を致しまする用には。拙者割出し置きましてござる。明日参内の折から書付を以てさし上げさつしやつたらば。こなたの抜群のお手柄になりませう。拙者がよろしう仕りませう。お氣遣ひなされませ。憲法是はあまりのお志。然らば宜しうお頼み申します。種之然らば中將様。また跡の狂言の稽古。此間に與て致しませう。中將さうしよう／＼。憲法きてふコレサ喜蝶。何をうつかかりとして居る。河原町の屋敷から送らさう。早う往にやれ。ト喜蝶小市耳語き居る。喜蝶イヤ私はもそつと居りませう。記内お前が左様仰るは。殿縫之助様に名残を惜まつしやれてか。殿にも一兩日の内には此方のお國へお入りなさる。マアお歸りなされたがようござりまする。ナア縫之助様。ト縫之助總角と話して居る。種之オ、何ぢやいな。記内何をなされてござりまする。種之イヤは何を。オ、跡狂言は淺間が嶽。其けいこしてゐるのぢや。辨之イヤ申し喜蝶様を淀へ歸しませうと申す事でござります。

縫之オ、早う往んだがよからう。喜蝶イエ〜私や矢ツ張こゝにをります。小市イエ〜早う御歸りなされて。蘇入の拵へなされたがよからう。喜蝶私や往にやせぬ。否ぢやワイのう。總角往んで貰はうぞえ。こゝらあたりに居て貰うまいぞえ。小市サア〜往んだ〜。喜蝶構やんな。私や往ぬ事は否ぢや〜。やつぱりをる。總角いやおくまい。縫之我がまた何て其やうに。總角じたいこなさんが。喜蝶わが身はわしを。小市こなたはマア。ト四人争ふ皆々とする。記内これはマア何てござる。縫之是は。記内何てござります。縫之やつぱり狂言の稽古ぢやワイやい。記内稽古ならばもそつと靜にしたいものナ。憲法は何をさは〜と。喜蝶もめたくばもそつとあたがよい。稽古ならば奥へ往てしやれ。中將サア皆奥へ往かう。縫之助奥へおじやいのう。縫之そんなら奥へ往てこまそ。喜蝶わしも往かう。小市俺もゆく。總角申し〜。縫之勝手にせい。四人エイ〜。トせり合ひ入る。圖書何の事ぢや。俺も奥へいてこまそ。オ兵衛も奥へ往てこまそ。辨之俺も奥へ往てこまそ。トオ兵衛。記内。辨之作入る。中將どりや奥へいて稽古せう。圖書御兩人これにござれ。ト皆々入る。憲法ハテさう〜しい。遊軒イヤ浅間獄見物でござらう。扱憲法殿。只今禮式を御指南申すによつて申します。今の儀はどうでござる。憲法今の儀とは何の事てござる。遊軒ハテ夫内々申した彼事な。憲法エ、夫は何時なりとも掛屋方より。遊軒イヤサ金でなしに御内室の事て。ト口のうちにいていふ。内よりどろ〜。圖書エ、口惜やはらちやなア。トどろ〜にて合方になりめりやす。憲法エ、狂言の稽古であやちがしれぬ。もそつと大きな聲でお聞せ下されい。遊軒イヤサ大きな聲もしにくい。御内方のみゆき様のことさ。憲法エ、みゆきが事な。サアお望みならば進ませせう。というたちやござりませぬか。遊軒恥をいはねば理が聞えぬ。みゆき様はもと此京都の舞子。恥しながら拙者命も身も投打つて惚れましたれども。イヤすつたのもぢつたのと申す内に。こなたが國元へ伴れて歸らしやつたといふ事を聞くと。其時はきつう遺恨を含みました。今度大内への御上使。何でもしくじらせてくれうと思ひの外。みゆき様をやらうと仰やる。夫て頓と腰が抜けて。扱つき

あつて見ればきつう粹。けうといものぢや。憲法そんならみゆきをやらうと申したを。まだ嘘言ぢやと思つてござりまするか。遊軒イヤ嘘とは思はぬけれど。又女房をくれうと申す事ぢやによつて。憲法愚痴ぢや。きつう愚痴。一たいマア表面は女房で。ついで一所に寝た事もない。遊軒嘘。けうとい嘘。夫は今度の事があるに依て身共への。憲法イヤイヤほんの事〜。遊軒ほんの事か。憲法ア、疑ひ深い。遊軒そんなら問ふ事がある。辨之作〜。ト内より。辨之三種の神器をこなたへ渡せ。小市ならばとつて見よやい。辨之其寶劍を。トばた〜蔭にいていふ。憲法遊辨之作〜。ト呼ぶ。辨之ハイ〜。小市勝負は戰場。兩人それ迄は。さらば。ト跡めりやすになる。辨之作書扱持つて出る。辨之とんとモウ結び際でござりました。ア、しんどい役ぢや。遊軒辨之作逢ひたいといふは餘の事でもない。内々そちに口説いてもらうたみゆき殿の事。辨之ア、申しこれ〜。トいひ消す。遊軒大事ない〜。辨之夫でも憲法様が。遊軒一ツも苦しいない。憲法殿に貰うたてや。憲法さても辨之作に今まで口説いたのぢやなア。遊軒面目次第もない。憲法こなすつばの皮め。辨之ウ、主人憲法様には御合點でござりますか。憲法わが取もち俺がためぢや。出来した〜。辨之夫でよめた。申し遊軒様お返事が参りました。遊軒ヤア。辨之折を見て渡しませうと存じて。ぢつと持つてをりました。憲法今まで見せぬといふ事があるものか。遊軒ちやつとくれ〜。花夕様みゆきより。昔の花夕をまだ覚えてみてくれたかやい。憲法花の夕べとはいやな變名ぢや。遊軒エ、弄らしやるないのう。辨之作讀てくれ。辨之主人の前ではあんまり。憲法エ、氣の弱い。其根性で今までよう取持つた。大事ないわいやい。辨之それもさうかい。ト讀む。辨之とくより御返事と存じ候へ共人目の關にさし控へ〜。誠に御無事の様子。風の便に聞まし嬉しさの御事に候。數ならぬ身を左程迄思召し下されし御事。御嬉しさ限りなう。飛立つばかりにて御座候。飛立つばかりでござります。憲法飛立つばかりぢや〜。遊軒ばかりで〜。ト辨之作又讀む。辨之前かたつれなく申せしは。殿御の心の飛鳥川。とくと見申さんため。思はずも憲法様に受出され。國へ參じ候へども。すかぬ事故つひに傍へ寄つた事も御

座なく候。遊。靈なんとくあとはく。辨之お前の志嬉しいと思ふ魂が。現にも通ひし可愛さは舊にまして早う夫婦になりたいたと存じ候。遊軒サア堪らぬ堪らぬ。ト又讀む。辨之どうぞ表向のわけ御立下され。御へんもじの程待入こがれより。花夕様御事今はいうけん様まゐる。こがるゝ身より。サアこがるゝ身よりぢや。ハツ。ト狀を投る遊軒頂く。憲法よう花夕さま。ト遊軒狀を顔にあて恥しがらる。遊軒さまくんと今迄は疑ひましたは眞平ごゆるされませう。もうく神八幡そこ元の事なら命でも進上いたす。憲法それは忝なう存じます。さつぱりと進上いたす。遊軒手をつきます。憲法ヘテきつい嬉しがらな。ト内にて多勢。やらぬぞ。圖。中どつこい。ト立て所作の三味線太鼓鳴る。内より。オ兵辨之作様く。辨之オイもう所作になつたさうな。私はちよつと参ります。圖書往てこい。オ兵辨之作様く。辨之オイくまでく。合點のゆかぬ女めが振舞。ト臺詞いひく入る。遊軒扱淀川の事はかうなされい。彼の川筋のまん中へ。眞直に堤を築くと。十三里の所がさし渡しになされて。七里半に京大坂の通路がなります。もう渡しやのなんのと。面倒いことは打やつて。其利法を申上げさつしやつたらば。莫大の御はうびでござらう。憲法サア其儀を存じつかぬでもござらね共。川の眞中へ堤をつく事は御咎があらうかと存じて。遊軒ハテ扱淀川は手前が切落しました。拙者が何とも申さぬに。誰がなんと申ませう。憲法サア二筋に川がなりましては。また水が緩漫まして。土砂がとまつて埋れませうと存じて。遊軒ハテ川が埋れたらなんの事其元の御用にさへ立ば。皆埋ても大事ござらぬて。明朝すぐに天奏へ書付をお出しなされい。手前よろしく申して手柄にさせませう。憲法兎角よろしく頼上げます。明日持參致しませう。遊軒式禮は昨日御指南申し通り。鎌倉の御名代なれば。門より内は大納言の兼官でござる。裝束お著なされたか。憲法夜前石橋中將様がお著なされてとくと承知致しましてござる。遊軒あの圖書などが非藏人の役で。御簾を巻上げますに。得てしくじらさうと思へば。ようく疊から二尺ばかり上げて置きます。御簾へ冠をあてぬが故實ゆゑ。四ツ這にはなられず。いやはや態とした事が。憲法明日は高う上げたいものでござるが。遊軒いや其元のは御簾一ぱいに上げます。邪魔にもならば引ちぎつてなりと置ませませう。憲法眞の太刀土器拜領はやはり紫宸殿でござるナ。遊軒いかにも天盃頂戴の時是非かの土器が破れるものでござる。憲法直に土器を鎌倉へ早飛脚で遣します。自然破れましたは。遊軒サそこでござる。その通りの土器は二枚ござる。一枚は拙者が持つてをる。天盃頂戴して鎌倉へ下すは身共が替の土器御下しなされ。破ても少しも苦しくない。同じ土器でさへあれば。ほんの京都鎌倉との儀式をするのサ。憲法さやうなれば重疊の仕合でござる。遊軒マアそこを日の御門にして。此方へかう廻る。と兩方へ雜式が出る。此方へお出なされい。ト教へるうち。始終かげをうつ。あとめりやすくなる。遊軒扱さうくしうて物音も聞えませぬ。奥へ往て窃に申しませう。憲法左様がようござりませう。いはど今晚が惣稽古ぢや。遊軒たとへ惣稽古がないとても。始終手前がひつ添うて居るから。氣遣のきの字もござりませぬ。サアく御出なされい。憲法マアく御出なされませい。ト入る。唄になり。喜蝶小市が胸ぐら取り出る。小市エ、はなさつしやりませい。喜蝶イヤはなさぬわいの。小市コレお前は近江の國縫之助様へ一兩日のうち嫁入なされますぢやないか。そんなら主あるお方ぢや。太鼓持風情が傍へおよりなされますな。喜蝶エ、其方はのう。小市おつと口舌は筋ばかりいうたり。喜蝶去年の正月智恵院の御忌に参つた時。わらは忍びの徒歩詣で。戀に上下の隔はない。可愛らしい男ぢやと。思うたが戀の始め。小市涎へせきく通ふにも。餘ほどに思はにや行かれぬ。大ていや大かたの事ではござりませぬ。喜蝶それぢやによつて今度京都へ來たも。見舞といふは附たり。其方の顔見にきたのぢやわいの。縁組も何も兄さんがさしやんした。私や何にも知ぬわいの。何した物であらうぞ。思案して貰はうと思つて。胸は板になつてゐるわいの。夫々今のやうな事。ようもくいはれたの。ト泣く。小市何程泣しやましても其手はくはぬ。コリヤ下地から知れてあること。態とはなうて高が此方がやうなものぢやと思つてけつぶすのか。さう旨うは乗るまいわいの。と斯いふと腹が立たう。私やとうから疑うてゐるやせぬわいの。喜蝶そん

なら疑ひは晴ましたかや。小市お前の心は私がよう知つてをるもの。喜蝶それに人を術ながらしくさつて。小市よつ術ながらしくさつたなア。ト寄添ふ。小市時に嫁入の事はひよんな事ぢやなア。喜蝶どうぞ思案してたものう。ト記内出る。記内喜蝶様。喜蝶オ、何ぢやいのう。記内何ぢや所ぢやござりませぬ。與三右衛門様からお人が参りましてござります。ちと仔細があれば一兩日の内に與を入れねばならぬ。喜蝶を早く歸してくれいと。お迎ひが参つてござります。お供廻りは表に待せ置ました。拙者がお供仕ります。サア。お出遊されませい。喜蝶さいのう往ぬるわいのう。記内若殿様も夫故に急にお國へお歸りなされねばならぬ。御供廻りの用意はよいか。橋懸りよりハア。喜蝶これは又急な嫁入ではある。記内何が急な事がござりませう。殿様もお前も御婚禮は御一緒になされねばなりませぬ。斯様にお目てたい事はござりませぬ。ト此内喜蝶小市のそばへより。喜蝶何せうぞいの。小市サア何しようとしてマア一旦は嫁入なされずばなりません。其思案といつば。記内ヤイ。汝は幫間ぢやないか。御寮人の傍へ寄て。嫁入なされずばなりません。いと汝が指圖受けぬ。びらしやらした事があると汝が首が飛ぶぞ。小市ハイハイ。喜蝶便を待つてゐるぞや。記内何の便を。サアお出なされませい。喜蝶来てたもや。ト小市にいふ臺詞。記内間違つていふ事あり。記内お供仕ります。喜蝶必ずおじやえ。記内是はしつこい。お供致しますワイのう。ト總角縫之助皆々出る。總角ござんせござんせ。縫之何ぢやいやい。小市そりやモ一口はじまつたわ。總角何てお前は女房持んす。縫之誰がいやい。總角ノ喜蝶さんは云號で。淀から嫁入さしやんすを。今迄私によう祕して居さんしたのう。子供さうぢや。急度云はんせ。縫之其様におだて。くれな。總角イヤおだてる事も何もいらぬが。急に身請の客が有つて今日か明日かには埒が明く筈。夫てはどうもならぬによつて思案して下さんせと。云うて置くのに構はずに。放つて置かしやんすによつて。遺手の杉がモウ今夜のあけ迄に身請の相談が出来た。早う戻れと今迎ひの駕が来てあるわいなア。縫之ヤア。總角ヤア所か。モウ私に飽が来たによつて。喜蝶様を女房に持つて。身請のあるを幸ひ。私を突放すのぢやな。お前ばかりはさういふ心ではあるまいと思つたに。こちや聞かぬ。エ、エ、ト折る。子供さうぢや。ぐつと云はんせ。縫之さいのう。おれも其事に如才はないけれども。兄貴の御上使で金の向はた。き上げて。掛屋へ云うてやつても根から取合ぬが。氣遣しやんな。夜明に金拵へて身請する。總角イエ大事ござんせぬ。高が彼地へ往たら死ぬる分の事ぢや。縫之其やうに短氣にものを言やつてはどうもならぬ。總角いへ。何などお前の心次第にさしやんせ。縫之さいのう。どのやうにしてなりと。ト花車一人出る。花車總角さん。先刻にから駕を待つて置いたが何をしてござんす。今夜中に往ねば。身請の時が切れると又叱られる。ちやつと戻らしやんせいのう。總角エ、欺された。私やモウ往にやせぬ。花車往ないでつまるものか。太夫さん方明日は身請の惣揚ぢや程に。早う戻らしやんせ。サア。早う。縫之コリヤ杉ぢやないか。マア待つてくれ。太夫はおれが身受するのぢや程に。ちつとの間。杉申し。是申し。いつぞやから揚代の算用もせず置いて。私らへの紙花もくれずに。五百兩といふ身受の金が出来るもので。縫之さればいやい。金はナ。杉いえ。お前ぢやといふては親方が身願ひ立て。忌がる。待つことはマアなりませぬ。身請なざるゝなら。今夜中に五百兩の金を持つてお出なされませ。サア太夫様ござりませいのう。總角殿様モウ逢ふことはござんすまい。さらばでござんす。縫之コレ夫をやつては。杉アなりませぬといふのに。縫之さいやい。杉金はナ。縫之サア金は。杉金持つてお出なされませい。サアござれ。コレござれといふのに。縫之ハテは何もならぬわいやい。皆々申しどうして生きて居る氣はござんすまいぞえ。小市ア、何處も色事の生粹ぢやなア。ト辨之作。石橋中將。圖書。才兵衛出る。辨之其様にいふ事もないわサ。才兵衛いはにやなりませぬわいのう。中。圖サアよいわいやい。才兵衛イヤようないわいのう。コリヤ何して下さります。小市また一組はじまつたわ。辨之やるといふのに。才兵衛ア今貰はう。あるかえ有るまいが。頭から斯なるを知つてゐるに依て。マア第一お公家を客にする事はいやぢやと云ふのに。何もかも引受ける大事ない。なんのと言つておい

なら疑ひは晴ましたかや。小市お前の心は私がよう知つてをるもの。喜蝶それに人を術ながらしくさつて。小市よつ術ながらしくさつたなア。ト寄添ふ。小市時に嫁入の事はひよんな事ぢやなア。喜蝶どうぞ思案してたものう。ト記内出る。記内喜蝶様。喜蝶オ、何ぢやいのう。記内何ぢや所ぢやござりませぬ。與三右衛門様からお人が参りましてござります。ちと仔細があれば一兩日の内に與を入れねばならぬ。喜蝶を早く歸してくれいと。お迎ひが参つてござります。お供廻りは表に待せ置ました。拙者がお供仕ります。サア。お出遊されませい。喜蝶さいのう往ぬるわいのう。記内若殿様も夫故に急にお國へお歸りなされねばならぬ。御供廻りの用意はよいか。橋懸りよりハア。喜蝶これは又急な嫁入ではある。記内何が急な事がござりませう。殿様もお前も御婚禮は御一緒になされねばなりませぬ。斯様にお目てたい事はござりませぬ。ト此内喜蝶小市のそばへより。喜蝶何せうぞいの。小市サア何しようとしてマア一旦は嫁入なされずばなりません。其思案といつば。記内ヤイ。汝は幫間ぢやないか。御寮人の傍へ寄て。嫁入なされずばなりません。いと汝が指圖受けぬ。びらしやらした事があると汝が首が飛ぶぞ。小市ハイハイ。喜蝶便を待つてゐるぞや。記内何の便を。サアお出なされませい。喜蝶来てたもや。ト小市にいふ臺詞。記内間違つていふ事あり。記内お供仕ります。喜蝶必ずおじやえ。記内是はしつこい。お供致しますワイのう。ト總角縫之助皆々出る。總角ござんせござんせ。縫之何ぢやいやい。小市そりやモ一口はじまつたわ。總角何てお前は女房持んす。縫之誰がいやい。總角ノ喜蝶さんは云號で。淀から嫁入さしやんすを。今迄私によう祕して居さんしたのう。子供さうぢや。急度云はんせ。縫之其様におだて。くれな。總角イヤおだてる事も何もいらぬが。急に身請の客が有つて今日か明日かには埒が明く筈。夫てはどうもならぬによつて思案して下さんせと。云うて置くのに構はずに。放つて置かしやんすによつて。遺手の杉がモウ今夜のあけ迄に身請の相談が出来た。早う戻れと今迎ひの駕が来てあるわいなア。縫之ヤア。總角ヤア所か。モウ私に飽が来たによつて。喜蝶様を女房に持つて。身請のあるを幸ひ。私を突放すのぢやな。お前ばかりはさういふ心ではあるまいと思つたに。こちや聞かぬ。エ、エ、ト折る。子供さうぢや。ぐつと云はんせ。縫之さいのう。おれも其事に如才はないけれども。兄貴の御上使で金の向はた。き上げて。掛屋へ云うてやつても根から取合ぬが。氣遣しやんな。夜明に金拵へて身請する。總角イエ大事ござんせぬ。高が彼地へ往たら死ぬる分の事ぢや。縫之其やうに短氣にものを言やつてはどうもならぬ。總角いへ。何などお前の心次第にさしやんせ。縫之さいのう。どのやうにしてなりと。ト花車一人出る。花車總角さん。先刻にから駕を待つて置いたが何をしてござんす。今夜中に往ねば。身請の時が切れると又叱られる。ちやつと戻らしやんせいのう。總角エ、欺された。私やモウ往にやせぬ。花車往ないでつまるものか。太夫さん方明日は身請の惣揚ぢや程に。早う戻らしやんせ。サア。早う。縫之コリヤ杉ぢやないか。マア待つてくれ。太夫はおれが身受するのぢや程に。ちつとの間。杉申し。是申し。いつぞやから揚代の算用もせず置いて。私らへの紙花もくれずに。五百兩といふ身受の金が出来るもので。縫之さればいやい。金はナ。杉いえ。お前ぢやといふては親方が身願ひ立て。忌がる。待つことはマアなりませぬ。身請なざるゝなら。今夜中に五百兩の金を持つてお出なされませ。サア太夫様ござりませいのう。總角殿様モウ逢ふことはござんすまい。さらばでござんす。縫之コレ夫をやつては。杉アなりませぬといふのに。縫之さいやい。杉金はナ。縫之サア金は。杉金持つてお出なされませい。サアござれ。コレござれといふのに。縫之ハテは何もならぬわいやい。皆々申しどうして生きて居る氣はござんすまいぞえ。小市ア、何處も色事の生粹ぢやなア。ト辨之作。石橋中將。圖書。才兵衛出る。辨之其様にいふ事もないわサ。才兵衛いはにやなりませぬわいのう。中。圖サアよいわいやい。才兵衛イヤようないわいのう。コリヤ何して下さります。小市また一組はじまつたわ。辨之やるといふのに。才兵衛ア今貰はう。あるかえ有るまいが。頭から斯なるを知つてゐるに依て。マア第一お公家を客にする事はいやぢやと云ふのに。何もかも引受ける大事ない。なんのと言つておい

て。毎日太夫様を揚げてこなさん達三人で外の客をせぬによつて。身上は上つたりぢや。今日の明日のと引ずられて。橋の寮へこい合點ぢや。来て見ればどこへ金。首筋押へて戻らにやならぬ。わたさつしやれぬと代官所へ断るぞや。辨之其やうに大形にいふ事はないわい。オ兵イヤいふ。石橋中將様と圖書様と辨之作様とぢやと。圖書辨之作コリヤ何するぞい。辨之モウ了簡がならぬわい。ト刀を抜く。皆々止める。オ兵何ぢや切るのか。切れう。辨之己れ眞つ二つに。オ兵切つて貰はうわい。ト川浦遊軒出る。遊軒まで。辨之イヤお退きなされませ。遊軒まで何も皆聞いた。町人の無法者を相手にして不調法ものめが。オ兵イヤ遊軒様。町人の無法者とは。金受取らうといふがどうして無法者ぢや。遊軒二百兩ある受取れ。オ兵オ、受取らうては。ト遊軒才兵衛をむね打に打す。オ兵アイタアイタ。遊軒身の程を知らぬ奴。おのれ高位を客にした事を知らぬ顔なれば其通り。うぬが口から申上げると。うぬが首が飛ぶが。うぬ最前のやうな事。今一言いうて見よ。ぶち放すぞ。オ兵アイくあやまり入りましてござりまする。遊軒金は身がつゞける程に。辨之作何方なりといけ。辨之ア、有難うござりまする。今迄段々お金を貰ひましたに依て。いひかねて居りまする。中將才兵衛これから居續ぢやぞ。オ兵何程なりともお出なさりませ。圖書工、慾面のひつばつたやつぢや。遊軒コレ縫之助殿氣の細いどうした事ぢや。ソレ五百兩。ト投げ出す。辨之エ、遊軒明後日は嫁御の輿が入ると有て。家中が迎ひに參つて居る。將監殿の機嫌の損ねやう早う歸らしやれ。太夫は跡より身請してやるわいのう。辨之スリヤ身請して下さりませ。遊軒辨之作五百兩くるわへ持つていて。總角が身請して國へ連れてゆけ。辨之エ、忝うござりまする。辨之若殿お嬉しうござりませ。辨之嬉しい段か生々世々。此御恩忘れおきませぬ。有難うござりまする。遊軒まだく金は何程うても用に立つ。もう一家同然ぢやわいのう。辨之日本晴がしたやうな。中將此勢ひにとつと呑あかさうてはあるまいか。オ兵か程小判の山をつくからは。太夫様方を引連れて。すぐに廊へ押かけ山の郭公。辨之たつた今迄惡たいを吐きくさつた大泥坊めが。ト侍一人出て。侍花満憲

法様に。追付七ツでござりまする。お歸りあられませう。遊軒憲法殿く。ト憲法出る。憲法最前より一べん尋ねてをりました。遊軒イヤもう貴様は念を入れて稽古なさるゝ事はござらぬて。憲法オ、迎ひに來たか。侍ハア。憲法私ハモウ參じませう。遊軒お出なさるか。憲法弟。どなたも皆送つて行け。中將イヤく夫には及ばぬ。おれも直に跡から參内する。圖書明後日嫁御がお入ある。直に歸らしやれ。憲法いかさま親共より度々の使てござる。そんならお暇申して國へ歸りませう。辨之イヤもう今日ほど嬉しい事はない。遊軒然らば諸事は先達で申した通り。明朝大内でお目にかゝりませう。憲法いよく頼み存じまする。遊軒イヤもう一面に味方さ。憲法あなた是にござりませ。中將オ、明日逢ひませう。圖書明日く。憲法廊のもの共太儀ぢや。皆々ようお出なされませ。憲法紋之丞。サア供せい。紋之ハア。憲法明朝御意得ませう。ト七ツの鐘なる。憲法入る。遊軒サアく廊の者共をつれて。縫之助も歸らしやれ。國元に將監殿が待かねてゐられう。辨之そんなら身請の事お頼み申しまする。辨之私が吞込んでをりまする。辨之つゝと此嫁入はひよんな事ではあるぞ。ト小市出て。小市申し旦那。辨之小市か。小市其嫁御をどうぞお去りなされて下さりませ。辨之ヤア。小市私は喜蝶様と云交してをりまする。皆々ヤア。小市あの子も往ともなし。お前も持ともなし。去つてさへ下さりませれば。私は首が落ちても添ひまする。胴をすゑましたのでござりまする。御得心なくばいつそ爰で殺して下さりませ。辨之サアえらい事いひ出した。小市お大名の嫁御に疵付けました。殺して下さりませるか去つて下さりませるか。返事なされて下さりませ。爰は動きは致しませぬ。辨之よう念比してくれたなア。いかにもやらうと云うても親父が得心せねばやらうともいはれず。辨之きつう思ひ込んだ顔付ぢや。小市命は捨てをりまする。圖書不便な事ぢやなア。辨之遊軒どうぞしやうはあるまいか。遊軒イヤなかく器量のものぢや。すつかりとよう云うた。其代りには添れるやうに思案してやらう。小市エ、辨之去るやうの分別がござりまするか。遊軒あるく。皆々どうもござりまする。遊軒小市われは人の見知らぬを幸ひに武士になつて。縫之助殿

の國へ往て祝言の中へねだりこめ。皆々さうして何ぢやな。遊軒こゝに有るぢや。まづ汝がいふには。手前は何の
 某と申すもの。則ち淀與三右衛門が妹喜蝶は二世までといひかはしてをる某。夫のあるもの娶るは不義もの間男
 ぢやと強請かけるのぢや。皆々面白く。遊軒そこでこなたが。扱は左様か。其様なみだらな女を女房にもつて悪
 名とる事ならぬ。去つたといふ。皆々去らにやならぬ。遊軒かぶせ物しられた事ぢやに依て。親將監殿もくつとも云
 分ない。さつぱりと去つてしまへ。其跡が驅落。與三右衛門ぢやというて。指がきたないとして切つても捨られず。夫
 なりにして了へば。何と夫婦になられるではないか。皆々したり。辨之智恵もあれば有るものぢや。縫之小是より外に
 思案はないぞ。縫之何かに付けて結ぶの神さま。忝ない。遊軒拜まつしやれ。縫之さて汝は侍になつて来るか。
 小市參ります。縫之よう仕組みして往かざるまい。小市やるものぢやござりませぬ。若殿縫之助様に一寸逢はうな
 どとくらはすぢや。縫之さうぢや。コリヤみちく云合さなるまい。でたらめにやつて見やうかい。小市でたらめ
 でたらめ。ト侍一人出て。侍旦那これにござりまするか。みゆきさまより御狀が參りました。縫之エ、早う戻れてあ
 らう。ト狀を見る。侍イヤわざくの飛脚で參りました。窃に御覽なされませい。跡は火中なされとの儀でござる。
 縫之はてなア六ヶ敷いなんぢや。花様まゐる御存じ。ト遊軒とり。遊軒よし。覺ある。縫之花さま御存じ。覺え
 がござりますか。遊軒人に見せなといふ管ぢや。コリヤもう夕を脱いて花様ぢやわい。辨之しやれるは。中。縫いまのか。遊軒今のも。縫之お前のか。遊軒世話をやく根本根元ぢやわい。小市サア早う往かう
 ぢやあるまいか。縫之いなう。辨之追付身請してやりませう。縫之小結ぶの神様有難うござります。遊軒これは
 御慰懃の御禮いたみ入ります。トしかつべらしくいふ。オ兵サア太夫様方お出なされませい。皆々後から戻らしやん
 せえ。圖書お歸りかいなア。中將さらば。辨之ようお出たえ。ト唄になり。縫之是は見なれぬお方でござる。ト歩き
 ながらいふ。小市拙者はでんつく彌五右衛門といふ浪人ものでござる。縫之ハ、コリヤえい。小市不義もの遣

れまい。縫之まつた不義とは何を以ておいやる。小市ヤア旨い。ト臺詞。花道の眞中に立留りいふ。いろ／＼こ
 なし有り。舞臺よりほめる。みな／＼入る。合方唄になる。辨之サア是から戀君の文が承りたい。遊軒さつきの狀の
 上に。引續きておこしたはじつが来たわいのう。中將エ、あやかりものめ。圖書ちつともあやかる爲ぢや。われら讀
 みかけうか。遊軒ひけらかすではないが。聲を上げて讀んでくれ。遊中さらば聽聞仕りませう。いよく御きげんよ
 く御わたりなされ候と悦び。さ候へば辨之作に文遣はし候。大方御覽も候はんと存じ。見た。隨分いやら
 しく書つらね。故。お前が御覽なされたらばお笑ひ草とぞんじ。遊軒隨分いやらしいのがよい。何の笑はうぞ
 いのう。中將てもきつい好ぢやなア。圖書まへ方京にをりし時分より。いろ／＼口説き候へ共。身しんたえて遊軒は
 いやにて候ゆゑ。七りけんばい願籠いたし候かげにて。お前様と連添ひ朝夕有がたくぞんじ。辨之ヤア。遊軒モ
 一度讀んでみい。圖書身しんたえて遊軒はいやにて候ゆゑ七りけんばい。中將どれ。願ごめいたし候かげにて。おま
 へ様とつれ添ひ朝夕に有難くぞんじ。何のことぢや。ト辨之作氣味わるさうによむ。辨之所に又々家來辨之作を頼み。色々と
 め。辨之ハイ。遊軒よめい。辨之ハイ。ト辨之作氣味わるさうによむ。辨之所に又々家來辨之作を頼み。色々と
 口説き申候。遊軒はべら坊とも阿呆ともぞんじ候が。辨之作めが仕方。より／＼手討とぞんじ居申候ところ。遊軒サ
 ア跡を讀め。ト氣色だつていふ。辨之ハイ。トうぢくする。遊軒よめい。トくつといふ。中將讀んで了へやい。
 下引たくり讀む。中將惡縁ちぎり深し。今度の御上使遊軒に大内の作法御習ひ。諸事御頼みなさらねばならず。私
 に遊軒への文遣し候様に。こま／＼仰せ下され候故。筆も墨もけがれじよう存じ候へども。あはうが氣に入るやう
 に道ならぬ文遣し申候。圖書ドレちつと讀まう。御申越の通りあの文にてはいかな遊軒も腰を打ぬき申すべく。御上
 使の首尾もよく致し候はんと存じ。跡は思召の通り上使の役目さへ御しまひ候は。遊軒を引出し赤恥を御か
 せなされ候御事。御尤に存じ候。いつたい慾深き佞人にて候間その御心得。また國へ御歸りの節早々辨之作を逆

に御上げ御尤にぞんじり。ヤア。ト頓ふ。圖書御機嫌にて早々御歸國まち入り。火中へ。花滿憲法様まゐる。みゆきより。圖書そんなら花様は。はなみつの花であつたか。中將こりやどうぢや。ト右のうち遊軒腹の立つこなしいろあり。辨之作が持つて居る金を引たくる。辨之これは。ト遊軒だまつて懐へ入れる。辨之作思入。遊軒ウヌ。今迄くれた金はかたられたと思つて濟す。うせう。ト辨之作鐳を取つて。辨之まつた。遊軒ものぬかすと打はなすぞ。辨之成程御立腹は御尤。今迄こなた様を偽り金錢をかたり取つたかとの思召し。どうも濟ぬ。サア打はなしで下さりませ。ト遊軒ふり返り切らうとする。遊軒ぶちはなすぞよ。辨之今の狀の文句。國へいねば逆磔どちらてものがれぬ命。遊軒にツくい憲法め。辨之彼奴らには構はぬ。大恩はこなた様。ト遊軒思入。遊軒もう何時ぢや。圖書おつ付夜が明けます。遊軒已れそれ程に思ふならば云付ける用がある。辨之何なりとも。遊軒コリヤ。ト耳語く。辨之畏つてござりまする。遊軒いけ。ト辨之作走り入る。圖書遊軒殿。中將其方が心は。遊軒これ。兩人に耳語く。中。圖書がつてんぢや。遊軒先へ廻つて。圖書今出川口の門からござれ。ト兩人入る。

返し

造物一面の築地公家門の體。橋懸より雜式二人。其跡へ仕丁黒裝束の公家二行に並ぶ。其跡へ對黒裝束にて花滿憲法出る。其跡へ諸太夫二人。仕丁多勢靜に出る。西の方公家門にて立留る。

先公家二人おかげで四位の侍從に兼官致し有難う存じます。憲法町支配の御兩所御苦勞。取わけ榎田佐衛次殿御苦勞。新公家鎌倉より京都御館を預りをりまする武家に納言の兼官有難う存じます。ト四人目禮する。雜式より段々門の内へ入る。ト公家門引道具にて。大臣柱ともに東へ引込む。花道より兩方へ御簾のかゝりたる屋體せり上る。舞臺所々に御簾かゝりたる御殿引出す。花道より憲法一人出る。山口右辨向ふへ行き。すれ違ひけつまづく。山口不作法なやつ。憲法御免なされませい。山口わりやたれぢや。憲法イヤ御免なされませい。山口見しつたぞ覺えてるよ。ト云捨にして右辨はいる。憲法本舞臺へ来る。青山侍従つかくへ行當る。青山アイトく。トこける。憲法抱起し。憲法是は不調法な。御了簡下さりませい。青山ヤイわりや見馴ぬ者ぢやが誰ぢや。憲法私は鎌倉よりの上使。青山ムウ侍が禁中へ来るに。疊さばりの作法も知らずに来るか。但し鎌倉から斯せいと云付たか。憲法イヤ眞つ平不調法でござりまする。青山後日に屹度云付る程にさう思へ。ト行うとする。憲法イヤ申し夫は。青山エ。ト突飛し入る。憲法思入有て。憲法遊軒殿はどこへ往つしやつた。ト岩倉宰相通る。憲法申し。岩倉なんぢや。憲法紫宸殿へはどうさんじます。岩倉ハ、大納言の裝束を著て。紫宸殿を知ぬとはハ、。憲法イヤちと便りにする人を見失ひました。教へて下さりませ。岩倉紫宸殿はかう行くのぢや。ト願ぐるりと廻す。憲法どう参じます。岩倉さう行くのぢや。憲法どう。岩倉さう。エ、どんな。ト笏で願つき入る。憲法何を云つても便りにする人が居ぬによつて。ト憲法思入ある。中將出るを見つ。憲法イヤ石橋中將様ではござりませぬか。夜前はお目に。中將ヤイ。こりやわりや誰ぢや。憲法ハテ私でござりまする。中將私とは。聞ば鎌倉よりの使とあるが。武士に心安うものいはるゝ覺ない。夜前とは何の事ぢやしらぬぞよ。憲法成程御尤。ついにお目にかゝりました事もござりませぬが。ちとお尋ね申上たい儀がござりまする。紫宸殿へはどれから参ります。教へさつしやつて下さりませ。中將紫宸殿はわが足の向く方へゆけ。大だわけめ。ト下座の方へゆく。憲法呆れて居る。憲法コリヤ餘程喰違つたわいのう。併し石橋中將様が斯ゆかれるからは。此方が紫宸殿であらう。ト見て。憲法櫻と橘が見える。斯ぢや。トゆく。是より引道具御簾のある所へゆく。圖書こちらに居る。憲法みす低う懸りあるを揚げ行うとする。圖書コリヤ。御簾上げる事はならぬ。くどれ。憲法さう仰やるは圖書様か。餘りみすが低うござります。モそつとお上げなされて下さりませい。圖書ヤイ。みす上げいと慮外なやつめ。大内の事さはいするか。憲法差配は致しませぬが。此

約束では。圖書約束とは何が約束。御簾へ手をさへると後日に鎌倉へ急度申付るぞよ。憲法ハア。ト憲法思入有つて。みすの内へくゞる處。圖書冠の纓を以て引く。冠落る。圖書不吉もの。冠落した天奏へ申上げる。待つて居る。ト走り入る。憲法是より思案して胸を極める思入にて冠を著て。しほくくとゆく。紫宸殿の道具引出す。圖書。中將。公家四人。遊軒居る。憲法階のそばへ来る。中將鎌倉の使御座どころぢや。憲法ハアト中將顔を見てぎつくりする。中將御座近うあがらつしやれ。憲法ハア。ト又階を渡る。向ふのみす少し上る。中將出御。皆々シイ。ト辭宜する。中將毎度の格にまかせ御太刀を下さる。頂戴。憲法ハツ。ト中將みすの内より黄金作りの太刀を出す。鞘を殘して身ばかり出す。憲法見て恠りして柄の方より取る。圖書玉座に近い。白刃をかくせ。憲法ハツ。ト袖の下へ入る。中將頂戴のもの隠す事緩怠。憲法ハツ。ト出す。中將真劍狼藉。ト憲法腰へ差うとする。中將天子の下されもの腰に差す慮外もの。憲法ハツ。ト憲法思案して襟を裂き白刃を隠す。中將古格の献上ものはどうぢや。憲法先達て天奏方へそなへ置きましてござりまする。中將不調法千萬な。天奏に受取つたもの一人もない。直に持つて上るはしれた事。不念法外な。憲法ハツ。ト此内より無念のこなし有る。中將天盃頂戴。憲法ハツ。ト中將三寶に大土器のせ。みすの内より持出。憲法があたまたの傍へ置く。土器破つて置く。憲法土器取上げる。破つてある故ぢやつと膝へ入れる。中將此度の使甚だ法外の至りなれども。其儘にさし赦す下れ。憲法ハツ。ト憲法階を下り少し思入れ有つて跡ふり歸りゆく。向ふより青山。山口立塞る。通さぬゆゑ附舞臺の方へゆく。又岩倉。高尾立塞る。其外みな憲法をまん中へ取巻く。憲法コリヤいづれも方は何となさる。山口イヤ何ともせぬ。大納言の兼官で大内へ来るからは。歌もなるであらう。ちつと所望しやうかい。憲法イヤ武骨ものでござりまする。岩倉ハア歌はいかぬか。歌よむ術をしらいて大納言の兼官するとはふとい奴ではあるわいのう。高尾面の皮の厚い奴ぢや。岩倉イヤあつものぢや。ト皆々よつて憲法が顔をこづく。憲法どのやうになされても知ぬ事は存せぬ。が中將様圖書様。コリヤ又遊軒殿も酷いしやうぢやぞや。中將むごいとは。憲法イヤサ宵迄は。中將よひ迄とは。上使が宵に公家と對顔しても大事ないか。憲法イヤサそれは。中將大事の上使が天子へお目見せぬ内に。我等へ内通しても大事ないか。皆々逢うたがぢやうか。宵迄とは。憲法イヤサ遂にお目には懸りませぬ。皆々其筈。ト憲法遊軒が傍へゆき。憲法遊軒殿々御造作お禮はゆるりと申さう。差當つて土器が破れました。直に鎌倉へ下しませねばならぬ。彼のかへ土器をどうぞ所望させて下され。夫程の事は相違なうなされ下され。中將替土器とは何の事ぢや。憲法ヘテ此間から教へさつしやれた替土器。中將天盃は其儘で鎌倉へ遣しあの方で頂くものぢやが。ア、天子のお上りなされた土器は捨て了うて。下々の呑む盃を鎌倉へ下すか。憲法イヤさやうてはなけれども。中。遊はう盡したら鎌倉まで祟りが行かうぞよ。憲法ハ、アよう思へば是は何ぞ足らぬ物があるによつて。俄に此様になされたと見える。後日謝禮はいかほどでも致さう程に。中將コリヤ。何ぢや。謝禮とは天子の土器は塵芥場へ捨て。金で買うていぬる盃を鎌倉へやるのか。皆々金で買うといふのか。憲法イヤ全く左様ではござりませぬ。中將まづ第一見た事もないさままで。大柄さうに遊軒殿と。餘り大柄にぬかすと。青侍に云付ておとがひ蹴はなすぞ。憲法夫は又あまり。中將餘りとは。皆々餘りとは。ト此間に遊軒出て上の方へそろく歩み立て居る長社行にて。憲法サア。成程となたも。お近付ではござりませぬが。うや。しい大内へはいり。少し逆上せましたか。轉願致したさうにござります。まつびらごめん下さりませう。中將さういへばまだしもぢやが。けふの無禮式法は皆破れた。後日にお咎め行くほどに。さう思つて居よ。憲法斯なる上からは後日のお咎は覺悟の前でござる。が遊軒殿。是は又餘り酷いと申すもの。たつた宵までは式禮作法残る所もなう念頃に指南して。今更此様になさるゝは。なんぞ一物あるのでござらう。淀川筋通路の儀も。貴殿の教のやうに七里半の堤築く事を自筆に認め。天奏へさし上げたれども。今に何の御沙汰もなし。此様にわるう横に出さつしやるといふは。皆々横にとは。憲法サア横と申す

約束では。圖書約束とは何が約束。御簾へ手をさへると後日に鎌倉へ急度申付るぞよ。憲法ハア。ト憲法思入有つて。みすの内へくゞる處。圖書冠の纓を以て引く。冠落る。圖書不吉もの。冠落した天奏へ申上げる。待つて居る。ト走り入る。憲法是より思案して胸を極める思入にて冠を著て。しほくくとゆく。紫宸殿の道具引出す。圖書。中將。公家四人。遊軒居る。憲法階のそばへ来る。中將鎌倉の使御座どころぢや。憲法ハアト中將顔を見てぎつくりする。中將御座近うあがらつしやれ。憲法ハア。ト又階を渡る。向ふのみす少し上る。中將出御。皆々シイ。ト辭宜する。中將毎度の格にまかせ御太刀を下さる。頂戴。憲法ハツ。ト中將みすの内より黄金作りの太刀を出す。鞘を殘して身ばかり出す。憲法見て恠りして柄の方より取る。圖書玉座に近い。白刃をかくせ。憲法ハツ。ト袖の下へ入る。中將頂戴のもの隠す事緩怠。憲法ハツ。ト出す。中將真劍狼藉。ト憲法腰へ差うとする。中將天子の下されもの腰に差す慮外もの。憲法ハツ。ト憲法思案して襟を裂き白刃を隠す。中將古格の献上ものはどうぢや。憲法先達て天奏方へそなへ置きましてござりまする。中將不調法千萬な。天奏に受取つたもの一人もない。直に持つて上るはしれた事。不念法外な。憲法ハツ。ト此内より無念のこなし有る。中將天盃頂戴。憲法ハツ。ト中將三寶に大土器のせ。みすの内より持出。憲法があたまたの傍へ置く。土器破つて置く。憲法土器取上げる。破つてある故ぢやつと膝へ入れる。中將此度の使甚だ法外の至りなれども。其儘にさし赦す下れ。憲法ハツ。ト憲法階を下り少し思入れ有つて跡ふり歸りゆく。向ふより青山。山口立塞る。通さぬゆゑ附舞臺の方へゆく。又岩倉。高尾立塞る。其外みな憲法をまん中へ取巻く。憲法コリヤいづれも方は何となさる。山口イヤ何ともせぬ。大納言の兼官で大内へ来るからは。歌もなるであらう。ちつと所望しやうかい。憲法イヤ武骨ものでござりまする。岩倉ハア歌はいかぬか。歌よむ術をしらいて大納言の兼官するとはふとい奴ではあるわいのう。高尾面の皮の厚い奴ぢや。岩倉イヤあつものぢや。ト皆々よつて憲法が顔をこづく。憲法どのやうになされても知ぬ事は存せぬ。が中將様圖書様。コリヤ又遊軒殿も酷いしやうぢやぞや。中將むごいとは。憲法イヤサ宵迄は。中將よひ迄とは。上使が宵に公家と對顔しても大事ないか。憲法イヤサそれは。中將大事の上使が天子へお目見せぬ内に。我等へ内通しても大事ないか。皆々逢うたがぢやうか。宵迄とは。憲法イヤサ遂にお目には懸りませぬ。皆々其筈。ト憲法遊軒が傍へゆき。憲法遊軒殿々御造作お禮はゆるりと申さう。差當つて土器が破れました。直に鎌倉へ下しませねばならぬ。彼のかへ土器をどうぞ所望させて下され。夫程の事は相違なうなされ下され。中將替土器とは何の事ぢや。憲法ヘテ此間から教へさつしやれた替土器。中將天盃は其儘で鎌倉へ遣しあの方で頂くものぢやが。ア、天子のお上りなされた土器は捨て了うて。下々の呑む盃を鎌倉へ下すか。憲法イヤさやうてはなけれども。中。遊はう盡したら鎌倉まで祟りが行かうぞよ。憲法ハ、アよう思へば是は何ぞ足らぬ物があるによつて。俄に此様になされたと見える。後日謝禮はいかほどでも致さう程に。中將コリヤ。何ぢや。謝禮とは天子の土器は塵芥場へ捨て。金で買うていぬる盃を鎌倉へやるのか。皆々金で買うといふのか。憲法イヤ全く左様ではござりませぬ。中將まづ第一見た事もないさままで。大柄さうに遊軒殿と。餘り大柄にぬかすと。青侍に云付ておとがひ蹴はなすぞ。憲法夫は又あまり。中將餘りとは。皆々餘りとは。ト此間に遊軒出て上の方へそろく歩み立て居る長社行にて。憲法サア。成程となたも。お近付ではござりませぬが。うや。しい大内へはいり。少し逆上せましたか。轉願致したさうにござります。まつびらごめん下さりませう。中將さういへばまだしもぢやが。けふの無禮式法は皆破れた。後日にお咎め行くほどに。さう思つて居よ。憲法斯なる上からは後日のお咎は覺悟の前でござる。が遊軒殿。是は又餘り酷いと申すもの。たつた宵までは式禮作法残る所もなう念頃に指南して。今更此様になさるゝは。なんぞ一物あるのでござらう。淀川筋通路の儀も。貴殿の教のやうに七里半の堤築く事を自筆に認め。天奏へさし上げたれども。今に何の御沙汰もなし。此様にわるう横に出さつしやるといふは。皆々横にとは。憲法サア横と申す

は拙者が事。遊軒殿。私は絞りに逢ふとても厭ひはいたさぬが。天盃の土器と眞の太刀は鎌倉へ納めねば末代鎌倉將軍の疵になりまます。爰をどうぞ聞わけて下されい。遊軒オ、笑止な事ぢやなア。いかにも天盃土器は二枚。一枚は遊軒が持つて居る。これ雲の内に關白の御判をすゑられたのは是ぢや。ト土器出して見せる。遊軒欲しかる。さつきに土器割て置いたも身共ぢや。憲法成程よく、腹の立事があるものでがなあらう。いかやうになど腹の癒るやうにした上で。其土器を下さりませ。頼みます是遊軒どの頼みます。遊軒これ皆御覽じ。此ほえる面はいのう。圖書其ほえ面へ笏ふるまはふ。ト笏で叩く。中將ドレおれがのも一つ喰さう。ト又叩く。△俺も喰さう。○これもくらへ。皆々是をくく。ト皆々憲法を散々に叩く。憲法きつとなる。皆々何ぢや何ぢや。遊軒無念な。憲法何の此位な事が無念にござらう。遊軒夫ならば又土器やるまいものでもない。憲法どうぞ下さりませい。遊軒オ、やらう。ト柄にて叩く憲法見て悔り。額血少々流る。遊軒無念な。憲法何の無念にござりませう。△ドレもう貰ふやうにしてやらう。ト蹴る。圖書俺も貰うてやらう。ト蹴る。中將あばらて貰うてやらう。ト蹴倒す。憲法思入。遊軒もうやるぞく。憲法どうなりとなされませい。遊軒オ、何なりとせうわい。ト蹴倒し踏む。憲法遊軒が傍へ行き。憲法サアもう大概腹が癒たであらうなう。遊軒オ、其位にしたらモウよい。今こそ土器やらうと云うたらよからうがならぬ。憲法此様にしてもならぬか。遊軒コリヤ是でもならぬ。ト狀を出す。憲法讀んでびつくり。憲法スリヤ此狀を見たによつて。遊軒うぬが絶體絶命ぢや。土器もかうぢや。ト打破る。憲法モウさうすりや是非に及ばぬ。ト遊軒を一かせ切る。皆々ヤア切つたはく。ト少し立廻り有つて追廻す。憲法冠をしめ直し。裝束まくり上げ。用意して又きりに懸るをいろく有つて追込む。道具元へ戻る。ト大内さわく仕出し。いろく、逃廻る。中將サアく大體の中ではないぞ。圖書中將様く。ト圖書中將行當り。中將遊軒は何とした。圖書遊軒殿は今出川口より二條の館へ送りました。中將女中方や上様はなんとした。圖書皆關白様のお指圖で。夜のおとへ入れましてござりまする。

中將淀伏見せの屋敷へも早打遣したれば。追付加勢が来るであらう。圖書いやモウ淀の與三右衛門早打ておひく、駈付けまして。日の御門まで参つたれど。迂濶にもえ入らず。御門に待つてをります。中將膳所の火消屋敷へもおひひにおひに駈付る。憲法がもし手に餘らば。與三右衛門を加勢に入れう。圖書關白様へ伺ひませう。ト走り入る。半素袍につゆ取つた侍掛烏帽子にて長道具を持ち八人憲法を取巻き出る。憲法冠著ながら裝束をまくり大立あるべし。圖書中將等かゝる。立有つて。憲法卑怯な川浦遊軒。出ぬか、出やアがらぬか。ト遊軒を尋ねる内。右の人數取付く事あるべし。此うち遠攻。大勢組付くを切倒し井戸へ入る。侍南無三寶。空井戸へ取逃した。水門を捜せく。ト皆々入る。道具一面の惣築地になる。淀與三右衛門花道より早馬にて出る。與三憲法は空井戸へ逃こんだとある。拔みちは此水門。ト窺ひ居る。憲法向ふの水門より出る。あたりを見て。是より冠裝束脱ぎ。前に眞の太刀土器を置く。與三右衛門隠れて見て居る。憲法身づくろひして腹へ突込む所へ。みふね鉢巻大小にて出る。憲法見て悔り。みふねヤア憲法様か。憲法神道源八が女房みふねか。みふねまそつと早う駈付けたら。やみくると御生害はさせますまいもの。憲法イ、ヤ悔むな。大内を騒したれば牛裂釜入にも遭ふべき身體。切腹するは我本懐。みふね委細の様子は承りました。川浦遊軒が奥様にむたいの戀慕。それゆゑの邪。憲法無念は無念とこたやうが。眞の太刀天盃の土器は此通り。鎌倉への申わけ。どうも堪へられぬ。みふね併し遊軒を打漏しなされてこそ残念にござりませう。憲法シテ遊軒は。みふね疵養生に二條の館へ歸りました。憲法エ、ト無念がる。みふねお道理でござりまする。憲法そぢは身が首に此天盃眞の太刀を添へ。鎌倉へ有の儘を訴へて指圖を待て。みふね有の儘に言上せば。理非は立つても大内を騒せた咎。もしお國を沒收せられば。奥様縫之助様は門前拂ひ。親殿様はいづくの大名へぞお預け。憲法花満の家は斷絶。みふね憲法様。お國も城も身のなる果。憲法エ、無念なはい。サア介錯せい。みふねハツ。ト後へ廻る。憲法此腹へ突込んだる刀を源八に渡し。遊軒を打漏したを無念なといへ。關口平太は遊軒が弟ぢやぞよ。みふねエ、

憲法あれら風情に目はかけな。志す怨みは川浦遊軒一人ぢやぞよ。みふね畏りました。憲法介錯。みふねエ、と首切り。是より装束に包み。右の太刀土器を包み脊中に負ふ。此間侍下座。橋懸りより。鑑を持ち狙ふ。みふね尻目にて屹度見付思入有つて知らぬ風にて態と鑑先へ向ふ。兩方そろく付寄つてみふねをはさみ一時に突く。みふねひらく。兩人芋ざしになる。又突だす。みふね切倒し行かうとする。圖書熊手にてみふねを引かけ立ある。圖書長刀に懸り首場の中へ飛ぶ。山口又立ふさがる。顔を切る。くわへめんにて死ぬる。此模様の立有りてみふね向ふへ走り入る。與三右衛門始終見て頭巾を取り。みふねを遙に眺め思入あつて。圖書ハテナア。ト手を打つ。よろしく幕。

第二幕 目 劔術仕合の場

造物向ふ一面の金襴惣二重舞臺。君は千代ませの謠。二重舞臺の中に奥方みゆき立つて居る東の方に神道源八。西の方に關口平太社杯にて手を組みなる。玉淵久馬社杯にて並び居る。雙方の武士大勢社杯にて反打ち詰合なる。志賀左近。吉川紋之丞まん中へ入り止めて居る。源八方に舟大工。平太方に百姓大勢並び居る幕開く。

大工どうなされて下さります。百姓百姓どうなされて下さります。△皆々ぬけ。△皆々ぬけ。左近待つたまたつしやれ。ト喧しういふ。此見えにて幕開く。みゆきわしが聲を掛けぬに待たぬか。口奥様の御意ぢやが鑑らぬか。左近善にもせよ悪にもせよ。奥様が待てと聲をおかけなさるに。尾籠の振舞却て落度でござらうぞ。紋之源八殿平太殿の詞も出されぬに。ちと我儘かと存じます。控へさつしやれ。△皆々ぢやと申して。紋之御意でござる。百姓。大工どうなされて下さります。久馬喧しい引かぬとくし上るぞ。左近汝らも騒しい控へぬか。百姓大勢はい。平太これく弟子衆。何をざわくといふ事がある。關口流神道流何方がよい何方がわるいといふ事は今取だちをする子供迄知つた事。貴様達がわやくといふても。勝つ所で勝にや役に立たぬ。仰渡された刻限に。竹刀打の勝負を決し。打勝つた

者に渡津も堤も。淀川筋は皆平太が普請。お手前たちがざわくいふと。何ぞ後の勝負が危いやうにも人が思うてわるい。控へさつしやれ。源八是々弟子衆。御前もこゝにござるに不作法な。何した事でござる。仰付けられた竹刀打の勝負。刻限までは餘程間がある。神道流か關口流か。印可を申受けた方が渡津堤共に淀川の普請承る。まだ勝負も知ぬうちに。ざわくと騒しい。控へさつしやれ。△皆々餘りと申せば。源八ハテ理非は勝負にあるわざ。平太騒しういふとかさから出るやうでわるい。皆控へさつしやれ控へさつしやれ。△皆々餘りと申せば。平太ハテぢやはいふなら。いはして置いたがよい。左。紋双方共にお引なされい。ト引く。大工汝れらもかしましくいふなサ。百姓お國へ直に参りましたも。堤の普請を早うして貰ひませぬと。又しても淀川の水がくへこんで田畑が流れて。南長柄の百姓は乞食になります。源八様と意地づくをお立てなされますは。私共の迷惑でござります。平太ハテ扱最前からの事を聞かぬか。儕等が其泣ごとを吐すによつて。今宵竹刀打の勝負して。打勝つた方へ堤も渡もかため取るむねのわるい事を片付けて。追付ばたくと普請して取す。暫く待つてをれサ。百姓ハイ何卒頼上げます。源八ヤイ大工共。わいらも難儀であらうが。今聞く通り意地づくに際どる渡しの普請。今宵のうちに何方へなりともかためたらば。急に取いそいで致してくれう。暫くまで。大工ハイ先刻から承りました私一人の迷惑でござります。致したうござります。私共大工も仕掛けて今に放てござりますゆゑ。棟梁受取りました私一人の迷惑でござります。源八追付善悪が知れる。待つてをれ。平太ハ、ハ、ハ、何やらしやうにもならぬ事を。いか様盲目千人目明き千人だの。日本開山の關口平太が弟子になるといふは。其元たちの目があるといふもの。割木をもつて狗子追へ歩く様な事いうて信仰するは。大きなべら坊といふものさ。△皆々左様くでござります。久馬平太殿善悪は小口からでも知れさうな物でござるが。現に善い方をしらずに悪い方を指南受るは。何したものでござるぞいのう。平太イヤもう何の斯のと申して。マアいうて見れば生付いた福と貧乏との違ひでござる。ハ、ハ、ハ、△皆々ハ、ハ、

ハ、源八人間は水と見れど天人は瑠璃と見る。又餓鬼は炎と見る。劍術も其通り。邪を以て向はゞ。流義よくても
 双金なまれば無刀も同然。正道をむねに納め。道を以て向ふを神道流。かの同じ目明でも。いろはも得書かぬ者を文
 盲と申す程に。各も随分流義に眼を見開いて居たがよい。○皆々ハア。久馬源八殿其方のお弟子は文盲ではござらぬ
 か。△皆々ちつと眼が開きましたかな。源八イヤもう四書五經詩文章位は心得てござる。△皆々シテ外のはナ。
 源八ハテよその文盲さ。○皆々さやうでござりまする。平太皆よく聞つしやれ。アノ大鵬でござる。兵衛に取つては片
 羽がいが九萬里づつ伸びまする。△皆々左様でござりまする。平太其大鳥の前で雀侍が。ちやらくちやくと。ハ
 ハ、ハ、ハ。△皆々ハハ、ハ、ハ。源八アノ鳥といふ奴は。月などが互えると夜が明けたかと思つて。ガア〜と吼えま
 する。是をあはう鳥といふ。扱からすどもがカア〜よう啼くぢやござらぬか。○皆々左様でござりまする。源八魚
 の腸でも引かけさせて往なしたらようござらう。ハ、ハ、ハ、ハ。○皆々ハハ、ハ、ハ。平太どれ鳥の因縁承はらうか。ト
 立つ。△皆々お聞きなされざりますまい。源八鳥の因縁聞かうとあるに。雀の因縁聞かいてもつまらぬものぢや。
 ト立つ。○皆々コリヤお聞きなされませい。ト兩人向ふへ出。平太なんと神道流は關口流よりはよい物かなア。源八サ
 アレバ何れもは何と思召す。○皆々イヤ拔群の違ひでござる。源八あの通りでござる。平太へ、ハ、ハ、ハ、雀どもが轉る
 は。○皆々雀とは。平太イヤ貴様達の事ぢやない。雀の事サ。ごくにも立ぬ事を貧乏雀共が。ア、不便な事ぢやノウ
 何れも。△皆々不便な事でござる。源八ハア鳥がなは。○皆々鳥とは。源八イヤ各方の事ぢやない。鳥めが事ぢ
 や。扱よう啼く鳥ぢやござらぬか。○皆々よう啼きまする。平太イヤ雀ら。アノ猿といふ物はナ。己れが面の赤い
 ゆゑに。箔のぬつた佛の顔を見て笑ふといやい。源八アノ蟹といふ奴はナ。己れが横に行くに依て。直に歩く人間を
 笑ふといやい。ト平太が方をこづく。平太オ、濼い柿めは甘い柿の人に食はるゝを笑ふといやい。源八磔が獄門を見
 て。足がないというて笑ふといやい。平太スリヤ獄門の鹽梅。よう知て居るか。源八知らずばちつと知らさうかい。

平太知らうわい。源八知らさうわい。平。皆々知らうわい。源。皆々知らさうわい。ト兩方より喧しういふ。みゆき双方共
 にまてといふに待たぬか。左近御意を背くか。みゆき女子と思ひ侮つての仕方か。源。皆々ハア。みゆき源八平太それ
 へ出い。平。源ハア。みゆきそち達は主人の禮儀を知つてをるか。イヤ知りやせまい。そち達兩人は兵衛の御師範も。
 貴き身を以つて鎌倉より仰渡された淀川の普請の儀も。かたみ怨みのないやうに。源八には渡。平太には堤と仰せつ
 けられたではないか。それに源八が渡。成就する事を憎んで堤を築かず。渡さへ渡さずは堤の往來叶はぬと。互ひに
 拒み。兵法の流義。私の宿意に主の用事を缺すさへあるに。今宵は何ぢや。縫之助様へ淀與三右衛門様の妹喜蝶殿を
 婚禮の最中。夫左衛門は鎌倉の使者に京都へお上りなさるゝお留守の内。親殿將監様も今宵の婚禮。わしまて上下に
 氣を付けるに。もし口論に及んで。双方の武士が拔放したら何とする。目出度い夜も家中に亂を起して主をのろふの
 か。源。平イヤ全く。みゆき殊に廻船往來の御朱印を預る此屋敷。淀川往來の普請延引に及ぶゆゑ。今宵子の刻に兩人
 立合の勝負を決し。打勝つた方へ一人に云付けいと親殿の仰せ。兵衛も役目も打勝つた方が承る筈でないか。それに
 家中を騒すは。主を蔑にする不届者。但し左衛門様のお留守の内と見かけての我儘か。平。源サアそれは。みゆき不
 所存ものめが。源。平段々誤り入りましてござりまする。みゆき目出度い祝言の夜なれば聞捨にして今はゆるす。皆以
 來は嗜め。源。平ハア。みゆき子の刻までは魚と水の交り。上下にも篤といひつけて。將監様の御機嫌を伺がや。源。平畏
 つてござりまする。文誠に主人といふ重石がなくば。つい口論にも取結びませうもの。武骨の段は御用捨下されませう。
 平太イヤもう時のはずみて。ふら〜と過言を申した。御了簡なされて下されい。源八イヤもう今更面目次第もござら
 ぬ。平太結構な流義を輕蔑致したは。下拙が誤りてござる。源八イヤ手前から手を突きまする。平太イヤ手前が不調
 法。源八イヤ重々不調法。平太イヤ手前が。源八イヤ手前が。兩人ハ、ハ、ハ、ハ。久馬長柄の百姓共。渡し舟の大工共。
 其方達も子の刻迄はたまりへ參つて控へてをれ。大工百姓。畏つてござりまする。百姓ドレたまりで待つて居よう。大工そ

んなら待つてをりまする。大工源八様の勝に極つて有る。百姓平太様の勝に極つた。大工サア皆ござれ。ト両方へ入る。左。紋イザ先づ奥へお出なされい。源。平各も奥へ。△皆々ハア、、、、。源八平太殿。平太源八殿。源八勝負は子の刻。平太後刻。源。平御意得ませう。ト唄になり。侍を連れ双方へ入る。みゆき左近紋之丞懸物みな取片付けい。兩人畏つてござりまする。ト入る。花滿縫之助出る。縫之扱もく急に來た程にの。エ、みゆき様。みゆき縫之助様。もう嫁御は見えたかえ。縫之見えた段か與三右衛門が附いてをられ。親父様と目出たい盡しの咄。ませかへして居る。みゆきそんなら又お前も。ナゼ嫁御の傍に居やしやんせぬぞいなア。縫之何をよい氣らしい。モウ來さうなものぢや。みゆき誰がいな。縫之イヤサよもや彼奴も。あれ程に稽古した事ぢやによつて。來ぬといふ事はない筈ぢやが。エ、此方の身請もエ、つゝと俺はつかりに氣を急しをる。みゆきお前もきよろくと嗜ましやんせ。女子といふものはさうしたものでぢやないぞえ。祝言の夜さりは。大體恥かしい怖いものぢやない。それでもあたまから聲のしなつこらしう物いふは甚うせいになるものぢや。傍に居てやらしやんせ。縫之モウ來さうなものぢやが。みゆきエ、およそな聲様ではある。ドレ私も喜蝶様の顔見て來う。けうといふ縹緞ぢやげな。エ、あやかりものめ。ト背中をたゞき入る。縫之ホウ何のあやかり物な事がある。よもや小市めに如才もあるまいが。辨之作はモウ太夫が事をいうて寄越さうなものぢやが。ト山家屋太郎右衛門町人の形にて出る。太郎縫之助様に逢ひさへすりやよござりまする。侍ぢやというて不作法な。何處までうせる。太郎サアようござりまする。侍憎い奴の。縫之コリヤく待て。そちは京都の町人山家屋太郎衛門ぢやないか。太郎縫之助様お前は。縫之コリヤ四邊へ目を利かせい。コリヤ此者には用事がある程に。苦しうない次へ行け。侍畏つてござります。ト入る。縫之よう來たなア。太郎よう來たなア縫之助様。コリヤどうなされます。何して下さりますのでござりまする。ト關口平太聞て居る。縫之コリヤ聲が高い。聞えるわい。太郎イヤ聞えるやうにいふのでござりまする。お前が廓通ひの揚代に詰つて。どうもならぬ程に金二百兩貸せと仰やる。大

盡金は一文もなりませぬというたれば。金は濟す違ひのない證據に。お上から預りの廻船往來の御朱印を預けうと申うて。コレく此證文。右二百兩の金子。來る晦日迄に相濟み申さず候はゞ廻船往來の御朱印其方へ買物に差入れ申すべく候所實正明白なり。縫之大きな聲をすなはい。太郎かういふ證文を書いて置いてモウ幾月になります。今日はやらう明日は渡さうというて。御朱印もおこさず金もおこさず。こりやマア何するのでござりまする。縫之サアサア尤ぢや。けれど其御朱印の事は。急な依てつい書入れたのぢや。なかくわいらに渡す物ぢやない。金は追付濟さう程にモウ二三日。太郎ヤこれく其大事の物を書入さして置いたがこちのこみぢや。千も萬もないか可よござりまする。ト大ういふ。縫之わりや何處へ行く。太郎奥へ往て親御様に此證文を見せて。金受取りまするわいの。縫之それをいうて堪るものか。太郎サア嫌なら二百兩の金今受取りませう。縫之サア二百兩の金は。太郎金がなけりやアイ若殿様に御朱印を。縫之シツくヤイ大きな聲すると爲にならぬぞ。太郎ヤア切刀を廻して切る氣か。縫之さうてはなけれど。太郎御大名の弟御が町人に金を借りて殺しても大事ないか。切られませう。縫之其様に没義道に物をいふなやい。太郎奥へいてめつきしやつきする。縫之それをいうて。ト取付く。太郎ハテ面倒な。ト突飛す。立廻りある所へ關口平太取つて放り。當る。縫之平太かよい所へ來てくれた。平太サアくようござります。縫之彼奴マア。ト平太。太郎右衛門が懐中の證文を取つて懐中へ入れる。ト太郎右衛門起きて懐中いろく捜し。太郎コリヤ今手酷い目に逢したはわれか。平太われかとは素町人の分てうぬく。ト睨む。太郎イヤサ強い顔すな。今の證文はどこへやつた。平太おれが取つた。太郎ヤア其證文を。ト取にかゝる。手を振り上げる。太郎アイタ、、、、。平太大盗人めが。御朱印くと澤山さうに。大切な物を證文へ書入さして。うぬ。表向て詮議すると首が飛ぶぞよ。太郎アイタアイタ。平太此證文は關所だ。命からく去るを有難いと思つてうせう。ト投る。太郎コリヤ又餘まり。平太イツツン打放してのきよ。太郎ア、御許されませ。ト遁げて入る。縫之てもよい所へよう來てくれたなア。平太お前もお

前ぢや。上様よりお預けなされる所の。廻船往來の御朱印は大切なお家の柱。此様な事が聞えるとお國の大事になります。ア、薬袋もない。縫之おれもさうは思つたけれど。平太こなたは一向夢中ぢや。縫之サア今の證文早うたうか。縫之イヤもう今の難儀を救つてたもつたわが身。何なりとも聞くわいのう。平太先以て有難う存じます。別の儀でもござりませぬが。お前の深いひ交してござる島原の傾城總角。私に下さりませい。縫之ヤ。平太モウぞつこん惚れぬいてをりまするゆゑ。廊へ通ひましても。お前と腐り合つて居るゆゑ。ねから手に廻りませぬ。お前が主ぢやに依ていはれませず。忌々しう思つてをつたが。幸ひの所ぢや。私にさつぱりと下されい。總角が起請を持つてござるであらう。ドレ下されませい。縫之平太。われは氣が違ひはせぬか。平太何がどう致しましたとえ。縫之イヤもう興もあすも覺はてた奴ぢや。平太なんにも覺める事もないがな。縫之ヤイ太夫と深う馴染んで居るは廊中にかくれはない。其主の思込んで居る者に惚るさへあるに。何ぢや廊へ通つた。大方其位なら。常の客のやうな顔てかつて取つたも知れまい。汝れはくようおれに向つて起請をおこせのくれいのと。そんな事よういふなア。平太ハテ惚れたものぢやに依て下さりませい。惚る事はなりませぬかな。ドレ起請を下さりませい。縫之まだくならぬ。今度からそんな事いひ居ると。手討にするぞ大盗人め。平太サアくようござりまする。それ程お腹の立つことなら貰ひますまい。縫之なんの爲に。平太ア、そんならせう事もなし。ト立つて往かうとする。縫之コリヤ待て今の證文おこせ。平太アノ此證文を。ヤレ折角こつちへ取つたものを。マア止に致さう。縫之ヤイ其證文持つて居てどうしをる。平太何も致さぬ。大切な廻船の御朱印を書入れた證文ぢやによつて。物ぢや。縫之ヤ。平太物ぢやてく。太夫が起請くれてさつぱりと退いてしまつしやれば上げます。いやぢやと云はつしやると物ぢやて。縫之そんなら汝いふ氣ぢやな。平太何のお主の難儀になる事私が申しませう。總角さへ下されるれば申しませぬ。起請下さりまするか。下さりまするか。

あらう。縫之エ、おのれはナア。平太下されませるか。縫之ならぬわい。平太ならずば物ぢやて。縫之おのれそれを。ト取にかゝるを突飛す。縫之モウおのれ。ト抜いて切かゝる。刀もぎ捨て。平太ものぢやて。縫之エ、汝を。ト又小刀を抜いて切かゝる。もぎ取つて捨て突飛し。平太下さりませぬか。否ならものぢやて。縫之おのれ。ト捕へ。平太こなたの身體の一大事なる事ぢや。篤りと思案して下さりませい。下さるであらう。遅なると物ぢやて。縫之おのれ。ト平太寄つて當る。平太物ぢやて。イヤハヤ結構なものぢやて。ト入る。唄になる。ト縫之助起きて無念のこなし有つて大小差し。身繕ひして切込まうとする。神道源八出て。源八お待なされませお待なされませ。縫之イヤ退け退け。聞かぬく。源八マア待つしやりませ。遂にない血相して。何處へお出でなされませ。縫之平太めを切つておれも腹切る。ト行つとする。源八サアようござります。最前からの様子は物蔭から見てをりましたれど。日頃意趣ある平太。私が出てはなほ意地つようなりをつて。お身の妨げにならうと態と控へてをりました。縫之源八モウ堪忍がならぬ。源八さればサ彼方は抜きさしのならぬ證文を持つてをれば。お腹を立てられまする程事の破れになつて。お家に疵が付きませるがや。縫之というてあれを。源八取返して上げませう。縫之ヤ。源八取返しさへしたら手の下の罪人どうせうと儘。私次第になされませ。縫之そんなら取返してたもるか。源八お前は何か知らぬ顔て。うつくしうしてござりませ。縫之イヤもう取返してさへたもればよい。源八其事を必ず色目にもお出しなされませ。縫之合點ぢやく。ト内より。みゆき縫之助様く。將監様がお召遊ばす。縫之助様。縫之ハイそれへ參ります。源八ちやつとお出なされませ。縫之そんなら頼んだぞや。源八私が吞込んでをります。ト内より。みゆき縫之助様く。縫之それへ參ります。頼むぞやく。トいひく入る。源八追付私。せうどもない事仕出さつしやれた。急に取返さねば大事になる。時にかうつ。是では戻しをりさうなものぢやが。ト思案して。かうつ。さうぢや。故之源八殿源八殿お召なされませ。源八殿。源八それへ參ります。ア、まよ。さうせずばなるまい。ト小首傾け入る。唄に

なる。ト橋懸より小市尻から奥へ忍びこみ。小市イヤサ申す事は申さにやならぬてや。侍無禮な侍がある。小市逢はにや置かぬ。トせり合ひ出る。久馬みゆき紋之丞出る。久馬奥へひくが何ぢや。十内イヤ此侍が若殿縫之助様に逢うとお座敷へ通りまするゆゑ。右の仕合でござりまする。久馬お聞あられましたか。みゆきどうやら見たやうなお侍。何の用があつて此屋敷へは参つた。小市然いふ女性はどなたでござる。久馬花満左衛門の奥方サ。小市奥方も口方でも大事な。縫之助殿に逢へば様子の知れるものでござる。みゆき縫之助殿にあへば様子が知れる。縫之助様をよびや。久馬縫之助様。ト縫之助出る。縫之助何ぢや何事ぢや。みゆきあのお侍がお前に逢ひたいといはれまする。縫之助來たか。先刻から。小市ウ、ン。縫之助ムウ。貴殿にはつひぞお目にかゝつた儀もござらぬが。手前縫之助でござる。小市さては御自分が縫之助殿でござるナ。つひぞお目にかゝらねば近付てあらう筈もなし。近付てござらねばつひぞお目にかゝらうやうもなし。近頃無念残念の對面を仕るナ。縫之助して御用とはナ。小市成程えらう用がござる。ちよつと夫へ出やツしやれ。縫之助者にナ。小市いかに。ト向ふへ出る。縫之助御用とはナ。ト小市取繩を出したぐる。小市縫之助腕廻しやれ。異儀に及ぶと。踏付けて繩かける返答は何と。縫之助までつひぞ逢うた事もない奴が。此縫之助には何誤が有つて繩掛ける。小市わりや不義者ぢや。縫之不義とは。小市ヤアしらじらしい。身が事は。八幡の邊に蟄居する。えらふ永介といふ浪人ものさ。縫之助其えらふ永介が何故繩をかけうといふ。小市今宵此館へ嫁入して來た淀與三右衛門が妹喜蝶は。身共が夫婦の契約をして居る所に。其主のある喜蝶を嫁にとるは不義密夫。スリヤ身は先の馴染。我は後のなじみ。不義間男といふが。此えらふ永介が誤か。返答は有るまいがなア。縫之助スリヤ嫁入して來た喜蝶とそちは懇して居るか。スリヤ被せられたな。久馬まつた何とも合點の行かぬ。お聞なされましたか。みゆき淀の城を預る程の與三右衛門。男のあるものをよもや縁組なされう筈がない。久馬コリヤ聞えた。扱はお大名の縁組を見かけて。強請込み金銭をむさばりに來たかたりものぢやな。侍來こい

つ引出さつしやれ。十内大がたりめ。ト立ちかゝる。小市聊爾せまい。聊爾すると腕に覺は有明櫻。はらくはつと散りめされうか。お笑止な一ツのあんどを蹴破つて。明日の晩から事を飲かすぞ。縫之助ア、ラをこがましや。いかに永介。喜蝶と汝女夫ぢやといふには。何ぞ慥な證據があるか。小市證據のない事をいほうか。喜蝶が直筆の二世も三世も言交した起請が證據。是を見い。縫之助にコリヤ起請。皆粗相すな。慥な證據が有るは。荒立てると此方の武士が立ぬぞ。小市なんと是が證據になるまいか。皆々ハテナア。久馬イヤ、其起請は偽物であらうも知れぬ。小市千も萬もない喜蝶を爰へ出せ。喜蝶に逢うて喜蝶が身共を見知らぬというたらば。身共は騙りぢや。又いかに女夫でござるというたらば。縫之助貴様間男ぢやぞよ。縫之助面白い。喜蝶を呼出して詮議する。左近喜蝶を爰へ引ずつて來い。左近畏つてござりまする。みゆき左近まで。縫之助なぞお止なされます。是へ呼出し詮議致します。小市早う出せ。みゆきまでマアまでいやい。縫之助様。喜蝶を爰へ呼出して。もし覺がないと云はしやんすればよけれど。もしいかにも私が夫でござると云はつしやると。いかう詮議がむつかしうなつてくるぞえ。縫之助の難かしい事はござりませぬ。みゆき難かしいわいなア。ア、氣の毒な。小市何の氣の毒な事がある。縫之助大事な左近。早う連れて來い。左近畏りました。ト入る。久馬ウム紋之丞。そちは此通りを與三右衛門様へ委細に申上げて。是へお出なされといやれ。紋之畏りました。小市だんない與三右衛門怖うないぞ。みゆきコレお侍。大事のことを云うてござつたが。いよく夫に相違はないかや。小市えらふ永介武士でござる。ト小市縫之助目くばせする所へ。嫁綿帽子白無垢にて。淀與三右衛門社村にて。紋之丞。左近付き出る。みゆきハテそれは合點の行かぬ。トいひく出る。みゆき與三右衛門殿。與三扱今日は種々の御馳走。將監殿にも殊ない御悦。こなたにも別して御取持でござる。みゆきイヤもう風情もない仕合でござりまする。與三時に今奥で承れば永介とやら。妹喜蝶にわけが有るとやら。其浪人はあれか。小市いかにえらふ永介は身共ぞ。みゆきお覺がござりまするか。與三ハテ藥袋もない。淀與三右衛門が妹に其様な事

が有つてよいものか。縫之與三右衛門様。何とやら私も心悪うござります。喜蝶殿をアノ侍におあはせなされまじたらばようござりませう。小市オ、逢はう。與三八貴殿の面暗れに。逢ひたくば逢してやらう。妹喜蝶あの侍にあへさ。嫁喜蝶アイ。ト縫之助の傍へゆく。縫之コレ大事ない。なにもかも諸事は味よう呑込んで居る程に。ちやつと傍へいて。すつぱりと有様にいはつしやれ。小市喜蝶か合點がゆくまい。何であらうと餘の筋はいらぬ。云交して居る事を。すつぱりといひさへすりやよい。サアいうて了へ。トふり切つて縫之助傍へ行く。縫之ハテ扱何であらうと有様にいひさへすりやよい。ちやつといはつしやれ。ト突やる。小市諸事は跡で知れる程に。ト又縫之助方へくる。縫之ハテ扱面妖な。小市怖い事はないわいのう。トつれて来る。もぢくする。縫之マア此帽子を取つて。ト取る。總角なり。總角縫之助様。縫之ヤアわがみは。小市ヤアこなさんは。與三與三右衛門が妹喜蝶。曇り霞のない妹でござる。とつくりと詮議なされい。小縫コリヤどうぢや。縫之マアわがみは何して。總角もう縫之助様。わたしや浚與三右衛門が妹の喜蝶でござんす。嫁入して来てお前の女房ぢや程に。かはいがつて下さんせえ。縫之是はマア夢ではないか。與三右衛門様どうでござります。與三イヤこれ縫之助殿。御親父將監殿と縁組いたした喜蝶はそれでござる。不調法ものでござれども。こなたを戀こがれまする故。取急いで嫁入致させた。天下晴れて夫婦にするのぢや程に。必ず粗相のないやうに頼み存じます。縫之ねつから合點がゆかぬ。小市おれも合點がゆかぬ。與三但し不得心にござるか。縫之めつさうな。これが不得心でたまるものでござりまするか。與三然らば添うてくだされうか。縫之添はいて何と致しませう。小市何のことぢや。みゆきお侍。サア喜蝶殿の出やしやんした程に。詮議さつしやれ。小市いえ。コリヤ喜蝶ぢやない。本の喜蝶を呼出して下さりませ。總角これ粗相いはしやんすな。浚與三右衛門が妹の喜蝶はわしてござんする。小市何をこなたは。喜蝶ではないもせぬもの。總角きてふてござんす。小市何程でも喜蝶ぢやない。總角喜蝶ぢや。トせり合ふ。與三妹。何をせり合ふ

ことがある。ひかへて居いサ。みゆきお侍。其喜蝶殿とはいひかはしては居やしやらぬか。小市イ、エ。こりや何ぢやいなア。縫之何ぢやの斯ぢやのといふ事はない。俺や嬉しうて堪らぬわい。小市各自ばかり嬉しがつて。久馬不義ではないの。小市ちよつと往んで參ませう。みゆき浪人まつた。十内御意ぢや待たう。小市ハイ。みゆき喜蝶さん。お前はいひ交した覺は有まいのう。總角めつさうな。其様な事が有つてたまるものでござりまするか。みゆきお侍。いひ交した覺がないと有るからは。約束の通りそなた騙ぢやぞや。小市え。與三二腰を差ながら。一國の大名に無實を云ひかけ。それなりにしておかうか。身が妹を伺いふのぢや。小市ハイ。コレ縫之助様。よいやうに云うて下さりませいのう。與三縫之助様。いかう馴々しい物のいひやうする浪人ぢやが。部屋住なれど左衛門殿の舎弟。彼等しきの素浪人に。知人あらう筈がない。ハテ知人なれば妹喜蝶かな。何やかやさし構ひになりさうなものぢやなア。よもや知人ではござるまい。小市イエ。知人の段ぢやない。縫之ヤイ。ついぞおのれ見た事もない奴ぢやが。何故騙りをいうて来た。まつすぐにいへ。小市それは何いふのぢやいなア。縫之何者に頼れたか有やうにいへ。いはぬと骨をひしいてもいはさにや置かぬぞ。小市イヤ是もすさまじいわ。コレお前頼んで私に斯せいと。縫之ヤイ。そりや何をぬかす。エ、聞えた。扱はおのれ身が熱うなつたによつて。様々偽をいうて。此場を遁れうとする大盗人め。小市是はきようがる。いかに面々ばかりすつくりと旨い目に逢うたというて。コレ主はぬしとも思ふが。此方がしらしんとして居る所ではないわいの。總角よう私にいひ掛をしに來てたな。何やら怖い男では有るわいのう。小市そう。寄つてたかつておれを獨りはね出しものにしたは。アイ。あの喜蝶と申しますはあれは島。與三そいつくまれ。十内捕つた。ト小市を縛る。小市是は迷惑な。與三大騙めが。何もぬかすな。じつとして居れば事により歸してくれまいものでもない。いらぬ願を利くと。直に首が飛ぶぞ。小市アイ。何にも物は申しませぬが。是は又迷惑な事ではある。覺てござりませえ。みゆき合點のゆかぬ事ばかりぢや。篤と詮議しや。十内大騙め。おの

れ仔細のあるやつぢや。先づ懷中を詮議して。小市何となされませ。ト十内懷中をさがし。十内さして仔細もない。ト守袋を取り。小市何の爲に。十内懷中に此守袋がござります。ト渡す。みゆき守りを取つて。みゆきこれは。十内何ぞ仔細がござりまするか。みゆき與三右衛門様。あの細付には些と詮議致したい事もござります。私にお預けなされて下さりませ。與三イヤ此館へ仕掛に參つた騙りめ。いかやうにともなさりませう。みゆきそんなら預りましてござりまする。與三いかやうとも。みゆきソレ片脇へ引据ゑて置け。十内サア立たう。小市立たう。何の事ぢや。ひとつも合點がゆかぬ。繼之與三右衛門様何も申しませぬ。エ、有難うござりまする。小市何の事ぢや。與三いよいよ妹めが儀を頼み存じます。繼之千年も添ひまするでござりませう。小市壺被つたやうな。久馬イヤ與三右衛門様。少し詮議が残りました。與三みどもにの。久馬何とやら氣味のわるい物のいひやう。最前あの男めがいひかはした證據と起請を出しました。則ち是にござります。與三妹自筆で一筆書け。總角ハイ。ト左近硯箱持つて行く。總角書く。與三久馬見やれ。ト久馬見合す。久馬コリヤ拔群の相違。與三夫でざらりと詮議は濟まうが。久馬ムウ。と九ツの半鐘打つ。左近子の上刻でござりまする。ト花滿將監出る。將監子の上刻か。紋。左左様でござりまする。與三將監殿。かの勝負只今でござりまするか。將監只今でござりまする。幸ひ皆これに居るわ。與三見物仕りませうかい。將監双方とも呼出せ。紋之ハア。ト竹刀しなへを向ふへ直し。紋之關口平太殿。左近神道源八殿。紋。左立合の刻限でござるぞ。平。源ハア、ツ。ト双方より弟子多勢連れ出る。將監源八平太。改めて申聞かすに及ばねど。鎌倉より仰渡された浚川普請。兩人に申付けたれども。互に意趣を拒んで延引する故。鎌倉への聞え御朱印を預る此家の疵になる。夫故しなへ打の勝負。勝たる方へ家の師範。浚川筋の役目一時に申付ける。左様心得い。兩人ハア。與三源八平太が争ひは承り及んだ。堤も築かず渡も渡さず。さし當つての難儀は當家でござりまする。將監左様でござりまする。みゆき凡そ二三年も普請放つてござりまするゆゑ。誰いふともなしに源八の渡し平太の堤と申します。繼之大切な勝負ぢや。打負けぬやうにしやれ。ト平太を見て脱む。平太總角を見る。嫌がる。平太エ、ウ、ン。紋。左双方共にお立合なされい。ト是より身繕ひする。弟子兩方へ別れ急度見て居る。兩人立合ふ。是より兩人將監方に目禮して。それより竹刀打にかゝる。双方の弟子より掛聲。此立さまあるべし。つまりに平太源八を打すゑる。皆々ヤア平太殿お出来しなされた。與三平太。適の手の内。見事。將監出来した。是は花滿の家の印可。師範たる者に譲るが古禮。浚川往來の普請も其方に云付けるぞ。ト印可を左近取次ぐ。平太取る。平太有難うござりまする。弟子衆悦ばつしやれ。皆々お手柄申さう様もござりませぬ。平太ヤアきつう骨の折れる事もござらぬ。たまりに控へて居る百姓共へも。此通り申し聞して歸したらよからう。左近畏つてござります。ト入る。將監是で追付普請も成就致さうと存じて氣が休まります。與三左様でござりまする。將監サア奥へ參つて祝言の盃致さう。與三右衛門様お出なされい。與三追付參りませう。將監みゆき皆引連れておじやれ。みゆき畏つてござりまする。ト入る。將監紋之丞參れ。紋之ハア。ト將監つれ入る。與三源八は定めて残念に思ふである。併し天災不定というて。大丈夫の氣にかけるものでない。主人の馬の眞先が肝要ぢや。サア縫之助殿。奥で祝言の盃致さう。平太イヤなりますまい。與三なぜ。平太部屋住ながら一國の大名。傾城を女房にする事はなりませんまい。與三傾城とは。平太何もかも承つた。與三右衛門様。餘りなされやうが粹過ぎていやぢやわいの。與三與三右衛門が何がどうした。平太こなた様の妹御というて嫁入した此女は。總角といふ島原の傾城さ。與三與三右衛門が妹を傾城といふには。何ぞ慥な證據が有るか。平太證據お目に掛けませう。ト懷中より狀を出し。右の起請を取り。平太せき。御通ひ下され候御心ざし。御嬉しく御座候へ共。こなたにちと。さし構ひ御座候ま。せひ。お思ひ切らせ下さるべく候。此後御返事も申さず候し。ひら様より。あげまきより。此狀と此起請の寫が同筆。是が傾城といふ證據。みゆき下レ其狀こへ。平太御覽じませ。トみゆき取て。みゆきはんにのう。コリヤ紛れもない同筆ぢや。ト引裂く。平太オ、これソリヤ何なざります。みゆきどうも

せぬ破つたのぢや。平太それを破つては。與三平太。妹を傾城といふには又何ぞ證據があるか。平太證據は。與三ドレ證據は。平太みゆき様何で破らしやれた。みゆき破つたは其方が爲ぢや。平太けぶけれんな事を仰やるが。何して爲ぢやな。みゆき家中一統に廊通ひは御法せき。それに。平様よりあげまきとは。そちや法度に背いて廊へ通うたか。平太サそれは。みゆき破つてやるは其方が爲ぢやわい。平太ハア。ト口を開く。與三平太妹は傾城か篤と見い。平太見す。傾城の。みゆき顔を見知つて居れば廊へ通うたのぢやな。平太サそれは。與三近付かとか見い。平太イヤ近付ではござりませぬ。與三こな慮外者めが。急度捕へて糺明する奴なれども。妹が一世一度の祝言の夜。今はゆるす以後急度嗜め。平太壺破つたやうな。小市どこも壺がはやる。みゆきサア構はずと奥へお出なされませ。與三妹おくへ。總角アイ。平太ア、何程壺かぶつても。まだこつちにはよい物があるぢや。皆々エ、平太物ぢやて。ト縫之助脱む。源八顔てとめる。小市とんと壺ぢやて。みゆき繩付引立い。皆々うせう。ト唄になる。

平太ア、どいつもこいつも精出して祝言しあがつたがよい。追付思ひ知らしてこまさうぞ。したが何と。日比には口聞いても今を見られたか。十内イヤもう見ぬ事は話にならぬ。常の願とはうらはら。イヤもう驚入りました。ござりまする。三平あの又た、かれた時のさまといふ物は。かゝつた形ではござらぬ。伸之進彼の後ろ足を投られた時は。病犬が水道へ轉け込だまぢや。平太イヤ拙者もちくと骨も折れうかと存じたが。根からはい猫を啜るやうな。腕なしの振りづんばいてござる。角兵衛源八殿。今日の勝負は。われらも摩利支天へ立願をかけます程の儀。こなたも兼て高言を吐いて置いたぢやないか。新治イヤ是お待ちなされ。百萬だらいうたというて。負けてしまつて。何の役に立ぬ事ぢや。各々方は存せぬが。手前はズント思ひ切りました。角兵衛拙者も是からよい師匠取をして。武藝を勵まにやならぬ。何れもはなんとと思召す。皆々我々も左様でござる。角兵衛源八殿。向後師弟の縁を切り。指南は頼みませぬぞや。新治指南上げましたぞや。角兵衛平太殿。此列の者一人も残りずお弟子になりたう存じまする。新治向後

弟子になされて下さりませうなら有難う存じまする。平太オ、こりや皆利口になられた。それでちつと米食ふ武士のやうな。ア、したが碌にもない事を教へ込て。きうせん筋へ固つたに依て。一人一人本街道を教へて。眞人間にしてやらうと思へば。ア、世話の。満足に教へてやらう。皆々有難う存じまする。平太皆仕合せなわるたち。有卦に入つたやうなものぢや。皆々左様でござりまする。平太ドレ弟子師匠の盃致さう。奥へござれ。皆々ハア。ト行かうとする。源八イヤ關口平太ちよつとお目に掛りたい。平太拙者に。源八成ほど。ト兩人向ふへ出る。平太用とは何でござる。源八ハ、ハ、イヤもう日比は手前もおのれやれ。いと思はゞ樊噲項羽でも一握りのやうに存じたが。なか／＼參るものではない。最前其元の働き微妙の構へに。寄つかゝる事ではござらぬ。向後手前も御指南を受けませう。門弟になされ下されうならば。忝う存じまする。平太ハテいつにない利口な御挨拶でいたみ入りまする。源八イヤもう甲乙を見ますれば天と地と申さうか。富士の山を蟻がせゝるも同然。及びません。平太イヤ又其様にもござらぬて。源八イヤサ及ばぬと申す證據には。目の前で弟子衆が。其元へ破門致されたを何共申さぬ。又各々の前てかく申すが。此後從ひまする性根でござる。平太是は痛み入る御挨拶。左様に仰やれば此後陸じう致し。互ひに申しかたらひませうと申したらよからうがいやぢや。貴様は大きな蠅くらひぢやの。此間から兵衛は天下に我ばかりのやうに。いかに願に細工のよい蝶番があるというて。人も多に此關口平太と立並んで争ふといふは。膽のたばねの丈夫なと申さうか。盲目蛇に怖ずと申さうか。面の皮の厚いと申さうか。身の程を知らぬと申さうか。けち太い腰骨も痛むであらうが。それは手前が打たうて打つたのぢやない。貴様のけちぶといから叩かれたのぢや。かの水を浴びて居る物を。足首を泥龜めが食ひ付いて引込まうとするを。引捉へられて料理せらるゝと同じことぢや。したが面の皮の厚いのは。零落した時の甚う多足になるものぢやげな。かうさつしやれ。もう兵衛は止めにして辻坊下の豆を切る鎌の曲か。それ今の鍋でもかぶる太夫になつたがよい。ハ、ハ、ハ。源八イヤもうお差圖受けまして。何なりとも稽

古致さにやなりませぬ。時に平太どの。先づ御師範の印可はとらつしやる。渡し堤ともに淀川の普請は受取つしやる。先づ言ふ所のない。これで其元の十分になつたと申すもの。時に其替りにちと其元へ御無心の筋がござる。平太無心とはな。源八餘の儀でもないが。物ちやて。平太ヤ。源八へ、物ちやて。其物を下されまいか。平太ヤ。源八わが身にも主ぢやないか。難儀さつしやる事ぢや。又あればかりが女子でもござるまい。サもう貴殿の十分になつたからは。餘の事はいかやうにもなりさうな事ぢや程に聞分て。平太これへ源八。何ぢやと思へば物ちやをば返してくれいか。源八サア夫をどうぞ。平太ならぬ。ずんとならぬ。源八サアなるまい。さう見たに依て貴様を十分に納めた忠義者ぢやに依て。平太ヤア。源八其志を酌わけて。平太ヤイへ、そんなら何か。その物を貰はうと思つて。わざと立合の勝負に負けてやつたといふのか。源八イヤ全くさうではない。それはそれは是。平太だまれアがれ。うぬは太い奴ぢやなア。いけもせぬ立合に打のめされたが面目ないに依て。物に假託けて云くろめるのか。源八さうではない。平太ならぬ。ぐつとならぬ。大べら坊めが。面の皮の千枚で。又此平太にずはらへと物をぬかすな。皆弟子が落ちたが恥しうないか。此願で。此面で。よう悪たいを聞くナア。ト指て突く。平太せめて無念なと思ふ根性があらば。きん玉でも踏へてくたばれ。アノ大泥坊めが。ト顔をほる。源八源八邪ても非ても貰ひかゝつた物ぢや。貰はにやならぬ程に。さう心得ていやれ。平太ハ、皆聞きやれ。あゝいふ願ぢや。十。新。清今のやうに打れても。皆々恥しうはないか。源八忠義の恥しめは韓信も股をくぐる。強うても負るもあらうし。弱うても勝つもあらうし。そこは千差萬別ぢやと思つたがよい。十。久面白。十内強うて負るならば。其強い所へチトお見舞申さうかい。源八何時なりと御出なされ。久馬其そつ首をかう。ト打にかゝり。十内同じく打掛る。竹刀打にて二人を打すゑる。源八マアざつとこんな物ぢや。新。三。さういふ所を後からかうと。ト又かゝるを立廻あつて打すゑる。源八何人なりとお出なされ。平太コリヤ出来た。けうとい物ぢやが。それは皆とりくの儀を見る儀

なわるたち。ひやうりてやられもせうが。先生はいかぬていナ。源八夫もやり兼はせぬて。平太ハ、やり兼ずば最前御前でナゼやらなんだ。そこらが口は調法で貧乏隠しの段ぢや。コリヤへよい事いうて聞かさう。おれと勝負せい。乃公にちつくりでも打勝つたら。コリヤ我望む證文をやるは。其替りに腰を叩き歪める。事によるとぶつてくぶち殺さうも知ぬぞよ。源八打勝つたら其證文とるぞや。平太ハ、もう慾になつた。よいはコリヤ證文は爰にあるは。マアちよつとマアへ。ひゞくれのさき蚤のきん玉の斧で破つた程でも。竹刀の先が。平太身體へちよつと當つたら直にこれをやるがけうといものか。源八力一ばいやつて見やうわい。平太オ、出来すへ。したが思ひよらぬ所をかうぶちかけると。源八かう止めるでありさうなものぢや。平太よつ程ようなつたわい。又爰を外してかうやつたら。源八かうして防ぐぢやてや。平太えらいものぢや。所をかう付込んだら斯して。ト是より立色々有りて。源八平太をぶちのめす。源八かうぶつた物ぢや。マア此様なものぢや。どなたでもどいつてもマアこんな物ぢや。ト弟子ども氣味わるがる。源八ドレさらば證文を。ト取る。平太コリヤそれは。源八なんぢや。竹刀がちくとでも當つたら證文やらうと賭づくぢやないか。約束ぢやに依て取つたがなんと。平太よう取つた。けうとい物ぢや。其けうとい所を又かう。ト抜いて切つてかゝる。立廻りありてぶちすゑる。源八まだ望ならかうへ。いくつても氣に入つたやうにぶつてやる程に。さう心得て居たがよいぢや。ト傍へ坐る。弟子皆々袖引合ひ氣の毒なる思入。平太そろそろ起きて刀を差し。徐に塵を拂ひ。平太どんな事が有つても勝つ所て勝ちさへすればよいぢや。源八なかへ手利ぢや。ようぶつた何にも云はぬ。此禮は重ねて屹度いふぞよ。源八關口平太。神道源八何時なりとも承らう。平太いはいてならうか。源八聞かいてならうか。平太どうで遅いか。源八早いか。平太禮いふ所が。源八互ひのせつば。平太しつかりと。兩人忘れなよ。ト唄になり。平太みなへ連れて入る所へ。縫之助總角出る。縫之源八出来しやつたへ。總角大體氣味のよい事ではなかつたわいなア。源八何アノ位の事に屬託する者ぢやない。マア證文を戻しませう。トヤ

る。縫之こいつにかゝつて様々の目にあふ事ぢや。トやぶる。小市奥より出る。縫之助行當つて。小市ワアイ。イヤもう歸ります。縫之小市ではないか。小市縫之助さん。ヤこなさんは。よう酷い目に逢したぞよ。縫之イヤもう背中に腹ぢや堪忍したも。縫角小市さん。お前はどして繩を解いて戻らんした。ト將監。與三右衛門。喜蝶に綿帽子著せてつれ出る。縫之ほんにどして繩はとけたぞ。小市サア變つた事ぢやないか。あのみゆき様といふはおれが姉ぢやわいなア。縫之。源ヤア、。小市わしが親は禁裡の諸大夫で有つたが。仔細有つて浪人の尾羽うちからして。姉は舞子に賣られる。私は奉公に往て今此形。最前の守袋に生れ年月が書いて有つたを見て。幼な顔が残つてある。ちひさい時の話し親達の事。憂苦勞を物語して。兄弟の名乗をしたわいなア。縫之それで讀めた。兄左衛門殿。堂上方の娘を妻に貰うたとばかり。親の名もいはず委細は追つて知れうといふて暮さつしやつたが。そんなら舞子といふ事を隠さう爲て有つたか。源八そりや私に窃にお話してござりまする。みゆき様の舞子の時の名は大吉と申しまする。小市いかにも元の名は大吉といふ舞子で有つたげにござりまする。縫之是はしたり。縫角そんならお前も此お家の一家ぢやわいなア。小市ア、一家にしては薄いものぢや。源八叔最前聞いてをりましたが。コリヤやつぱり傾城の總角殿でござりまするか。縫之オイのう。源八何ぢややら入組んだ様なわけぢやがどうでござりまする。縫之サアおれも合點が行かぬ。高が此小市は喜蝶といひ交して居る。おれは太夫へ添ひたし。小市そこで縫之助と相談して。高は喜蝶を去らして連れていぬる約束して置いた所が是ぢや。縫之マア何いふ仔細でござりまする。縫之サアお金の金は来ず。其間に身請の客の埒が明いて行かねばならず。死なうと思つた所に。其客といふは思ひがけない與三右衛門様。何であらうとおれが妹の喜蝶ぢやというて連れてゆく。いふやうにせいと俄に拵へつれてござんしたわいなア。源八したが扱は喜蝶殿も。縫之助様も。いひかはした者のある事を知つて。圓う納めうといふ與三右衛門様の志。仇に思はつしやりまするな。縫角エ、添ひない。將監舞子は戻らず聞届けた。縫角ヤア親人様。將監そこには

居るは島原の傾城總角ぢやな。皆々いえ是は。與三いふまい儘に聞届けた。將監殿あなたには先祖より。家中には不義法度の固い掟と承つたが。見ると聞くとは大違ひ。妹喜蝶の婚禮の夜に。傾城遊女を引込み。館は揚屋同然。是て濟みまするか將監殿。急度御返答を承りませう。將監さてはいはう所もない憎い奴等。源八おのれも同じ穴の狐ぢやな。源八與三右衛門様。是はどうでござりまする。縫之與三右衛門殿。此者は御自分様の妹喜蝶殿でござります。與三だれが。ついに見た事もない女。廓の傾城賣女めに與三右衛門近付は持ちませぬぞ。縫角イ、エイナア。お前が妹喜蝶ぢやと。私を通してござんしたぢやないかいな。與三やい、何をぬかす。ト喜蝶綿帽子を取る。縫之。小市ア是は。與三宵より婚禮を待つ所に。延引するこそ道理。コリヤ何ぢや將監殿。澁與三右衛門は武士でござるぞ。妹を揚屋同然の屋形へ嫁入りは得させますまい。傾城ゆゑ妹めは廢りました。澁與三右衛門が武士の立つやうの御思案が承りたい。皆々なんの事ぢや。將監成程御尤。返すくも不所存者の悴め。勘當ぢや。皆々エ、。將監七生までの勘當ぢや。早く出て失せう。縫之ハツ。與三成程御尤。勘當さつしやれずばなりませんまい。源八憚りながら與三右衛門様。お前様が。與三將監殿。武士が知行をくれ。召抱へるもまさかの用に立てんため。夫に家中へ指南もする身を以て。満座の中でぶちすゑられたは。さし當つて祿盗人。こいつらは何なされます。將監御尤。與三序に勘當なされずば成りますまい。將監源八勘當ぢや出てうせう。源八ナニ勘當とな。與三先づさつぱりと勘當がよからう。將監對面これぎり。うせう。源八ハツ。與三序に申すが。みゆき殿はもと舞子となり。是以て遊女。序に是れも勘當して了はつしやつたがよからう。將監一人たんれいなれば一國亂をおこす。與三一人も置かぬが政道。將監いふに及ばぬ。みゆきも勘當ぢや。皆々エ、。與三妹おのれも勘當ぢや。ト突やる。喜蝶エ、。與三妹。おのれが不義も知つて居る。勘當ぢや。うせう。喜蝶なんにも申しませぬ。忪へて下さんせえ。小市そこら中が勘當だらけになつた。與三イヤ又勘當なされずば。御上へ此事噂あらば家の疵。勘當とはいつちよい思案でござる。將監悴めゆゑに妹御を捨てさせ

まする段。なんぼう氣の毒に存に存じます。與三イヤもう手前などは勘當致せば七生までの勘當。將監手前とも七生までの勘當。與三併し一旦は左様仰せらるれども。指が穢いとて切つては捨られぬ俗のたとへ。少し此勘當與三右衛門會得仕らぬ。ト將監書く。將監これを宜敷申上げて下されい。ト一通認め出す。與三右衛門取つて。與三一。悴縫之助事。身持放埒。又みゆきは遊女なるよし詮議の上不屈至極。夫故七生迄の勘當致し申す所實正也。此儀鎌倉へも御披露願入者也。正月晦日。花滿將監。同左衛門。成程此通り言上仕りませう。とてもものに刻限をお書入れなされい。將監心得ました。ト書く。與三是てまがひなき勘當。御家の格式は立ちました。將監家來共門前よりたゞき出せ。皆々エ、。與三とてもものに早々たゞき出したがよからう。將監與へいてみゆきめを引ずり出し。一緒にうせう。ナニ與三右衛門殿是にござりませう。ト入る。七ツの半鐘。縫。源與三右衛門様。コリヤマア何てござります。與三最早七ツ時。六ツ迄はたつた一時。用意の乗物。侍ハア。ト乗物八人して昇き出る。與三右衛門乗る。花道の方へゆく。皆々これは。與三明六ツまでに屋敷を立退け。將監殿には覺悟なされといへ。狼狽へて此場に居ると命がないぞ。侍エ。イエイ〜。ト早打の如く昇き入る。皆々呆れて居る。皆々コリヤマア何ぢや。トみゆき長刀にて辨之作を追掛け出る。立廻り有て。みゆきが長刀を打落し。引かたげうとする。源八辨之作を取つて投げる。立有つて辨之作逃げて入る。將監辨之作の主殺しめ。ト手を負ひ出る。皆々ヤア將監様。源八南無三寶コリヤマアどうして手を負はしやつた。みゆき家來。辨之作が兼が川浦遊軒に頼まれ。私を口説いたが。今度の御使者に左衛門様の御供。それに今宵忍入り。私を連れ立退かうとするを支へなされたれば。源八此通りの深手か。トうろたゆる。將監おいの。源八おのれ辨之作め。ト行かうとする。みゆき源八まで。將監様のお命が危いぢや。ト源八戻る所へ紋之丞出る。紋之今迄家中揃ひ居りました。屋敷人ぎれば一人もござりませぬ。皆々ナニ一人も居ぬか。左近其上廻船往來の御朱印が紛失致しましてござります。皆々ハア。將監ナニ廻船往來の御朱印が。ト死ね。皆々是申しこれハア。源八入りヤ御朱印も辨之作

めうぬ。ト花道の方へ駈出す。向ふよりみふね包を背負ひ走り出。血みどろになつて源八に行當る。源八ヤ女房みふねか。みふね御家の大事ぢや〜。ト轉る。皆々ヤアみふねか。ト源八ゆかうとする。みゆきコリヤマ源八。みふねが此形。家の大事ぢやといふがや。小市是マア何ぢやしらぬが。大事やといふのう。ト源八駈戻り。みふねを起し呼び生けて。源八コリヤマ女房。氣をしづめて物をいへ。源八ぢや〜。みふね是此切先の血を見て。源八に無念なといへ。トのる。源八コリヤマ〜。跡も先もいはいては合點がゆかぬ。篤といへ。左衛門様が此切先の血を見て。無念なといへとか。みふね眞の太刀此土器それ。ト風呂敷放り出し。ウンとのり死ぬる。源八なんぢや〜。みふねヤアイ。ト色々して。もうコリヤマ息が絶たか。皆々ヤア。源八マア包の中を。ト解く。みゆきヤアこりや夫左衛門様の御首ぢや。皆々ヤアナニ左衛門様の。ハア。ト遠攻になり。皆々悔りする。源八兩人遠見せい。紋。左畏つてござります。ト入る。是より思入様々有つて。源八土器の破と太刀とを見て思案。みゆきは首に取付き取亂し泣く。源八開傳たる天盃の土器眞の太刀。此血を見て無念なといへと左衛門様が。切腹なれば。ソレみゆき様に戀の叶はぬ意趣。遊軒が大内の。ト思入有て。花道の方を睨みつけ。源八エ、無御無念にござりませう。トみふね方に向ひ。出来したうい者ぢや。よく知せたな。ト紋之丞左近出る。紋之三百人ばかりの人数にて出口を塞ぎました。左近承れば屋形を闕所仰付けられ。若し狼藉も致さうかと。用心の遠攻ぢやと申します。源八推量の通りモウ叶ひませぬ。是が左衛門様が。禁裡で騒動をおやりなされ。切腹なされた其おたゞりを見えます。兩人旅の用意せい。左。紋ハア。源八サア〜。是はしたりどうでござります。縫之どこへ行くのぢや。源八どこというて。マア宛なしに出るのでござります。皆々さうして爰はえ。源八天下よりの仰付けられ。明けて渡さにやなりませぬ。みゆきそんなら明けて渡すか。ト源八が顔をちつと見て。源八エ、胸甲斐ない。ト泣く。みゆきエ、男になりたい〜。縫之そんなら此屋敷に籠る所存はないか。源八ア、是壁に耳天に口。われ〜。同士の意趣ならば。いか様にもなりますれど。天下へ弓引くと朝敵。朝敵となればたとへ後

日にいか程の大功なすとも。再び相續は叶ひませぬぞや。サア〜とも〜にお諫め申してサア〜。みゆきハツ。ト取亂して泣く。喜聲お道理でござりまする。總角マアお立なされませい。ト泣く。源八ア、是々とも〜諫め。エ、何をきよろ〜。縫之イヤ此草鞋は右へはくのか左りか。根から知れぬもの。源八どちらなと穿いたがよいわい。トみゆき足の立たぬ思入。源八みゆきを引起し。源八これみだい様。お前には川浦遊軒熊本辨之作といふ二人の敵がござりまするがや。みゆきイヤ、トみゆき屹度する。其顔へ刀さしつけ。源八これ此血しほは左衛門様の血しほちやがや。トみゆき身を顛はして睨む。源八モウよい〜。サア〜立たそ〜。左近そちらへもか〜れいやい。トみゆきすがる。源八若殿様御用意。金がござりませうな。お枕金ござりまするか。縫之イ、ヤねつからない。左近イヤ源八殿。もし要らうかと存じまして用意の金子を。縫之わづかなれども私も。ト源八取つて。源八ハア梅檀は二葉よりと。また年はもゆかぬに。流石は武士の子程ある。よい心掛。これ殿様。御枕金と申すものは。斯様な時にはか入りませぬ。それにマアねつから無いとは餘りな。高垣の方へ行くがよからうか。ト矢あまた射かける。紋之丞死ぬる。皆々悔りする。源八モウ絶體絶命ぢやわいのう。ト捕手あまた出で。見事なる立あり。追うて入る。ト黒装束の侍一人づつ出で。五人を一人づつ肩げ入る。此間始終はた〜。いろ〜立あるべし。源八手負ひ出ている〜思入あつて。源八縫之介様みゆき様。新治やらぬぞ。ト新治くわへめんにて死ぬる。源八みゆき様。三やらぬぞ。ト足を切られ死ぬる。源八斯やうに尋ねても御行方の知れぬといふは。敵方へ奪取られたか。エ、無念なナア。侍やらぬぞ。ト兩人切られ死ぬる。鐵砲撃つ。源八ヤア飛道具を持つて卑怯な何やつぢや。ト平太鐵砲持つて出る。平太今汝が右手の腕を撃かすめたは。己れに委細をいひ聞かせ。跡にてなぶり殺しぢや覺悟せい。源八扱は今の鐵砲はうぬて有つたよな。平太左衛門は鎌倉の上使をしくじり。其上兄遊軒に手を負はせ。大内を騒がしたゆえ。左衛門はくたばつて了うた。源八ナニ兄遊軒とぬかすからは。扱はおのれは川浦遊軒の弟よな。平太重罪の左衛門。部類眷族一人も残らず。ぶち殺せとの上意。此屋形は兄遊軒に下され。此平太が押領するわやい。源八ヤア人も多いに遊軒に屋形を押領しられたか。エ、平太無念な。オ、悲しいはず〜。みゆきは兄遊軒が心を掛け居れば都へ送り。總角は身が女房。喜聲も手かけにする。縫之助も跡からやると。くたばつたら左衛門に。此平太が傳言したとぬかせ。源八エ、遊軒こそ手に入らずとも。己れを打殺して主人への土産。遊軒も跡からやる。半座をわけておきをらう。平太なぶり殺しぢや覺悟ひろげ南無阿彌陀佛。ト立廻りある所へ。與三右衛門つか〜と出で。平太を突のけ。與三源八苦しうない早く立退け。平太でも鎌倉の咎人を。與三縫之助みゆき事。將監勘當いたしたる事紛れなき自筆ゆゑ。助け遣はず條件の如し。勘當の者どもお祟りない有難い勅書。平太でも左衛門が重類を。與三勘當は寅の一天。家没收は卯の上刻。平太イヤなんと。與三かゝる願をせん爲に。種々に心を碎いたわいやい。源八ぢやというて御主人達は。皆々皆こゝに居るわいのう。ト花道より出る。源八ヤア。與三家來を廻し細工はりう〜。平太四人のやつら。與三勅定を背くとたつた一打。ト種が島構へる。源八エ、お心ざし忝ない。與三其手疵では心元ない。源八かくの仕合。ト手水鉢を切る。與三出來した。平太うぬ。與三いけ。

幕

造物一面の黒幕。眞中に渡津場の小屋。橋懸り松原。高札立てあり。砂舞臺に草井戸。在郷唄にて慕ひらく。ト仕出し三人出る。

百姓しんどい休め〜。仕出し。何ぢややら。よう〜爰は源八の渡し。もう今から休んでどうなるもので。△それそれまちつと歩め〜。百姓なんぢや高札が立つてあるは。○ドレ〜。ト讀む。○一。淀川筋水早く落ち候故。舟にて登る工夫致すものあるに於ては。重罪たりとも其咎を許し。褒美は望次第たるべき者なり。△ムウそれでおれも

て下さんせ。金の工面。オ兵おつと皆までいふまい。金の工面所か。權九郎様に五十兩といふ金借つて。今日の明日のと日延べ。代官所へ断るといって居らるゝ。それに金どころか。ついそこらにも。金がぶらついてあるにな。お舟そこらあたりに金がぶらついてあるとはえ。與九拾ひたいものぢや。オ兵ソレそこに。目の前に。ト與九郎搜す。與九ハテめんような。私が目には見えぬ。與九ハテ其娘廊へさへやれば五十兩。ナント目の前にあるではないか。お舟さればいなア。あの子にはチト義理のある子なり。まだほんのまゝくおうて。オ兵イヤサよい比合でござんすて。與九まだ去年まで溝でしゝやつたもの。お松かゝさん私を廊へやつて下さんせ。私や廊へいきたくござんすわいなア。お舟何をいやるやら。廊へいけば芝居と違つて苦しいものぢやぞや。お松私や廊へいて常住殿様の顔が見たいわいなア。お舟ナニ廊へいて殿様の顔が見たい。お松アイ是見て下さんせ。ト守袋の起請を出す。お舟そんならば殿さんと。お松アイ。お舟そりや誰が世話して。與九わしが中へ入つて。ト思案して。お舟そんならわが身は廊へいきやるか。お松アイ。お舟オ兵衛さん。そんならさうして下さんせ。併しチトお前に無心がある。オ兵娘さへ来る氣なら。何なりと聞きませう。お舟私しも一緒に奉公にゆきたうござんす。仲居になりと遣手とやらになりと。一緒に置いて下さんせんかえ。オ兵イヤそりやならぬ。それでは始めから蟲つきぢや。總體子飼の奉公人でも。ちよこゝ親が來ると根性がわるうなるものぢやに依て。そりやならぬ。お舟そんなら此相談も止めに致しませう。オ兵そんなら金受取らう。金渡せ。お舟金はござんせぬ。オ兵すへるなく。お舟ハテ嫌なら縫之助様を連れていて桶ぶせにしたがよい。が世間にはあはうなものが澤山ある。そりや桶ぶせにしたら。さりとて彼は男氣なものぢやと存じて譽めるものもあらうが。桶伏の桶から金は出まいし。又親ぢやもの子ぢやもの。何の一所に居たというて。あの子の爲にこそようあれ。何のわるい事があらう。オ兵ア、これ〱御苦勞ながら奉公に。お出なされて下さりますと悦びます。どうぞお

さんすえ。オ兵一年に二兩二分。お舟アノたつた二兩二分。オ兵そんなら三兩。お舟アノ三兩。オ兵イツソ飛んで五兩。お舟安いもんでござんすな。そんならかうつ。イツソ大坂の新町へ談合せうか。オ兵ア、これ〱そんなら何程お舟マア五十兩。オ兵エ、お舟ドリヤ一走り往て來う。オ兵ア、これ〱出す〱。五十兩出す。お舟イヤ無理にとはいはぬぞえ。オ兵だれが無理にといふぞいの。娘を五十兩でよい奉公人取つたと思へば。勤をせぬものを五十兩とは。お舟高いかえ。オ兵イヤ、エ安いものぢや。サアざつと埒が明いた。幸ひ此在所にこちの入判がある。證文認め金渡しませう。一走りござれ。ト此間に辨之作出て聞いて居る。お舟そんならさう致しませう。オ兵してあの子は幾歳ぢや。お舟十六で戌の年でござんす。したが彼の子の戌の年は不思議な生れ。戌の年の戌の月の戌の日の戌の刻に生れた戌の年でござんす。オ兵それは不思議。出世しませう。サアござれ。お舟これお松。私はあなたと。ちつと往て來る程に。どんへも往かず待つて居や。與九郎よ氣を付けいよ。サアお出なさんせ。ト入る。お松早う戻らしやんせえ。與九お松さん。アノ是から常住殿さんの顔見て嬉しからうナ。お松私や嬉しいわいのう。與九廊へゆく道中せんならんがお前知つてか。お松イヤ、知らぬわいのう。與九おれが教へてやる。マア斯うつまをとらんせ。斯う足を向ふへ斯う。お松ゾントようせぬわいのう。與九ハテ不器用な人ではあるほどにの。お松かうかや。與九わしが跡から見とござんせ。ト此間に後より辨之作。お松をつれ小屋の内へ入る。お松ハアこれ。ト權九郎敵役の形に出る。町人三人つれ出る。茂治兵衛親父の形に出る。町人サアよござるわいのう〱〱。權九コリヤ老耄め。代官所へつれゆく。サア來い。町人コレ權九郎。其やうにせずといやいの。茂治コリヤ權九郎。いかに貸したが強いというて。其様にせぬものぢや。ハテ借つた金返す。マア二三日待つてくれい。權九いやぢやわい。今日の明日の何時まで待つのぢや。サア今受とつた金わたせ。町人これ權九郎。貸した〱といやるが證文でもあるかや。權九わ

り様たちは。人に金を貸した事がないによつて。其様な事いふわいのう。金貸して證文とらいて濟むものか。與九コ
 リヤ權九郎め。權九なんぢや。與九なんでもない。權九一札の事。一金五十兩也。右の金子御入用次第急度返辨申す
 べく候。若間違ひ候へば。娘お舟を其元へ女房に遣はし申候所實正也。なんと是ても物いふわいやい。與九權九郎め
 權九何ぢや。與九なんでもない。茂治權九郎それは。尤ぢやが。マア二三日待つたも。お舟も今は男を持したに依つて。
 私が儘にもどうもならぬ。權九なんぢや。娘に男持したした。親父。證文に書入れて男持したというて濟むか。太い奴
 ぢやなア。ト草履にて叩きかゝる。皆々取支へる。町人マアようござる。もし疵でも付いてはわるい。もう了簡さつ
 しやれ。茂治權九郎いかに手にあうたものぢやというて。胸ぐら取つてわりや何するや。權九イヤ斯するは。トた
 きかゝる。後より辨之作權九郎を投げる。權九イヤ親父。わりや味やるな。腕づくならこい。ト辨之作が顔を見て。
 權九ヤア今のはお侍か。わりや何ておれを投げた。辨之年寄にもし怪我でも有つてはわるいと思つて。引退けた
 が何とした。權九イヤわれが引退けやうは。えらい引退やうぢやな。ト掴みかゝる。顔をたゞく。權九アイタ
 アイタ。トそこら搜す。町人なんぞ落したか。權九目の玉はそこらにないか。與九おつとあるぞ。梅干の種
 や。辨之これ親父。こなた彼のペラ坊に金五十兩借つて居るか。茂治ハイ。辨之それ返して了はつしやれ。ト金をや
 る。茂治エ、スリヤ此金を私に下さりますかえ。與九あの只かえ。辨之いかに。茂治お前は神様か佛様かうぶす
 な様か。有難うござりまする。コレ皆の衆。悦んで下され。町人オ、出來しやつた。はよう返してしまはしやれ。
 茂治コリヤ權九郎。金返す受取れ。權九受取ぢや。與九權九郎證文から先へおこせ。權九忙しない。金改めるまちを
 れ。與九證文おこせ。權九まだしも似せ金ではない。ソリヤ證文。與九おつとせう。茂治おれが手か改めて見よ。與九お
 前の手も何も。いの字が兩方へ別れてある。茂治あはうめが。町人權九郎金請取つたらモウ往にやらぬか。權九こな
 のがある。近付でもないものに。五十兩といふ金を遣る。いかい痴呆ものぢや。長生すればいろの事を見るわい
 やい。ト花道の中程までゆくと。辨之コリヤ待て。權九何ぞ用があるか。辨之われは何ぞ忘れたものはないか。ト權
 九郎搜して見て。權九なんにも忘れたものはない。辨之金を返すからは云分はあるまいナ。權九誰ぞ云分があるとい
 うたか。辨之最前はなせ親父殿を打擲したぞ。權九何ぢやい。埒の明かぬ事いふないやい。そんな強請喰ふのぢ
 やないぞ。金貸して食てゆく權九郎ぢや。返せば云分はない。返さぬさかいてぶつたがなんとした。ト本舞臺へ戻る。
 辨之さつきには金返さぬさかいて打擲したが。今は金返したさかいてわれをかうく。トむね打くはす。權九イヤお
 さむ。いかに差いたと思つてひらめかすな。何てぶつた。なんてたゞいた。辨之返したに依つて我をかうく。ト又た
 く。權九イヤもう生きても死んでもぢや。侍。われはひよんな者と出入仕掛けた。不仕合なものぢや。喧嘩して生き
 て戻つた例のない男ぢや。ト跡へ遁仕度して。何の。命投げ出して置いてするわい。町人はてもうよいわいのう。了
 簡して往きやいのう。權九構ふない。挨拶するとわいら相手ぢやぞ。町人構ふなく。權九サア侍怖さうにせんと
 爰へこい。高が命一ツぢや。わりや何て挨拶する。おのれを。ト町人に投げられ。權九もう聞かぬ。ト逃げては。
 權九爰へ來い。どいつても相手ぢや。ト遁げて。權九コリヤ侍。卑怯なこゝへ來い。トやかましくいうて町人共向ふへ
 入る。茂治お前は神様か佛様か。見ず知らずに私に大枚のお金を下さりまして。あはうよお禮申せ。與九たんと
 金を只くれるといふ事があるものか。嬉しうござりまする。ト辨之作。茂治兵衛が白髪を切り。火にくべて小屋の内よ
 り壺を出し合せてのむ。辨之戌の年の戌の月戌の日の戌の刻。と戴きのみ。ウント氣を失なふ。茂治ア、是はお侍様
 お侍様。與九ア、是申し申し。茂治これはマア何の事ぢや。お侍様。與九なんぢややらいぬ。いはんした
 が。まぢん呑んしたさうな。茂治お侍様。お氣が付きましたか。あはう水々。ト井戸の水汲み吞ます。辨之ウ、ン。
 茂治お侍様お氣が付きましたか。ヤアお前のお顔は。辨之おれの顔が何とした。與九其お前の顔は。辨之身共が顔がど

のがある。近付でもないものに。五十兩といふ金を遣る。いかい痴呆ものぢや。長生すればいろの事を見るわい
 やい。ト花道の中程までゆくと。辨之コリヤ待て。權九何ぞ用があるか。辨之われは何ぞ忘れたものはないか。ト權
 九郎搜して見て。權九なんにも忘れたものはない。辨之金を返すからは云分はあるまいナ。權九誰ぞ云分があるとい
 うたか。辨之最前はなせ親父殿を打擲したぞ。權九何ぢやい。埒の明かぬ事いふないやい。そんな強請喰ふのぢ
 やないぞ。金貸して食てゆく權九郎ぢや。返せば云分はない。返さぬさかいてぶつたがなんとした。ト本舞臺へ戻る。
 辨之さつきには金返さぬさかいて打擲したが。今は金返したさかいてわれをかうく。トむね打くはす。權九イヤお
 さむ。いかに差いたと思つてひらめかすな。何てぶつた。なんてたゞいた。辨之返したに依つて我をかうく。ト又た
 く。權九イヤもう生きても死んでもぢや。侍。われはひよんな者と出入仕掛けた。不仕合なものぢや。喧嘩して生き
 て戻つた例のない男ぢや。ト跡へ遁仕度して。何の。命投げ出して置いてするわい。町人はてもうよいわいのう。了
 簡して往きやいのう。權九構ふない。挨拶するとわいら相手ぢやぞ。町人構ふなく。權九サア侍怖さうにせんと
 爰へこい。高が命一ツぢや。わりや何て挨拶する。おのれを。ト町人に投げられ。權九もう聞かぬ。ト逃げては。
 權九爰へ來い。どいつても相手ぢや。ト遁げて。權九コリヤ侍。卑怯なこゝへ來い。トやかましくいうて町人共向ふへ
 入る。茂治お前は神様か佛様か。見ず知らずに私に大枚のお金を下さりまして。あはうよお禮申せ。與九たんと
 金を只くれるといふ事があるものか。嬉しうござりまする。ト辨之作。茂治兵衛が白髪を切り。火にくべて小屋の内よ
 り壺を出し合せてのむ。辨之戌の年の戌の月戌の日の戌の刻。と戴きのみ。ウント氣を失なふ。茂治ア、是はお侍様
 お侍様。與九ア、是申し申し。茂治これはマア何の事ぢや。お侍様。與九なんぢややらいぬ。いはんした
 が。まぢん呑んしたさうな。茂治お侍様。お氣が付きましたか。あはう水々。ト井戸の水汲み吞ます。辨之ウ、ン。
 茂治お侍様お氣が付きましたか。ヤアお前のお顔は。辨之おれの顔が何とした。與九其お前の顔は。辨之身共が顔がど

うした。ト草井戸にて見て辨之戌の年戌の月戌の日に誕生の女の生贖に。血筋の者の白髪を合せ用ゆれば。相好變ると遊軒殿の秘傳。ハテ變つた妙薬もあればあるものぢやなア。茂治エ、辨之縁あらば重ねて。ト向ふへ走り入る。茂治なんの事ぢや。ト與九郎。茂治兵衛が襟を持ち井戸に向ひ。與九戌の年戌の月戌の日。スンヘンヘンスンハラメンスンキヤウ。ハテ變つた寢言もあればあるものぢやなア。茂治エ、あはうめ。何やら胸さわしがしてわるい。お松はどこに居る。與九ホンニお松さんに道中教へてみたが。何處へやら消えさんした。茂治エ、何ぬかすやら。尋ねをれおまつよ。與九お松さん。茂治まつよ。與九まつよ。茂治もちつと大きな聲で呼べ。ヤイお松よ。與九おまつよ。茂治まつよ。與九お松さん。茂治まつよ。與九ア、是小屋の内が血だらけぢや。茂治ヤア。與九それお松さんが殺してある。きもとやらいふものを取つたさうな。茂治そんなら今の侍が孫の敵ぢや。ト尻から花道へ入る。與九ア、これ俺一人残して。コレ俺も往かう親父さん。トお松の死骸をかたげ向ふへ入る。與九コレ親父さん。イヤ親父さん。と才兵衛お舟みなく出る。才兵サア。事が済んだ。證文取つて金渡す。お舟いかいお世話。お松や。是はしたり何處へ往たやら。コリヤ小屋の邊は血だらけ。才兵コリヤさうはさせぬわ。證文して金受取るとふけらかしてしまふ。其手は食はぬ其金こつちへ。お舟イエ其金を。才兵男どもそいつ踏のめせ。男合點ぢや。トよつて踏む。ドロくにてお松出る。お松コリヤ母さんを何とする。お舟やお松か。何處へいて居やつた。フンもう廓へゆく事がいやになつたか。お松それで戻つたのでござんすわいな。お舟是でも遁したのでござんすか。才兵イヤもう近年の誤り。トント誤つた。お舟ア、其様にいはんすなら了簡しよう。才兵サアそんなら娘駕籠へ乗りや。アノ垂を上げてくれいか。ドレ上げてやりませう。トお松を駕籠へ乗せ歸る。お舟そんなら私は跡からゆく程に。皆さん頼むぞえ。追付跡からゆく。機嫌よういきやえ。才兵娘が上氣したかして。顔が赤うなつた。ト向ふへ入る。お舟追付ゆく程に侍つて居る。ア、女といふものは早う智恵づくものぢやなア。昨日や今日まで千代鶴のやうに思つて居たが。いつの間にやら殿様と。ト涙をこぼし。お舟可愛やなア。神道源入が女房や娘が。僅な身の代に傾城の御公。ア、又愚痴な事いうた。こんな事いうてまで。ドリヤ往にませう。トよろしく。幕

第三幕 目 揚屋の場

造物惣二重舞臺。向ふ長暖簾まいら戸。下座中二階。橋懸り本大格子。寶來屋といふ行燈懸り。騒ぎ唄にて幕開く。權九郎匍いて居る。才兵衛。お梶託びて居る。梅の。ハ重菊。松代。千代鶴。孰も傾城の形。

お梶マアお待なされませい。權九けたいなぞ。梅の權九郎様突出しの太夫様ぢやに依つて。どうで氣に入らぬ事もあらう。其様に云うたものでもないわいな。松。千マア堪忍さしやんせいな。才兵まだちひさい太夫殿の事てござりまする。悪い事があるなら。遣手のおかちに呵らせませう。お梶私が篤りと異見致しませう程に。マアお待なされませ。權九コリヤやい。金出して買ふにすつたもぢつたのと。此權九郎遂に女郎に振られた事が無い。ちつぽけな形をしくさつて。大ばつたの男を能う振つたな。お梶成程御尤てござりまする。私がお腹の癒る様に致しませう。才兵爾うぢや。異見しや。お梶コレ花の井さん。こなさんはマアよう。此頃仕立て間も無いに。お客を振るといふ事があるものか。何て振らしやつた。トつめる。花の井泣く。梅のコレ。其様に荒うさつしやるないのう。千。松泣かしやんすわいなう。お梶構うて貰ひますまい。太夫様方の不動は。遣手が折檻せにやならぬ。サア如何いふ事て振らしやつた。玉の振りはせぬわいなう。權九イヤ。振つた。お梶振つたのか。玉のなんの私が振らう。あうたわいなう。お梶あうた。其あうたものが彼の様子に仰しやりまする筈が。玉のあうたはあうたけれど。つゝともう。ト泣く。お梶權九郎様あはれましたかえ。權九オ、あうたはあうた。梅のソレ見さしやつたかの。才兵お逢なされました

ら。其様にお腹をお立なされる筈はござりますまいがな。お堀何ぞ外に悪い事がござりまするかえ。權九才、有る。自體此間からあの遣手のおふねに惚れて居るに依つて。汝等を頼んでも、イヤすつたのもちつたのと云うて埒明かぬ。お舟めはこはがる。五日も八日も此様に流連うたして置いて。おのい等は俺を太郎にかけるとか。オ兵全くと左様ではござりませぬ。あのお舟が娘を私所へ取ましたに依つて。其目代に遣手奉公に參りましたが。かの龜付の總角を揚詰にして。ちよつといらはしも致しませぬ。外に結構な身請のお客が有つて遣らうと思つても。金銀をばつくと蔭散かして。廊中を廳けるに依つて。太鼓遣手まで皆お舟が幕下に屬致して。私も力一杯云うて見る氣ちやけれど。威勢に畏れて能う申しませぬ。お堀どうぞ手に入れて上げませうと思つて。オ兵衛様といろく相談をして居ります。もそつとお待なされませい。オ兵衛サア俺もほつと待屈したに依つて。マア蟲ころしにあの新造を呼んだ所が。皆々振らしやんしたかえ。權九イヤ振はせぬ。オ堀それでもお前。權九サア咄しをしても。付穂が無く。夫からワア〜ほえる。夫から方々逃げまはるに依つておはへて來たのぢや。何と俺がのが無理か。女郎が無理か。俺が無理ぢやあるまいがな。梅の其様になうてさへあだ憎てらしいこな様に。きく者はあるまいと思つたにヲ、怖。松千こちははいやぞお堀こりや太夫様のが尤ぢやわいなう。オ兵衛定めて其位なら。天晴な事ぢやなア。權九俺もやけむぢやぢや。おふねが手に入らねば。女郎どもや禿どもを。オ兵衛は迷惑でござりまする。お堀私等も如才はござりませぬ。如何して見ても往かぬに依つて。彼のお舟が娘の常磐木様も。お前に呼ばれていじり立すと。娘を人質に取れたもんぢやに依つて。厭ながら手に入らねばならぬ。此思案は如何でござりまする。權九出來た。夫ぢや〜。オ兵衛、待つたり〜。常磐木はひら様といふ大盡の揚詰。是も總角をアノお舟が揚詰にして放さぬに依つて。其人質に買はつしやるのぢや。外へはやらぬでい。權九這奴が〜。ひらにもせよ壺にもせよ。銀出して太夫を買ふに何を吐す事がある。オ兵衛も揚詰でござりまする。權九揚詰なら買ふわいな。オ兵衛先は置きの御座つてござりまする。權九何ぢや怖いな

ないぞ。うぬは癖につくか。オ兵衛うては無けれど。お堀そんなら先のお侍様と御相談になされませ。禿衆遊ひに往かつしやれ。ト此間に吹替の源入。頭巾被て向ふより出る。記内跡より隨いて出る。此内へ入る。千。松アイ、ト向ふへ入る。梅のアレ〜常磐木さんが。平さんと連立つてござんすぞえ。オ兵衛サア是からは。お前の存分にお買ひなされたが可うござりまする。權九齊に指圖受けいても。こりや腕づくにこまさう。穴なし汝も呑め。お堀サア一ツ上りませ。トぬめりになり。向ふより常磐木道中して出る。禿八重菊附き。跡より關口平太衣裳羽織。侍伴れて出る。平太コリヤ〜常磐木。もそつと靜に歩け。常磐木爰に消え彼處に結ぶ水の泡。浮世に捨つる身こそをしけれ。平太兎角這奴は小ませた事ばかり吐す。コリヤ汝が此様に辛い勤をするは。皆母めが根性からぢや。總角が手に入るまでは。存分に慰む程に爾う思へ。お堀エ、ひら様。常磐木様も好うお出なされました。サア〜お入りなされませ。常磐木先へ行くぞえ。平太コリヤおぢや。又取逃すな。お堀合點でござりまする。オ兵衛平様待兼山の郭公。サアお入なされませ。平太今夜は意趣返しに。儂も酒攻ぢや程に爾う思へ。ト記内出る。記内平太殿。平太記内最前の奴は。記内跡先へつけましてござりまするが。氣取ましたか此内へ付込みましたる故。お出を相待居ります。平太慥に彼奴と見た目は違ふまい。記内左様でござりまする。ト常磐木内へ入る。平太記内に囁き橋懸りへ入る。平太亭主何者ぞ内に居るか。オ兵衛ハイお客がござりまする。權九イヤア常磐木は是ぢやな。可い〜。平太ソレ。久馬畏つてござりまする。ト權九郎が顔を見て。久馬ホウコリヤ違つたわ。能く似た處もあるが。ハテ馬鹿な面だなア。ト突倒す。平太誠に横顔を見れば。其儘ぢや。梅のアレおふね殿が又例の酒に酔うて戻らんすわいなう。お堀ほんになア。エ、あの形わいなう。オ兵衛太夫様方や禿を。なんぞ己が使ひ者の様に申す。おふねが參ります。平太總角もござるか。久馬參ります〜。權九直に口説いてしまさうワイ。久馬直にお口説なされませ。ト平太に云ふ。オ堀さらば戀の捌け口を見ようか。ト向ふより傾城總角道中して出る。おふね赤前垂仲居の形。酒に酔ひたる體しどげなく。笹に色々櫛笄

莫入 小判 鏡 守袋を付け。此笹を持出る。幫間喜作。幸助皆々欲がり。取巻き出づる。右すりがね三味線鹿蹄
 なり。お舟誰に。花の私に。お舟わしの子にや遣らぬ。誰に。千。松俺に。お舟折たもんにや遣らぬ。誰に。喜。幸はな
 に。お舟はなれぬもんにや遣らぬ。ト花道にて色々あつてひよろつく。皆々笹を持ち引移る故轉ける。皆寄つて引起
 す。花の井肩へかゝる。囃子止る。お舟面白く。オ兵喜作惣助。又おふねを引張つておちよばいか。餘り煽動て貰
 ふまいぞ。お棍さうして今日は何ぞ貰はしやつたか。喜作しやつたの段か。マア一寸莫入五つに金三兩。お棍ヤア、
 幸助何ぼ呵られても。おふね大盡でなければ夜が明けぬ。お棍エ、そんなら俺も往たら可つたもの。あたぼこしもない
 一生の損ぢや。總角コレおふね殿。其様に酒が過ぎて。身も世もたままるものではない。些と控へて下さんせ。お舟是
 は太夫す。お志の段申上げう詞もない穿鑿でござんす。此方少しも酔はぬでござんす。總角でも道々も。それはそ
 れは危険うてなる事ぢやないわいなう。お棍イヤおふね殿。總角様を一寸借ましたいといふお客がある。一寸貸して
 下さんすまいか。お舟私が揚詰の太夫すを。借たいといふ客があるか。オ兵コリヤおふね。太夫を買ふは金でする事
 ぢやに依つてせう事がない。お客があるのに大枚の給銀取つてゐる遣手が野良かはいて濟むか。お舟濟まぬでござんす。
 親方様屹度あやまり奉つたぢや。ドレちつと又此方の商賣ぢや。お客様の座敷を取持つて。ト行かうとしてひよろひ
 よろする。總角ア、コレ危いわいなう。ト抱へる。花のおふね殿。此中云うた平さんといふのは。彼のさんぢやぞえ。
 總角何ぢや平さんとは。ト見て。ほんに又來んしたかいなう。平太しぶとう逢はねばしぶとう通ふ。揚詰の大盡おふね
 といふ遣手はそちか。ちかづきになりたい。久馬お召なざる。爰へ來てお伽申せ。お舟平様とは豫てお噂在原の平
 様ぢやな。太夫す。だんない行かんせ。私も近附にならう。總角イヤ夫でも。お舟ヘテナ私がだんないと云ふからだ
 んないわいなア。ト本舞臺へ來て真中へ直る。皆々次第に坐る。常磐おふねどんでござんしたか待つて居たわいな。お舟イ
 や常磐木の懸のね色も置かぬわいな。其色の替は持てぬ。大方やいとが足らぬものか。お舟は
 を絶する悪い性ぢやのに。何故呷けて置いた通りに。四火患門をすゑて貰はんせぬぞ。私が附いて居ぬに依つて。
 夫ぢや又お腹が痛うはないかドレ。ト往かうとする。久馬コリヤ何する。今宵は身共が揚た太夫。指さす事も成
 らぬ。ト突飛すを。お舟ホイ我物ならぬ情なさ。可し。構ふ事も無し酒持てよ。千。松アイ、。ト銚子 盃を
 持つて來る。お舟口が悪い水一つくれ。喜作 畏りましてござりまする。ト差出す。おふね幸助が脊中へ恧れ居る。
 お舟ア、さつぱりと是で飲直されるぞ。ト平太總角が手を執り。平太奥へ往て抱いて寝るわい。總角どの様に云はしや
 んしても。平太縫之助に心中立てるのか。總角いつやらからふつりと便りも無し。文も届かぬか音信一つさしやん
 せぬ。聞えぬぞへ殿様。死出の山も三途の川も。手に手を執つて行く約束ではないかいなア。常磐死出の山も三途の
 川も。手に手を執つて行くと。羨ましい事ぢやナ。平太エ、いけしぶとい。よう此様に仕込をつた。千も萬もない來
 い。ト引立てる。おふね割つて入り。お舟何なさる。平太伴れて往つて。お舟ちつとなるまいかいナ。平太何故。
 お舟何故とはつらい。僅た今お侍さんが。常磐木は揚げて置いた。太夫に指さすなと呵らしやんしたぞえ。平太ヤ。
 お舟ちつとお赦し。ト權九郎おふねが傍へ往て。權九コリヤおふね。お舟ヤアお前は。ト見て。お舟エ、又取違つ
 た程にの。あた厭らしい此顔わいの。ト顔を突く。權九コリヤ。身鯨か何その様に。指てねなすなへ。サア返事は
 如何ぢや。お舟とんと厭。極上箱入飛切の厭ぢや。味な事なア。ト笑ふ。權九イヤこりやげらつくな。可笑うないぞ。
 邪でも非でも抱いて寝る程に爾う思へ。平太揚詰の總角そんなら借らうかい。お舟一寸貸す事もならぬぢや。コレ此
 方へモそつと寄つて貰ひませう。ト總角をだかへて。お舟私が是程に思つて居るのに。殿さんに逢ひたい。とは。
 揚詰の此お客の手前へ。些と無慮慮てはあるまいか。思ひ出して貰ひますまい。平太貸す事もならぬぢやまで。權九ど
 うでもならぬぢやまで。お舟何と飲直さうぢやあるまいか。棍。幸。茂可うござりませう。平太記内一つ飲まうぢやない
 か。久馬才兵衛お盃を持て。權九俺も飲まう。おふね大盡はわりや遣手ぢやないか。俺が座敷を持て。お舟ほんに

なア。とんと商賣を忘れた程に。アイ權様ちとお相致しませう。久馬さらば常磐木獻さうか。常磐イ、エわしや酒は嫌ひでござんす。久馬下戸か。常磐アイ。平太下戸とは面白い。權九客が飲めと云ふに飲まぬか。お舟權様遺手といふ者は欲がる者ぢやといふがお定りぢやが御存じかえ。ト權九郎紙入より壹分出し鉢の中へ入れ。權九えらいものか。小判ぢやない壹分。サア飲め。酔潰れさせて置いて。おとつてしめる飲め。トおふね金三兩出し。お舟誰ぞ助けて欲しいなア。喜作オツト我等。幸助まんがちな。お尻イヤ私が助ける。ト競合ひ三人寄つて飲み。喜幸。規壹兩つつ有難い。オ兵見落しの一分は我等。權九ヤア汝はけうといものぢやナ。お舟權様お前の様なひぢりかすりやを商賣に。人を痛めて金儲する者が。廓穿鑿はマアすぎ候ぢや。わたしがきつと太鼓を持つ程に。私相應の大盡におなりなされねば。諸事粹とは申し悪い。粹にならんせ。戀のしやうが餘り野暮な。そうたいの客さんが後家茶屋へ行くもよい。仲居のある茶屋へ行くも揚屋の遣手はしたまでだてな所へ。コレなア如何に相方が見えぬというて去なうとはどうぢやいなア。お前はあなたにばかり可愛らしうて。其様に堅い殿御を誰も持ちたないなアと。じやら。云ふやら。昨夜の口舌がどうで慥うてと。はでに咄しも纏れるに依つてツイ座も長うなる。其折節は一寸どうやら可愛らしい事が。せきくになると茶の間でねるか。起番の夜は廊下待つて居るやうに。色は心の外ぢやわいなア。其はでもなしに私を口説くとは。役に立たぬてんがうぢや。今の一分でとんとお脈があがつたぢや。爪長屋とはようつけさんした。權九サア夫は。お舟旦那くわつくわ。ト脊中を敲く。皆々ワアイ言負けて好い氣味ぢや。ト權九郎しよげになる。お舟いかう酔うた。足揉め。ト寝轉ぶ。喜作アイ。ト揉む。平太サア常磐木獻いた程に是で一ツ飲め。常磐イエ此様な鉢で。平太つひに飲まぬのを盛殺すが此方の手ぢや。久馬飲まいても飲ます。厭と云ふと口へ注込む。お舟ハテ仰山な酒盛ぢやなア。平太ハテ總角を借らうとは云はぬ。汝も俺が揚げて置いたに依つて。焼いて食はうが此方の儘ぢや。久馬肴には此切灰をほうばらさうかい。ト火入の火を挟む。平太是は出來したサア飲め。常磐そ

んな無理な事を。平太飲まぬか。久馬食へヤイ。總角コレおふね殿。あれ見やしやんせいなう。常磐説言して下さんせいなア。お舟飲んだり。飲まにや持てぬて。ト寢言の様に云ふ。平太ドレ喫はしてやらう。ト總角鉢を取つて常磐木を引退け。總角貸しますでござんせう。平太貸すか。總角貸すわいなア。平太貸せば可いて。總角貸さう程に。もう常磐木さんは堪忍して下さんせ。オ兵サア埒が明いた。久馬是から奥へ往て。彼の奴も詮議致しませう。平太奥へ往て一ツ飲まう。オ兵サアお出なされませ。權九あたほこしもない。可い。俺も奥へ往て小びつちよを對手にして飲んでござさう。常幸旦那私も參じませうか。權九勝手にしをれ。平太サア總角來い。オ兵サアお出なされませ。ト唄になり平太。總角を伴れ入る。久馬常磐木を伴れ。其外皆々入る。おふね寢て居る。權九郎才兵衛にいろく可笑しき思入。オ兵衛驚き。オ兵アツ、。エ、權九郎さんお前の其形は何ぢやえ。權九用場はないか。ト入る。オ兵衛も入る。おふねそつと起き思入あつて。お舟ア、浮世ぢやなア。神道源八が妻や子が。如何にお主の爲ぢやとて。前垂姿で酒浸しになつて。娘に傾城。其娘を賣つた身の代て太夫を揚詰にして。變つた身の上ではある。したがもう百兩は皆になつたが。夜半までに身請の相談。こりや如何せう知らぬ。ト二階にて多勢の聲する。オ兵是はもてる物ではないわ。△常磐木さんは。どうやら持てぬ顔付ぢやわいなア。花の常磐木さんの三味線が聞きたいわいな。オ兵こりや好うござりませう。常磐わしや得う弾かぬもの。花のなアに此中歌うて居やしやんした。わしや知つて居る。お舟ムウもうしんしやくか。あんじたものではない。花のどうでも聞きたいわいな。オ兵サア。所望ぢや。トかけ晝にて三味線引く。お舟ハアとうく唄ふ。怯ず憶せず屋敷で教へた三味線は女子の嗜み。廓の客の慰みに間に合ふといふは。正味の雙六ばんてよこつち。茶臼が莖のおもしぢやまで。イヤ。這樣に云うてみても埒が明かぬ。時に此方の身請の事は。かうツ。トおふね色を思入ある所へ。茂治兵衛。與九郎伴れ風呂敷をおひ驅出る。茂治隨に此邊ぢやと聞いたが。與九格子のある所ぢやと云うたが。爰でござんす。茂治爰ぢや。コリヤ必ず泣えな。

何にも云ふな。與九何の云うてたまるもので。茂治そんなら可い。アイ誰を頼みたくござります。爰の家にお舟といふわろがあるか。一寸逢して下さりませ。お舟アイ誰ぢや。此方へ入らしやんせ。茂治入つても大事ござりませぬか。御免されませ。ト内へ入る。お舟何處からござんした。茂治イヤ私は些と。ト顔見合せ。茂治おふねか。お舟父様。與九お家さんかえ。エ、ト泣くを茂治兵衛睨む。與九泣かぬぞ。お舟でも能う来て下さった。文を遣らうにも便りは無し。定めて廊へ来て。跡で憎い奴ぢやと呵つて居さしやんしたであらう。茂治イヤモウ憎いやら悲しいやら。與九譚のある事ぢやごんせぬ。コレお松さんはなア。茂治又吐すか待をらぬか。與九へ、へ、お松さんはお松さんぢや。ア、ト泣く。お舟尤でござんす道理でござんす。お前の心にも姉のみふねが居たらば恚うてはあるまい。産さぬ中ぢやに依つて。廊へ賣つたかと思はしやんせう。なんの眞實の娘より可愛もの。假令此身を刻まれるといつても。あの子を放して可いものか。皆お主の爲ぢやと堪忍して下さんせ。茂治其様に可愛がつてくれる程。おりや身も世もあらぬわい。ト泣く。お舟コリヤ與九郎。何も彼も汝がよう知つて居るぢやないか。何故父さんの篤りと合點の行くやうに。云うて聞してはくれぬぞいやい。與九さいなア。云うて聞したけれども。エ、コレ俺より。泣くなと云ふ此なさんがたんと泣かんすわいの。茂治何吐す。おりや泣きはせぬわい。與九夫でも涙がちよろ／＼出るわいなア。年寄といふ者はこたへの無いものぢや。お舟したが氣遣ひして下さんすな。娘も達者に勤めて居ります。茂治ヤ。お舟私が傍に附いて居るに依つて。風邪一ツ引しはせぬ程に。夫を腹癒に。お前に知らせずに廊へ来たは。了簡して下さんせ。茂治ヤア／＼／＼何ぢや孫は達者で居る。お舟アイ。しかも廊へ来るはあの子の望み。與九其譚も篤りと咄しました。お舟夫ぢやに依つて。辛い勤ぢやとばかり思はしやんすな。殿様に逢ふを頼にして居るわいなア。茂治何ぢややらどき／＼と譯が知れぬ。其方は娘が事を知つて居るか。お舟常住傍を離さぬもの。知つて居いて何と致しませう。茂治猶どき／＼として譯が知れぬ。與九コレお松さんはな。お舟アノ中二階に居るわいな

う。茂治ヤアお松は二階に居る。お舟又案じたものぢやござんせぬ。客に揚られあの二階に。茂治二階に。ト二階に三味線唄を唄ふ。お舟アレあの聲がお松でござんす。茂治ヤアお松か。ト見る。二階にがきの影法師映る。皆々ヨイヨイヨ。與九ヤアあの影は。ト茂治兵衛與九郎が口を押へぢつと泣く。お舟常よりは達者にござんす。茂治そんなら殿様を慕うて。ト思入あつて。茂治可愛や／＼。お舟總角殿に勤をさすと。生きては居ぬと殿様の御短氣。お松が身の代で今日までは總角殿を人に逢さず。我娘の戀の取持して。總角殿をそてにする。末の出世を娘ですると世間の口の端。總角殿の妬み。源八殿まで忠義の立たぬ悲しさに。折角逢はうと思つておぢやつた娘なれども。隠し祕んで逢はせぬも義理詰。殿様はつい傍に御座る事も知らずに。逢ひたい／＼と云うてゐる心根可愛うござんす。茂治そんなら殿様には逢さぬか。お舟アイ。茂治可愛や／＼。お舟侍には何がなつたものぢやぞ。ト與九郎二階へ行かうとするを茂治兵衛引戻し。茂治何處へ行く。與九私は常々殿様によく似た／＼と云うて。私ばつかりを廻して居やんした。今の譯を聞けば可愛さうに。せめて俺が顔など見せて樂ましてやるのぢや。茂治あんだらめ。汝や俺が逢ふとつい消える。お舟何がえ。茂治サアそりやあの。二階の客が座敷の興が醒める。消える。些との間など消えぬ様にしてくれ。エ。阿呆め。お舟其様に思つては疾病が出る。今こそ此様な淺ましき形になつて居れど。追付殿様を御世に出して。娘も歷乎として聲を取りますわいな。茂治何ぢや娘に聲を。お舟アイ。與九ワア。と大泣。お舟何を泣く事があるぞいやい。茂治娘其方に無心がある。聞いてたもるか。お舟父さんとした事が改まつた。何なりと云はしやんせいな。茂治餘の事でも無い。お松が願を聞いてたも。お舟お松が願とはえ。茂治如何に忠義なればとて。逢さぬとは餘り酷たらしい。一生の俺が頼みぢや。何卒殿様に逢してやつたも。お松よ氣遣ひするな。汝が心に入つた様に祖父が死なうぞよ。おふね頼む頼むわいなう。トおふね俯向いて居る。與九コレお家さん。こなさんの前のお家さんが死なうから。うづくかして旦那をしじう甜めさんしたぢやないか。コレ物心覺えてからは堪忍の成るものぢや

ない。茂治コレ孝行は外に無い。何卒殿様と孫と寢させてやつて下され頼むわいなう。與九私が一生の恩に被ませう程に。お松さんの嬉しがらんす様にして下さんせ。茂。與拜むわいなう。お舟お前より私が逢してやりたさは。どれ程にあらうと思つて居さつしやんすぞいなう。茂。與そんなら逢してやる氣か。お舟如何も義理が立ちませぬ。茂治爾うぢや。ト七首にて死なうとする。與九郎おふね止める。お舟コレ待つて下さんせ。茂治エ、いつそ打割つて云ひたい。云ひたいけれど。與九云うたら消さんすであらう。お家さん逢して下さんせいなう。總角逢さいて何と致しませう。お舟總角さんか。茂。與今の様子は。總角みんな聞きましてござんす。おふねさん何にも申しませぬ。エ、ト拜み泣く。ふね此仕儀ぢや程に何卒。總角假令どの様な事があるといつても。是がマア如何黙つて居られませう。茂治兎角好い様に。總角お松さんは本妻私は妾。二人して中好う添ひますわいな。お舟有様は親の口から言ひかねてをりました。何卒そんなら。總角直に爰に寢さします。お舟エ、忝い。そんなら父さん與九郎も。ちつとの間奥へ。茂治行くなと云つても行かねばならぬ。阿呆來い。與九アイ。お舟まだほんの懐子。お前を頼むぞえ。總角そりや氣遣ひさしやんすな。與九何時消えうも知れぬ。茂治コリヤそんなら案内したも。お舟小座敷へお供致しませう。與九佛壇のある處へ。茂治コリヤ。お舟いかさま。義理といふ其義理こそは義理ならぬ。義理の上越す義理もあるまじ。茂。與南無阿彌陀佛。お舟サアござんせ。ト唄になり。おふね。茂治兵衛與九郎を伴れ入る。跡にて總角思入あつて手を敲く。禿アイ、。ト總角囁く。禿松代入る。總角今までは私より外に。一生女房は持すまいと思つて居たが。しかも私が床取つて寢さすねばならぬといふも。お松さんと殿様の中へ。よく。先の世で縁を引いた中か。結ぶの神様の結び様に念が入つたものでがなあらう。ト此臺詞の中に千代鶴。八重菊。松代出て屏風を引き床を取る。花の井。みちとせ。千代菊出る。花の總角さん。總角好う來て下さんした。二階客はもう濟んだかえ。花のアイ皆奥の座敷へ住て。二階には常磐木さん一人轉寢してござんす。總角そんならお前方を頼む。奥の客へ好いやうに間を合して。常

磐木さんを爰へ呼んで下さんせ。三千そんなら爰へおこすかえ。總角頼んだぞえ。松。千アイお床は可うござんす。總角コレ。ト皆々囁く。看込んで入る。總角長持の錠明けける。縫之助色事師の形て出る。縫之太夫か。總角殿さん。ト物云はずに行燈の火を手燭へ燈し。暗がりにする。平太後へ出て暗うなる故氣を著ける。久馬出る。是に囁く。ト是より平太探つて橋懸り床の取つてある所へ行く。源八立役の形にて才兵衛が口を押へ出て。同じく床の際へ寄る。總角縫之助點頭合ひ連立床の傍にて。總角待つてござんせ。縫之早うおじや。ト總角元の所へ戻る。久馬床の傍へ探り寄る。平太縫之助を執へる。コレといふ口へ手を當てる。久馬平太様御首尾は。平太ソリヤ。ト久馬に渡す。久馬縫之助を縛る。所へ源八。才兵衛を突出し縫之助をとる。久馬。才兵衛に猿轡を箱め縛る。源八は縫之助を伴れ探つて内へ入る。平太舌舐りして是より色々思入あり。様々あるべし。所へ中二階より常磐木を連れ出る。常磐總角さん今云はしやんした事。ト口に手を當て。總角コレ。ト總角囁く。常磐ヤアそんなら殿さん。ト常磐木囁く。常磐エ、アノお前。イエ、夫ては。ト又囁く。總角眞實。常磐眞にかえ。總角なんの神懸けて。常磐エ、忝うござんす。ト唄になり常磐木を屏風の中へ入れ。總角屏風引廻し。おふねと顔見合す。おふね物云はずに拜んで居る。總角是程は女の常ぢや。堪忍して下さんせ。お舟子程可愛い者はござんせぬ。了簡して下さんせ。總角イエ、私が心の狭いから。嘸蔑視ましやんすであらう。お舟身勝手な者ぢやと。怨んでござんすであう。總角手を合せて拜みます。お舟イエ、私が。總角イエ私か。兩人堪忍して下さんせ。ト源八。縫之助を連出る。源八女房おふね。お舟ヤアこちらの人。總角ヤア殿さん。源八始終の様子は皆聞いた。いかい苦勞をするなア。お舟お前に其詞を聞くが氣附人參。好う來て下さんした。ト執付く。お舟何時の間に爰へござんした。縫之聞けば聞く程。果敢ない浮世ぢやなア。源八豊入院殿龜山大居士。豊壽院殿角山大居士。今日は左衛門様の御命日。將監様の御逮夜。トおふね源八が手を巻り。お舟みふね命。姉様も今日が逮夜。源八心ばかりのせめては營み。お舟今日の命日。人に隠して料具も爰に。ト唄になり位牌を飾る。

其前に縫之助を直し。おふね祝蓋に菓子餅を供へる。此間唄。源八無御無念にござりませう。追付敵討つてお家を再び取立ませう間。今暫く草葉の蔭でお待なされませ。縫之其時都に居りませうならば。叶はずとも遊軒を一刀刀恨みませうもの。何事も不孝の段は。御免されて下さりませ。ト二階の障子明く。中二階にて茂治兵衛鉦打つて廻向して居る。お舟姉さん。嗚其時は口惜い最後でござんせう。お氣遣ひなされませ。身醜になるというても。殿様の仇お前の敵。追付討つて修羅の苦思を助けませう。お松が事は氣遣ひせずと。草葉の蔭から見下さんせ。其代りには源八殿は貸して下さんせ。未來は三人一つ運てござんすぞや。南無阿彌陀佛。縫之よその無常を告げるやら。心寂しき一ツ鉦。源八幸ひの追善供養。サア總角様二世までの固めの盃殿の位牌の前で縫之助様と夫婦の盃。總角エエ夫てはお松さんが。源八其松めが事を。志しに預つた故の祝言。此方は本妻。お舟其代りには。お傍になりとも娘が事を。源八祝言の謠はあの念佛。お舟お酌致しませう。ト唄になり祝言する。源八御朱印の盜賊は。體に平太とは睨んだれども。何を是ぞといふ證據も無し。迂濶にかゝらば御朱印を。土灰にもなさば永々お家は埋木。見出すまではと今日まで廊へ入込めども。お舟體に是ぞといふ證據も無し。源八女房。序に此戒名に廻向して置け。ト戒名を出す。お舟山殿喜譽信女。此戒名は。源八娘松が戒名。お舟エ、源八お松は死んだわいやい。お舟エ、それに又先刻に父様が。ト二階より茂治兵衛顔出し。茂治聲殿。源八舅殿。茂治先へ来て居やつしやるの。源八疾參つた。茂治胸に詰つて。と思入して。其處へ云うて下され。ト著物を抛る。障子びつしやりと閉す。お舟コレいなア。お松が死んだとは何の事ぢやいな。總角殿さんお前までがどうでござんすぞいなア。お舟此著物はお松が。血だらけになつて。こちの人。唯だ今まで無事で居たお松が。縫之俺が事を思つて。今まで姿を見せたのは。幽霊であつたわいなう。お舟エ。源八其方が身の上娘が事。與九郎が話で備に聞いた。何者とも知らず渡し場に於て。娘が生贖を取つたとある。戊の年戊の月戊の日に誕生したる女の生贖に。白髪を合せ用ふれば。怒ち白髪となつて相變るとあり。正しく敵の所爲。其方にも此事云聞かさんと来て見れば娘が面影。殿の事を戀慕ひ。未來の縁を結んで貰ひたさに。此世の縁は總角殿。子に迷はぬ親は無いわいやい。縫之夫程にまで俺が事を思つてくれる。志忘れ置かぬ。此世は僅か未來では。長う夫婦になつて遣らうぞよ。ト總角泣く。おふね振袖を持ち色々身に添へ泣く。お舟母様。傾城になつて居るのに此櫛は小うて悪い。もそつとむねの高いのを買つてくれいと云うたを。何を榮耀らしい。母も此様に金遣ふのは大抵苦い事か。忠義にする勤奉公。榮耀者と呵つたれば。殿様が今でも見えた時に。わたしや悪うござんす。何卒すゝきの兩ざしを買つて下さんせ。殿さんは此様な風がお好かいなアと。死んで居ながら修羅の迎ひは苦にもせず。經念佛の一遍も聞かず、粧ひ化粧や頭髪飾り。唄三味線を心懸けたは。殿様に添ひたい。と思ふ心の念力があつたか。我身の子よりも可愛うて。つひぞ肌を放した事も無いもの。姉さんへの言分は。何と未來へなるものぢや。其方に別れてわしや何とせう。お松。も一度物云うてたも。知らぬ事とて殿様に。逢ひたい。と云うて暮したを。逢はしたら可かつたもの。お松堪忍してくれい怏へてたも。かはいや。ト大泣。總角今までは心中を。立てる。と思つたが。女の意氣地はお松さんお前に負けた。未來は必ず女夫になつて下さんせ。いとしや。ト此臺詞の内橋懸りの屏風開く。平太率塔婆を持ち聞いて居る。源八泣いたとて悔んだとて歸らぬ事。兎にも角にも殿の御先途を見届くるこそ娘が追善ぢやかや。お舟アイ。縫之せめて佛間に回向がしてやりたい。源八憚りながら夫は望みまする所てござりまする。お舟あの子が肌身に付けた著物。せめて貴方の手で。ト渡す。縫之助取つて抱緊め。縫之可愛や。ト平太と顔見合す。おふねちやつと源八を押し入の内へ入れる。縫之助は中二階へ上る。おふね思入あり屏風の方を見る。平太エ、ト率塔婆を踏折る。總角を引捕へやうとする。お舟こりや何さしやんす。揚詰の内は指も差させぬと云ふのに。物覚えの悪いおさんではある程にの。平太汝は男に生れ勝つたものぢや。出來すわいやい。お舟其様にもござんせぬて。平太神道源八が女房。お舟エ、平太夫が逃廻る故。嗚不自由にあらうナ。お舟ハ、ハ、ハ、一ツも覚え

せぬて。平太神道源八が女房。お舟エ、平太夫が逃廻る故。嗚不自由にあらうナ。お舟ハ、ハ、ハ、一ツも覚え

の無い事を。平太わりや源八が女房ではないか。お舟源八とやら源七とやら。那樣者は存じませぬ。平太へ、知らぬであらう。何處ぞ其邊に居さうなものぢやが。正眞の猫に追れた鼠同然。彼處の隅爰の押入の蔭に隠れ廻るのら犬めが。お舟サア犬と云はうが猫と云はうが。爰へ出ては彼の衆。イヤサ主に別れて彷徨ふ様な。人が何の此邊に居てたまるものか。平太イヤいふまい關口平太神道源八と。互に兵術を争ふ程の奴が。うぬが主の國を横領せられて。あんけらひよんとしてけつかるはどう腰拔め。爰へ出て平太へ鬮憤を云はぬか。アノ寛坊めが。お舟サア腰拔と云れうが何と云れうが。大切な願ひがあるぞえ。平太爾う吐すは平太が所持して居る廻船の御朱印の事であらう。お舟エ。平太そりや世話焼くな。俺が持つて居る。お舟エ、平太可愛や。どの様に働いても知れぬ所に。たぼくして置いた。平太に一寸でも傷が付けるが最期。朱印は天へ飛んで了うて。マア此界には無いぢや。ようしたもものか。爰へ出て平太と勝負して取返さぬか。取返して見ぬか。こりや何ぢや。ハア飾つた二ツの位牌は。左右衛門と將監が位牌か。エ、あた忌々しい。ト蹴飛す。お舟サアくく。爰をちつと耐へねば役に立たぬ。是はしたり總角さん如何ぢやいな。平太イヤうぬが主の位牌ぢやぞよ。其位牌を平太が踏蹴るが無念にはないか。口惜うはないか。口惜くば爰へ出て平太と勝負せい。出あがらぬか青蠅めが。ト縫之助中二階より走出て。平太が胸倉執り。縫之ヤイ汝が爲にも主の位牌を土足に懸けて。恩知らずめ。さうして御朱印も汝が盗んだナ。サア出せ。汝出さぬとて出さず指かつか。ト平太黙つて居る。懷を捜し。縫之こりや懷には無い何處へか隠した。サア眞直に。ト平太。縫之助が首筋執つて捻付け。平太うづ蟲めがうぬ。おのい等が手に觸る所に置いて可いものか。川浦平太は一國の大名。其大名の懷中を家捜して。うぬ盜をひろぐか。ト捻付けて振廻し。平太此様にされたら。何處ぞの溝蟲めが面を出しさうなものぢやが。お舟御朱印の知れぬ内は。滅多に顔も出されまい。平太總角心に隨へヤイ。總角エ、此方はなう。ト泣く。平太イヤいみぞ蟲め。やいうぬが總角に隣り付いてげつかる故。身が懸の助け。どこぞではくと思つて居たが。

爰へ出たは百年め。思ひ斷りました總角を上げませうと。吐しをろう吐せやい。ト色々にじり付ける。お舟出まい出まい。ハテ總角さん出やしやんすな。平太出たが最期。しやぶりとから竹割ぢや。縫之エ、汝はなア。平太汝とは汝とは。エ、生白けたしやつ面。こゝを打つて遣らう。ト縫之助が眉間へ傷付ける。總角ア、コレ。トおふね留める。平太出たが最期。朱印は消えて了ふ。出て見ぬか。コレ恚うするが出て見ぬか。トくづく。平太ハ、ハ、好い人質が出をつた。總角厭なら抱いて寝ようとは云はぬ。其代りに這奴をつまみ殺すぞよ。總角サア夫れは。平太出さうなものぢやがナ。縫之コレく必ず俺を庇うて。這奴が心に隨うてたもんなや。平太吐した面はいの。此様な目に逢うてもまだ願の減らぬ。すそびんばふのはつた二才めが。骨も皮もごたくになるやうに。うぬを恚うく。ト捻廻し色々あり。無理に踏付ける。總角もういつそ。縫之隨がやるとおりや死ぬるぞや。總角サア夫は。平太オ、死たくばいつそ打殺して、ト引廻す。おふね總角を突放し。縫之助を中へ圍ふ。お舟ソレ總角さんを渡します。平太へ、へ餘程こたへたさうな。お舟引替にするからは。云分はござんすまいがナ。平太總角さへ渡せば。何奴も這奴も緩めてやらう。ト長持へ縫之助を引立入れ錠卸す。兩人是は。平太まだ強ばつて居る總角。ウンと言はした上て此錠渡さうお舟總角さん常磐御前を知つてぢやあらう。總角わたしや死ぬると云うても。平太抱れて寝ぬと僅た一突。ト刀逆手に持つ。舟。總角ア、コレ。平太ウンといふか。總角サア如何なりと。ト泣く。平太奥へ往て抱いて寝よう。お舟其上て其錠も。平太欲くばやらう。うぬ。ト源八方へ往かうとする。おふね枷になる。平太ハテ命冥加なうづ蟲め。ト平太。總角を引立て奥へ入る。唄になり源八奥へ騙込まうとする。おふね執付き。お舟コレ今奥へ行くと總角殿に凶事が出来る。殿様が生きてはござらぬぞや。非人お尋の源八見付けたぞ。ト走り入る。源八南無三。ト往かうとする。源八コリヤもう網を張つたわいなう。お舟こちの人私が思案は。ト騒く。源八出來た。そんなら俺は。ト騒き入る。與九郎出る。與九お家さんアノ。ヤアお前は旦那さん。ト口に手を當ておふね騒く。與九ウンく呑込んだ。お舟とつさん

に早う、ト紙入拾ふ。お舟こりや最前平太が懐から落した紙入。此一通は。ト呼んで見て戴き居る。權九郎出る。權九おふね。何處へ往た。ト出る。權九おふね。コリヤ。お舟エ、權九郎さんか。權九權九郎さんか。やが。今汝は俺に逢たいと云うておこしたが。何ぞ用があるか。お舟アイ。權九何の用ぢや。お舟權九郎さん。ト思入あつて。お舟強う冷えるなア。權九かまうな。トぜうらくかく。お舟ドレ火鉢上げよか。ト火鉢を傍へやる。權九ついとない事ぢや。ドレあたつてこます。トおふね色々思入あり。權九郎見るやうで見ぬこなし。お舟ア、コレづつと冷えるけれど。滅多に火鉢へもあたられず。權九コレ爰へ来てあたつたが可いわい。お舟大事ないかえ。權九何の誰が呵る者があつて。お舟そんならあたる。ト傍へ寄る。權九オ、さむ。テモ寒い事ぢや。お舟權九郎さん。酒飲まうぢやあるまいか。權九飲まう。幸ひ爰にある。ト酒銚子を取つて。權九燗にやる事は面倒な。ト火鉢の上へ懸ける。お舟權九郎さん。お前はアノ私に何の彼のと云うて下さんすは。マア定か嘘か夫が聞きたい。權九嘘かとは曲がない。もう。天邊から足の爪先へ徹へて。お舟イエ嘘ぢや嘘々。よう私がうかくと乗らうかいなア。權九ほんにほんに。強いほん。お舟云はしやんすな。お前がほんの事なら。私はほんの男があるといふ名ばかりで後家同然。言ふ事聞かいて何とするもので。權九それは夢では無いかい。そんなら御意の變らぬ内に早う。お舟ア、忙しない。まだ些と云はねばならぬ事がある。口でばかり爾う云はんしても。男の心と飛鳥川と。よう云ふぢやないかいなア。權九そんなら心中見せうか。腕引かうか股突かうか。そもじ故なら如何なりとするわいなう。お舟イエイエ那樣仰山な心中は要らぬ。お前の體へごうかいが打たい。權九何のごうかいとはや。お舟ハテお前は人に勝れて好い男。若し餘處の女子が惚れると腹が立つ。それでお前の腕へ黒子をした。權九ムウ入黒入は夫は心易い。明日でも内て来う。お舟ア、那樣水臭い。爾う云うて欺せてな。もう。心底の知れた。ドリヤ奥へ往て。ト往かうとする。權九ア、コレ。氣の短い。するわいなう。お舟そんならサア受へんせ。ト權九何とする。



テ知れた事おふね命。ト唄になり左の腕に書きにかゝる。權九郎身を縮める。お舟ハテ臆病な。まだ書くのに何の難い事であるぞいな。ト御の字を書く。權九ア、コレ。そりや御の字ぢや。つい平常のおの字を書きやいなう。文盲な人ではあるほどに。お舟お前は強う私を安うさんすの。權九何故に。お舟ハテ私はお前の女房。女房ぢやに依つて御の字を書くのぢや。權九扱は我等が爲の御ふねといふ心か。お舟アイ。權九もつとも。ト書く。お舟是ておふね命。ア、針がない鈍な事ぢや。權九針が無くば明日の事。ト權九郎がねつけのさすがおふね見て。お舟イエ。幸ひ好い物がある。此小刀で。權九ア、コレ。如何に女子の物を知らぬというて。小刀で入痣するといふ事があるものか。神武以降忌物ぢや。お舟そんなら措かんせ。ドリヤ奥へ往て。權九ア、是さても氣の短い。サアそんなら入痣した跡は今のぢやぞや。サア。お突なされ。とんと鳴神が呆れる。お舟そんならおふね命と彫るぞえ。ト合方。此内權九郎色々思入あるべし。此間ほり。臺詞云ふ。お舟お前は半分強いわいな。アハ、。權九なんの此位の事は朝飯の茶漬ぢや。私がまへ喧嘩したが知りやるまいの。お舟イ、エ知らぬわいな。權九何が氣勢。向ふは拔身を持つて俺に切懸る所を。手を出すは邪魔ぢやと思つて。天窓でこう受けたぢや。お舟ハテなア。コレ爰が大事の辛拘所ぢや。かう。として恚うするともう可い。扱も仰山な。ト早う突く。ソレ見やんせ好う出来た。權九ムウもう終ひか。おりや又ま些と長いものかと思つた。サア約束の通り。ト奥の間へ入り唐紙を締める。お舟マアア待たんせ。まだ肝腎の事が有るわいなア。權九まだかいナ。お舟ハテ祝言の盃せねば。なれ合女夫になるわいなア。權九盃は跡へ廻す。お舟幸ひ爰に酒がある。ト火鉢の燗鍋に手を添へて。お舟オ、あつ。是はきつう通つたさうな。權九何の熱い事がある。ト取りにかゝる。權九あつ。あつ。オ、あつ。とおふね鼻紙に挟み酒をつぎ。お舟サア私から獻すぞえ。ト權九郎受て手へかゝる。權九あつ。あつ。トおふね燗鍋を權九郎が右のかたへあて。二人ながら轉る。色々可笑味あり。お舟サア是て可い。權九フウかたみうらみのない様にしたものぢやな。お舟コレ此羽織を著

やんせ。ト源八の羽織著せる。権九何ちや可笑い物著せやるの。お舟是でとんとこちの人。権九女房共。ト連立ち屏風引きながら入る。記内家來大勢通出で。記内平太郎様。平太様は何處にござります。ト屏風の内を見て。記内ヤア、ぬは最前の遣手。誠は源八が女房ぢやよな。ソリヤ家來ども。侍やらぬぞ。権九ア、コレ。やらぬとは何の事ぢや。一ツも覚えは無いが何の事ぢや。記内ヤア、ぬは神道源八ぢやよな。権九イ、エ神道ぢやござりませぬ。門徒でござります。喃女房ども。記内うぬ其女と共々寝て居るからは。源八に違ひは無いぞ。権九コレ、こちの人。お前は源八ぢや無いハサ。源八ぢやないさかいて。何處へ出ても源八ぢやないと云抜けて下さんせ。記内女房が云教へるから。慈源八ぢやソリヤ。侍やらぬ。ト内より茂兵衛。與九郎に繩掛ける。茂治ハイ舅の者でござります。お舟ア、コレ、父様。お前は三代相恩のお主に繩懸けるとは。大悪人ぢやなア。茂治コリヤやい。今時は名を取らうより徳を取れぢや。夫故縫之助殿に繩懸けて渡す。そんなら這奴が源八か。お舟ア、コレ。お前の口から主を源八と云はしやしたからは。もう顯れたかハア嬉しや。権九何の事ぢや。與九コレ、源八。此様な淺ましい縫之助が姿と思つて。見限つてももう叶はぬ。三世のきえんを結びやい。権九何の事ぢや。こりや皆氣が違つたさうな。阿呆めうぬは那樣事を何處で習つて來をつた。祭りのばんじりに雇はれたと思つてけつかるさうな。記内縫之助最前は能く贖者を擲ました。夫は追つての事。家來ども其奴縛れ。侍腕廻せ。権九減多無上に廻せ。と何の事ぢや。記内卑怯な源八。是非あらがふてもあらがはせぬ確な證據があるぞ。権九證據。面白い。記内家來ども最前の繪圖を出せ。権九何ちや繪圖ぢや。サア合して見た。ト家來繪圖を出し合せ。記内年の頃三十年。眼小く。侍寸分も相違はござりませぬ。記内うぬ是でもあらがふか。権九ア、コレ、何の事ぢや。記内右の腕には鐵砲傷あり。侍出せ。鐵砲傷が確りとござります。記内左の腕にはみふね命と入患あり。侍御ふね命と確りとござります。記内家來ども引立て。侍うした。捕つた。お舟コレこちの人。入患から顯れたかと思へばわしや悲しい。権九何吐す。記内家來ども引立て。侍うせう。與九コレお家さん旦那さんに。茂舟シイ。與九今の佛さんの命日には。何ぞ旨い物を拵へて進めて下さんせえ。茂舟かはいや。ト茂治兵衛。おふね顔見合せ。茂舟お痛はしやなア。記内ソリヤ兩人を引立て。ト唄になり。侍うせう。茂治ハア。ト泣く。権九うぬら。侍きりうせう。権九マア、待たんせ。コレわりや俺を太郎に懸たなア。侍うせう。記内うせう。権九マア、待て。よう山を見せなんだな。侍ハテうせうてや。ト花道へ入る。茂治兵衛。おふね跡見送り。茂治まんまと是で遁れた。お舟コレは最前平太郎が懐より落した一通。ト茂治兵衛讀んで見て。茂治是はマア結構な物拾やつたの。茂舟ア、嬉しや。ト兩人拜む。押入より源八出る。源八舅殿。女房共。お舟まんまとお前に仕立て、やりました。此一通は最前平太が懐から落した一通。ト源八讀んで見て。源八スリヤ此一通があるからは。御朱印は平太が所持して居るか。此様子を若殿様へ。ト長持の鏡を抜切り明けて。お舟ア此長持の内が切抜いてござんす。源八内が切抜いて有るとは合點の行かぬ。ト花の井出で。花のコレ、おふね殿や。こなさんが平太の傍に附いて居よと云はんした故。引添うて居たればの。總角様を引連れて裏道から逃げて去んだ。源八ナニ總角様を引連れて去んだとあるからは。若殿様も平太めに出し抜かれたか無念なア。花のまつと先でござんした。源八程は行くまい。茂治聲殿。源八女房共。お舟是が近道。源八合點ぢや。ト尻裏げ入る。唄になるト

返し

造物向ふ黒御簾。柳の幹あり。東大臣柱に出口の門あり。雨降り。侍提灯燈し駕籠一挺總角。縫之助乗せ出る。跡に平太合羽傘足駄穿き出る。昇天申し旦那。どうぞ桐油を懸さして下さりませ。侍大事の急の用事でお歸りなさるゝに。小言吐すと首が飛ぶぞ。

平太コリヤ。急の道。駕籠の損じ賃は如何程なりと遣はす。早くやれサ。昇夫左様なら可うござります。ト向ふへ往かうとする。向ふより源八駕籠の鼻を押戻し本舞臺へ来る。平太源八か。源八平太か。侍うぬ。ト提灯切落す。皆逃げ入る。花道へ追うて行き本舞臺へ戻る。源八其後は逢はぬが。最前はいかい世話であつたなア。平太汝が爰へ来たは。二人の奴等取返しに来たか。源八マア那様もの。平太いかにも戻してやる。ト駕籠の傍へ抜いて差付ける。源八コリヤ。逸まるな。龜相すな。汝には只一言云聞かす仔細がある。逸まるなマア待てサ。是此一通は最前其方が懐中より落せし一通。此内に往來の御朱印は其元の所持可被成とあるからは。其方が手にある筈。此往來の御朱印。若殿の御手よりお上へ差上げねば。盜賊の悪名が抜けぬ。汝も以前お主の事ぢや。私同士の意趣に。主の大事は替へられぬ。爰を何卒聞分けて。其御朱印の所在を云うてくれ。武士が手を下げて頼む。聞分けてくれいサ。平太汝はおそい者ぢやな。爾うやはらで出たら返してくれうと云ひたいがならぬ。儂には常から意趣のある奴ぢや。いかにも往來の御朱印は俺が手にあるが。返す事ならぬと云うたら。汝切らざるまい。切つては水の泡。そんなら助けて置いて云さうと思ふか。此平太が目の黒い内は。金輪際云ふ事ならぬ。サア切れ。サア切れ。サア切れ。サアハテ扱今云ふ通りの所存。何の爾ういふ氣は無い。抵抗せぬといふ證據。ト刀抛出し。源八昔の意趣があるなら。汝が存分にして。跡で御朱印の所在を云うてくれ。頼む。平太オ、可い推量。スリヤ俺が存分になるか。源八源八も武士だ。二言は無い。平太そんならうぬを恚う。ト蹴倒し踏付ける。源八サア存分になつた。云うてくれサ。平太イヤイヤまだ這樣こつちやない。ずつとえらい事がある。源八まだ存分にならざ。サア如何様とも爲いサ。平太うぬを恚うして。ト下駄にて顔を蹴り踏付け唾を懸ける。平太汝は武士でないか。顔を灰吹にされても無念には無いか。へ、へ、へ、張合の無い奴。源八ハテ抵抗せぬと云ふからは。何の構はう。存分にしてくれ。平太まだ存分にや爲足らぬ。源八まだ存分にや爲足らぬか。此上の存分は。平太汝を存分には恚うする。ト切懸ける。源八其

第四幕 目 淀與三右衛門屋敷の場

存分ばかりは得成らぬ。平太ならねば恚うぢや。ト立になり源八。平太が衣裳の紋を切る。朱印出る。ト平太掘る。柳の枝へ懸る。高堀よりおふね見て居る。源八ハテ變つた所に隠しをつたな。平太平太が定紋は。何時でも御朱印ぢやと思つて居よ。源八最早御朱印の所在が知れるからは。此儘では置かぬ覺悟せい。平太最早あれが出たらしよ事が無い。うぬを殺す覺悟せい。ト唄になり是よりどろろになり。つまり平太を殺す。曉六つの鐘鳴る。岩壘搦みの駕籠の繩を切り。内より縫之助。總角出る。縫之源八。源八若殿様。お舟ソレ往來の御朱印。源八忝い。平太それを。ト源八ボンと切る。源八御座りませ。ト幕

造物向ふ金襖二重舞臺。家體入込大名屋敷の體。好みあり。橋懸に城の櫓少し見える。中門は橋懸に縫之助小市。白き兜頭巾装束にて窺ひ居る。高札あり白梅盛りの體。惣一面に雪降の體。棒の官翁下座の家體に惣白髮茶を立て居る。向ふに奴雁平雪にて猿を造り居る。琴唄にて幕明く。奴二人竹箒にて掃除して居る。奴○ナントやか内。甚に冷たい事ではないか。奴△冷たい段か。おけすへから腦頭まで縮み上げる様なわい。奴○此方も遊軒様の奴なら。此様に冷たい目はすまいものを。奴△したがあの様にはだへかると機嫌を損うて。えては笠のだいが落ちるものぢやてや。雁平ヤイ。汝等はソリヤ何を吐す。身共は旦那遊軒様の御意で猿を拵へて居る。おのいらが差配は頼むまい。がた。願利くと願引裂いて了ふぞよ。奴○わりや見事願引裂くか。雁平望なら引裂いて遣らうか。奴△引裂るゝなら引裂いて見よ。雁平引裂いて見せう。ト聒しう云ふ。小幡桂欄にて奥より出る。縫之助。小市囁き入る。木幡ヤイ。騒がしい何事ぢや。雁平さればござります。此奴らが私めが事をがいに誹りま

す。夫故喧嘩でござりまする。サアうぬ等何とか云うて見ぬか。木幡ヤイく仲間ども。此度八幡御造營に付。禁廷より御勅使がお立なさる。其守護として川浦遊軒様。親御官翁様此所に御逗留。萬事鹿相の無い様に吩咐置いたが。若し過失有つては夫與三右衛門殿の無調法になるが。嗜めく。奴二人段々誤り入りましてござります。雁平何とえらいものであらうがナ。木幡其方達は了うたら休めく。奴二人ないく。ト入る。官翁雁平く。雁平ナイイ。官翁梓遊軒はまだ歸らぬか。ト愚癡なる老爺方の臺詞にて云ふ。雁平今日は旦那遊軒様には。淀の景色御遊覽とあつて。御勅使諸共お出なされてござりまする。官翁然らば追付歸るであらう。汝は早く迎ひに行け。雁平ナイく。木幡様。お迎ひに往て参りませう。木幡太儀ながら早う往てござれ。雁平ナイく。ト入る。木幡是はく官翁様にも。冷えまするのに其様になされずとも。マア些と御休息なされましたが可うござりまするわいな。官翁何ほ冷えても爐のたぎりで。差して屈託にもござらぬが。年寄つて久しく蹲ばつて居れば。腰も膝もめりく。ア、いかう冷えまするて。木幡左様でござりませうとも。官翁ちとそれへ参つて寛ぎませう。木幡サア是へお出なされて。御休息なされましたが可うござりまする。官翁左様致さう。さてく草臥たく。ト向ふへ出る。木幡お道理でござりまする。官翁イヤ又恠う見渡した處は如何も云へぬ。ト若し臺詞にて云ふ。木幡と顔見合せ。官翁イヤなに御内所。此方の夫與三右衛門殿の。いかい心遣ひになりまする。トおやぢ方にて云ふ。木幡これはく御挨拶でござりまする。夫與三使様のお供なされます遊軒様お前様。嘸氣苦勞にも存じませぬが。御勅故。さのみ屈託にもござらぬども。どうて参らねばならぬ身の上。又身共が事は茶に事慣れたとあつて。御勅使へ茶を差上げる様にとの事。高位高官に差上げるは。イヤもう氣が張つてなるものではござらぬて。木幡左様でござりまする。去ながら茶に妙のあるお前様。高き位高官に差上げるは。木幡左様でござりまする。

りますれども。茶の稽古致したうござりまするわいな。官翁夫は好い心懸。ちと稽古さつしやれ教へて進ぜう。木幡そんなら教へさつしやれて下さりませうかナ。官翁いかにも教へて進ぜう。併し茶といふものは。いかう難かしいものござるてや。木幡左様でござりませう。官翁マア一寸立たつしやれ。木幡アイく。官翁其兩手をくつと上たく。木幡アイ恠うでござりまするかえ。ト手を上げる。官翁ソレく爾う手を上げた所を恠う緊付けたものぢや。ト戯る。振放し。木幡あなたとした事が。こりや何事をなされます。官翁ハア茶を教へてやりまする。幸ひ四邊が静なれば。此邊で一吹呑みませうか。木幡是はマアあなたとした事が。ひよつと人に知れたら何となされませう。官翁なんの人に知れるもので。此間より何處ぞではくと存じて居つた。此方へ心中と存じ。此文認めて置いた。是を見て返事下され。ト狀を懐へ捻込み傍へ寄る。振放し。木幡是はマアお前様は御本性でござりまするかえ。さうして好い年をして。與三右衛門といふ夫のある身の上でござりまするぞえ。夫にマア。つれない君様参るおよばぬ身より。オオ厭らし。ト投付ける。官翁年寄々々と云うて貰ひますまい。此様に年は寄つて見ゆれども。いでさらば爰だと思へば。若者五六人前も働くてや。無情い君よ。幸ひ四邊は静かなり。こゝらあたりでも随分。ト又戯る。木幡放さぬのか放さぬか。官翁放さぬく。わしや何ぼうでも放しやせぬ。木幡年寄だてら力が強うて逆も叶はぬ。官翁この力てまさかの時を推量なされい。木幡申し遊軒様へ申付けるぞえ。官翁遊軒は愚。與三右に云うても大事ない。如何したとて放すものか。ト與三右衛門最前より出て聞いて居て。官翁を執つて抛る。官翁是は強い力ぢや。其強さては。ト見て恠り。木幡エ、好い所へ。申し先刻に如何もなる事では。與三コレく奥へ今日は遊軒殿の御親父官翁殿。御勅使へ茶を差上らる。かこひの花も念入れよと吩咐けたが。木幡イ、エイナ。先刻にからあの老爺めが。與三ハテ扱人には目も耳も無いと思つて居るか。何事も聞いても居る。又知つても居るわいな。木幡スリヤ先刻にからの事はよう御存じ。ハ、ハ、ハ、わたしや御存じあるまいかと思つて。ひよつとお疑ひでもあらうかと存じまして。

與三ハテ女といふ者は。味な處へ氣の廻るものではある。ト官翁そろ／＼入らうとする。與三イヤ官翁殿でござりませぬ。官翁これは／＼與三右殿。此間はいかいお世話になります。與三イヤ其元には今日は御苦勞にござりませう。官翁左様にもござらぬてや。與三イヤ官翁殿。手前共は篤と存せぬ事ながら。茶の湯と申すものも。様々手前のある事さうにござるナ。官翁なんとござるやら。與三先づ恚う手を上げまして。其處を恚う緊付けますか。是に挨拶がござる。其挨拶には其様に年は取つたけれども。いてさらば力つくと云へば。若い者五六人前も働く。人が何と侮つたとて。此力瘤で此力瘤で／＼。ハ、ハ、ハ、ハ。官翁イヤ與三右殿。手前左様な茶は存じませぬ。與三官翁殿其元にはもうお幾歳におなりなされます。官翁拙者七十六に罷成ります。與三七十六。七十六で五六人前とは。ハテ達者な事とござるナ。官翁何とござるやら。ト與三右衛門狀を拾取り。與三つれない君様參るおよばぬ身より。つれないとは獨り旅の事か。及ばぬ身。此身はハテ變つた身ぢやナア。官翁殿何と茶の湯にも斯様の物が要る事とござりまするか。官翁お花鳥の茶の湯の稽古致さねばならぬ。與三イヤ官翁殿。此つれない君とは如何いふ君ぢや承りませう。官翁イヤ與三右殿。大切な御勅使饗應の茶の湯。殊の外取込みます。後程お目に懸りませう。ハアぢやて／＼。與三イヤコレ此無情い君は如何ぢやぞいなう。官翁ハアぢやて／＼。ト云ひ／＼與三ハア、ハ、ハ、ハ。ト此内門の際に縫之助。小市出て聞いて居る。木幡テモ扱もマア好い氣味な事とござりましたわいなう。與三さればされば。年には寄らぬものぢやてなう。木幡左様とござりまする。イヤア其文私に下さりませ。今一度恥掻かしてやりまするわいの。與三イヤ廢にしやれ。遊軒殿の耳へ入つても可くない事ぢや。廢にしやれ／＼。木幡イヤ／＼左様とてはござりませぬ。云は私胸が濟ませぬわいなア。ト與三右衛門兩人を見て。與三ハテ味に入込んだ。川浦遊軒は淀川筋に七里半の堤を築き。往來自由の普請承ると雖も。川筋を舟にて往來する工夫致す者あるに於いては。重罪たりとも科を赦し。恩賞は望次第との仰。與三右衛門承り其高札。サ家を立つべき朝もと膝々に心は盡せども。

遊軒が計ひにて獅子飛を切落したれば。淀川筋の水高うして。中々舟にて往來する事思ひも寄らぬ。サ家を立つべき功も無くして。勅使守護の遊軒に双向ふは朝敵も同然。與三右衛門が城にある内は叶はぬ事／＼。木幡イヤ申し。夫は何事を御意なされますえ。與三サア此様な雪の夜には。得て盗賊押込などの徘徊するものぢや。ヤイ目に懸らば人命がないぞ。サア時節を待つて。見付られぬ様に隠れたら可らう。サア何者も此邊に居らねども。大方雪に隠れさうなものぢや。ト縫之助小市囁き又隠れる。木幡何がイナ。與三アレ／＼庭の樹木が大方雪に隠れさうなもの。オ、夫が可い／＼。ハテ入込んだナア。ト橋懸ばた／＼にて。雁平サア非人め出さぬか／＼。みゆきアイ何にも隠した物はござりませぬ。雁平まだ／＼うぬが。今隠した物出さぬか／＼。木幡ヤイ雁平。聲高なそりや何事ぢや。雁平只今旦那を迎ひに大手先へ參りましたる所に。此非人めが何やら合點行かぬ面構へにて御城内を窺ひます。篤と心をつけますれば。双物を隠し持居ります。夫故の詮義でござりまする。木幡非人の身として双物を隠し持居るとは。ハテ合點の行かぬ。雁平サア非人め出せ。みゆき何にも隠した覚えはござりませぬ。雁平出さねば恚う。ト少し立廻りにて。みゆき刀ひらりと抜き差付けける。みゆき隠される丈は秘みませぬ。斯様にお目立ます上からは。秘みませう様はござりませぬ。いかにも御覽の通り。恚非人の身と成下りまして。家に傳はる此刀。ト少し見得あつて。みゆき但し又非人は刀を所持致しまする事ならぬ者でござりまするかナ。與三非人の女是へ參れ。みゆきハイ。トつか／＼出で。みゆき與三右衛門様。與三ヤイ／＼女。つひに見た事も無い見苦しい女。必ず龜相云ふな。みゆきハイ。御用でござりましたかナ。與三非人の身として刀を携へ。城外に徘徊すれば咎める筈。何故又大手先にはうろたへ居るぞ。みゆきハイ此刀が賣たうござります。與三なんと。みゆき斯様の身と衰へ所々に流寓ひまするが。與三右衛門様はお情深いと承りまして。此刀を買って貰ひませう爲。與三アノ其刀を。みゆきハイ。與三イヤそりや身共ではあるいまに外。買つて貰はふと思ふ人があつての事であらうがな。みゆきエ、。與三勅使守護の高家には相應の小

太刀。買うて貰はふと思ひ。與三右衛門に取次を頼むのか。爾うであらうがナ。みゆきお目立まする通り。外へ持つて参られませぬ此刀。目指す處は。與三遊軒殿か。みゆきハイ左様でござりまする。與三爾うありさうなものぢや。雁平ハ、見れば鋒先には血にて錆腐つてある鈍物。目那遊軒様に賣らうとは。こな大騙賊めが。みゆき莫邪が刀も持手の手の内。刀の錆も見苦しけれど。血汐の無念ののりの落さぬが。すぐなる心の亂れ焼。些とお目には入りませぬ。すはと云はど何方でも何奴でも斬りかねぬ業物でござりまする。與三見事々々。爾う見ゆる。ト此間縫之助。小市出て見て居る。雁平願の過たどら乞食め。ト立廻り雁平を當てる。見得あつて止る。與三其刀是へ持て。ト見得あつてみゆき與三右衛門に渡す。篤と見て。與三鋒先の血。無無念にあらうナ。木幡女中。シテあの刀の價は。みゆき金銀に望はござりませぬ。其價は。與三身が屋敷に奉公の望か。みゆきハイ左様でござりまする。與三イヤそりや叶はぬ。みゆきそりや又何故でござりまする。與三此度男山入幡造營に付勅使のお成。守護する役は川浦遊軒。與三右衛門がお宿申し御馳走申す中に。些とても過ちあれば朝敵同然。與三右衛門が手にある内。敵討はなるまい。木幡スリヤ此女中は。みゆき花滿憲法が女房御幸。與三將監を討つて立退いた辨之作は。所在が知れたか。みゆき遊軒は高位の交り。せめて辨之作なりととも。様々に尋ねても。與三知れまいナ。知れぬ筈ぢや。辨之作は遊軒が隠匿うて居るぞよ。みゆきエ。假令朝敵にならうとまよ。與三家が大事か敵が大事か。みゆきイヤなんと。與三敵を討つも先祖へ孝。其家國を立てる功があるか。みゆきサア夫は。與三敵を討つて先祖を潰すか。こな不孝者めが。與三其家國を立てべき功は爰にある。みゆき縫之助様。縫之與三右衛門様。お久しうござりまする。與三縫之助。家國を立てべき功があるとは。縫之天下より預り奉る關西往來の切手。詮議仕つてござりまする。お受取下され。與三いかにも相違無い切手。儲に受取つた。縫之いよ。家督の儀は。與三立てられまい。みゆき敵討は。與三なるまい。御用を爲損じ。禁裏を騒がしたる科。重類を絶せとの仰なれども。勘當の者共にお祟り無いは時の憐愍。川筋普請の事も徒に。大切なる預りの切手まで盗まれ。科に科を重ねたる花滿一門。假令預りの切手取返したればとて。其儘に家國が納められうと思ふかヤイ。みゆきスリヤ其切手を差上げて。小市家國は立ちませぬか。與三木幡其高札を是へ持て。木幡ハア。ト高札持ち行く。與三縫之助。家國を納める功は是ぢや。縫之みゆき是とは。與三提川筋水早き所。船にて往來する事工夫致す者あるに於ては。重罪たりとも科を赦し。褒美は望たるべき者也。ト向ふより。遊軒様のお歸り。み。縫之小なに遊軒が。ト行かうとする。木幡コレ御勅使の守護でござりまするぞ。みゆきスリヤ其切手は。與三與三右衛門が預つた。縫之館の内は取巻いて。小市一人も動きませぬぞ。木幡勅使守護の役目も了ひ。みゆき辨之作が所在も知れ。縫之小再び本地に立歸る。與三今宵の内に時節があらう。木幡マア夫までは腰元みゆき。與三女房著類も著せ替やれ。木幡女中奥へ。みゆきハア。縫之小みゆき様。みゆき皆も短氣を出すまいぞ。縫之小ハア。ト木幡。小市入る。みゆき。與三右衛門残る。與三ナニ腰元みゆき。大切なる勅使守護の遊軒殿。随分無禮の無い様に。みゆき時節までは屹度おあづけ申しまする。與三夫が可い。ナニ御幸。若又時節に及んだ時。其方が手の内は。トみゆき響にて松へ手裏劍打つ。小鳥飛去る。鳩一羽落ちる。みゆき豫て手練は致しました。ト見せる。與三見事。女に稀なる手の内。併し欺すに手なし。思ひ懸無い處を恠う。ト打懸ける。莫益にて受け。みゆきこりや何となされ。與三若し敵が恠うせば。ト立廻りになる。みゆき疊を上げる。與三右衛門まへ立つ内に飛退く。みゆき此手練ではナ。與三見事。所を透さず恠う。ト手裏劍打つ。駒下駄にて受留め。みゆき是では何とござりませるナ。與三緊りと抱へたぞ。みゆきエ。忝い。與三奥へ往て休息せい。みゆきハツ。ト唄になりみゆき入る。與三右衛門雁平を引起し活を入れる。雁平起きて。雁平ウ、最前の女めは。與三雁平氣が著いたか。ト雁平悔り。雁平與三右衛門様でござりまするか。與三遊軒殿のお歸り。迎ひに出い。雁平ナイ。ト橋懸より勅使辨の中將。跡より川浦遊軒長柱杵。

御用を爲損じ。禁裏を騒がしたる科。重類を絶せとの仰なれども。勘當の者共にお祟り無いは時の憐愍。川筋普請の事も徒に。大切なる預りの切手まで盗まれ。科に科を重ねたる花滿一門。假令預りの切手取返したればとて。其儘に家國が納められうと思ふかヤイ。みゆきスリヤ其切手を差上げて。小市家國は立ちませぬか。與三木幡其高札を是へ持て。木幡ハア。ト高札持ち行く。與三縫之助。家國を納める功は是ぢや。縫之みゆき是とは。與三提川筋水早き所。船にて往來する事工夫致す者あるに於ては。重罪たりとも科を赦し。褒美は望たるべき者也。ト向ふより。遊軒様のお歸り。み。縫之小なに遊軒が。ト行かうとする。木幡コレ御勅使の守護でござりまするぞ。みゆきスリヤ其切手は。與三與三右衛門が預つた。縫之館の内は取巻いて。小市一人も動きませぬぞ。木幡勅使守護の役目も了ひ。みゆき辨之作が所在も知れ。縫之小再び本地に立歸る。與三今宵の内に時節があらう。木幡マア夫までは腰元みゆき。與三女房著類も著せ替やれ。木幡女中奥へ。みゆきハア。縫之小みゆき様。みゆき皆も短氣を出すまいぞ。縫之小ハア。ト木幡。小市入る。みゆき。與三右衛門残る。與三ナニ腰元みゆき。大切なる勅使守護の遊軒殿。随分無禮の無い様に。みゆき時節までは屹度おあづけ申しまする。與三夫が可い。ナニ御幸。若又時節に及んだ時。其方が手の内は。トみゆき響にて松へ手裏劍打つ。小鳥飛去る。鳩一羽落ちる。みゆき豫て手練は致しました。ト見せる。與三見事。女に稀なる手の内。併し欺すに手なし。思ひ懸無い處を恠う。ト打懸ける。莫益にて受け。みゆきこりや何となされ。與三若し敵が恠うせば。ト立廻りになる。みゆき疊を上げる。與三右衛門まへ立つ内に飛退く。みゆき此手練ではナ。與三見事。所を透さず恠う。ト手裏劍打つ。駒下駄にて受留め。みゆき是では何とござりませるナ。與三緊りと抱へたぞ。みゆきエ。忝い。與三奥へ往て休息せい。みゆきハツ。ト唄になりみゆき入る。與三右衛門雁平を引起し活を入れる。雁平起きて。雁平ウ、最前の女めは。與三雁平氣が著いたか。ト雁平悔り。雁平與三右衛門様でござりまするか。與三遊軒殿のお歸り。迎ひに出い。雁平ナイ。ト橋懸より勅使辨の中將。跡より川浦遊軒長柱杵。

乗物釣せ家來附き出る。奥より官翁出る。官翁是は辨の中將様。只今お歸りなされましたナ。辨之官翁茶の湯の用意は可いか。官翁ハツ。與三遊軒殿。只今お歸りてござりまするか。遊軒やうやく只今てござる。與三先づお通りなされませい。卜辨の中將上座へ直る。官翁。遊軒。與三右衛門並よく並ぶ。與三今日は御勅使様。徒歩をお歩ひ遊ばされ。其元様萬事御苦勞。遊軒イヤ左のみ苦勞な儀もござらぬが。貴殿には珍客が参つて。嘸御退屈にござりませう。與三是は御勿體ない。辨之官翁。其方がいうた細工は出來たか。官翁ハツ。雁平申付けた細工は出來たか。雁平へイ疾仕り置きましてござりまする。ト官翁傍へ猿を持ち行く。官翁中々好い細工ぢや。何と御覽じましたか。與三御幼稚にお渡りなさるゝ故。さぞ道草でござりませう。遊軒イヤモ御覽じつけられぬ民家の手業。一段と好いお慰みてござる。官翁悴。淀川筋の巡見し召れたか。遊軒イヤさして辛う面倒いこともござらねど。どうも土砂を津の國尻無川へ流し込みまする故。思ふ様に行き兼ねまするゆゑ。北山の木を伐しますはずでござる。與三ハア、御工夫が出來ましたかナ。遊軒餘り水早くて土を保ちませぬ故。北山の木を残らず伐りますると。雨は直に山へ落ち。山の土は一雨一雨に淀川へ流れまする所へ。藪をとつて流しますると。彼の竹の根がしがらんで流れまする中に。右の山土が流れて参りますると。竹の根へ挟まれ。此竹が川中へ土臺となりますると。自然と川が埋れまする中に。堤を築きます算用でござる。よくしたものでござるてや。與三したり。あの早き川瀬。登り船さへ突流される故。行かぬ事と存じたに。川中へ堤を築くとは。其意を得ませぬとばかり存じたに。今のお話驚き入ましてござる。官翁イヤコレ與三右殿ばかりは左様に仰せられるな。悴遊軒が工夫致した堤の事。悪からうと此方一人遮つて申上げたぢやないか。夫に今更追従らしい。遊軒コレ〜年寄だてら。そりや何を云ふのぢや。與三右殿ぢやといふて。追従も云はつしやれいで何と致さう。當時此遊軒に追従せぬ者は。雪で造つた是此猿松。喃與三右。與三左様でござりまする。遊軒今度の

とやつて見ても。サ一人も是ぞ好い事といふものが無い故。せう事無しに又遊軒に仰付られた。爰を思へば世間に智慧の有る者は。いかう少いものでござる。與三それはモウ此方のお智慧に及ぶ程の者はござらぬ。遊軒イヤ〜強ち斯様な者が無いとも申されぬ。二人ござる。與三それは誰でござる。遊軒ハテ一人は拙者。今一人は世間の人を一人に致して。ハ、ハ、ハ、ハ。與三いかさま仰しやれば左様なもの。見ますれば御勅使様には徒歩をおひろひなされ。此乗物はナ。遊軒雁平。其乗物の内に居る者はへ引出せ。雁平畏つてござりまする。ト内より喜蝶腰纏にて出る。與三其方は。喜蝶お恥かしうござりまする。官翁悴。見れば女。仔細は如何ぢや。遊軒只今片沼を歸りまする所。御勅使と拙者が眞中へ。鐵砲を打懸けました。與三ハテ夫はひやいな事ナ。遊軒早速邊りを吟味致させました所。彼奴が鐵砲所持致す故。直に捕へて参つた。與三ハレ危い事ナ。遊軒女の手業に斯様の事仕るは。一人の工ではあるまい。同類が有らう。有様に白狀せい。喜蝶狙ひ濟して本望遂げうと思つたに。エ、爲損じて口惜いわいやい。ト懐劍にて切懸ける。腕首執へ。遊軒與三右殿。此女見知つて居やつしやるか。與三イヤつひに見た事も無い奴でござりまする。遊軒アノ現在の妹を。與三妹にもせよ。一日勘當致したれば他人。他人なれば見知らう様はござりませぬ。遊軒ハテ氣散じな事ぢやな。官翁悴。惣體此間は夜寝悪ひ。用心しやれ。喜蝶遊軒。ト又突にかゝる。遊軒コリヤ親を切るか。喜蝶親とは。遊軒最前捕へし時。肌を探せば臍の緒の書付。亥の年亥の月亥の日亥の刻の誕生息災延命と書付けたは拙者が手ぢや。喜蝶エ、遊軒鬼やらひの節會の夜。はしたの女に手を懸け懐胎したるは其方。母は些少かの過り有つて大内へ追放。其後娘誕生したれども。母は當座に死んだる故。守袋を證據に方々と尋ねて居たが。ハテ健康で居たナア。其方と同じ守袋見よ。ト出す。きてふ合せ見て。喜蝶ヤアしつくり合ふからは。そんならお前は父さん。お前が父さんなれば。ト小市と顔見合せ。喜蝶ヤアお前は。ト小市隠れる。喜蝶父さんなれば。ハア。ト大泣。與三淀堤に由ある守袋を添へ捨あつた故。拾上げた妹は。遊軒殿の娘であつたナ。喜蝶夫への功。憲法様の敵。一太刀恨まうと思つ

たに。敵は父さん。スリヤ小市殿と。こりやマア何とせう。ト泣く。與三御勅使へ鐵砲を打懸けたれば。所詮命は無いと思つて居よ。喜蝶それ父さんにもせよ夫の仇。ト切懸くる。遊軒ハテ扱。スリヤ憲法方の奴と腐り合つたナ。喜蝶夫への面晴ちや。ト立廻りあつて當てる。ウンとのる。官翁是け。遊軒薬でも遣つて下され。ト官翁藥飲す。きてふ起き。喜蝶エ、ト泣く。遊軒世になきものゝ斬刻め等には。遊軒が娘は添はさぬ。追付好い聲取つてやらう。ト官翁目で知らす。官翁ウン爾うとも。ト頷く。與三遊軒殿。手前が召抱へましたる新參の腰元がござるが。其元様を戀託びまして。何卒お伽と申すも慮外。お茶の給仕になされて下されと望みまする。幸ひ持傳へましたる太刀一口。是をお買なされて下さるまいか。夫を橋渡しに致したいと申す故。宜しう申上げくれうと。次に控へさせ置きましてござる。何と御覽遣はされまいか。遊軒身共に小太刀が賣りたい。與三親子共にお目利の上手と承り及びましたしか存じませぬ。雁平最前女の非人めが。旦那に刀を賣りたいと願ひまする。何とやら合點の行かぬ奴でござります。遊軒ドレ其刃物見ませうかい。與三御覽なされませい。ト渡す。遊軒抜いて見て。遊軒こりや疑ひも無い眞の御太刀。與三其鋒先の血。鏽を賣りたいと申しまする。遊軒買ひませう。其賣主は何處に居まする。與三小太刀の賣主是へ參れ。みゆきハツ。ト著流しにて出る。遊軒わりや憲法が女房みゆき。みゆき遊軒様。お久し振てお目に懸りました。遊軒遊軒を厭ぢやくと嫌うたが。今思ひ知つたであらうナ。而してマア久しう見ぬ内強々裏れたナ。みゆきエト與三右衛門止める。みゆき昔が今の氣であらうなら。流浪は致しますまいと。悔んで居ります。遊軒與三右衛門御幸を此屋敷へ引込んだは。扱は此遊軒を。與三お寢間の伽が致したい願ひ。遊軒ヤ、何と。與三意氣地を立てまするも身が可愛さ。野心無いと申す證には。賣りました眞の御太刀。價には妾になりと。以前の好みが受けたい彼が願ひてござる。遊軒スリヤ憲法への貞心を捨て。みゆきお恥かしながら。何處へ執付く島も無い此身。昔の好みを認出し。お傍でお伽が申したさ。お前に逢ひたい。逢ひたい。ト申して居りましたが。マアお健康でお歸しうござりまする。遊軒アノ此遊軒が傍。みゆき御奉公が申したさ。與三夫故刀賣りまするでござりまする。遊軒いかにも買ひませう。一旦心懸けましたる女。寢間の伽させう。みゆき爰へ來い。みゆきハイ。與三お召なさる。行儀よくして參れ。トみゆき思入あり傍へ行く。みゆき御用でござりまするか。遊軒汝さへ寢間の伽せうならば。心許して寢間の伽さしてくれう。ト切懸ける。與三右衛門みゆきを引退ける。遊軒こりや何さつしやる。與三何となさる。遊軒此方へ求める小太刀。鋒先の鏽びて切味心元無い。女めを試しまする。與三些と御粗相かと存じまする。遊軒何が何と。與三此方は勅使守護の役。血をあやしても苦うないか。遊軒尤。親人ソレ。官翁合點ぢや。トみゆきに切懸る。立廻りの中與三右衛門扇にて打落す。官翁與三右。こりや何とする。ト手酷く云ふ。與三年に似合はぬ岩疊な事な。官翁サア何と仰しやる。ト急に老爺方にて云ふ。與三貴殿には勅使へ茶を差上げる役目。血に鏽びたる刀を持つさへあるに。女を試し召るゝか。官翁サア夫は過りました。與三過りも。御老體には似合はぬ近年の過り。官翁ウム。トきめる。遊軒親人。お年寄のお引なされい。ト官翁よぼく下に居る。遊軒與三右殿。いかにも御勅使前で。血をあやさうと致したは。親官翁が無調法。夫とても手前無調法でござる。與三イヤ謝らせうと申すではござりませぬ。遊軒イヤあやまりましてござる。あやまりもあやまり近年の大あやまりでござりまする。喜蝶父さんお前。ト切にかゝる。遊軒止め遊軒雁平女めを試せ。雁平ハツ。トみゆきに切懸ける。立廻りにて止め。みゆきこりや何とする。雁平切味試みる。ト立廻りにて與三右衛門雁平を見事に斬る。官翁與三右こりや何とする。與三何とも致さぬ。官翁勅使守護の家來を斬るからは覺悟であらう。與三這奴斬つても苦しうない。官翁苦しうないとは。與三不義者でござる。官翁不義者とは。木幡其證據は爰に居まする。ト木幡出る。遊軒不義の證據見ませう。木幡不義の證據は此文。あの雁平めが私に惚れて此付文。官翁様お前も最前御存じ。但し此文封を解いて。内の名を改めませうか。官翁ア、コレ。成程最前身共も居つた。家來雁平めが此方に不義を働く。扱を憎い奴と思へども。悴が歸つたら手討にもと存じて居つた。與三石能く斬召

たに。敵は父さん。スリヤ小市殿と。こりやマア何とせう。ト泣く。與三御勅使へ鐵砲を打懸けたれば。所詮命は無いと思つて居よ。喜蝶それ父さんにもせよ夫の仇。ト切懸くる。遊軒ハテ扱。スリヤ憲法方の奴と腐り合つたナ。喜蝶夫への面晴ちや。ト立廻りあつて當てる。ウンとのる。官翁是け。遊軒薬でも遣つて下され。ト官翁藥飲す。きてふ起き。喜蝶エ、ト泣く。遊軒世になきものゝ斬刻め等には。遊軒が娘は添はさぬ。追付好い聲取つてやらう。ト官翁目で知らす。官翁ウン爾うとも。ト頷く。與三遊軒殿。手前が召抱へましたる新參の腰元がござるが。其元様を戀託びまして。何卒お伽と申すも慮外。お茶の給仕になされて下されと望みまする。幸ひ持傳へましたる太刀一口。是をお買なされて下さるまいか。夫を橋渡しに致したいと申す故。宜しう申上げくれうと。次に控へさせ置きましてござる。何と御覽遣はされまいか。遊軒身共に小太刀が賣りたい。與三親子共にお目利の上手と承り及びましたしか存じませぬ。雁平最前女の非人めが。旦那に刀を賣りたいと願ひまする。何とやら合點の行かぬ奴でござります。遊軒ドレ其刃物見ませうかい。與三御覽なされませい。ト渡す。遊軒抜いて見て。遊軒こりや疑ひも無い眞の御太刀。與三其鋒先の血。鏽を賣りたいと申しまする。遊軒買ひませう。其賣主は何處に居まする。與三小太刀の賣主是へ參れ。みゆきハツ。ト著流しにて出る。遊軒わりや憲法が女房みゆき。みゆき遊軒様。お久し振てお目に懸りました。遊軒遊軒を厭ぢやくと嫌うたが。今思ひ知つたであらうナ。而してマア久しう見ぬ内強々裏れたナ。みゆきエト與三右衛門止める。みゆき昔が今の氣であらうなら。流浪は致しますまいと。悔んで居ります。遊軒與三右衛門御幸を此屋敷へ引込んだは。扱は此遊軒を。與三お寢間の伽が致したい願ひ。遊軒ヤ、何と。與三意氣地を立てまするも身が可愛さ。野心無いと申す證には。賣りました眞の御太刀。價には妾になりと。以前の好みが受けたい彼が願ひてござる。遊軒スリヤ憲法への貞心を捨て。みゆきお恥かしながら。何處へ執付く島も無い此身。昔の好みを認出し。お傍でお伽が申したさ。お前に逢ひたい。逢ひたい。ト申して居りましたが。マアお健康でお歸しうござりまする。遊軒アノ此遊軒が傍。みゆき御奉公が申したさ。與三夫故刀賣りまするでござりまする。遊軒いかにも買ひませう。一旦心懸けましたる女。寢間の伽させう。みゆき爰へ來い。みゆきハイ。與三お召なさる。行儀よくして參れ。トみゆき思入あり傍へ行く。みゆき御用でござりまするか。遊軒汝さへ寢間の伽せうならば。心許して寢間の伽さしてくれう。ト切懸ける。與三右衛門みゆきを引退ける。遊軒こりや何さつしやる。與三何となさる。遊軒此方へ求める小太刀。鋒先の鏽びて切味心元無い。女めを試しまする。與三些と御粗相かと存じまする。遊軒何が何と。與三此方は勅使守護の役。血をあやしても苦うないか。遊軒尤。親人ソレ。官翁合點ぢや。トみゆきに切懸る。立廻りの中與三右衛門扇にて打落す。官翁與三右。こりや何とする。ト手酷く云ふ。與三年に似合はぬ岩疊な事な。官翁サア何と仰しやる。ト急に老爺方にて云ふ。與三貴殿には勅使へ茶を差上げる役目。血に鏽びたる刀を持つさへあるに。女を試し召るゝか。官翁サア夫は過りました。與三過りも。御老體には似合はぬ近年の過り。官翁ウム。トきめる。遊軒親人。お年寄のお引なされい。ト官翁よぼく下に居る。遊軒與三右殿。いかにも御勅使前で。血をあやさうと致したは。親官翁が無調法。夫とても手前無調法でござる。與三イヤ謝らせうと申すではござりませぬ。遊軒イヤあやまりましてござる。あやまりもあやまり近年の大あやまりでござりまする。喜蝶父さんお前。ト切にかゝる。遊軒止め遊軒雁平女めを試せ。雁平ハツ。トみゆきに切懸ける。立廻りにて止め。みゆきこりや何とする。雁平切味試みる。ト立廻りにて與三右衛門雁平を見事に斬る。官翁與三右こりや何とする。與三何とも致さぬ。官翁勅使守護の家來を斬るからは覺悟であらう。與三這奴斬つても苦しうない。官翁苦しうないとは。與三不義者でござる。官翁不義者とは。木幡其證據は爰に居まする。ト木幡出る。遊軒不義の證據見ませう。木幡不義の證據は此文。あの雁平めが私に惚れて此付文。官翁様お前も最前御存じ。但し此文封を解いて。内の名を改めませうか。官翁ア、コレ。成程最前身共も居つた。家來雁平めが此方に不義を働く。扱を憎い奴と思へども。悴が歸つたら手討にもと存じて居つた。與三石能く斬召

された。此方の手に懸けるは雁平めが仕合さ。木幡爾う仰しやれば此文の。封を解くにも及びませぬ。官翁憎い雁平め。與三ハテ斬れたわ。右手の脇より肋を懸けてすつぱり。天晴の業物。錆には寄らぬものでござります。ト遊軒に渡す。遊軒いかいお世話でござる。と不承々々に取る。與三愈々女はお傍の伽。喜豊父さんどうでも。ト又寄る。遊軒這奴虎の子を飼ふ様な娘。與三右殿。此女めを確と此方に預けたぞ。與三預りました。官翁悻。序に其虎の子も。遊軒ハテ何程の事がござらう。遊軒親子は些とても。指さす奴があると。與三右殿の身の上。官翁それで落付いた。辨之サア皆奥へ參れ。遊軒最早お茶の湯の刻限。間もござりますまい。與三女房御案内申せ。木幡サアかうお出なされませい。皆々まづお入なされませう。ト唄になる。辨の中將。遊軒。官翁入る。與三右衛門。みゆき残る。きてふ泣いて居る。みゆき何を云うても勅使の守護。家の破滅を思うてエ、口惜い。喜豊折角思ひ思うて付覗うたに。爲損じ剩へ。小市女房去つた。二世までの縁斷つた。喜豊コレイナそれは。ト行かうとする。みゆきコレ待つた。遊軒が娘。弟小市に顔合すまいぞ。小市假令どの様な事が有つても顔合せぬ金打。ト表にて金打する。喜豊エ、みゆき可愛い夫の武士を捨さすか。喜豊サア夫は。小市不忠不義の名を取らすか。喜豊サア。み。小。喜サア。小市如何ぢや。喜豊ハツ。ト泣く。みゆきとは云ふもの、可憐や。ト與三右衛門は官翁が事思ひ入。きてふ與三右衛門が刀にて自害する。みゆきヤアこりや自害しやつたか。小市ヤア。與三内へ入ると不孝になるぞ。きてふ爾う無くては道は立つまい。喜豊私程因果な者は無い。夫に添ひたいばかり。兄様には勘當受け。嬉しやとも。敵を討つて女夫にならうと思ひの外。敵といふは父さん。どの様に添ひたいも思つても。小市様の武士の廢る事なら。必ず入つて下さんな。もう此世で顔は見ぬ。魂はお前の女房ぢやぞえ。此體は遊軒が娘。せめては敵の肉縁を恠う。恠う抉つたれば。もう心は晴れました。此世の念は切つた程に。せめて未來で女夫になつて下さんせえ。みゆき夫程までに弟が事思つて居る其方。因果とて惡縁。與三天下のお咎めある花滿憲法に一家となる事。上への聞えを障り勘當は致した。未來に遠慮は無い。妹勘當赦したぞ。喜豊エ、與三小市。きてふは未來の妹。改めて與三右衛門が媒人。連添うてたもるまいか。小市此世こそ敵の娘。未來は結ばいて何と致ませせう。必ず冥途は女房ぢやぞ。喜豊其詞を聞いたら思ひ残す事は無い。未來は一ツ蓮でござんすぞや。みゆきせめて此子の末期に盃。與三イヤ。顔を合せばやはり敵。みゆきちやと云うて可愛さうに。ト與三右衛門釣花生にゑのころ柳を生けあるを取つて。きてふが血を入れてくさりを片々はづし。與三血肉を啜つて因縁を引くといふ。其方も未來永々小市と縁を引く盃。みゆき私は則ち待女郎。與三盃に手を差さねば。敵の娘の媒人といふても無い。ソレ其鎖で。みゆき縁の鎖の引へ盃。取次もせず手も差さず。鎖で引くが二世の結び。與三息引かぬ内早う。ト唄になり。みゆき此鎖を持ち門の外へ引いて出る。與三右衛門手燭を持ち。此中に遊軒下座の家體にて官翁に囁き入る。官翁鐵砲にて與三右衛門を覗ふ。みゆき小市。二世の盃。小市是がきてふが血汐。トちつと泣いて飲む。與三陰中の陽陽中の陰。コレ此雪も内に陽有つて燃ゆる事。陰の凝固る證據。水は火を消し雪は火をかふ。人間も先づ其如く。雪の火を取る露雫と諦めて未來を樂め。是が門火。ト梅の直枝へ火を點ける。雪段々消えて燃行く。官翁鐵砲の上へ水落ちる。官翁鐵砲打付け入る。小市然らば慮外ながら。トみゆき鎖を内へ引いて入る。唄になり。みゆきコレ爰に盃。喜豊エ、忝い。ト飲む。與三みゆき殿。其盃は是へ。みゆきアイ。ト又引いて来る。與三右衛門つくく見て唄になり。與三ハ、ア、神なる哉妙なる哉。唐土のくわてきは。柳の葉に蜘蛛のとまり水に浮みしを見て舟を造る。今與三右衛門は花生の盃を見て。夜舟の覺りが開けた。み。小何と。與三此花生を今一度。トみゆき向ふへ引いて。みゆき恠うすれば。與三淀川は水早く。五日七日の中に中々船にて上る事思ひも寄らず。七里半の堤を七曲りの中へ直に付け。玉城に近道拵へるは。遊軒が心に深い工あらんと思へども。何を云うても大内の仕官。敵討も家國も。此上り舟の工夫こそ。思ひ暮しは此年月。其通りに舟に綱を付け川端を引上らば。米穀萬事運送は思ひの儘。船にて自由は躰と權と。帆を巻くばかりに凝つたるか。

も。こなさんは無念には無いか。エ、此力はなう。爾ういふ此方の心底とは知らず。今まで敵討を延したが殘念なわいなう。縫之今まで敵討を延したは。遊軒が怖さてあつたナ。エ、爾ういふ心とは知らいて便りにしたは殘念なわいなう。みゆきもう頼の綱も切れ果てた。是より奥へ踏込み遊軒に繩打つて。禁廷よりお赦しの出るまで。命を取らねば事は済む。サア縫之助様お出なされい。縫之ソレ一時も早う。ト此内遊軒聞いて居る。與三ヤレ待て。遊軒ばかりは翫めうが。辨之作は何とする。縫之何と。與三女房木幡首尾はもう好い。起きたく。木幡與三右衛門殿。首尾好うござりまするか。縫之これは。木幡皆與三右衛門殿との相談。與三川浦遊軒方に辨之作置まひ置く事。草を分つて詮議すれども知れぬこそ道理。あの官翁七十有餘の老人が。人無き所て様々の氣丈。察する處遊軒が家の祕薬。戌の年戌の月戌の日戌の刻に誕生したる女の生血と。血筋の白髪を合せ飲したに極つた。縫之まつた源八が娘のお松は行方も知らぬ浪人が生贖を取り。殊に親茂治兵衛が白髪まで。みゆきスリヤ其時の浪人は。縫之辨之作であつたナ。與三是を消さうには亥の年亥の月亥の日亥の刻に誕生したる女の生血にねこ柳。みゆきスリヤ先刻のきてふ殿の生血を。與三犬死でない妹が最悟。三人追付知れる辨之作。與三急く處て無い。心を沈めて來い。ト皆々入る。唄になる。遊軒出て。遊軒大底の奴てはないわい。ト奥より官翁若い男にて出る。官翁擧げお上にも殊ない御機嫌只今。遊軒ヤイヤイ。うぬが其身振は何だ。官翁悴。身共が身振が何とした。遊軒うぬが顔水鏡て見をらう。官翁悴とした事が。扱々何とした。ト老爺がたの臺詞にて手水鉢にて顔を見て。官翁ヤアこりや遊軒様。私は何時の間に此様になりましたたナ。遊軒最前の茶をふか。喫うた故ちやわい。官翁與三右衛門が計略に乗つたか。エ、こりやマア如何したものであらうナ。遊軒もう儂は此屋敷には置かれぬわい。官翁遊軒様。如何ぞ好い思案は有るまいカナ。遊軒表門は番人あり。幸ひ水車の樋口。人の見ぬ間に急げ。官翁私は私ぢやが。お前は何となされまする。遊軒山が轉けて來ても助使の添人。花満一家與三右衛門が首取つて追付行く。人の見ぬ間に急げ。官翁ハツ。ト走り入る。みゆき氣味合あつて遊軒が傍へ行く。遊軒みゆき。わりや爰へ何しに來た。みゆきわたしやお前に逢に。遊軒何ぢや身共に逢に。ハテ好く來たな。みゆき先刻には憎い奴ぢやと思はしやんせうが。わたしや今では憲法様の事は思ひ出した事も無い。お前の事ばかり思うて居るのに。お前胸慾ぢやぞえ。但し又私に惚れたと云はんしたは嘘かえ。遊軒スリヤ憲法への真心捨て。遊軒が心に隨ふか。みゆきサア其處が去る者は日々に疎し。遊軒いかにも伽さして遣らう。身が氣に入る様に伽はせまい。みゆきサアお氣に入らうか入るまいかは知らねども。マア恚う。ト切懸けるを止めて。遊軒此様な伽の爲様では。些と間に合はぬ。みゆきそんなら恚う。ト又切掛ける。見得よくとまる。縫之助又切懸ける。遊軒扱は汝も入込んだなア。縫之みゆき様の媒人を致しませう。遊軒媒人ならば幾人でもさしてくれう。木幡私も媒人致しませう。遊軒幾人でもさませせう。與三拙者も媒人致しませう。遊軒幾人でもさませせう。みゆきお伽致しませう。ト又切懸ける。見得あつて止る。與三コリヤ大内から御沙汰も無い中に。傷付けると家が立たぬぞ。木幡心を静めてお伽をさしやんせ。ト是より立になる。攻太鼓になり立廻りあつて止る。遊軒あの攻太鼓は。與三さのみ驚かつしやる事は無い。將監を討つて立退いたる辨之作。今宵水車の樋口より抜出るを。源八。總角兩人致し。川の中に敵討。天道合さんを行馬となし。小舟を以て取巻き。いかなく動かしは仕らんぞ。遊軒ナニ辨之作だ。ト往かうとする。見得になる。遊軒寄つたら蹴殺すぞ。與三動くな。ト是より道具舞臺一面に廻る。此内皆立廻り。

道具一面の城。前に水車あり三十石小舟數多。皆々高提灯にて取巻く。眞中に官翁實は辨之作橋袴。源八橋袴。總角白無垢にて立廻り。此内道具廻りあり。

又元の座敷になる。右の見得にて遊軒を與三右衛門。みゆき。小幡。縫之助取巻き元へ戻る。向ふより小市。御書を持ち出る。道具止る。

與三ヤア小市か。小市ハツ。與三首尾は。小市御書。與三一方より讀上げい。ト與三右衛門。小市兩人にて讀む。小市花滿憲法儀は鎌倉の名代として大内に於ての無禮。禁裏を騒がしたる科に依つて。一家残らず滅亡す。與三然るに吟味を遂げ尋ぬる所に。川浦遊軒が悪心の上。憲法が妻女御幸とやらんに戀慕し。御盃も遊軒打破りし由。悉くなれ合たる者どもより白狀。憲法に科無き條一決せり。小市且又花滿一家紛失の切手差上げし上。淀川上り舟の工夫訴へたる功に依り。昔の所領安堵。加増として家中人別に三十石づつ御加増せしめ。日本廻船の要と致すべき者也。小市此度七里半の堤川中へ築き候事。王城へ近道を付けしは。謀叛の萌しと評定極り候事。與三且又川浦遊軒。花滿一家へ下し賜る間。年來の敵。賜殺しに致すべき者也。與三小仍つて御書如件。皆々サア遊軒。遁れぬ所ぢや覺悟せい。ト又見得になる。是より道具又々廻る。ト右の辨之作源入總角立して居る。是より道具四五遍も早う廻る。ト見得好く右の屋敷の所にて道具止る。立廻有つて遊軒を縫之助みゆき兩人して殺す。橋懸より源入。總角走り出る。縫之兄者人の敵。みゆき夫の敵。兩人思ひ知つたか。源八辨之作も打止めました。與三出來した出來した。是より禁廷へ奏聞せん。み。縫。總是と云ふも與三右衛門様のお蔭。與三お勅使様は。木幡先達てお歸し申しました。與三出來した。敵討は濟んだ。まづ此場は目出たいお立。ト打出し。

三十石體始終

宿無團七時雨傘

無宿團七時雨傘

狂言作者 並木正三

編中人名

- 一 團七の茂兵衛 一角力取ひな川 一 澤村國太郎 一小役大勢
- 一 堺大治 一同十文龍 一 嵐三五郎 一 岩井風呂治助
- 一 女郎とみ 一同千間川 一 並木正三 一女房お梶
- 一 親方權兵衛 一同萬力市左衛門 一 芝居頭取
- 一 廻し男久七 一 茶屋川九 一 魚屋大勢
- 一 同佐兵衛 一 高橋數右衛門 一 木戸大勢

第一段 堺魚市の場 大寺芝居の場

造り物堺魚市の體。茂兵衛床几の上に。うち鍵に魚を引かけ居ると。魚屋大勢寄たかり居る。幕あく。

茂兵衛アちやアくくく。大勢きりがれんく。茂兵衛ちやアくくく。すじきと。すみやき。八郎じや。魚屋きすは北の間じやぞ。茂兵衛ちやアくくく。ト皆々囂しう云ふて値を付けると。川九出て。川九扱も囂しい事じや。ヤアこなたは團七の茂兵衛殿じやないか。ほんに團七じや。茂兵衛オ、誰じやと思ふたら。難波新地の川九か。川九川九か。アイヤこなたはく。茂兵衛サアくマア可いわい。後て如何なりとする。爰は人がある。聒しう云ふな。

魚が吸付いても。此方は北向の鰻のやうに思ふて。跳廻るに依つて。鮑の貝の片思ひ。氣遣ひはないわいなア。茂兵それでも赤貝は食はしたて有らう。とみいつかな事。海老の腰の屈むまでと。言交したを忘れてたまるものか。毛逢たうて。茂兵ソレ其邊あたりに目ばるどもが鯨に。鮪。とみそれじやに依つて。つゝともう何にも鱒じやわいなア。茂兵寝からの事は如何じややら。とみコレ氣遣ひさんすな。ふかほど寝てこます。茂兵でもほうほうのかながしらで。身請の秤にかつたら。とみ死ぬるぞへ。生魚じやとばし思はぬが可いわいな。茂兵ハテかれひこれ〇いかい苦しわうが一本残つた。ヤアちやア。茂兵ハア、出来た魚盡しの口合。中々聞事て有つた。面白かつたナア萬力。萬力とうふくのでふを見付出したぞ。歌右サア。芝居を見に往かうサア富〇富十郎を見せうおじや。とみイ、エわしや最う芝居は厭。爰て遊ぶわいな。歌右何じや爰て遊ぶ。アノ爰て。爰て遊びたがる程おりや芝居が見たいじや。サア。手に手を取つて。芝居見に行かうおじや。とみエ、意地の悪い事じやなア。親方コレとみ。たつた今まで芝居に行たいと云ふたじやないか。何思ひ出して芝居が厭じや。サア連まして往きやいなう。とみやじや。厭てムんす。萬力親方厭な筈じや。蟲めがけつかる。鰻に付いて居る蝶といふ出しが身代の邪魔になる蟲が爰にけつかる。歌右オ、てふて有らうが半で有らうが構ふ事はない。腐い魚の腸を喰ふて。鱗のお蔭で願を養ふてけつかつて。アノ大盗人の大ずりめが。親方サアおじや。とみやじや。茂兵コレお侍。一寸待つて貰ひませう。歌右待てとは身共が事か。茂兵外に侍くさいものも無く。こな様の事てなうて誰の事て有らうぞいの。あんだらくさい。歌右うぬ侍に向つて何と吐した。うぬが。萬力サアようムります。萬力が可いと云ふたら。マア。待しやりませ。歌右サよいか〇よかよいてや。萬力ヤイ其處なわる。用が有るなら爰へ下りたが可

ふへ茂兵衛。此内大治。治助と連立出て別れて居る。萬力用とは何の用じや。茂兵今聞けば魚の腸を喰ふたの鰻の蝶じやのと。悪態吐したは誰の事じや。萬。歌サアれば。茂兵俺が事か。萬。歌サアれば。茂兵俺が事じや有あらうが。ア、とみと慇懃して居る蟲じやと云ふ心で。鰻の蝶じやと云ふのじやの〇爾うか爾うて有らう。蟲じやと聲懸られて。蟲にならずにも居られまい〇下んせ。歌右何を。茂兵とみを。歌右サア。茂兵今日はこなんの揚て有らうが。連れて去んで。今夜は俺が家で。抱いて寝る程に爾う思ふて貰はう。明日去しやうが。遅くば晝までの花つけて。金は其方で拂ふて置かんせ。可いか。歌右厚顔しい奴では有る。うぬはマア何といふ奴じや。茂兵團七の茂兵衛といふ者じや。何とした。萬力團七の茂兵衛見知つた。おりや大坂で萬力の市左衛門といふて。人のよう知つた者じや。見知つて貰はうかい。茂兵萬力の市左衛門〇フウ面見知つた。萬力其萬力の市左衛門が附いて居て。ぐずらしたと云れては。俺が顔が立たぬ〇好いばれくちじや。團七とやら。富をのいて貰はうかい。茂兵爾う出さうなものじや。悲しい事は此方が侍じや。又貴様が萬力じやに依つて。否でも應でも貰はにや成らぬ。爾う思ふて貰はう。萬力ヲ、やらう。富よりまづ先へ是をやらう。ト胸倉執つて叩き懸る腕首とらへ。茂兵こんな猪小才すな。萬力うぬはつたぞよ。茂兵ヲ、はつた。萬力うぬ。ト少々立廻り有り。富あせると親方とらまへて居る。歌右モウ赦されぬ。ト抜いて切つてかゝる。茂兵衛程よく留めて。茂兵コリヤかけ付るのか。歌右うぬぶち殺して。ト是より三人立廻り。市の者ども喧嘩。と匂く。此内親方とみを連れて這入る。ト大勢の魚屋取支へるを。退け。と云ひて騒ぎ。皆々押分引分揉合ふて這入る。ト跡に茂兵衛一人残り居て。茂兵何處へ亡せた。富は何處へやつた。大方芝居の方へ。ト行かうとする。大治團七待て。ト茂兵衛振り返り悔りして。茂兵大治殿か。大治團七又さそふむのか。茂兵團七喧嘩しやせぬ。治助大治其方の預けたいと云やるのは。此和郎か。大治ヲ、是じや。治助大治狭ふても堺は天上の靜かな暮し好い所じや。大坂の道頓堀は。近年寂しいの何じやの彼じやのと云ふても物言が斷えぬ。夫に此喧嘩仕を隠

ふて世話せいか。あつみを子に譲るとやらいふ諭のふし。小博奕も打つふりなり。色事で侍と角力取を相手に取暴れ歩く。這樣者を見知越しに預けて樂するののか。おりやマア怖い。變替じや。エ、預らぬ程に爾う思や。ト床几に腰掛ける。茂兵親仁殿ありや誰でえす。大治アリヤ大坂の島の内。岩井風呂の治助といふて。置屋じや。茂兵其處へ俺をやるののか。大治マア智恵付の爲に。俺が親分て廻しやら何やら彼やらに遣るのじや程に行け。茂兵厭じや何の爲に大坂へ行かいても相應に爲て通る。何の爲に大坂へ行くもので。大治ハテ悪い事は云はぬ。往けやい。茂兵厭じやと云ふのに。大治何て又厭じや。茂兵情婦に離れるに依つて厭じや。何と平たいものか。治助親分の貴様にさへ彼の挨拶じや。連れていんだらもつちやくする。マアおりや厭じや。とんと厭じやぞや。茂兵いやがる所へ無理に往かいても大事な事。大治一旦往けと云出したら。否てあらうが應て有らうが。遣らにや措かぬ往け。茂兵そんならどうでも。大治オ、堺の地に置く事成らぬ。茂兵おけいきやせぬ。何の爾ういふ水くさい根性な處に何の爲に居よ。又肝煎つて貰はいても。俺が往きたい所へ一人行く。コリヤもう俺が身をほつとして突出すのじやの。ヲ、突出しや。人の情も世に在る程とやら。モウ其時分じや有らう。うつとしからう。うつとしがる所に居いても大事な。義理も作法も知らぬ犬のやうな者の所にや居ぬ。アノ物知らずめが。ト云ふて大治。茂兵衛が胸倉執つて引つけ。大治人の情も世にある程とは。己を見限つて放すと云ふのじやの。エ、此方はなう○零落れば心まで其様に下作になるものか。此方は俺が三代相恩のお主。湊川の家中に於て。宇田甚五右衛門様といふ侍の御子息の茂兵衛様。殿様より預りの。二字吉光の九寸五分を盗賊に奪取れ。申譯無くお家は没落。勸當受けて俺が所へお出なされ。段々のお頼み故。儕やれ盗賊めを引捕へ。再び歸參させませずば措くまいと。人の入込む呼屋をしたり。置屋をしたり。戎島で顔を賣つて。角力の頭取までするには。皆詮議の手懸にするのじやわいの○それを此方はうか〜と。色にばかり性根に立つか。此方の性根の悪うなつたも皆色故じや。夫て大坂へ遣らうと云ふが誤りか。心を察し居る俺を尤じやとは。よう其様な事が云れるのう。如何なと此方の勝手にさつしやれ。エ、胸慾な人じやなう。茂兵大治○大治殿爾う云へばモウ何にも返す詞が無いけれども。よう思ふても見たが可い。其方が親分になつて。肩て風切つてさへ知れぬ九寸五分。大坂へ俺一人往て。何を目當に爲うやうが無い。同じ事ならおりや堺に居たい。今の様に云ふたはほんの若氣○腹が立つなら拜ませう。怵へて下されコレ親仁殿。堪忍して下さりませ。大治何ぞ云ふと人を拜んで。俺に罰あてる氣かいよう。茂兵モウ〜此以後喧嘩はせぬ。どのやうな目に逢ふても。人に對手にならぬといふ證據に。ト矢立にて左りの腕に字を書き。出刃にて切廻し墨を入れる。大治是は。茂兵大勇信士親父様の御戒名。堪忍といふ字を入れたれは。俺が心の誓ひ。大治ムンすりや其字を見る度に。茂兵家の大事此身の大事。親の事を思ひ出して。踏れうと叩かれうと。腹を立てぬ喧嘩せぬといふ心の誓言。是て心を晴したも。大治若旦那忝うムる〜。ト手を執り泣く。治助大治〜。大治ヤア何じや。治助先刻には變替したが。おりや其茂兵衛殿預りたい。大治ヤア何と云やる。治助大治貴様は聞えぬぞや。是程念頃にするやうにもない。爾ういふ事なら何故打割つて云ふてたもらぬ。今聞けは其方の御主じやさうな。爾ういふ事を知つたらば。水くさい愛相盡しを何の云はうぞいの。預けてたも。預つて世話がして見たい。大坂へ寄越しやらぬかと云ふ事。茂兵治助殿とやら忝うムりますれど。親仁殿の大坂へやらうと云れたも。喧嘩から起つた事。喧嘩さへせねば別に大坂へ行く事も無いやうなものじや。治助有るやうなものじや。其概略といふは。茂兵衛殿は見知つて居るか。ト腰にさして居る九寸五分を抜放し見せる。茂兵ヤアこりや是紛失の二字吉光。大治よもや貴様が。治助サア盗んだ物なら此方衆へ抜いては見せぬ。是見やんせと抜いて見せた處が。盗まぬといふ確な證據。コリヤ云はいても知れて有る事。大治シテ是は何處から如何廻つてこな様の手に入ました。治助サアいつも來る刀屋が持つて來て。安いものと云ふて置いていたが。其刀屋が夜抜して行衛が知れぬ。慍う

に立つか。此方の性根の悪うなつたも皆色故じや。夫て大坂へ遣らうと云ふが誤りか。心を察し居る俺を尤じやとは。よう其様な事が云れるのう。如何なと此方の勝手にさつしやれ。エ、胸慾な人じやなう。茂兵大治○大治殿爾う云へばモウ何にも返す詞が無いけれども。よう思ふても見たが可い。其方が親分になつて。肩て風切つてさへ知れぬ九寸五分。大坂へ俺一人往て。何を目當に爲うやうが無い。同じ事ならおりや堺に居たい。今の様に云ふたはほんの若氣○腹が立つなら拜ませう。怵へて下されコレ親仁殿。堪忍して下さりませ。大治何ぞ云ふと人を拜んで。俺に罰あてる氣かいよう。茂兵モウ〜此以後喧嘩はせぬ。どのやうな目に逢ふても。人に對手にならぬといふ證據に。ト矢立にて左りの腕に字を書き。出刃にて切廻し墨を入れる。大治是は。茂兵大勇信士親父様の御戒名。堪忍といふ字を入れたれは。俺が心の誓ひ。大治ムンすりや其字を見る度に。茂兵家の大事此身の大事。親の事を思ひ出して。踏れうと叩かれうと。腹を立てぬ喧嘩せぬといふ心の誓言。是て心を晴したも。大治若旦那忝うムる〜。ト手を執り泣く。治助大治〜。大治ヤア何じや。治助先刻には變替したが。おりや其茂兵衛殿預りたい。大治ヤア何と云やる。治助大治貴様は聞えぬぞや。是程念頃にするやうにもない。爾ういふ事なら何故打割つて云ふてたもらぬ。今聞けは其方の御主じやさうな。爾ういふ事を知つたらば。水くさい愛相盡しを何の云はうぞいの。預けてたも。預つて世話がして見たい。大坂へ寄越しやらぬかと云ふ事。茂兵治助殿とやら忝うムりますれど。親仁殿の大坂へやらうと云れたも。喧嘩から起つた事。喧嘩さへせねば別に大坂へ行く事も無いやうなものじや。治助有るやうなものじや。其概略といふは。茂兵衛殿は見知つて居るか。ト腰にさして居る九寸五分を抜放し見せる。茂兵ヤアこりや是紛失の二字吉光。大治よもや貴様が。治助サア盗んだ物なら此方衆へ抜いては見せぬ。是見やんせと抜いて見せた處が。盗まぬといふ確な證據。コリヤ云はいても知れて有る事。大治シテ是は何處から如何廻つてこな様の手に入ました。治助サアいつも來る刀屋が持つて來て。安いものと云ふて置いていたが。其刀屋が夜抜して行衛が知れぬ。慍う

云へばどうやらあやの抜けぬものじや。若し治助かと思ひもさんせうが。マア盗人になつて好くばなつて遣るまいものでもないが。今の話を聞いて。預りたいと云ふは是じやわいのう。大治シテ此九寸五分には。貳千五百兩といふ折紙が有る筈じやが如何しやつた。治助大治吾儕も粹方のやうにもない。刀屋から賣に來るもの。折紙付を安う賣るもので。茂兵イヤサ其折紙が無ければ。二字吉光が有つても歸參する事は成らぬ。治助サア其處が詮議でありさうなもの。マア小口が知れたら其處をたぐつて。折紙の詮議盜賊の詮議も。出來まいものでも無いぞや。茂兵衛殿此方は大坂へ來る氣はないか。茂兵何卒大坂へ行たうムります。世話して下さりませ。大治貴様を男と見懸けて頼む。何卒世話焼いてたもらぬか。治助オ、俺が預つた。大坂へ連れて去んで世話せうわい。大治エ、忝い治助是じや。治助是は野暮らしい何じやぞいなう。俺が預つたら大船に乗つたやうに思や。イヤ茂兵衛殿。あの色は堺に置いてござる氣か。茂兵ハイモウ今からでも參ります。治助よし。もうよい。色は諸道の妨げといふ所を。一寸押して見たものじや。必ず其入ぼくろを忘れまいぞや。九寸五分が好い異見じや。間違ふては此双物はやりませぬぞや。欲くば此方の身持次第じやナ合點か。茂兵ハテ此上は富と。顔見合しても物申しませぬ。治助コレ云はんすないなう。物云はぬと云ふて云はずに居る者が有らうかいの。こな様の心で心嗜んだが可いわいの。○そして貴様何する氣じや。大治治助とした事が。貴様の所に千代太夫といふ息子も有り。若い者をどや。置くのも氣の毒なが。治助ハテ何なと爲すわいの。茂兵些と月代も剃るに依つて毛剃にても遣つて貰ひましょ。治助剃刀持つか。茂兵ハイ。治助それ幸ひ太左衛門橋の善太郎に頼んで。床へなりと遣らうわい。大治そんならもう直に連立つて去んで下され。治助したが角の芝居から爰へ來て居る慶子殿に一寸用も有り。ちよつと逢ふて往の。茂兵私も直に附いて行やんしよ。大治いつそ今日は見物せうかい。治助夫も可るサアおじや。ト行かうとする。數右衛門。萬力始終を見て居る。兩方より

返し

さゝぬと云ふは是が證據じや。歌。萬ハテうせいと云ふに。大治夫こそ團七男じや。治助出家ました。その。行きませう。ト治助數右衛門を取つて投げ。大治。萬力を投げる。ト歌になる。三人そろ。向ふへ這入る。ト跡に二人顔見合せ。萬力お前はマア侍に似合はぬ。投らるゝといふ事が有るものか。歌右身は武士だに依つて投られても大事ないが。儕は何じや。角力取てはないか。夫に何故蹴倒された。萬力どこに俺が投られた。歌右投られはせぬか。萬力夫はさうと。今の二字吉光の事は聞かんしたか。歌右思ひ懸ない。スリヤ彼奴が甚五右衛門が忤茂兵衛め。萬力コリヤ思案せざ成ますまい。歌右芝居の方へうせたに極つた。萬力茂兵衛めが大坂へうせれば。とみは此方の自由。歌右萬力來い。ト向ふへ走り這入る。

造り物芝居の表の體。ト目出度論になると。芝居内にて木戸役者の名を云ふて出端を譽める。ト見物の聲いろいろする。大治木戸口より出づる。芝居頭取の送出づる。跡より茂兵衛治助も出る。

大治せめて一切見て去んだが可いわいの。治助イヤ。よう思へば日脚がたける。早う去んで爲かけた事も有り。夫と大坂でなんぼも見た狂言じや。頭取爾うてムります。追付大坂で盆替りの狂言を見ませう。大治わたしやモウいなうわい。茂兵去しやるか。内へ心得て下んせ。大治随分健康で居たが可い。治助頼んだぞや。治助氣遣ひしやんな。些と大坂へ出ておじや。大治ライ。頭取様。役者衆へころえて下んせ。頭取ハイ。角力の時分には見に參りませう。大治何を色で暇が有るまいが。頭取ハ、ハ、ハ、ト別れ大治去ぬる。頭取内へ這入る。治助茂兵衛マア當分人の噂を聞合すまで。床の毛剃に往たり。又町も手傳ふたりしたがよからう。茂兵私も爾う思ふて居ます。ト云ふ内とみ走出て。とみ茂兵衛様。今お前の顔を見たに依つて抜けて來た。コレ如何も成らぬ事が有るわいな。彼の侍が私を身請せうと云ふわいな。茂兵何じや侍が身請する。とみアイナア。茂兵夫がどう抛つて置れるもので。ト行

かうとする。治助咳拂ひする。ト茂兵衛じつと素知らぬ顔する。とみ思案して下さんせ。此身請が埒明くと。わしや死ぬるぞへ。お前も云しやんした事も有り。二人の命の瀬戸じや。何卒好い思案して下さんせいなア。茂兵衛イヤ申し治助様。今日は魚市の勘定でムります。抛つて置いては帳が厄體になります。一寸事譯云ふて引合して渡して参ります。治助茂兵衛。岩井風呂が大治に確りと預つた。其方よもや顔の潰れるやうな事はしやるまい夫とも。是に替へて腥物に打かゝる氣ならせう事がない。コリヤ鯉かきにして分の事じや。茂兵衛減相な事。色は色那樣不埒な者でムりませぬ。治助イヤもうおりや如何なりとも元々じや。マア男づくを見たものじや。とみコレ茂兵衛様。思案して下さんせいなア。ト此内敷右衛門。萬力。親方出て。歌右思案も瓢箪も入らぬ。身請して身請が女房にする。とみあた厭らしい聞とむない。厭じやわいなア。萬力團七の茂兵衛といふ蟲は大坂へ行くと明家の女郎。假令離れいても無理に離して。旦那にせしめさすのじや。歌右身が請出すにぐつとも言分は有るまい。親方三百兩に極めて。年期證文まで持つて来たのじや。何方も邪魔して貰ひますまい。治助權兵衛殿じやないか。權兵衛かと思ふたら治助殿か。治助熱い事なう。此間仕かへと云ふて来たのは此奉公人じやの。親方ライノ是でござんす。モウく手にも足にもおへる者じやない。仕替に出さうと相談に遣つたけれども。幸ひ此お侍様が身請をせうとの事。夫てお侍様の方へ遣る。爾う思ふて下んせ。治助目と鼻と明いて金儲けする貴様は。かたのよい人じやわいの。歌右ヲ、目の前で身請する。萬力金渡せ。萬力ハイ今とみを身請なさる。何奴も這奴も言分は無いか。コレ金渡さうか。ト金入の財布深紅のふさを取出し。それ金受取れ。ト渡すを親方受取り。親方ハイ。こりやいかう嵩が高うムりまするが。歌右みだけ小判で四百兩程ある。皆受取つて置け。親方アノ皆下さりますか。歌右女郎の身請に何ぼの彼ぼのと直をする事も無い。借銭ぐるめに受こんで。さつぱりと済して遣れさ。親方コリヤマア夢ではないか。這樣大氣な身請は見た事

往て稼いで見る氣じや。とみエ、茂兵衛に居やしやるは。嶋の内て岩井風呂の治助様といふ置屋じや。大治殿が世話で大坂へ行く。今まで何の彼の約束した事も有れど。マア縁が有らばと云ふやうなものじや。爾う思ふてたも。とみエ、そりや何云はんすぞいな。降つて湧いたと云はうか。そんなら私は是限りにするのいか。茂兵衛マア是限といへば是限り。命が有らば又逢ふ事も有らうと云ふやうなものじや。とみエくめつさふな。夫ては済まぬ。生きるとも死ぬるとも一緒じやと言交して置てから。イヤく何ぼでも放りやせぬ。大坂へ行く氣なら。わしを殺して置いてから行しやんせ。何處も遣る事は成らぬ。ト頼付き泣く。茂兵衛いろく思入。治助茂兵衛日がたけるが。行く所へちやつと往て來ぬかいなう。茂兵衛今往て参ります。とみイヤく何ぼでも成らぬ。ト留める。茂兵衛ハテ扱。ト振切り這入る。トとみ付いて行かうとする。數右衛門留め。歌右コリヤ身請した女房。此方へ寄つて居い。とみそんならモウ私が厭になつて退くのじやなア。ト數右衛門が刀を抜き死なうとする。歌右どつこい殺してつまるものかい。親方金取つたらお前の者じや。緊りと留めさつしやりませ。ト此内芝居の内はたとして。頭取表口から合點が行かぬ。詮義せい。木戸合點じや。ト頭取木戸五六人走出る。治助頭取様いかう騒がしいが暴行者でもあるか。頭取イヤ大抵の事じやムりませぬ。三段目に慶子様が使はしやる。みだけ小判が四百兩。かんがふの印を盗まれましたわいの。治助ヤアそりや惣嫁の時使う小判じやの。頭取サア其小判は念入れて銚屋で一兩を五分づゝで拵へさせた。太夫元から聆しう云ふ。表は御存じのかた庄なり。迷惑する者は私一人でムります。夫と彼の軍勢催促の勘合の印が無ければ四段目の狂言する事が成ませぬ。歌右衛門様がえら怒りじや。夫でもう樂屋は混返します。治助ムン勘合の印は赤い金入の帛紗に。深紅の房が付いて有つたかへ。頭取アイ深紅の房てくるく巻いてムります。治助アノ金入の袋に。頭取アイ。治助ハテナア。ト治助顔で數右衛門を教ふると。數右衛門萬力と顔見合せ。つつなき

こなしいろく思入。頭取先刻に侍が小道具部屋をうそくして居たが。どうやら吞込まぬ。オ、爰に居やしやるわ。コレお侍様。お前は先刻に小道具。歌右何じや。身は武士だぞ。武士に向つて何をほざくのじや。頭取でもお前光刻に。萬力コレく頭取。此お侍様は俺が旦那衆でえす。芝居の小道具取つて何するもので。どんな事云やるとすこたんめぐぞよ。歌右オ、爾うじや。頭取萬力さん。何ぼう爾う仰しやつても。此方も商賣の消とむないにや替られぬ。詮義せにや成ませぬ。木戸待て。爰に居る奴が持つて居る。此房は金入じや。頭取どれ。ヲ、是が勘合の印じや。這奴が盗んだのじや打のめせ。親方ア、コレ。是はたつた今其お二人の衆から女郎の身請。○眞餘の小判かへ。木戸どこへ身請。眞餘の小判で身請が成るものか。親方ほんに眞餘じや。頭取そりやこそ勘合の印も入れて有るわ。大盗人じや。三人共打のめせ。ト三人を叩付ける。ト芝居の内歌を歌ふ。幕切の拍子木。チヨン。見物褒める聲する。頭取待て。憎い奴等じやが。モウ幕がつまつた。ちやつと此金を慶子様に見せにや成らぬ。勘合の印も太夫元へ渡さう。木戸エ、彼奴等をマア。頭取ハテ可いわい。ト云ひ。皆芝居の内へ這入る。親方ヤレ怖や。すつての事に盗人の同類にならうとした。マア此證文は此方へせうわい。ト引奪る。萬力は。親方夫とは大事の奉公人を。勘合の印で身請せうとは。萬力殿看す。な事よう云しやるなう。あんまりで物が云れぬ。サアとみおじや。とみイヤ。待つて下んせ。茂兵衛様に逢ふて譯立にや成らぬ。親方ハテ戻れと云ふのに。治助コレく權兵衛殿。よいわないやじやが。いつそ其奉公人仕替に取らうかい。親方それは忝い。勘合の印で身請せらるゝ時節じや。何ぼうなりともいつそ切出さう。治助すつぱりと年切百兩。親方チツト可いわ吞込んだぞ。治助貰ふたぞよ。親方遣つたぞよ。治。親よいく。ト指にて手を打つ。治助とみ吾儕を此方へ入込むが。コレえようには置かぬが商賣じやが。何とすつぱりと勤めてたも。とみわたしや爰を離れて外へ行く事は。治助成らぬや。とみそんなら。治助サアマア大坂者の爲る事は不詳かも知らぬが。とみ始終の譯を知つてお辭儀が罷る。治助サア。ア。恠ういふ勤めの中にも。樂しみ無うては勤らぬと近松が云ふた通りじや。大坂へおじやつたら。面白い事も有さうなもの。其處を見込んで吞込むも。商ひがして貰ひたさ。とみ心得ました私が根の續く丈け。日がらの上の物前も随分。治助モウ可い。コレそんない衣裳ははりこむ。頭の道具も大源の木々と張合ふ程にする。爾う思や。ト芝居の内より正三出て。正三モウ去ます。ト云ひ。出る。木戸まそつと御見物なさりませぬか。正三イヤ又内に待つて居ます。手代そんならお歸りなされますか。ようお出。ト手代木戸へ送出て這入る正三。治助を見て。正三ヲ、是は治助殿ではないか。治助ヲ、並木正三様。爰へお出なされますならば。お供致しませうもの。正三ア、貴様の爰へお出の様子は。廻しの久七に聞いた。わしも用事は多し忙しければ。角の芝居の世話して居るに依つて。盆替りの狂言の請合と。表方に取る金が有つて来たが。狂言も大方片付いた。金も百兩持つて。やうくと今去ぬる所じや。治助お前も御用の多いに。いろくのお世話なされます。正三サアうぶからののらじやに依つて。のらの方はどうでも好じや。作者も面白いものじやが。時々ひどう難かしくござんすてや。イヤもうわしや去ます。跡から靜かに。治助モウお歸りなされますか。然らばお靜かにお出なさりませ。ト正三向ふへ行かうとする。治助アイヤ申し正三様。些とお待下りませ。正三何ぞ用がござんすか。治助申し其今仰しやつた百兩は持つてムりまするか。正三持つて居る。治助近頃御無心ながら。お貸なされて下さりませぬか。正三何ほ程。治助百兩。正三皆か。治助ハイ。正三ムウ岩井風呂の治助といふて。立引がよいと云ふて皆立てるげな。同じ町内の事なり貸すは貸すが。此方も急に要るぞや。治助イヤモウ大坂に歸りましたら。直にお戻し申します。正三シテ此金は何にさつしやる。治助急な奉公人を取ましてムります。正三急な奉公人とは。治助ハイ親方も其所に居れます。とんと年四年一ヶ月とそこら残つて百兩。些と譯が有つて。途中で何も彼も了はねば成らぬ張合つてムります。正三可し吞込んだ。マアたてり

も好し笑顔が好い。奉公人が氣に入つたソレ百兩。ト渡す。治助是は早速忝うムります。正三ア、好い奉公人じや。是は繁昌しませう。代物はぐつと上じや。これ百兩貸した代りに。此奉公人が當つたら大庄で立さすぞや。治助夫は立ませいで。正三名は何と云ふの。治助富と申ます。正三何じや富々〇こりや當りませう。富出やつたら三切張込まざ成るまい。コレ知つた顔じやとて。ふる事は成らぬぞや。治助權兵衛殿ソレ百兩。親方忝い。したが黒犬に吠れてあくのたれかすじや。又眞鍮じやないか改めて見やう。正三そりや何故に。治助イヤ小判に懲りて居られます。たつた今も勘合の印て身請をしられうとして。正三ハア、今の先樂屋で金が見えぬと云ふて居たが。ト皆々數右衛門を指さし。數右衛門。萬力づつながるこなし。治。正ハ、ハ、ハ。親方こりや眞の小判じや。ほんの小判といふものは有難いものじや。受取の代りに年期手形此方に渡します。治助夫には及ばぬけれど。證文の出来るまで此方へ取つて置かう。ト紙入へ入れて。治助コレとみ。這樣事といふものは。皆立引と心意氣づくする事じや。此紙入は其方に渡す。とみアノ此紙入を。治助此紙入の中には其方の年期證文。金も少し入つてある。年期證文があるに依つて。モウ逃げて走つても大事無いと云ふやうな氣が微塵でも有つては。使ふてからが役に立たぬ。何處やらの男も。色にかゝつて走る根性では。大事の世話が無足になる。振捨て、大坂へ行かふといふのも。云ふに云れぬ譯が有る。悪い氣じや無いぞや。其方も勤め大事に金儲けしてくれるのも。其處に慙うじやと思ふ事が有る故に依つてじや。云はず語らずの約まる處は。大坂で譯が知れう。心意氣づくて其紙入を預けるのは。其方の心が見たいのじや。とみ成程隨に預りましてムんす。親方そんなら連立つていんで。請人呼に遣らうかい。治助爾うせう。正三おりやモウ去ましょ。治助御支度は何うムりますか。正三たつた今樂屋で雑用食ふて來ました。治助大込て旨うムりませう。正三飯は旨いが汁はからうムる。治助そんなら其處まで送りませう。〇權兵衛殿富を連れて徐々往て下され。はハテ好い勝て進ましたなう。治助を様でムります。ト云ひ、兩方へ入る。ト數右衛門衛門萬力思入して。數右萬力こりや如何せうぞ。萬力とんと一も取らず二も取らずといふものになつた。ト數右衛門尻裏げして行かんとする。萬力留めて。萬力コリヤなん何處へ行かんす。數右いつそ失策序に。富を引擔げ立退くのさ。萬力悪い。引捕まへられて死なすがいな目に逢ふものじや。數右何としたもので有らうぞ。萬力高が富が行く先は知れてある。どうなりとも目論見は出来る。急ぐ事は無いてや。數右をさめない。夫ばかりで無い二字吉光の九寸五分を持つて居る故。俺は夜が寝られぬ。ト云ふ所へ久七戻り様子聞いて居る。萬力サア俺も彼の二字吉光を。岩井風呂めを持つて居るので肝が潰れた。數右甚五右衛門に意趣有る故に。其方達に頼み二字吉光を盗ませたに依つて。到頭家は潰れる。悴茂兵衛に九寸五分を持せ歸參さすと吐すからは。盜賊の詮議も無けにや叶はぬ。萬力サア其處じやて。假令二字吉光を持つて置いて。貳千五百兩の折紙が無けにや。國へ持つて行く事成らぬ。其折紙持つてムりますか。數右ヲ、肌身離さず。ト懷中より出して見せる。萬力マア是て錠はおりにあるわ一目論見〇目論見たいものじやが。ト治助折紙を取らうとする。數右衛門ちやくと引奪り。萬力立廻りにて止まる。三人きつとなる。數右治助わりや今のを聞いたか。治助此方の耳から此方の耳へ抜通つた。數右百年目じや。萬力いつそ引裂いて了はしやれ。數右合點じや。治助ア、これ。萬力治助あの折紙が引裂けるが厭なら。とみを數右衛門様へ上ませい。數右身が女房に富をくれて。茂兵衛めが手を切り。證文取つて寄越せ。夫が厭なら是引裂いて。治助待つた待たうぞ。數右女房におこすか。治助サア。萬力證文書すか。治助サア。數右引裂かうか。三人サア。數。萬如何じや治助ホイ是非に及ばぬ。どうで今度俺が本心ぶちまいて聞かずにや成らぬ。マア可い。其折紙其方へ納めて置かぬせ。數右そうはちや。ト懷へ入れる。治助いかにも富と茂兵衛が縁をさつぱり斷して。證文取つて遣らう。萬力云ふないやい。其縁を斷さうと云ふも。持つて居る物をして遣らう爲て有らうがな。治助俺がどん底を打明さう

○二字吉光が有る上に。其折紙をしてやりなば。一角の金儲けと人間の慾心起り。あの茂兵衛めや富にまで。情らう見せるのは。皆立身が仕たさ故じや。今時に立引じや男づくじやのと。損の行く出入する白痴が有らうかい。まよう思ふて見たが可いわいの。萬力爾ふ云へばどうやら尤らしい。歌右治助汝が云ふが誠ならば富と茂兵衛が中を引裂くやうにするじやまで。治助引裂く段じやない。大きな金になる九寸五分。俺が工面て二人の奴等を逐退けるやうに爲て見せう。歌右面白。二人の奴等を引分け。富を身が手に入たらば。此折紙を渡してくれう。萬力微塵でも二人の奴等を庇護ふか。俺が心に合點の行かぬ事が。兎の毛で突いた程でも有るが最後。折紙は引裂くぞよ。治助そりや勝手次第。歌。萬必ず詞番ふたぞよ。ト久七最前より聞いて居る。久七其目代には此久七。治助わりや何時の間に來た。久七皆もくろんで國で盗んだ九寸五分を。刀屋に賣したのは親方○科をこな様に塗付けう爲私が思ひ付じや。是も主を大事と思ふ故。治助ハテ親切な事。久七是から内の立舉動。俺と萬の佐兵衛が見る目喚ぐ鼻。有る事無い事一々に數右衛門様へ注進する。爾う思はんせ。治助いつち好い目代じや。是れて心がさつぱりとする。細工は流々仕上を見やしやれ。歌右また言合す事も有り。治助俺も談合が有る。萬力ござれ。萬力往かう。コリヤ久七わりや跡に残つてコリヤナ。ト囁く。久七合點じや呑込んで居る。歌右サア二人共に。萬。治マアござりませ。ト三人這入る。久七一人残り居ると。芝居はねて見物どや〜と出る。中に角力取三人出る。ト久七呼懸け。久七わいら芝居見に來たか。十文龍久七か逢はぬな。久七ヲ、爾うして汝等。何も好い事も無いか。ひな川無いく。久七イヤ有るてや。コリヤわいらに金儲をさすわ。角力三人金儲けとは耳寄じや。何じや〜。久七咄して聞さう。アノ萬力知つて居るか。十文イヤ名は聞いて居るけれど。近年角力を廢たげなに依つて。顔は知らぬなアわいら。角力二人ヲ、俺等も見知らぬ。久七其萬力が親方に。數右衛門殿といふ侍が有る。其人が惚れて居らるゝ富といふお山に。團七の茂兵衛といふ奴が能く形遣になる。また外に數右衛門を付けて置く。大きなお山の有る事がある。茂兵衛めを養つて居る。

い。夫をけしてくれりと。諸事は萬力が呑込みて。樹葉のがから金が出るわ。夫を汝等に分けてやるのじや。三人そりや旨い。いかに團七の茂兵衛聞及んで居る。其奴をしまひさへすれば宜いか。久七ヲ、おりや直に去なや成らぬ。諸事萬力が呑込んで居る程に。茂兵衛めをしまふたりや。萬力が金親じやほどに。萬力にも氣に入つて。是から金貰ふやうにせい。十文そりや旨いわ。併し俺等はねつから顔を知らぬさかいて。とんと雲暗じやが。どんな面な奴じや。久七二人ながら顔を知らぬか。角二人ねつから知らぬ。久七そいつはつまらぬわい○ヲ、そしたら恠うせい。帷子で知れ。團七か着て居るのは團七縞といふ。赤い大きな立横縞じや。ひな川エ、團七の茂兵衛めといふ奴は團七縞か。久七ヲ、彼奴が外に其帷子着た者は無い。十文可し〜爾うして。其萬力殿はどんな和郎じや。久七萬力殿は是は藍の二重格子の帷子着て居るが爾うじや。十文そんなら萬力殿は藍の二重格子の帷子。茂兵衛めは團七縞じやの。汝等よう覺えて居いよ。角二人合點じや。久七おりや去ぬる程に。見付次第に直にやつて了へ。三人呑込んだ。久七首尾よう往たら大坂へふけて來い。やれ世話やの〜。ト花道へ這入る。ひな川コリヤ汝等隨分ぬかるなよ。團七縞着た奴が茂兵衛じや。十文夫よりは藍の二重格子に逢ふて。先へ金が貰ひたいはい。千間川何を吐すやら。團七縞さへしまふたら金儲けじや。わいらも隨分目を配れ。サア〜來い〜。ト皆々這入る。ト歌になり。跡ばたばたとして走出て。跡より萬力出て富を執へる。萬力してやつた。とみコリヤ何とするのじやぞいの。萬力何とするとは其方を尋ねて居たのじや。汝が先刻に治助に預つた紙入には。年期證文と少と許り金もあるじやあらう。夫を此方へおこせ。とみ滅相な。傍へ寄くさつたら聞く事じやないぞや。萬力聞くの聞かぬのと面倒な。ト懷より紙入を引出し。是を此方におこせ。とみイヤ〜爾うは成らぬ。ト競合ふ内草井戸の中へ取落す。萬力南無三寶井戸へ落しをつた。とみ大事の紙入井戸へ落した。治助さん〜。ト云ひ〜這入る。萬力ア、これ〜取つて遣る〜。聴しげんさいめじや。可いは濡れても水じや。證文は證文。金が沈まねば可いが。ト云ひ〜裸になり井戸へ這入る。

川九おじやいなう／＼。ト茂兵衛を引摺出る。茂兵衛サア／＼其様にする事は無いわい。川九よう後にやらうとぬつべりこつべり欺したナア。拾八貫七百廿四文難波新地の拂かけた錢も取らぬ渡せ。茂兵衛ふ云ふたとて。無い物は如何も。川九無いて済むかいやい。ト頬かまちを撲る。茂兵衛うぬぶつたぞよ。川九ヲ、汝は強しおりや弱い。死身になつて。懸合ふのじやが。其面かまちは何じや。其目玉は何じや。わりや俺を殺すか。ヲ、怖々。錢拂ふて置いて殺せ大騙子め。ト蹠飛す。茂兵衛思入有つて。茂兵衛は運の好い奴じや。昨夜か今朝なら直にいがめて息の根を止めるけれど。些と仔細が有つて。どの様にしても抵抗もせぬ。如何なと腹の癒るやうに。勝手次第にせい抵抗はせぬ。川九イヤして貰ひたいな。拾八貫の上茶屋の拂を踏んで。色拂さへ能うせぬ形をして。手向が成るか成らぬか。成るならして見いやい。コリヤ茂兵衛よ。おのりや此方の内で飲んだり肴喰ふたり。此類桁へ喰ふたか。但し此方の類桁へ喰ふたか。ト茂兵衛を打擲する。茂兵衛イヤモウ如何さつしやつたとて。かつたがふせうじや。どうなりと腹の癒るやうにしや。川九ヲ、爲いては。ト川九茂兵衛が帯解いて着物脱がす。茂兵衛裸にて坐り。茂兵衛どうなりと。川九十八貫のかたに是を剝いてこますが當分の蟲やしなひ。茂兵衛どうなりと。どのやうに爲つしやつても。手ざしはせぬと云ふてからは些とも手ざしはせぬ。其様に利強う云ふたものじやない。川九何が利強い。十八貫七百廿四文の處へ。帷子一枚取つてこますが何て利強い。ア、大盗人めが。ト散々に踏み。帯帷子たくり這入る。茂兵衛マア裸では去れず。コリヤマア如何したもので有らう。ト思案の内とみ走出て。とみヤア茂兵衛さん爰に居やしやんしたか。方々尋ねて居たわいな。茂兵衛とみか。とみお前の此形は。茂兵衛新地の川九が來て。剝いて去んだ。とみめつさうな裸で済むかいな。茂兵衛済まいでも着る物が無いもの。トとみ最前萬力が脱いで捨て置いた帷子を見て。とみ幸ひ好い物がある。是着やしやんせいなア。ト帷子を着せて帯さす。茂兵衛とみ俺が先刻に其方に云ふた事。段々仔細の有る事じや。とみ共謀子も聞いたわいなア。これわしや。隣の岩井風呂へ仕替に行くぞへ。茂兵衛サア何と云ふか。

とみイ、エイナア岩井風呂へ仕替に行く。モウ極めたわいなア。茂兵衛りやマアほんの事か。とみなんの嘘を吐こそいなア。金も渡して有つたわいなア。茂兵衛そんなら恚うじや往たらば。トとみに囁く。ト治助出て。治助二人共何咄しする。とみ茂兵衛、ト悔りして兩方へ退く。治助茂兵衛約束が違ふと。コリヤ鯉かきじやぞ。ト七首を見せる。茂兵衛心得ました。治助帳場の仕切はまだか。茂兵衛もう一遍引合すばかり。兵助早う了ふておじや。茂兵衛往て參じます。ト這入る。治助そんなら先へ去ぬるぞや。とみコレ茂兵衛さん。ト行かうとするを留めて。治助ハテ扱懸て茂兵衛も大坂へ來るわいやい。とみアイ／＼申し旦那様。ひよんな事がムんす。大事の／＼紙入をア、井戸へ。治助落しても大事無い。とみ大事ないとはへ。治助誠の證文は爰にある。ト懐より取出し見せる。とみエ、。治助奉公人の氣を引いて見る。是がほんの根ざらへと云ふものじや。ト治助とみ井戸を覗き。治助いかい白痴の〇とみ來し。とみアイ。ト向へ手を引いて這入る。ト歌になる。井戸より萬力紙入を口に啣へぬつと上り。萬力井戸がへはそうなかつたが扱も寒い事じや。したがすつしりと重たい。拾兩許り在しますと覺えたり。ト押載き。何より證文を數右衛様へ上まして。ト紙入あけると瓦のわれ出る。中をいろ／＼探し。證文出る。ヨこりや竹田の番附じや。治助めがこりや一番やり上つたな〇エ、忌々しい。色々の事に寒い目する。俺が脱いて置いて置いた帷子が。トいろ／＼尋ねる處へ川九。茂兵衛の帯と帷子を擔げ持出る。川九是は／＼萬力さんじやないか。萬力川九か。川九其形は何じや。萬力其邊に俺が帷子は無いか見てくれ。川九イ、ヤ無いぞや。萬力爰にあつたが面妖な。トいろ／＼尋ねて。川九汝が持つて居る帷子俺に貸してくれ。川九滅相なコリヤ金のかたに取つたのじや。萬力何で有らうと貸してくれ。川九デモ是をお前に貸すと汗だらけになつて直打が下る。廢しにせう／＼。萬力エ、汚い奴じや。ト引奪り着る。川九是は迷惑。萬力俺が借つた其代りに。明日こんな帷子五ツも六ツも持つて往てやる。川九そんならモウ私は歸ります。コレ萬力さん。明日帷子五ツ持つてお出でへ。ほんまに持つてお出でへ。萬力聒しい云ふな。明日立に行く

わ。川九必ず明日持つてお出でや待つて居るぞへ。ト云ひく這入る。萬力どうやら見たやうな綺じやが。トばたばたとして茂兵衛出て。茂兵衛治助様へ是はしたり。先へ去れたか知らぬ。何卒とみに逢たいものじやが。萬力ア、うぬが居つては何や彼や邪魔になるに依つていつそ。ト割木にて叩き懸るのを留めて。茂兵衛人に抵抗はせぬと誓言立たが。殺される事はマア成るまい。ト少し立ある内。以前の角力取三人出て。ひなソリヤ團七綺じや。ト釜の沸湯を萬力にかける。十文合點じや。ト依つて萬力をくらはす。萬力コリヤ何とする。ひな何とするとは猪小才な。十文團七綺め。ト叩き据多十文龍馬乗になる。茂兵衛いらが關ふ事じやない。ひなサアく可んす。藍の二重格子の帷子が目印じや。お前は高見から見とござりませ。十文イヤ團七綺め。うぬをくくと大抵探した事じやない。ト萬力起上り物を云はうとするを。十文何處へく。もう是が往生じや。ト皆々寄つて叩く。茂兵衛ムン〇そんなら團七綺を。十文コレ氣遣ひさんすな。とみは駕籠に乘せて大坂へ大道筋を。茂兵衛大坂へか。三人コレ萬力さん。萬力ヤア。三人何を。ト石にて天窗を割る。三人ぼつかげさんせ。茂兵衛合點じや。ト尻塞げして向ふへ走り這入る。

幕

第二 段

岩井風呂の場 並木正三内の場

造り物二重舞臺。向ふ惣障子。西の出へ出屋體格子。東の門口岩井風呂といふ暖簾掛け行燈掛けてある。お枕香して居る。佐兵衛腰掛けて居る。幕開く。

お棍マアく其様に云はずとも可いわいなア。佐兵衛イヤく大抵憎い奴じやない。廻し仲間て云合して。一度がてう懲したが可いてや。お棍何ぼう爾う云しやつても。主と家來との事じやに依つて負うちじや。佐兵衛ソリヤ主と家來との事じやに依つて。負うちじやと思ふて。そうくが詫言しに行きました。今年はねり物も無し。祭りも寂しいに依つて。廻しが云合せて俄に出た。そりや尤も彼處な家の事が缺けたといふもの。あれ程奉公人の揃ふてある家で。祭りの晩にさし込はなし。一夜さやなど俄したとて。アノ後家めが其様に云ふ事も無い。お棍それ其様に悪たい云ふに依つて。親方も意地で腹立てるのじや。佐兵衛さればいなア。モウ當座に呵つて済む事じや。大勢の廻しが一ツになつて。詫言しに往たれば。わいらは如何して来た。おだてに来たか何のと吐す。ほんに今些と拍子が好いと思ふて。あの様なひどいつめの長い後家めは無い。お棍サアもう可い。濟んだ事なら云はぬが可いわいなウ。久七アノ跡でムります。お棍ライく先刻に貰入おこせと云ふて来たが。持つて往て下さつたか。久七アイ持つて參りました。佐兵衛此間は難波新地でえらうたてるげな。佐兵衛何處で聞いた。久七床の善兵衛が今日云ふて居た。佐兵衛イヤ爰の旦那はナ。お棍此方は奥に。佐兵衛、今のを焚付ける異見じやな。久七イヤモウ大抵し太い者じやない。佐兵衛悪い呑込じやわいな。アノ破落戸に引付いて居て。金になる數右衛門様の方へ行とむなるといふは。因果な事じやナア。お棍イヤモウそれで此間から。折檻やら異見やらであへるわいな。佐兵衛いらも茂兵衛は大抵世話した事じやないが。大の破落戸じやない。先度も京へ上ると吐して。俺に錢四百借つてずいじや。彼奴こきむくつても取らに措かぬ。久七わりや又新地へ引合したじやないか。其錢もやらぬげな。佐兵衛イヤモウうそごうたのわいた事じやない。したが早う方が付いたら可らう。久七今夜は今のを連まして来て。めつきしやつきして了ふたが可い。佐兵衛サア俺も其心て云ふて置いた。追付ござるじや有らう。お棍コレ寢衣の包持つて往て下され。久七ハイくト。包を取る。お棍揚にならぬかいの。久七イヤくあの客は何ぼでも揚かふ客じやない。其癖内はよいげな。一度がぜう早うかつてこます。佐兵衛久七何處へもさし込はなかつたか。久七ヲ、河さくがざわくして有つた。佐兵衛オツト往てこます。久七連立つて往て来い。ト云ひく這入る。ト相方になりお棍表を見て。お棍旦那殿もう誰もごんせぬ。トとみ泣くく奥より出る。治助莫益提げ出て。治助今奥て云ふた通りじや。何を云ふも彼を云ふも皆男の爲じや。其方が

愛相盡されるやうに云さへすりや。男といふ者は思ひ断の好いものじやてや。とみサア其思ひ断のよいのが。猶悪しうムんすわいなア。お棍コレ／＼大きな聲して泣くと。向ひの足代屋へ聞える。京扇屋のお松さんも。表に涼んで、あつた。小さい聲さんせいなう。治助コレよう聞きや。其方を俺が抱へたも。強ち商ひばかりじやない。茂兵衛を連れて戻るのに。あれがせいも有るまいし。短氣な心が出ては大切な詮義の邪魔になるに依つて。出した百兩はおりや捨物にして居る。因果のつくばいといふは。彼の二字吉光の折紙をば。數右衛門が持つて居るを見たに依つて。引取らまえうとすりや折紙を破りに懸る。あれが無うては二字吉光を持つて居ても歸參の種には成らぬ。とつゝおいつの思案の中。二人が中を裂いて。とみを呉れるならば折紙を遣らう。さも無くては引裂くぞと云ふを幸ひ。ぐつと敵役になつて。いかにも二人の奴等が伸を引裂いてやらう。二字吉光は俺がのにして。褒美を貰ふ工面じやの。何の彼のと云廻して。兎角折紙を疵の付けぬやうに。すつくりと取つて了ふたら。跡は如何せうとまゝじや。お棍あの佐兵衛久七は數右衛門の目代になつて。何から何まで注進するに依つて。一向あの短氣な茂兵衛殿には云れぬ。治助それぞれ茂兵衛に云ふと。直に數右衛門に取つてかゝる。爾うすると折紙を引裂くと。未代埋木で朽果てる。モウ毎日／＼。如何する／＼と突くやうに云をる。俺もやけの勘八で跡の月から敵役を仕込んで。今日此頃は茂兵衛に逢さぬやうにして。俺も此方へ寄せぬやうにするが。茂兵衛も今は氣がもやついて堪るまい。お棍爾うして今朝茂兵衛殿へ文やらんしたか。とみアイ。お棍何といふてやらんした。とみ泣じやくりして。とみとても添れぬ事じやほどに。わしが事は思ひ断つて下さんせ。お棍よし／＼。とみわしや又出世じやさかいて。數右衛門様の方へ行ます。もう再び顔は見ませぬ。文もおこして下さんすなど。つゝとモウ。ト膝を捻めて泣く。治助。お棍顔を見合してほりりとして。治助ヲ、よし／＼爾うじや／＼。夫でこそ男の爲じや。お棍爾うてムんす。何ぼう腹立さしても。爰が女の心中じや。折紙さへ取戻したら。俺は此方の人が吞込んでじやわいなう。治助爾うじや俺も敵役して居ても。一人では釘が

利かぬ。せんはう盡きて其方を取込んだのじや。今にてもひよつと茂兵衛が来て。顔を合すまいものでもない。其時にいひ教へた通り合點か。とみアイよう得心して居ます。わたしや死身になつて申します。ト泣く。治助爾うじや。一寸でも此事が知れると。數右衛門が折紙を破る。爾うすると生きても死んでもじやぞや。お棍目出たうなつたら。跡は私等が身に代へて女夫にする。治助せいでたまるものか。ト佐兵衛。茂兵衛を連れて来る。佐兵衛イヤ些と男の立引を知れやい。お棍サア門中で云はずと。内へ這入つて云ふたが可いわい。ト治助とみに目眊して奥に這入る。トとみじつと俯向き思入して後へ隠れる。お棍佐兵衛殿又話しう云ふのか。ヲ、茂兵衛殿ごんせ。茂兵衛ハイ此間はお目に懸りませぬ。床の方も彼方此方と忙しうて。エ、お見舞も申しませぬ。旦那殿は何處へござりました。お棍旦那殿は留守でござんす。茂兵衛留守かへ。此間三度まで參りましたなれど留守。とみは如何致しました。お棍とみかへ。茂兵衛ハイ。お棍とみは堺へ預けに遣りましてムんす。茂兵衛の何處へ參りました。お棍大治様の方へ遣ましてムんす。茂兵衛イエ／＼此間爾う仰しやつたに依つて。直に堺へ參りましたが大治には居ませぬ。お棍それでも預けたがナア。茂兵衛此中は京へ仕替に遣つたと。治助様が云ふてじや有つたに依つて。京へ登つて肝煎衆に聞けば。やつぱり内方に居ると云ふに。腹がもやくと。一體アノ富は其様に。彼方此方さして下さりませ。等は無奉公人じやが。治助さんにも此間から。どうやらあぢな受になつて。マア／＼何て有らうと。富に逢して下さりませ。お棍ハテ爰なおさん。何ぞ内に居る者を隠すやうな物の云様。堺へ遣つてあるに違ひは無いわいな。茂兵衛そんなら堺へやつてあるに違ひは無いかへ。お棍なんの嘘を吐こぞいな。茂兵衛其堺へ遣つてあるものが。今朝爰からじやといふて。町飛脚が富が文を如何して持つて來ました。お棍サアそれはナ。茂兵衛措しやりませ。此間から大抵もみなひもやうじやない。夫でも何とも云やせぬ。アイ大事の事が治助様に頼んであるに依つて。其治助様もみなひもや胸は早鐘突くやうなわい。治助さんか富か何方にても逢さへすりや可い。逢して下りませ。ト此内とみは茶碗にて酒

を飲みいろ／＼仕打あり。佐兵コリヤわりや爰へぐずりに来たか。茂兵イヤぐずりやせぬ。此文に付いて云たい事がある。有つて来たのじや。佐兵汝が云たい事云ふ手間で。四百の錢を戻せ。茂兵そこ處か。佐兵そこ處かとは騙子め。おのりや京へ行く時に。四百きりまいたのじやな。茂兵四百の錢はやるわい何にも云ふな。汝にはいかい世話になつた事覚えて居る。佐兵コリヤ／＼口あかさぬやうにせりふばしすな。其手じや往かぬ。マア四百の錢戻せ。ト執付くを立廻りにて見事に投げ。茂兵何を痛い目好んでするやうなものじや。佐兵うぬ投たぞよ。ト又かゝるを見えよく投げ。茂兵やかましい奴じや。佐兵うぬ何て投た／＼。ト掴みかゝるをお梶止めて。お梶コレ／＼近所へ聞えると外聞が悪い。向ひの足代屋は家主じや。茂兵衛も悪い。静かにして貰ひませうぞ。トをさめる内。茂兵衛とみを見付け。茂兵其處に居るは富じやないか。とみアイ。茂兵先刻にからわりやマア。ト行かうとするお梶隔てゝ居ると久七戻り。久七アイあとして。何じや茂兵衛か。佐兵衛何とした。佐兵錢をおこさぬのみならず投をつた。久七何て投た。お梶久七やかましい。何も云ふ事はない。富が云ふ事があるそうな黙つて聞きや。茂兵衛殿も富が傍へ寄ると怖がる。其處から云ふたが可いわいの。久七ヲ、傍へ寄る事は成らぬわ。茂兵とみ今朝おこしたコ、此文は。コリヤ退状じやが眞實退るか。眞實侍の方へ行くのか。此文はマア何の事じやぞやい。とみ茂兵衛さん。退状に何の事じやと。いふ退状が有るかいなう。もう此世では逢ませぬ顔は見まいと。心に鏡を下して置いたのに。まい／＼何しにごんした。茂兵わりやマアそりや本氣で云ふか。氣が違ひはせぬか。久七爰な奴は人の大事の奉公人を氣違ひにさらすか。とみ一體お前の身の上を。よく算用して見やしやんせ。假令私が女房にならうと云ふたとて。家が無うてから。とんと今迄は夢中で暮したが。よう思ふて見れば。數右衛門様の方へ行けば出世なり私が自由になる。お前に付いて居ては。何時しかじゆつない目をせにや成らぬ。是程知れた理窟は無いわいなア。茂兵ムウ其理窟が今日に見えたに依つて。夫でわりやゑりに付くのか。とみアイマア襟と云やゑり。何じやかう厄難じやわいな。茂兵エ、爾ういふ根性で

は無かつたがなア。何時の間に天魔が魅入れて。ト行かうとする。佐兵何じや血相變へて如何する。人の奉公人に手を懸たらたゞは置かぬぞよ。茂兵ヤイ夫で立つか。それで立つかいやい。とみア、立たうと轉けうと。退いたらモウ關ふ事は無いわいなア。茂兵關ふ事は無い。おのりや云ふた事覺えて居るか吐した事。とみ覺えて居る。よう覺えて居るけれど。それもモウ無茶苦茶じや。わしやモウ今が夜の明けたやうになつた。お前は私に係つて居やしやんしては。出世の妨げになる。美しう退いて了ふのが。兩方好しじやないかいな。トとみ始終憂ひの仕打。お梶俯向いて居る。佐久それ／＼。茂兵エ、儂をなア／＼。ト茂兵衛無念なるこなし。とみ憎からう／＼。退しなといふものは。どうで満ろくて往た事の無いものじや。憎いと云ふて短氣な事さんすと。お前の身の爲にならぬ。私ばかり死ぬる事は關はぬ。兎角お前の身が大事じや。千も萬も無い私氣は水臭うなつて有るぞへ。其水くさい者を。どうのかうのと思ふて下さんしたといふて詮無い事じや。腹は立さんすな。モ餘りかいの廻らぬので。ほつとしてとんと厭になつた。それで京じやの堺ぢやのと。嘔吐いて途はぬやうにしたのじや。とんと厭じや弗つり思ひ斷つて下さんせ。わしや又是から數右衛門様の方へ往て。些と榮耀して樂せにや成らぬわいなア。ト茂兵衛齒切を噛み無念がる。とみ俯向いて居て。手を額に當て泣かぬ顔する。久七何じや無念がるのは。物云つけるのか。汝も又お山にあのやうに云れても。へら／＼と臺詞したがる事も無い。大きな籠坊ではあるわい。佐兵イヤ又とみさんが云はんすが眞の事じや。昔は知らぬが。當世客を情人にするのが是近道じや。今は客の男が好うて。品が好うて金はくれて。世間の聞えがようて。親方は喜んで。ひがらはうれて。節季に手支へは無うて。好い事だらけじや。爰のならずを情人にすると。錢は無うて。たんはえらうて。無理は云ふて。身物は減して。客は落ちて。内は修羅燃して。節季にぎち／＼して。懸つた事は一ツも無い。今は前より町の旦那衆が。やつと男が好いてや。古金買に見せても知れた出入じや。夫を無念がるとは愚痴な奴じや。ヤイこりや四百戻してくれよ。ト茂兵衛腕巻りして。腕の入ほくろを見て思入。茂兵親仁様。

とんと思ひ断ましてムります。モ今迄よしない犬のやうな賣女めに欺されて。大切な詮義の事も。有やうは空吹く風でムりました。ト腕を見て泣く。とみを見て。儕故に今までの事思ひ出して見ると。腹が立つて如何も成らぬけれど。何云ふたとて馬の耳に風。蛙の面に水。蛙め蝦蟇め。モウふつ／＼と思ひ断つた。爾う思へ。トとみ一寸顔上げて俯向き。袖を咬緊り泣く。茂兵嬉しいか。嬉しかる。思ひ断つたからは再び顔も見やせぬ。○お梶様。治助様にお目に懸つて。御相談致したい事も有れど。此氣合じやに依つて。どうも大坂には得居ませぬ。直に京へ上つて。さらりと氣を抜いて参じます。此間から段々お世話様。歸りましてからお目に懸りませうと云ふて下さりませ。○コリヤ此後隠れる事は無い。うぢつかずとも歩け。儕がやうなのら犬に。拳一ツ當てやせぬわ。ヨウのら犬め。まだ人が手で咬まうかと怖かつて居るさうな。太い奴なう。ト出やうとする。久七コリヤも夫て可いか。トとらまへる。見事に投げる。佐兵コリヤ錢戻せ。トかゝる向ふへ投げ。茂兵治助様へ宜しう仰しやつて下さりませ。ト歌になる。茂兵衛情々と花道へ這入る。ト兩人こなし。久七アイタ、、、、。佐兵アイタ、、、、。うぬ投たなア。錢を戻して投げるなら投たが可い。錢を戻さずに投げるといふ事が有るか。大泥棒め。久七コリヤ團七はモウ去んだ。爰に居ぬわいやい。佐兵何じやモウ去んだか。久七オ、去んだ／＼。佐兵エ、卑怯な奴の。團七戻せ錢を戻せ。ト血相して追懸行かうとする。久七止めて。久七コリヤ佐兵衛追懸けるか。佐兵イ、ヤさし込に行く。ト這入る。久七俺も跡をとひに行く。コリヤ佐兵衛待ていやい／＼。ト這入る。是にて治助奥より出て。治助ヲ、出来た／＼。夫てこそ心中ものなれ。お梶わしやじつと落付いて居ても。氣の毒で／＼成ませなんだわいなア。とみ旦那様おえさん。ト大きに泣く。ハア、と大に泣き。積を發し目を見詰める。治助尤じや／＼。お梶コレ／＼積が發つたわいなう／＼。治助大事無い／＼。のらさぬやうにじつと抱まへて奥へ連れて往こ。嚙黒丸子出しや。お梶アイ。ト治助とみを抱へ。色々介錯して這入る。

造り物惣赤壁納戸口。西の方床の間。書物箱狂言本の箱など直し有る。門口に酒ばやし。酒ばしり壺。酌升樽類惣じて請酒屋の體。正三出るト。花道より茂兵衛思案しい／＼出づる。茂兵且那内方にござりまするか。正三オ、茂兵衛かよう來たの。サア／＼上りや。茂兵ハイ／＼。正三サアア上りやいなう。此間はすつきりと逢はぬ。岩井風呂へ行くか。茂兵ハイたつた今往て参りました。正三いかう目が血走つて。色が悪いが何とぞしたか。茂兵イ、エ何とも致しませぬ。私も今晩ちと叶わぬ用事で京へ上ります。正三モウ船があるまい。茂兵イツそ夜道をかけて参りませうと存じます。正三よく／＼急な用じやなう。茂兵夫に付まして。濱の親仁が今留守で。錢の出たのがムりませぬ。御無心ながら一兩日。四五百お貸なされて下さりませ。正三ヲ安い事じやドレ／＼。ト取つて來て。正三今こちのものが留守で。四百ほか出てないが是で可いか。茂兵ハイ／＼是で可うムります。ト男戻り。男申し會處へ参りましたが。髮結は居ませぬ。正三ア、翌とうから芝居へ往て相談がある。また間に合はぬエ、憎い奴。茂兵モシ大事ムりませずば私いたしませう。正三ほんになア御髮結が在る。したが京へ行くに大事無いか。茂兵かちをさんじますに依つて。四ツになつても夜中になつても大事ムりませぬ。正三それは忝い。コリヤ櫛箱持つて來いよ。男ハイ／＼。ト盥手拭櫛箱持つて出て。抽斗より砥石剃刀出し頭揉んで剃る。ト向ふより三五郎國太郎男箱提灯持出て。三五サアお這入。國太ア／＼おはいり。三五サア／＼。ト兩人這入り。兩人お見舞申上ります。男お出なされませ。角の芝居の三五郎さん國太郎さんが。お出なされませぬ。正三お出サア／＼ずつと／＼。國太お免しなされませ。ト上る。正三扱どうでムります。三五強い暑さでムります。正三イヤモ堪らぬでムります。内に居てさへ酷いのに。主達は舞臺で一向て有る。三五イヤモ一トしきりはくら

くら致します。まだ見物はよう参りますぞ。正三左様／＼。扱主達のお出は彼の役の事で有らう。どうぞ月見過時分に。

いつそ出さうかと思ふ相談じゃが。些とのふせうは怵へて貰はにや成らぬ。三五サアそれを申升る事でムります。一體狂言は名も變つて新物じゃけれど。する處は古手屋八郎兵衛が。しん柱のやうな物でムりますな。正三それ〜。三五其處でムります。マア此方の芝居で慶子さん一光さん歌七さん。是がお妻。八郎兵衛。彌兵衛の處で有りさうなものじゃが。其衆を措いて三五郎と國太郎とがしたら。見物の目どが違やせまいかと。其處ばかりが案じたものでムります。正三イヤ〜又那樣ものじやない。其處は見物も千差萬別じや。高が今して居る狂言が世話で。慶子大五郎とふんで。女房殺しをして居る。其上又着にとくると大五郎は使はれぬ。三五郎國太郎とくみと大五郎はつかはれぬ。三五郎國太郎とふんで。残りの衆が余の事すると目も變る事じや。第一華やかに有らうと思ふ。三五華やかなか存じませぬハ、ハ、ハ。正三イヤサ華やかなて。何でも三五郎國太郎と云ふ八郎兵衛なら可けれど。些といき替つて有る丈が氣味が悪いでムります。正三サどうな〜。國太ア、仕込んだ物じやに依つて。私が三五郎さんに殺されにやこたへられませぬ。正三サアそこで美しい國太郎を。ぐいと殺して了ふたら。見物が力落しやしよまいかの。三五イエ、もうア、狂言が込んで来ては。そこらではムりませぬ。しかも酷う殺さにや成らぬ。國太わたしや蘇枋で血塗れになつて死なうかと思ふが。正三そりや可い。爾うすりや氣が變つて強う可い。其方が可い。三五イヤ又狂言をのけて地で思ふて御覽じませ。あれ程に根氣を盡して言交した女子が。アノ臺詞の付やうに憎う云ふて突放したら。ほんにやれ〜釋迦でも殺さにやなりませぬ。あれ殺さにや餘り男が大馬鹿じや。ト此内茂兵衛我身に引較べいろ〜思入有り。國太私もあの子の臺詞付が。餘り憎いに依つて。して見ようかと思ふて。正三爾うじやわいの。一體歌右衛門にさす女郎の親方の役。彼奴を大抵憎う仕込んで置いた事じや無い。三五アリヤ惡色事師をやつたのじやないア。正三とんとしらすりじや。アノ寶物で喰付して置いて。女形をのぼせた心意氣がにくい趣向じやてや。

國太ア爾うしてアノ親方は。矢張女形を口説ますかへ。正三サア〜マア惚れて居るじや。それ三段目の小幕に。色事師が逢に来て〜。留守遣ふて逢さぬ所の。三五ハイ〜。正三アノ間はお前の役を随分阿呆らしうなけりや悪い。爾うして置いて女形の方からどつさり退文が行く。夫から慌て出して来た處が。女形が水臭い臭い事云ふて突放す。此間は親方はやつぱり奥に居て留守遣ふて好い氣味がつて居る。コリヤ歌七憎からうわいの。ト茂兵衛いろいる無念がる思入。三五わたしやいつそべいさんも岩さんも。殺さうかと存じます。正三イヤモ殺すからじやに依つて。そこら邊りを滅多殺が可い。國太アノ三五郎さん。お前は親の位牌の戒名か何やらして無念を怵へる事が有るがな。そりや如何さんす。三五イエ〜モウあゝなつて戒名所じやない。彼様所でぐいと殺さにや阿呆らしい。一體私が役は思案して見ると阿呆らしいてな。正三阿呆も〜ごくだうの天上さ。マア口明に寶物を盗まれ家を潰されて。お山に欺され親方にやられて。其お山を敵役に取れて突放され。いかさま這奴殺すばかりが性根じや。殺さにやいつそ人間の脈が無い。三五サア殺さにやたまられませぬ。國太そんならわたしや蘇枋襦袢で致しませう。三五マアそこは宜しうなされて下さりませ。國太イヤもうお暇申ませう。正三モウお歸りか。エ、東の座敷なら松風のくずでも上ませうもの。三、國ハイお暇申ませう。正三ようお出なされました。ト三五郎國太郎去ぬる。正三扱茂兵衛見たも。役者といふ者はけたいなものじや有らうかの。すつたのもじつたのと云ふて。いじろ〜。したが出さぬ内に狂言咄しを聞いたが何と如何じや。ト茂兵衛顔色變つて。向ふを睨み詰居る。正三きつと見て思案の體。じつと顔を見る。茂兵衛こなし有つて。茂兵衛お暇申ませう。トついと行かふとする。正三コレ〜茂兵衛。茂兵衛御用でムりますが。正三マア〜腰掛けや。茂兵ハイ。ト合方になる。正三茂兵衛吾儕の色は如何した。茂兵何をじやら〜仰しやります。正三イヤ向ひの如何した。茂兵イヤモウ退いて了ひましてムります。正三ムウ退いたか。茂兵ハイ。正三何時〜。茂兵イエ此間さつぱりと譯立まして。美しう了ひましてムります。正三ムウアノ美しう了ふたか。

茂兵衛ハイ。正三アノ美しうハ、ト苦笑ひして。正三美しう了ふたら可いが。おいらも覺えが有るが。常はどのやうに賢い者でも。悪洒落な者でも。色に凝つて來ると。とんと人に云れず愚痴に成るものじや。其方の身の上の事も。岩井風呂の治助に大概聞いたが。相應に米も取つた人じやげな。愚痴となりやんなや。どれ程の腹の立つ事でも。色事をいふものは心の取置やうで。其場をとんと離れて見ると何でも無い事じや。サアそれが色事の間にはねから見えぬ。酸いも甘いも知抜いて居る。俺が悪い事は云はぬ。色事で腹の立つ事が有るなら。夫なりに心をとんと入直して忘れてしまふて。跡で思ひ出して見や。らつしもない事で腹立てたと悔まにや成らぬ。それ／＼凝過ぎると歴々の身をしまふものじやといふ是は咄しじや。茂兵衛イヤモウお咄しは屹度心得て居ます。私が續は起りますと。目が血走つて有るに依つて。爾う仰しやります。イエ／＼もう今は色事の方は無してムります。正三イヤサア有はせまいけれど。咄して置いたら心得にもならうかと思ふて云ふたのじや。茂兵衛モウお暇申ませう。正三イヤ天窓御苦勞。茂兵衛ハイ四百借りて歸ります。正三ヲ、ようおじやつた。ト茂兵衛門口で手を組み徐々這入る。ト正三跡を見送り。正三どうも彼奴が顔はたゞの顔ではないが。若しお山め連れて京へても欠落するのじやないか。ア、それでは先度の百兩が又延びるが。ア、儘よ如何なとせい。ト納戸へ這入る。

返し

元の岩井風呂になり。踊三味線になると。障子屋體の内に。數右衛門折紙を破らうとするを。治助とみを圍ひ。佐兵衛。久七。お梶を取巻居る。

數右 今夜は絶體絶命。返答に依つて直に破つて了ふのじや。治助サア／＼とみを渡すまいと云ふにこそ。私が心底は佐兵衛久七がよう知つて居る。こなさんに注進したて有らうがな。佐兵衛、皆云ふて遣つたに依つて。念押しにごさつたのじや。お梶とみを渡さうと云ふて居るのに。短氣な事さしやんすな。數右折紙は此方の命すく。滅多に破

らぬサア富を渡せ。治助サア。皆々サア／＼／＼。治助それ。トとみを渡す。數右衛門引取つて。數右衛門に受取つた。治助茂兵衛は京へ上して仕廻ふ。富は其方へ渡す。大方折紙を渡しても可さうなものじやなア。佐兵衛イヤ治助さん。先刻に茂兵衛が並木へ這入つたを俺がよう見て置いた。何の今頃京へ上るもので。舞戻るは定のもの。こなさんが茂兵衛と逢ふて。篤りと彼方の味方で無い事を旦那へ見せさへすりや。夫で譯は立つ喃久七。久七ヲ、兎角こなさんの存念が合點が行かぬ。治助いつち安い事じや。今でも茂兵衛めが來たら。俺が味方か。味方で無いかを見せませう。其上で折紙を買ひますぞや。數右ソリヤ其時の事。ト此内茂兵衛向ふより。血相して出て門口より。茂兵衛治助さん内にか。久七ソリヤ來たわ。數右詞番ふたぞよ。トとみを連れて數右衛門内へ這入る。茂兵衛治助さん内にか。治助留守じや。茂兵衛爾う云ふは治助さんじやないか。ト内へ這入り。茂兵衛治助さん氣の悪い。内に居て留守つかふと云ふ事が有るものか。何程私が怖いもので。お梶茂兵衛殿。こなさん留守じやと云ふに。ずか／＼と内へ這入り不遠慮千萬。茂兵衛内に居て留守遣はしやるに依つて這入つたのじや。鬼の女郎にや鬼神がなるとこなさんを。お梶ムウ鬼の女房にや鬼神がなると云しやんすからは。そんなら此人の人は鬼かへ。茂兵衛アイ鬼でムんす鬼じや。お梶此方はなう。ト競合ふ。治助サア可い／＼。汝が何にも云ふ事は無い。其方へ寄つて居い。お梶好い加減な事云ふたが可い。茂兵衛佐兵衛汝に借つた四百の錢戻す程に受取れ。ト顔へ打付ける。佐兵衛アイタ、タ、タ。久七わりや何て投打する。ト兩人取つて蒐るを見事に投げ。茂兵衛あがつたら引裂くぞ。治助茂兵衛わりや此方の内へ暴行に來たのか。茂兵衛何で暴行に來るもので。長々お世話になつた其禮を云はうと思ふて來たのでござんす。治助何じや禮云ひに來た。茂兵衛アイ禮云に來た。治助さん一寸富に逢して下さんせ。治助とみは留守じや。茂兵衛コレ那樣古い事云はずと。一寸逢して下さんせ。一寸逢ふて云たい事が有る。隙は取らぬ一寸。ト云ふ處を髻擱んで引付ける。障子の内に富を縛り。猿轡を締め數右衛門見て居る。治助ヤイ爰な恩知らずめ。うぬは何處の牛の骨やら馬の骨やら知れぬ奴を。大治

が頼むといふ臺詞にまひ上つて連れて戻つてから。彼處此處の日手間に遣つても舞戻つて。喰ひ潰されたも並や大抵の事じや無い。俺が無けりや。うぬ乞食する奴じや。其義理を些となりて思ひさらすなら。富には手も指さぬ筈じや。コリヤ百兩といふ大まいの金出して抱へた奉公人じやぞよ。其奉公人をうぬ等が慰み物にする事はマア成らぬわい。ト蹴飛す。數右衛門折紙を見せて頷く。茂兵衛ソリヤもうこんな様の云ふのは重々尤じや。尤は尤じやが其筈で無い。此方其約束じや無いと云や云ふもの。是も益に立たぬ事じや。治助様が情じや慈悲じや。成らう事なら僅六二目逢して下さんせ。治助成らぬ。茂兵衛サア〜成るまい。其處を何卒逢はして下さんせ。これ二人の衆。何卒可いやうに云ふて逢して下され。其代りには貴様達が先刻の仕返しは。俺を如何なりとして逢して下され〜。ト泣く。佐兵衛、とこぼえる程逢たぐば逢して遣らう。マア仕返しから先へして逢して遣らうわい。何じや〜。久七ヲ俺も仕返して置いてから逢して遣らうわい。ト蹴倒す。茂兵衛とみに逢さへすりや。如何なつても大事無い。どのやうな目になりとしや。佐。久ヲ、どのやうになりせうわい〜。ト二人蹴飛す。いろ〜喰はす治助止めて。治助マアマア汝等は何する。若し目でもまふたら俺が難儀ぢや。皆片脇へ寄つて居い〜。ト呵付けて。治助や茂兵衛。悪い呑込じや。所詮今夜は富に逢しはせぬ。又家捜ししたとて何の富を内に置いて堪るものか。マア去ね。何て有らうと儘よ去ねと云ふたら去ね。茂兵衛治助殿。治助。わりや俺をやり事に懸たぞよ。治助何じややり事にかけた。可いわ爾う云や何も彼もぶちまいて聞さう。曠よ其九寸五分持つて来い。お棍アイ〜。ト持つて出る。治助コレ覺えて居るか二字吉光。高が慪うじや。俺は數右衛門殿に頼まれて。汝と富とが仲を引裂いて金にするのぢや〇なんじや〜。此面何じや。此二字吉光を持つて居るを幸ひに。あまう大治めを太郎に懸け。汝を曳摺つて戻つたは。あの奉公人を使へば折紙が出ると汝を逐ひまくつて。湊川の家中へ俺が持つて往て金にする氣じや。ようしたものか。富めがばり〜する程賣つた間は黙つて置く。うぬにかゝつて買やんだに依つて。筋りと因果を云含めて。モウ數右衛門殿の方へ遣

つて了ふた。是で又金を取る。慪うばれかゝるからは泣いても笑ふても叶はぬ程に。早う京へなりと上りさらせ大扉鹿め。ト蹴倒す。數右今こそ心底見えた。約束の折紙。お棍こちの人折紙が手に入つた〜。治助受取つたか。お棍受取ました。治助エ、忝い。茂助治助覺悟せい。ト九寸五分にて治助が腹を突く。治助コリヤ待て言譯が有る。茂兵衛何を憚しト扶る。治助苦しむ。お棍ヤアこちの人を突いたわいなア。ト泣く。皆々憫りして。佐兵衛ヤア人殺じや〜。ト數右衛門。佐兵衛。久七慌て冒くト棒つき大勢出て人殺しじや〜と云ふ。ト茂兵衛そこら邊りを追廻す。皆々逃げる。お棍。治助を介抱して奥へ這入る。茂兵衛數右衛門め富をうぬ。ト茂兵衛奥へ行かうとする。ト數右衛門出て切つてかゝる。立廻りあつて肩口を斬る。數右衛門逃げて這入る。茂兵衛おわへ這入る。花道ばた〜にて本舞臺へ戻る。跡より佐兵衛。久七ついて出ている〜立。佐兵衛人殺じや〜。ト後より取付く。立廻り有つて見事に突く。是より久七かゝるを又突殺して。是より彼方へ行かうとする。ト大勢ソリヤと云ふ。詮方盡きて自害して。いろ〜苦むも大勢出て。大勢ソリヤ死おつた。叩伏せい〜。ト皆々叩伏せうと意しう云ふ。正三棒を持つて走り出て。正三待て〜鹿相すな〇エ、先刻にどうでろくな事じや有るまいと思ふたが。逸つた事したなア。と茂兵衛様死なしやんしたかいなう。ト泣く。茂兵衛とみを見て色々苦む。正三に顔にて水くれといふこなし。正三何じや水くれいと云ふのか。コリヤ水飲して殺しては跡が難かしい。エ、も一足遅かつた。委細の様子は治助のお内儀に聞いたに依つて。其數右衛門といふ奴は。ぐる〜巻にして置いた。氣遣ひするなよ。ト茂兵衛拜む。大勢正三様。こりやマア如何致しませう。正三エ、残念な。餘處の町で有つたら。直に一夜漬に拵えうもの。マア町の衆。大勢何てムります。正三面々の事を滿更俺が作られませまい。マア此儘で御檢使を願はう。委細の事は御上の御裁許次第。先づ〜此場はお立〜。ト打出し。

宿無團七時雨傘終

五大力戀緘

五大力戀緘

狂言作者 並 木 五 瓶

編 中 人 名

- 一 千島 萬太郎
- 一 千島家の侍 正平太
- 一 笹野 三五兵衛
- 一 藝子 菊野
- 一 千島家の侍 宅右衛門
- 一 勝間 源五兵衛
- 一 牽頭 作二
- 一 同 早枝
- 一 同 伴右衛門
- 一 若黨 八左衛門
- 一 廻し 男彌助
- 一 同 早枝
- 一 同 喜平太
- 一 富田屋 喜兵衛
- 一 仲居 おちよ
- 一 其の他
- 一 同 伊平太
- 一 家主 仁兵衛
- 一 富田屋 お市

第 一 段

造り物平舞臺一面に格子。真中に大きな入口内富田屋といふ暖簾掛けあり。西の方客露次。右露次口に。市左衛門着付袴にて手燭を持ち辭宜してゐる。萬太郎着付羽織愚敷若殿の拵へ。次に三五兵衛。源五兵衛。宅右衛門。其外左十郎。伴右衛門。伊平太着付袴羽織藏屋敷侍の拵へにて立てゐる。是に一人ツ、奴。紋付の灯提持付てゐる。是は富田屋の露次へ這入かけてゐる見え。幕の内にて芝居の矢倉太鼓しころの鳴もの幕開く。

市左衛門ながらお出下され升る段有難う存する。是からお通り遊ばされませふ。三五市左衛門御案内申すか。市左へイヘイ。三五萬太郎様まづ。萬本皆来い。案内せい。ト市左衛門先へ案内して這入る。萬太郎ツイト這入る。

三五兵衛皆々に一寸目禮して。三五源五兵衛何れも。源。皆々まづく。ト同じく目禮する。三五兵衛先へ段々思入有て露次へ這入。矢張家來連て這入ると。橋懸より肴屋肴籠を抱へて。忙しうに走り出て。肴屋をらゐもの忘れて置て。既ての事に料理人に目玉貰ふとした。トこんな事いひく。門口へは入ると。露次より奴灯燈を持ち残らず出て來て。奴。是から緩りと寢て呉ふ。奴△夫がよい。トいひながら奴皆々入口へはいる。露次の内よりしめる。

返 止

右の道具門口より西は引取る。東は觀音開きにて。西手の門口を橋懸りの切幕の所へ行やうにして。門口の出ばいりになる。

造物二重舞臺。三間の間より上手の方は見付障子。此三間の間の所に見切の唐紙。是は縦張り。下手の方は臺所の見え。膳組へつゝい。欄間の所に獻立の書付張て有。能所に大きな八方。都て臺所中の間の見え。方々に丸行燈。右の中間には藝子おとく。早枝。舞子おしか。おかの。此人數指すまふかき引のやうな事をして遊んでゐる。臺所には料理人喜兵衛金杓子を持ち立てゐる。息子彌吉。手代武助そこらを手傳ふてゐる。此見え騒ぎ歌にて道具納る。

喜兵衛吸物の下もつと焚て貰ふ。肴屋オツトせふ。料理鳥治へ往て最前の鶴を早ふ持て來いといふて下んせ。男合點じやく。ト橋懸りの方より門口へ出て行く。是は臺所の模様なり。奥より仲居おとわおちよ出て來て。とわサアサアお徳さん早枝さん。どなたもお出なされたぞへ。ちよおかのさんもお鹿さんもお鹿さん。一所に座敷へお出や。と。早もふ皆お揃ひなされたかへ。とわこちの旦那衆は昔ちじや程に。早ふ揃へていひへ。とくさうして菊野様はどこへゐてじや。しよ。お徳さんへ依は面白けれど。左十郎の御座り。お徳さんへお出なされたかへ。とわこちの旦那衆は昔ちじや程に。早ふ揃へていひへ。とくさうして菊野様はどこへゐてじや。

て。お市おとわお千代どこに居やるぞいのか。ト皆々を見て二人共爰に居やるかいのか。早枝様おとく様ちやつと揃へていてお呉ひな。ト此内早枝おとく鏡袋で顔直してゐる。早枝サアそふ思ふて私もおとく様も顔直してゐるわいなア。とく菊野様も一所に座敷へいかふかいナア。菊野あいそりや今行くけれど。わしや此狀が北まで持て居て貰ひたい。彌助呼んでおくれんか。ト武助臺所にて。是聞て仕切の唐紙を開けて。武助彌助どんは芝居を見て來るといふて出てござりました。彌吉戻られたらお前に知らせませうかへ。菊野エ、ずつともう急な用があるのに。爰に居てくれだがい。おとわどのお前を頼んで置程に。戻られたら此狀渡しておくれへ。ちよアイ。私が急度渡すわいなア。ト狀を受取る。菊野急な用じや程に間違はぬやうに早ふじやと云ふてお呉。頼んだぞへ。とわサア皆早ふ座敷へ來ておくれいなア。菊野アイ。サア皆早ふお出んか。とく菊野様お前顔ふきんかへ。菊野私や此形でよいわへ。お市どうでも北の首様じや。素地でも目立わいな。菊野こちや一向おだてゝじや。と。ちサアくいておくれ。ト騒ぎ奥へ行く。菊野早枝打連れ。おとくお鹿おかのとおとわお千代皆這入る。お市喜兵衛お吸物の引替はよいかや。喜兵はいようござりまする。トいふ内獻立張紙を見て。お市御膳迄の間に。お屋敷から來た泡盛を出せと仰つたぞや。武助ハイそりやかんばへ云付て置ました。時にお供の方は利屈にしてくれいと仰つてゝムりまする。お市夫やいつものやうにして置きやいのふ。武助今夜のはお振舞並じやに依て。ちつと氣をして呉いと仰つてゝムり升る。喜兵とつともう今は利屈で善いやうな事もあり。又悪い事もありじや。ト天窓を掻く。お市夫じやと云ふて又聒しいと悪い。武助可いやうにして置きや。ト此内奥にて手を拍く。お市それお手が鳴る。子供は居やらぬかいなう。ハイ、く。ト返事し乍ら這入る。躍り三味線にて。廻しの彌助橋懸りより這入るト。武助彌助殿戻らんしたか。彌助芝居は先刻に果たけれど。太左衛門橋の彌吉に逢ふて。夫て隙がいました。武助菊野様が用があると云ふてじや有つた。おとわ殿に聞いて上ぎよ。おとわ殿。ト呼び奥よりおちよ出て。ちよアイ。ヲ、彌助殿。最前から

待つて居た。菊野様云ふてじや事には。此状見て太儀ながら。北へ往んで来て欲しいと云ふてじや有つたぞへ。ト状を渡す。彌助其りやお世話でムりました。此状を見て太儀ながら北へ往んで来て呉れいとは。あの子にくさしの日は無し。何じや知らぬ。ト合點行かぬながら状を開き。向ふて持つて出て。今夜はいぬる程に。何となりとも場合をして買ふて下んせや。屹度く頼むぞへ。彌助殿菊野。又何ぞ痾癖に障つたか知らぬ。ト状を懐へ入れておとわ様。私は北へ急に往んで参じませうさかい。菊野様に此通り云ふてお呉なされませ。ちよそりやお前御苦勞じやな。爾んなら往んで上げてお呉へ。ト云ひく。這入る。武助彌助殿。ア、今から北へは太儀なものじやのう。彌助イエ爾うもござりませぬ。したが更けぬ内どうぞ。どれ往て来う。ト橋懸りの方へ行かけ。北へ往て来る程の間に離地へ往てこまざう。ト門口へ出て行く。始終躍り三味線。奥は大騒ぎ手を拍く。彌吉臺所へ出て。彌吉コレく喜兵衛。左十様のお好み例の辛蛸汁じや。早う拵へてたも。喜兵衛南無三吸物の工面が違ふた。よいわ仕掛けて置いたのは跡へ廻せ。ト庭の方を見て。喜兵衛龍助急に蛸洗ろてたも。ドレ拵へうか。ト云ひく。料理場の方へ這入る。彌助武助も共に附いて這入る。伴右衛門。左十郎。伊平太三人お市菊野連れ出る。三人兩人共に一寸来やれく。ト向ふへ出つる。菊野お前様方は私への用と仰しやるは。先度からお市様に聞いた三五兵衛様の事かへ。お市菊野様あなた方も色々仰しやる事じや程に。何卒よいやうに返事してお呉いなア。菊野サアお前が段々云ふてじや事なれば。アイと云たいけれど。如何も成らぬ譯が有るわいな。伊平如何も成らぬ譯と云ふは。外に情人が有ると云ふのか。伴右北の新地で鶯りと聞合した所に。其方が深間は無いとの事。今時の鶯子に似合はぬ甚だかたひ物じやと聞及んで居るさ。お市菊野様あの通りじやわいな。河治や三丸やて鶯りと聞いてござるさかい嘘は吐れぬ。お前の返事が無いに依つて。何うやら私が捨て置くやうて済ぬわいなア。外に何ういふ譯が有るか知らぬけれど。夫は夫は是と成さうな事じやぞへ。ト此間に菊野思入あり。菊野サア此事は甚だ事有つて。云々と思へども。云々三五兵衛様へ。お市様がお市様が済まぬやうな口振。夫じやに依つて云々程に。必ずばつとならぬやうにしてお呉れへ。お市其りや私が存込んで居る。爾うしてお前のきつしり様の名は何と云ふへ。三人早う聞しをれいやい。菊野サア其お方は千島のお屋敷。勝間源五兵衛様でムんすわいなア。替々ヤアく。ト思入有つて。菊野毎度お前様方と一座しても。一寸も見付られぬやうにするのは。大體氣の揉める事じやないわいなア。左十孰れもお聞なされ。千島家の御家老勝間源次兵衛殿の御子息毛虫どの。伴右日頃から四角四面な源五兵衛殿。斯様な遊所へなど参るやうな仁ては無いが。愚しい萬太郎様に世話の儀を御覽に入れん爲。斯様な所へも折々の體散。伊平左様でござる。チンフンカンで我々も異見なざる源五兵衛殿。菊野其偏屈な頑固しい氣丁面な御方が。一向可笑しいものじやわいなア。ト恥しきこなし。三人顔見合せ。三人興が醒める。ト奥よりおとわ出て。とわ申しくあなた方が見えぬと云ふて萬太郎様がお尋ね。ちやつとお出なされませいな。左十萬太郎様のお召なされば參らば成るまい。此様子三五兵衛殿にナ。伊平そりや間を見合せての事に致さう。サアくお出なされませ。ト合方になり。三人奥に這入る。お市菊野を向ふに連立ち。お市菊野様。何ぼうお前が誠らしう云しやんしても。如何も私や合點が行かぬ。源五兵衛様はお屋敷中でも物堅いとの噂。此方へお出なされても。終度新造様一人お呼なされた事も無い。其上彼方の奥様といふは。お國のお血筋屹度したお家柄。御祝言は無けれど。夫さへお嫌ひなさるゝ彼方。又何ぼうお前が隠しても。源五兵衛様と譯のある事なら。素振目遣ひ満更わしじやといふて知らぬ事は無い。三五兵衛様への返事が無さに。つい云しやんしたので有らうがな。私に何の隠す事は無いわいなア。菊野お市様北と南と隔てゝあれど。聞及んだお前の深切。日頃からお屋敷様で。内方へ来る私が馴染も無いものを可愛がつて下さんすお前。何の隠しませうぞいなア。御推量の通り。三五兵衛様がひつこう口説かしやんすのが厭さに。返事に困つて源五兵衛様に譯が有ると云ふたんじやわいなア。お市大方爾うじや有らうと思ふた。爾うして其様子は。源五兵衛様に咄してあるかへ。菊野何のいなア。今のやうに云れたに依つて。日頃

お市様が済まぬやうな口振。夫じやに依つて云々程に。必ずばつとならぬやうにしてお呉れへ。お市其りや私が存込んで居る。爾うしてお前のきつしり様の名は何と云ふへ。三人早う聞しをれいやい。菊野サア其お方は千島のお屋敷。勝間源五兵衛様でムんすわいなア。替々ヤアく。ト思入有つて。菊野毎度お前様方と一座しても。一寸も見付られぬやうにするのは。大體氣の揉める事じやないわいなア。左十孰れもお聞なされ。千島家の御家老勝間源次兵衛殿の御子息毛虫どの。伴右日頃から四角四面な源五兵衛殿。斯様な遊所へなど参るやうな仁ては無いが。愚しい萬太郎様に世話の儀を御覽に入れん爲。斯様な所へも折々の體散。伊平左様でござる。チンフンカンで我々も異見なざる源五兵衛殿。菊野其偏屈な頑固しい氣丁面な御方が。一向可笑しいものじやわいなア。ト恥しきこなし。三人顔見合せ。三人興が醒める。ト奥よりおとわ出て。とわ申しくあなた方が見えぬと云ふて萬太郎様がお尋ね。ちやつとお出なされませいな。左十萬太郎様のお召なされば參らば成るまい。此様子三五兵衛殿にナ。伊平そりや間を見合せての事に致さう。サアくお出なされませ。ト合方になり。三人奥に這入る。お市菊野を向ふに連立ち。お市菊野様。何ぼうお前が誠らしう云しやんしても。如何も私や合點が行かぬ。源五兵衛様はお屋敷中でも物堅いとの噂。此方へお出なされても。終度新造様一人お呼なされた事も無い。其上彼方の奥様といふは。お國のお血筋屹度したお家柄。御祝言は無けれど。夫さへお嫌ひなさるゝ彼方。又何ぼうお前が隠しても。源五兵衛様と譯のある事なら。素振目遣ひ満更わしじやといふて知らぬ事は無い。三五兵衛様への返事が無さに。つい云しやんしたので有らうがな。私に何の隠す事は無いわいなア。菊野お市様北と南と隔てゝあれど。聞及んだお前の深切。日頃からお屋敷様で。内方へ来る私が馴染も無いものを可愛がつて下さんすお前。何の隠しませうぞいなア。御推量の通り。三五兵衛様がひつこう口説かしやんすのが厭さに。返事に困つて源五兵衛様に譯が有ると云ふたんじやわいなア。お市大方爾うじや有らうと思ふた。爾うして其様子は。源五兵衛様に咄してあるかへ。菊野何のいなア。今のやうに云れたに依つて。日頃

から三五兵衛様も皆様も。氣味悪がつてじゃ源五兵衛様。それでつひ云ふたのじやわいなア。お市滅相な方では有るぞ。爾う云ふ事を源五兵衛様に云はずに置いて。若し三五兵衛様が直にお尋なされた時には。ひよんな物にならう程に。今の様子を源五兵衛様に咄して置いたが可からうぞへ。菊野ほんに爾うじやなア。爾んなら源五兵衛様に咄して來うわいなア。ト往かうとするを。お市ア、是いなア。立ながら咄しも成るまい。殊に座敷にござるを。お前が呼んで目立つ。おちよ吾儕一寸源五兵衛様を呼ましておじやいのう。ちよアイ。ト往かうとするを。菊野これおちよ殿。マア今の事は何にも云はずに置いて下んせ。ちよ菊野さん富市のおちよ。那樣事はしつて居るわいなア。ト奥にて潮來節歌ふ。トちよ奥へ這入る。お市菊野しかく有り。ト奥にて。源五兵衛様からの使とは何用じや知らぬ。ト此様な事云ふて奥より出て來て。お市辰巳屋から身に逢たいとは何者が來て居る。トお市思入有つて。お市ハイ辰巳屋のお使は。お使でムります。源五何を云ふぞい。是は菊野。最前から座敷に居らぬと思ふたが。何を爲て居るぞ。萬太郎様を始め。三五兵衛殿もお尋なされた。早く奥へ行きやれ。菊野ハイ參じます。參じますけれど。お市様今のをなア。トこなし有る。お市サア今のをなア。ト思入有つて。源五ハ、ハ、ハ、何じややら兩方が今のをなア。とは何事じや。お市サア今のをなアと申しましたは。ヲ、それ辰巳屋からのお使の事でムります。源五サア其使に早く逢たい孰れに居る。お市サア其お使は。源五其使は。お市サア其お使様は爰にてござる。ト菊野を教へる。菊野お市様すつとマア何云じやいなア。ト思入あつて。源五何じやとときと。エ、こりや身共を擲るな。好い機嫌な者共では有るわいな。ト苦笑ひする。兩人氣の毒なこなし。お市菊野に今の事を頼めといふ仕方。菊野イヤ。お前云ふてくれといふ仕方。兩人宜しく有つて。思はず源五兵衛と顔見合せ。お市ホ、ハ、ハ、ハ、菊野ホ、ハ、ハ、ハ、兩人ホ、ホ、ホ、ト氣の毒さうに笑ふ。源五何の事だ。差して可笑くも無い事を。エ、辰巳屋の使は玄關へ廻つたか。お市アイ其詞使の口上は。菊野様聞いてお尋なされます。これ爰へ來て。今の口上を聞くと云はしやんせいなア。源五ハ、菊野

が其口上を受取つて居るか。何の用じや早く云やれ。ト菊野思入あり。源五兵衛が傍へ來て。菊野サア其口上はアノそれ。頼まれてお尋なされませ。源五何を云ふ。辰巳屋からの口上が頼まれて呉いとは何の事じや。菊野サア其譯はマア下に居て聞いてお尋なされませいなア。ト合方になり宜しく有つて。菊野奥へ來て居やしやんす三五兵衛様が。疾うから私に惚たの何のと云ふて下さんすれど。如何いふ事やらわたしや三五兵衛さんが嫌ひで。成らぬわいなア。夫て今まで斷りいふても。爰に居やしやんすお市様や。奥に御座んす伴さんや。左十様までを頼んで。退引成らぬ今夜の切迫。得心せぬは外に深い色みやでも有るやうに。問詰られて詮方無さ。いかにも深う譯の有るお方といふは。源五兵衛様でござんすと云ましたわいなア。トこなし。お市私も爰に居る所で。左十様伴様へ。貴方と譯の有るといふ返事。ハツト思ふて跡で聞けば。三五兵衛様を始め皆様も。貴方を恐がつてムるに依つて。源五兵衛様と譯の有ると云ふたら。此後三五兵衛様も云出して。は有るまいと。思ふて云ふた彼の子の頓智。御迷惑は貴方お一人。菊野常から物堅い貴方。此様な自墮落な事はお厭て有らうが。三五兵衛様がお國へお歸りなされるまで。表向の色になつて。私が難義を救ふてお尋なされませ。其代りに厭らしい事はしや致しませぬ。申し源五兵衛様。一生御恩に着る程に。皆様の手前は今頼んだやうに。譯の有るやうに見せてお尋なされませ。トくすく云ふ。源五兵衛思入有り。源五辰巳屋の口上はハテ變つた口上な。菊野はまだ若輩な事なれば跡先の辨へ無く。只今のやうな儀云出さうとも。お市までが同じやうに。厄體も無い事を云出す。何ぼう表向でも内向でも。身共は大切な御用蒙り。大坂へ罷越して居る身分。殊に斯様な木強な侍が。若輩な女を執へ抱いて寝たの。イヤ情人じやのとエ、馬鹿な事云ふわいな。トお市思入有つて。お市それ見やしやんせな。大方恚うて有らうと思ふた。菊野様お前如何せうと思ふてじやへ。菊野如何といふて頼みに思ふ源五兵衛様はお厭じやと仰しやる。詰らぬものになつたわいなア。お市詰つても詰らいても。ト源五兵衛を見る。源五兵衛向ふを見て居る。菊野如何も爲様がないもせぬもの。お市無いては濟まぬ。ト源五兵

衛ををしへる頼めといふ仕方をして見せ。菊野濟まぬわいなア。トいろ／＼氣を揉む。菊野思入有つて。菊野私が身の切なさに。源五兵衛様のお身に心も着かず。ひよんな事云出して。嘸お腹が立ませうが。其處を堪忍して云ふたやうに表向の所は。マア情人じやと云ふてさへお呉なされると可いのじや程に。藝子一人を助けとる思ふて申し。申し是ぢやわいなア。ト拜む。源五是は又迷惑千萬な。藝子といふは偽り。誠は敵討の助太刀して呉いと云へば二言は無けれど。如何もはや今のやうなこつ恥かしい事は。ト我姿を見て。餘り馬鹿らしい。菊野サア爾うてはムリますけれど。頼まれてお呉なざらんと。何うも今夜は座敷に居れませぬわいなア。お市いかさま最前のやうに皆様へ云しやんした事が嘘じやと知れたら。三五兵衛様が猶聞いては有るまいし。菊野夫じやに依つて此様にこし付けて頼むのじやわいなア。お市申し物云はぬ彼の子が是程に頼んでじや事。菊野何卒聞入れて。お市お呉なされませいなア。ト源五兵衛思入有つて。源五ム、スリヤ今宵の所が抜られぬから。如何有つても押付ての頼み。菊野アイ貴方より外に。お市此棒は聞ませぬわいなア。源五是は又迷惑千萬。可いわ兩人が頼み。如何なりと致し呉う。菊野エ、爾なら頼れてお呉なされるかへ。お市得心して上なさるかへ。源五サア頼れて遣るが表向斗りじやぞ。菊野イヤ三五兵衛さんの手前を。譯の有る分には云ふてお呉ると可いわいなア。源五ア夫て可い事なら如何なりとも云ふて遣はす。菊野爾なら愈爾うじやぞへ。ア、嬉しやお市さん。頼と瘡が下ましたわいなア。お市私まで気がすつわりとした。最前源五兵衛様が厭と仰しやつた時は。こりやマア如何ならうと。大體案じた事じや無いわいなア。菊野さいなアわしもひよんな事云出し。跡へも先へも往かなんだに依つて。一向駈落せうかと思ふたわいなア。源五ハ、、、客に口説れて返事に困り。駈落せうとはしどの無い所が遣侍女のはてと思はれるハ、、、イヤ菊野。其方が頼む事を聞いて遣はしたら。又身共が頼む事も聞いて貰はねば成らぬが合點かな。菊野そりや最う何でも聞くに依つて必ず今の事を頼むぞへ。源五サア／＼可い

内三五兵衛奥より出てお市を見て。三五お市是に居るか。最前から尋ねて居つた。ム源五兵衛殿も是に御座るか。菊野も是に居つたか。菊野アイ。源五イヤ三五兵衛殿御存じの通り拙者一醉も喫ませぬ故。萬太郎様がお好の泡盛こみ信られ甚だ酔酩。漸く酔を醒さうと思ふて。失禮の段御免下されい。三五成程酒まるらぬ其元泡盛は切なうムらう。然らば是にて御休息なされ。萬太郎様の御前は宜しう取斗らうひませう。源五夫は忝う存じます。菊野ツントこなし有奥へ行かうとする。三五菊野待てそちや何れへ行く。菊野アイ御座敷が淋しからうに依つて。ト又往かうとするを。三五ハテ扱座敷には藝子共仲居も居れば可いわさ。お身は是で咄しやれ。ハテマア下に居やれ。菊野源五兵衛様爰に居ても大事無いかへ。三五ハテさきの。お身が是に居つたと云つて何の大事が有らう。マア下にお居やれさ。ト手を持つ。お市中へ這入り。お市これ菊野様。あのやうに仰しやる程にマア下に居いなア。トお市留む。下に居る。申し三五兵衛さん。私をお尋なされたは急な御用でムりますかへ。三五成程其方を尋ねたは。ト菊野を見て。源五兵衛を見て。イヤさして急な用でも無い。トこなし有つて。源五お市をお尋なされたは。扱はお馴染とやらの御用かな。三五是は源五兵衛殿には機嫌の印。遂に無い洒落詞を仰しやるなハ、ハ、ハ、時に源五兵衛殿。手前其元大切なる御用に付當所の屋敷へ参り。方々の遊所へ立寄まするも。彼の大切なる一品を。ト云はうとする源五兵衛邊りを紛らすこなし。三五兵衛も思入有つて。サア彼の大切に致す萬太郎様が。奥方住の江御前の御舎弟なれば。我々が守護致し當處に御逗留なさるゝも。下世話に云ふ智恵付の爲。拙者を乳母のやうに思召してござる。氣の毒なものでござる。源五生得愚しいお生れ。不斷お傍に御座る貴殿。御心配の段推察仕つて居ます。三五是は／＼御挨拶。夫に付ましても遊所へお出の砌は。眉目好き女を御覽なさるゝと○こまたもので。源五イヤ／＼是は三五兵衛殿のお詞とも覺えぬ。賢愚共に色情は斗られぬものと承る。三五ハア然らば其元のやうな四角四面な偏屈な仁でも。色は捨られぬものでござるかな。源五捨られて可いものか。堅いと云ふは。ト刀を見せ。源五此手前拙者とても同じ

三五執れも。ト奥を見て思入あり。左十日頃から毛虫と思ふた源五兵衛が只今の爲體。伴右我々最前から菊野が口承つたが。よもやと思ひ疑ひし所。伊平只今の仕儀。三人呆れ果ました。トお市最前より氣の毒なこなしにて。お市ホ、何と何方もお聞なされましたか。菊野様とした事が。何の隠さいても可い事を隠して。貴方にもお腹をイヤや腹はお立なされまいけれど。私までも大體悪いイ事じやござりませぬ。イヤ恠うなさらんか。菊野様の面當に。南の首様をお世話申しませう。誰か可らうぞ京扇子屋のみやさんか。河音のおきとさんか。ふさ様にせうかほんに鑿子の事はおとわが能う知つて居る。奥へ往て尋ねて參じませう。誰さんが可らうぞ。ト紛らすこなしにて奥へ這入る。始終合方。三五兵衛煙草吞了ひ。三五各方もお聞の通り面目次第もござらぬ。左三五兵衛殿。こりや御思案なされずば成ますまい。三五思案と云ふては外には無い。身共を今まで馬鹿にした女め。其上今の如く是見よがしに兩人が今の有様。此返禮は身共が胸に。伴右シテ其御思案は。三五生得愚な萬太郎様何事も身が詞次第。あの馬鹿者をたらし込み。源五兵衛めに恥辱を興へ。菊野めに泣面を唯今見ませう。伊平成程貴殿のお詞次第で。如何様ともなる馬鹿殿の萬太郎様。玉に使ふは天晴の御思案。三五併し乍ら一筋では往かぬ源五兵衛眞逆の時。ト皆々が囁く。三人心得ました。ト思入あつて。彌助橋懸り門口より狀を持つて戻りて。何卒座敷の工合が好ければ可いが。仲居家に逢たいものじゃが。おとわ様。おちよ様。ト奥を見て呼ぶ。伊平ヤイ、仲居共を呼ぶうぬは何者じゃ。彌助私は北の櫻屋の者でござります。伴右櫻屋といふは菊野が家でないか。彌助ハイ左様でござります。三人見れば狀を持つて居るが何用が有つて參つた。彌助ハイ此狀は菊野様に急な用が有つて。伴右何だ菊野に用が有つて。狀を持つて來たとは合點が往かぬ。其狀はへ寄越せ。三五伴右殿其狀はへ取つて來やれ。彌助コリヤ貴方がたの御覽しやるやうな狀じゃムらぬ。伴右ハテ扱此方へ寄越せ。ト狀を引奪り彌助を引退ける。彌助氣味の悪き思入。伴右衛門狀を渡す。三五兵衛御開き見て。三五急ぎ申入候。私事今般は氣分悪く候間。お市様へ御申し置候。彌助此お金は。

此文屆き次第早々御歸り待入り。ト菊野どのへ母より。ナント執れもお聞なされたか。三人怪しい狀ではござらぬか。三五母親の病氣といふて。一寸も早う歸らうといふ。菊野めが拵へ事。大方知れた事じや。彌助夫はお前様無理でムります。何ぼうお客が大事でも。親の病氣を構はずと。座敷が勤めて居られませうか。其やうに仰しやらずと。何卒今夜の所は。三五成らぬわい。ト屹度云ふ。彌助ハイ、ハイと身を縮める。うぬは大分菊野が眞腹をひろぐな。エ、聞えた。扱は源五兵衛と菊野が中の世話焼いて居るか。彌助ア、申しこりやマア何でござります。最前から聞いて居れば。源五兵衛様と菊野様が中を世話焼くの何のと。とんと合點が參りませぬ。三五這奴白々しい面に似ぬ太い奴だ。菊野と源五兵衛が中を。うぬが知らぬといふ事は無い。何時からの事。何處で出逢ふた。有様に吐し居らう。彌助ハイ、ハイ。伴右吐しやうが遅いと。うぬ痛い目をするぞよ。伊平痛いめが望なら。如何やうとも擦治して呉う。ト三人きめ付ける。此間彌助始終びり／＼して居る。彌助ア、申し／＼とつとも其やうに口々云ふて。狼狽させて下さりますな。お侍様に恠う取巻かれては。何ぼう臆玉の太い私でも。何やら夢中でムります。其やうに云はずと。私が云ふ事も聞いてお呉なされませ。伴右吐す事が有るなら是へ來てきり／＼吐せ。ト氣味悪うながら彌助眞中へ出て。彌助譯と云ふて外ではムりませぬ。菊野様は評判の石部金吉。是まで方々のお客がいる／＼と云ふと云ふてじやけれども。其方は大嫌ひでござります。源五兵衛様は元よりあの子に爾ういふ事が有つたら。此彌助が知らぬと云ふ事はムりませぬ。如何いふ事で源五兵衛様と譯の有るやうに仰しやりますぞ。三五譯の有るといふは。菊野源五兵衛兩人が口から。斯様／＼でござると唯今吐いたわ。彌助エ、そんなら菊野と源五兵衛様とが。一向呆れるわい。けふも明日も明後日も四明後日も醒果てた。伴右然らば其方は實正知らぬか。彌助鑿子様の色事を。廻しの男に隠すとは。ト小判の形をして見せ〇それ放すまいと思ふて。テモ吝い源五兵衛様。コリヤ餘程／＼儲け損ふたわい。ト三五兵衛紙入より小判の包を抛り出す。三五それ取つて置け。ト彌助右の金を取上げ。彌助此お金は。

ツ源五兵衛殿は執れに居やる。萬太郎様のお召なさる。源五兵衛殿へ。三人源五兵衛殿へ。ト呼立てる橋懸り障子の内より。源五ハツへ。ト云ひながら手拭にて手を拭きながら出て来る。伴右貴殿には執れにお出なさる。萬太郎様のお待兼でござる。源五イヤ失禮ながら暫く睡いめん眞平御免下さりませう。ト云ひへよき所へ坐る。三五萬太郎様へ申上ります。源五兵衛殿が是へ参りました。シテ御用はな。ト此内後の襖明け。菊野出て来て其邊見廻し。おとく早枝が傍ちやつと坐り三五兵衛皆々是を見。伊平見付たぞへ。菊野わりや執れへ参つた。菊野私は何處へも往きはせぬもの。何云なさるやら。三五菊野わりや執れへ往て居つた有様に云へハツ萬太郎様有様に申させませうな。萬太郎、申させい。ヤイ菊野わりや何處へ這入つて居た有様に云はぬと泡盛で云すぞよ。伴右泡盛とはよくござりませう。サア是で飲めへ。ト大きなこつふをば菊野が前に置く。菊野むつとしてこつふを取上げ。菊野おとわ殿一ツ斟いておくれ。トおとわ酌する。菊野飲まうとするを源五兵衛留め。源五待てへもう可い。イヤなに各。菊野が座敷を抜けて居つたは恠うてゑ。拙者暫くすいめんの間を介抱頼みました。夫故御座敷の事を缺き申譯も無い仕宜。彼めが無調法は私に免じられ何卒御免を。伴右アすりや菊野が詫言は其元がさつしやるか。ハテ變つた所から御挨拶でゑる。伊。左ハテ御深切な儀でござる。ト口々聊しう云ふ。源五兵衛構はず。源五これさ菊野。萬太郎様各方の御機嫌直し。わつさりと一ツ飲みやれ。菊野アイそんなら此盃で思ひさしにせうかいな。伴右思ひさしとは可らう。一ツつげへ。トおとわ酌する。菊野酒を飲む内に。三人思ひさしとは何處へ行かうぞ。ト口々に云ふ。菊野飲了ひ。菊野宅右衛門様お慮外ながら上げうへ。ト皆々顔見合せ。伴右出石宅右衛門殿へ菊野が思ひさしとは。ようへ宅右様へ。ト褒める。宅右衛門片隅へ寄つて居て。宅右ははへ。伴右殿のお褒のお言葉が有がたう存する。拙者先程より餘り盃が廻らぬ故。煙草斗りのんで居つて。菊の公の思ひさし。さらば一ツ喫べうか。ト云ひへ。此方へ出て。どりや私がお酌致しませう。ト此方にて酒盛になる。三五なんと萬太郎様。あれに思はまする菊野め。貴方方儀

に少し氣の有るやうな體でムります。御前には何と思召されます。萬太郎アにを嘘らしい。ト恥かしき思入。三五イヤイヤ眞實でござります。何彼善措きは呼ませうか。萬太郎来るなら呼んで見いやア。三五ハツ〇菊野。萬太郎様のお召なされるに是へ〇菊野きかぬ顔にて。源五兵衛。宅右衛門皆々と酒盛の體。是はすべて大座敷にて。兩方別れて居る座敷の様。三人早く來やんへ。ト聊しく云ふ。菊野思入有りて。菊野ヲ、聊し。其方へ來いなら行くけれど。爰にも盃が纏れてある。最些と待つておくれ。ト屹度云ふを。源五是は如何したものじや。假令如何やうな事が有らうとも。萬太郎様のお召とあれば。早く往て御機嫌に入るやうにしやれ。菊野そんなら云ても大事ないかへ。源五大事無いへ。菊野お前の許しなら。ドレ往かうわいなア。ト立つて此方へ来る。菊野よう源五兵衛殿の云ふ事は聞いて様々。トおだてる。菊野ヲ、可笑し。一向おだてへじやおとくさん早枝さん。お前も爰へお出んかいなア。ト云ひ云ひ三五兵衛が方へ来る。三五イヤ萬太郎様。此菊野が儀は如何取斗らひ致しませうな。ト萬太郎うぢへして居る。三五兵衛呑込んだ體にて。ハツ然らば其通り申付ませう。ナニ菊野。是にお出なさる萬太郎様。日外より其方を甚だの御執心。御大身様に身を任すは。其方達が果報といふもの。有難いと思ふてお伽申したが可い。何とお伽が可うムりませうか。萬太郎伽が可いへ。マア一寸爰てお伽をして見よ。ト菊野に抱着かうとするを。菊野申してんがうをなさんないア。ト突やる。萬太郎三五兵衛ねつから伽さへぬぞよ。仲居皆々サアへ。菊野様一ツ飲みいなア。三五ササよくムりますか。暫くお控下されませう。菊野イヤサ藝子。假初ながら我々が御主人萬太郎様が。お心をお懸なされた其方。何故お受申さんぞ。菊野御大身で有らうがお大名で有らうが。人といふものは心意氣ばかり。愚しい萬太郎様をたらし込み。三五兵衛様お前はマアさもしい。ト源五兵衛煙草吞みて咳拂ひして紛らす。イヤさもしい。私等御大身とは釣合はぬわいなア。三五スリヤ愈萬太郎様のお心に隨はぬか。ト俺が云ふ通り云へと萬太郎へして見せる。萬太郎様合點して。萬太郎スリヤ愈萬太郎様のお心に隨はぬか。ト云ふて三五兵衛を見る。菊野は矢張黙つて居

る。三五し太い女め。ト矢張萬太郎へして見せる。萬太ほんにねつから物云はぬ。マア何ぼう物云はいても身請して國へ連歸り。我と一緒に御隠居様とは如何有らう。三人如何じゃ。ト此間源五兵衛始終煙草呑んで居て此時。源五イヤ憚ながら菊野儀は。假令身請なされても御心には随ひませぬ。ト向ふへ出る。左ム、萬太郎様が身請なされても。お心に随ひませぬとは。源五兵衛殿。して其様子は。源五イヤ外でも無い。菊野は拙者が相方。三人ヤア。源五夫故身請は御無用とお止申したのさ。萬太ヤアそんなら菊野は。汝が色か。がをれ。ト少し氣味悪きこなし。三五兵衛大事ないと押へる心にて。三五源五兵衛殿。愚しうても萬太郎様は御主人の片割。其御主人の前とも憚らず。菊野はお身が相方と云ふからは。源五金輪際何處までも。ト菊野が手を引寄せ。三五兵衛きつとなつて氣を變へ。三五御躑なされましたか。ヘテほてくるしい儀ではムりませぬか。萬太ハテほてくるしい儀でムりませぬ。三人御主人を踏付け。餘りと云へば法外千萬。三五萬太郎様の惚れてござる菊野を横取した源五兵衛。ト打擲する事して見せ〇憎い奴じやござりませぬか。萬太憎い段か。俺が伽せうといふ菊野を横取した源五兵衛。皆寄つて叩け。三五ハツ孰れも萬太郎様の御意じや打つしやれ。ト三人はハツト源五兵衛が傍へ行き。扇を以て叩く。三人御意じや。ト源五兵衛を散々に打つ。菊野驚き。源五兵衛に取着き。菊野源五兵衛様。思ひ懸無此様子。恚うならうとは知らず。よしなき事を頼んで。ト云はうとするを源五兵衛。菊野を引付け。源五コリヤ何にも云ふな。言譯するも恚うならぬ先の事。一旦俺が頼まれては。是でも非でも立通すが。千島の國の氣風じやわいヤイ。菊野じやと云ふて看す。源五サ看す。知れた二人が中を。御存じ無萬太郎様は。お腹の立つは御尤。夫じやに依つて打れても。何とも無いわいヤイ。ト菊野を突遣る。菊野エ、。ト身を震はし源五兵衛を見て。堪忍して下さんせ。ト源五兵衛を拜み泣く。三五ハ、。何と孰れも色男といふものは。女の不便がる者でござる。三人左様でござる。ト此方へ来る。三五兵衛入替つて源五兵衛が傍へ行く。三五源五兵衛、又此間源五兵衛に打擲せられ。太明寺有りうな。菊野其方も驚し

からう。萬太郎様大切なる役目を受ながら。遊所の女に魂を奪はれる源五兵衛。お國の聞え暫く御遠慮仰付られずば成すまい。萬太いかさま爾うじや。ヤイ源五兵衛。大事の用に登つて居ながら散々の身持。國への遠慮身が目通りは暫く叶はぬ。菊野爾んなら源五兵衛様。三五暫く御前は叶はぬわい。トきつと云ふ菊野心意氣有つて三五兵衛が傍へ往かうとする。源五兵衛。コリヤと引廻して止める。菊野。源五兵衛を見て泣入る。三五イヤ最前より。よしなき事にて座敷の不興。萬太郎様所替へて飲直さうではござりませぬか。萬太夫も可らう。そんなら是から亭へ往て。藝子共には三味線鼓弓。我等は夜弓と出掛け。三人は一興でござります。萬太サア皆來い。三五御前のお詞を申次ぐ此三五兵衛。迫もの事に御意じや。ト扇にて源五兵衛を叩く。菊野。源五兵衛思入有り。三五兵衛じろりと見て。ハ、。ト歌になり。此一件残らず這入る。跡合方。源五兵衛菊野残り。皆々這入りて終ふと。お市障子家體より出て。兩人が傍へ来て。菊野の袖を控へ。お市最前からの様子は。皆聞いて居ましたが菊野さん。ト菊野お市を見る。お市は源五兵衛ををしへ。お氣の毒なものになつたア。爾うして此終ひは如何せうと思ふてじやへ。源五ハテ可いわ。斯様な難儀にならば頼まれまい。又難儀に成らぬ事ならば頼まんと云ふやうな。二筋な頼まれやうはせぬ。菊野何にもきなく思ふ事は無い。御前を遠ざけられたと思ふても。差したる仕落ても無い。又御機嫌の直る事も有らうわサ。菊野私に案じさすまいと。何ぼう其様仰しやつても。三五兵衛面のお傍に居る内は。お市ほんに爾うてムんす。源五兵衛様の御難儀も。元の起りは三五兵衛様が。お前を口説かしやんしたを。得心せぬ故とは。看す。知れてありながら。爾うとも云れぬ最前の時宜。ト菊野邊りの枕を取つて来て舞臺に直し。源五兵衛が刀を抜き。菊野指を切る兩人恠り。源五是は何事をした。お市痛みはせぬかへ。ト云ひ。兩人は宜しく介抱をする。菊野イヤ。大事無い。ト思入有つて。邊りの指を拾ひ紙に包み。源五兵衛が前に置いて。是取つて下さんせ。源五ヤ。菊野賤しい私が頼んだ事。厭とも云はず聞いてお呉なされた其上に。お屋敷の住居さへ叶はぬやうにした。元の起りは浅果敢

な私から。今更何とお禮の云やうが無さに。眞實惚たといふ。心の誓でござんすわいなア。ト源五兵衛思入有つて。源五ム、最前頼んだは偽りなれど。其禮の云ふやうが無さに指まで切つて。菊野アイお國には歴きとした。嫁御様の在る事も聞いて居ますけれど。大坂に御座る間は。切て私を女房に。女房は過ぎる飯焚じやと思ふてお傍に置いてエナ。ト思入。お市膝を打つて。お市けうといものじやわいなア。云合せの色事を底心からの惚やう。道は北の藝子さん程有つて立引が格別じや。能う惚た指は愚か腕も首も切つて上げいなア。能う惚たなア。源五イヤこれお市。其様に傍からそやし立てな。身共が承知やら不承知やら知れもせぬもの。指一本でさへ迷惑致し居るに。腕や首を貰ふて如何するもので。菊野そんなら私が惚たのが。お氣に入ませぬは初から知れて有れど。外に御禮の云やうがなさに。折角切つた指も徒事じやと云ふて。私故に其お身にさせます。此儘でどうも得心して下さんせねばいつそ。ト源五兵衛が刀に手を掛けるを宜しく留める。源五待て菊野。夫てお市の眞實が見えた。源五兵衛が承知した。お市菊野様承知じやといな。菊野そんなら本間に。承知してお呉たかへ。ト源五兵衛菊野が手を執り。源五親が満足に産付けた五體。指まで切つての其方が禮承知した。ト指をば懐へ入れる。お市菊野様。今の見やしやんしたか。指まで戴いて承知じやといなア。ト源五兵衛が首へ手を掛け抱着き。源五兵衛思入有り。お市おつと其手を放すまいぞ。雨降つて地堅まる。縁を結ぶは此常陸帯で。ト前垂を外し紐にて。菊野が抱着きて坐る儘を。源五兵衛が體へくるく巻する。源五兵衛迷惑なこなしにて。お市サア源五兵衛様。思寄らぬ新枕。アノ小座敷へ。源五イヤ最う夫には及ばぬ。お市及ばぬては菊野様の氣が濟まぬ。サアくちやつとお出なされませいなア。ト無理に立す。源五兵衛。菊野を抱へながら包怪なる顔にて。源五そんなら此儘で往かうか。お市サアお出なされませ。ト突遣る。源五兵衛ひろくして止る。源五ア儘よ。今までは主持今宵からは浪人の源五兵衛。明日の晝まで緩りと。ト抱着いて居る菊野と顔見合せ。源五て

め。菊野が置いた鏡袋と延紙を取上げ。我懐より紙を出し一緒にして。お市女中と違ふて藝子様は。是程世話が多い。ト鏡袋を障子家體へほり込。ひつしやりと障子閉し。吐息つき思入有つて。奥へ這入る。橋懸りより正平太。ぶつ裂きの羽織股引大小にて狀箱を持ち。正平笹野三五兵衛様は是に御座るか。お國元より火急の御用でムります。三五兵衛様。ト呼ぶ奥より。三五ナニお國元より火急のお飛脚とは。ト云ひく出て〇是は正平太。正平三五兵衛様。お國元勝間源次兵衛様より。貴方様と御息源五兵衛様へ此御狀。ト狀箱を出す。三五身共もお國元へ。書狀を遣はさうと存じ居つた所に幸ひ。ト狀箱を取つて開き見て。ム、こりや是大殿修理大夫様を毒殺致し。其上お家を押領せんとせしは。伯父御兵部卿江本丹藏と相連れ。御成敗は今川大炊様。跡目相續の儀もお家の血筋助作殿。萬事納まるお目出度付。彼の紛失の猛虎の劔。一時も早う詮議仕出し。歸國せよとの源次兵衛殿の御狀。コリヤ源五兵衛に見せるに及ばぬ。返事は即ち。只今奥にて認め置いた此書狀。國元源次兵衛殿へ。太儀ながら引返して届けてくりやれ。正平スリヤ此御狀を御返事と申し。源次兵衛様へ渡せば。可うムります。三五いかにも確乎と渡してくりやれサ。ト此時西の障子の内。菊野が聲にて聞ゆ。菊野申し源五兵衛様。何故其様に素氣無うさしやんすぞいなア。エ、最そつと此方へ寄りんかいなア。ヲ、辛氣。ト是を聞きて三五兵衛。幻のやうになり。聞耳立て居る。正平太は知らず思入有り。正平然らば三五兵衛様。此御狀屹度源次兵衛様へ。お届け申しませう間。源五兵衛様へも宜しく仰上られ下さりませう。随分貴方様にも御機嫌克く。何卒首尾よう萬事相調へ。御歸國を相待居ます。ト挨拶して入る。三五兵衛一向耳へ入らず。障子家體の方へしりく聞耳ながら来る。正平太いろく挨拶しても。三五兵衛物云はぬ故。段々三五兵衛に附いて同じく来る。正平三五兵衛様くくト。何ぼう云ふても聞入れず。障子の内の燈火内にて吹消す。正平太此時大音にて。正平コレサ三五兵衛様。ト大きな聲にて云ふ。三五兵衛恟りし。ぐんにやりとなる。此とたんにて宜しく。幕

第 二 段

造り物一面の平舞臺。見附赤壁唐紙押入納戸口上手の方筋違ひに障子家體橋懸り板塀例もの處に門口提札にして偏屈者借錢乞物貰ひ無用と書いて有り。大和風呂丸行燈直し有り。源五兵衛着流しにて筵を引き。蚊帳の内に枕をして本を讀んで居る。傍に刀懸に二腰とも懸けて有り門口には物貰ひ一人は裸身に汚れたる白張を着て女形の張假髪を被。土の鈴を持ち踊つて居る。一人は乞食の姿にて破れ太鼓を叩いて居る。此見え在郷唄にて幕開く乞食 てんく天満の神子の振袖鈴を袂に控へた。ト云ひく太鼓叩いて居る。乞食 控へたるこそ優し振袖を控へて囃して。ト是にて兩人聒しう云ふて居る。此間に橋懸りより家主着付羽織にて。日光せんにいろく載せ是を持つて出て。家主ヤイくわいら爰を何處じやと思ふて。てんく天満をやつて居るぞ通れく。ト是にて兩人踊りを止め。乞食ヤイ聞いたか。内から何とも云はぬに。表から通れとは這奴は新しいわい。乞食△表から通れと云へば。差詰内へ通らにや成らぬ。来いく。ト兩人内へ這入らうとする。家主コリヤく待をれ。内へ這入つても貸座敷の事なれば何にも無い。コリヤ見い。飯まで此様に持運ぶ事じやに依つて。米は固より錢一文も無い。益に立たぬ處で口叩かうより。早う行けく。乞食○旦那様其やうに云はずと。煙草なりと興つて下さりませ。家主這奴さまに強請かけるがな。コリヤヤイ。一體わいらは目が明いて有る無いか。此門口の書付が見えぬか。ト提札をしへ。偏屈者借錢乞物貰ひ無用と。而も假名で書いて有るぞよ。是かわいらが目に懸らぬか。乞食△懸つても懸らなくても。此方には貰ひさへすれば可いじや。家主サア其方は貰へば可うが。此方は與らねば可いじや。何ぼうなりと喋舌れく。乞食△エ、思ひし。儼ならぬ所。てんく天満の神子の振袖。乞食△あつたら所。太鼓を叩かうより。てんく

ん天満のみこの振袖。ト兩人踊りながら橋懸りへ這入る。家主跡を眺めて。家主神子ども、お神樂が上らぬので。實り無て行れた。イヤ内にござりますかな。ト戸を明くれば。源五ホ、シテ物貰ひは歸りましたかな。家主鶴の一蹠。去ねと云ふたら逃げて去ました。源五最前から門口で。囂しう申して居つたれども。例も貴公のお出下さる時分。お目に懸らば歸して下さわうと存じ打遣つて置ました。家主ハテこな様は不精なお人じやのう。けれう手前が好い時分に來たらこそ。用でも有つて參らにや如何さつしやる。源五イヤもう貴公がお出下されずば其儘に捨置き。日が暮れうが初夜にならうが打遣つて置きます。何處ぞでは歸りませう。家主ハテ優長な事を云ふお人じや。彼奴等は米貰ひも有り。中にも手元にあるものを引懸けて行く晝鷲もござる。不用心なお人じや。源五イヤく假令何を取つて歸つても苦しうござらぬ。拙者が物と申しては。爰にござる大小と其方に在る狭箱斗り。此蚊帳筵に至るまでも。貴公のお世話で借用申した。其外は丸行燈と大和風呂。燈箱蓆盆。是じやと申して皆其元の物。取れてからが手前何とも存ぜぬ。ト此内家主こなし有りて。横手を打ち。家主ハア、這はお侍程有つて詔ひの無い。扱々さつぱりとした物の云やう。其氣性を見込んで居る此仁兵衛も。遺老松町の住人じや。源五ハ、イヤ座興は格別。誠に不圖致した御縁で。其元のお世話になり。二月越に三十日餘り宿賃と申し。殊に朝夕に至るまで。斯様に自身にお運び下さる段。御深切と申さうか。お禮の申しやうもムらぬ仕宜。身不肖ながら。千島の家申勝間源五兵衛。兩手を支きて此通り當座のお禮。首尾よく歸參も致さば。只今の御恩は屹度謝ませう。千萬 忝う存ずる。ト辭義する。家主仁兵衛迷惑さうにして。仁兵マアくお手上られませう。是はマア改つたお禮痛み入りますが。愛縁氣縁とやら云ふものか。お前様の事と云や。悴が事より大切に存じます。二ヶ月は愚か。此上四ヶ月五ヶ月。乃至一年でも二年でも。緩りと思ふてござりませ。又座敷代を遣らぬなどと。苦にせぬが可うムります。一文半錢取らいても大事無い。コレ何處ぞ漏るなら直して上ませうぞ。其内にも歸參有るやうに。及ばずながら私も神佛を祈りませう。源五千萬お志

忝う存じまする。仁兵彼是云ふ内幕前。夜食も大事有るまいと思ふて持つて来た。もし香の物も出し立じや。上りませぬか。源五イヤ〜。まだ空腹にもござりませぬ。後程喫ませう。膳部は其儘片寄せて置ませう。仁兵ハテ後は後の事。マア一膳上りませぬか。ト云ひ〜其處を見廻して。仁兵南無三大和風呂に火が消たさうな。爾うして土瓶は何處にござります。ト云ひ〜其邊を探し見て。源五イヤ〜お騒ぎ有るな。土瓶は茶が温うならうかと存じて。用意致して置きました。仁兵這奴は理窟じやドレ〜。ト土瓶をいらうて見て。エ、しゃん〜と冷切つて有るわハハ、ハ、ハ。源五イヤ〜餘寒は嚴しうても最早二月。逆上致して悪いから。随分火の無いも可くござる。仁兵でも温い茶では毒じや。そんなら汲替へて来て上ませう。併し其間飯櫃や香の物を。爰に置いたら鼠が喰ませう。何處ぞへ片付けて置かうにも。膳棚は無し。如何したら可らうぞ。源五夫は拙者が宜しう取斗ひませう。此方へ遣されませう。ト香の物を引窓の細引に括付け。膳飯櫃を挾箱へ入れて。恚う致して置けば。鼠の引く氣遣ひはムらぬ。仁兵出来た香の物が。入幡場のおはやをやつて居るので。内は眞の闇となりけり。ト淨瑠璃にて云ふ。ハ、ハ、ハ、ドレ火を燈して上ませう。ト歌になり。仁兵燵燵箱を取寄せ火を打ち行燈へ點し。兩人しか〜。捨臺詞有るべし。橋懸りより宅右衛門着付羽織にて出て来て門口へ来て。宅右今致へてくれたは慥に此家じや。頼ませう〜。仁兵日が暮有るわい。とほれ〜。宅右イヤ些と物が尋ねたい。此邊りに先月から借宅致さる。勝間源五兵衛殿と申す仁兵はござらぬかな。源五イヤ〜如何やら聞馴た聲でござる。以前の朋輩共て有らう。仁兵衛殿御苦勞ながら。口上を受取つて下されい。仁兵合點でござります〜。ト門口へ来て。仁兵源五兵衛宅は是でござります。何處からござりました。宅右然らば是でござりますか。手前は出石宅右衛門と申す者でござる。源五兵衛殿御在宿でござらば。些と御意得たいと云入れて下されい。仁兵ハア、暫く待つて下されませ。ト此方へ来て小聲になり。留守遣ふて去ませうか。源五イヤ〜彼の仁兵は。拙者日頃から入敷の朋輩共でござる。吾しうござらぬお通し下されい。ト云ひ〜羽織取ま

尻着ける。仁兵そんなら通しませうか。ト源五兵衛を見て。源五仁兵衛殿御々しい。せりや何をさつしやる。仁兵以前の朋輩衆尋ねてわせたに。僕が無うては濟まぬ。乃て我等假の可内と化たじや。遠慮無しに遣はつしやれ。ト奴のやうにして門口へ来て。どほれネイヤ〜。是は〜宅右衛門様でござりまするか。能うこそお出下されました。主人源五兵衛宿に居ります。此方へネイヤ〜お通り下されませう。宅右然らば免しやれ。トはい。仁兵ネイヤ〜かうお出下されませう。ト源五兵衛。宅右衛門顔見合せ。源五是は宅右衛門殿。宅右源五兵衛殿。其後は打絶ましてござる。源五先づ〜。ト宅右衛門しか〜有つて。上方へ坐る。源五扱々お懐かしう存ずる。何からお咄申さうやら。誠に日外不圖致した事で只今の此體。面目次第も無い儀でムります。宅右誠に其節は。手前も其坐に居合しながら。萬太郎様のお詞を借つて。三五兵衛の傍若無人。何と申さう詞も無い仕宜。其故其儘に打絶ましてござる。其段は御免に預りませう。源五是は〜。御挨拶忝う存じまする。ト此挨拶の内に宅右衛門貰入を出して。煙管に煙草をつき。吸付けうとして火の無い思入。お莫益に火が無い。可内何故火を入れぬ。仁兵ネイヤ〜。ト火が無い故に困つたこなしにて。燵箱を見て取つて来てせはしなう火打ち。仁兵さらば一吹召上られませう。源五切火とは能く氣が着いた。宅右召使は甚だ奇麗好と見えまするな。ト仁兵衛邊りのつゝ茶碗に茶を汲んで持て来る。宅右衛門源五兵衛しか〜の挨拶あつて。源五シテ其元。夜分にお出下されたは。御用の向てムるかな。宅右イヤ〜。さして用事と申すでもござらぬか。日外の砌より。も御屋敷へ御立寄も叶はず。見るに餘りの御難儀。何彼御不自由にあらうと存じ。貢と申すでは無いが。ト云ひ〜。紙入より金包を出し。宅右是に金子壹兩貳分。しかも小粒で六片ござる。是を用立ませうから。御歸參の節返濟なされ。併し申さぬ事は聞えませぬ。切米では受取ませぬ。矢張正金で返濟さつしやれ。此金子を相渡しまさうと存じ。一寸參つたのでムる。ト右の金子源五兵衛が傍に置いて思入有つて。源五朋友の交りは筆墨の如しと申すに違ひ無く。不所存な拙者をお見捨も無く忝う存ずる。併しお氣遣ひ下されな。是に居らるゝ

は即ち此老松町の住人丸屋仁兵衛と申す仁の世話に相成り。此座敷も自分の掛屋敷でござるを。あらかじめ取繕ひ當所へ住居。鹽噌薪に至る迄。段々の深切詞にも述べられぬ仕宜。夫故随分心安う暮し居ます。宅右委細承つて安堵仕つた。ム、然らば夫に居さつしやるは家主殿でムるか。仁兵衛イ左様でムります。宅右扱々世に頼母しい仁もあるものでござる。拙者は又其元の召使かと存じ。先程からの無禮の段御免下されい。仁兵衛は痛入ます。イヤモウ家主ではござれども。折々は奴にもなり飯焚にもなり。又或時は源五兵衛様の按摩も仕ります。お求なされてずんと御損の無い家主でござります。宅右只今のやうに承り。御不自由には有るまいなれど。是は拙者が志。平に御用立下されい。源五左様あるを無下なう御返濟もいかど。宅右御遠慮は御無用。源五然らば暫時借用申さう。ト右の金を懐申して。源五斯様に貴公お世話相成ますに付ましても。何卒歸參の儀を願ひ居ます。今に於て彼の詮議の。ト云ひ宅右衛門仁兵衛へこなし。仁兵衛思入あつて。仁兵衛イヤモウお侍同士の付合は氣が張つて居悪い。幸ひ土瓶を持つて歸り。熱い茶と汲替へて參じませう。源五是は重ねの御苦勞千萬。仁兵衛イヤ申し貴方緩りとお咄しなされませ。源五兵衛様。後程お目に懸りませう。ト歌になり。仁兵衛土瓶を提げ橋懸りへ這入る。此歌を借つて向ふより。彌助木綿やつしにて。三味線箱と徳利をふりかたけにして出て来る。花道よき所にて。彌助菊野様。毎晩毎晩見る顔。ちつとやそつと遅いといふて大事か。其やうに走らずと靜かに歩いたが可うござります。菊野彌助殿。何を云はんすやら。こちや急きやせぬけれど。お前が遅いのじやわいなア。堪忍して下さんせい。ト這樣事云ふて本舞臺へ来る。宅右衛門。源五兵衛しかく有つて。宅右シテ其詮議の筋は。未だ手懸りもムらんか。源五イヤ其儀も少し心當りはござれど。並々ならぬ詮議の品故。甚だ心痛め居ます。宅右夫につけても此度お國の一件。伯父御の悪心。家中の内にも悪人の輩は残らず滅亡致し。殿様のお血筋に御家督も相極りながら。彼の今一色の劔が出ねば。足利殿より御免許もござらぬと有れば。此儀御承知でムらんか。ト此内菊野表より驚ふ。源五威程承りしお國の

一件。夫故毛頭油斷は仕りませぬ。宅右また其上に先達で。貴殿とお許願ござる殿の御家門。井上氏の御家門。此度貴殿の儀をお聞及び有つて。甚だ御案じなされる。由。お目附甚五右殿のお噂。お痛はしう存ずる故。序ながらお咄し申す。ト菊野是を聞いて腹立つるこなし。源五右様組の儀は。私不承知でムると申すは。御家門の息女を妻女に申受ましては。源五兵衛は女房の蔭を以て立身致した杯と申しては。武の道が立ませぬ。夫故婚禮の盃も其儘等閑に致し。右の御用に付取扱取急ぎ打捨ござります。ト菊野よしと頷くこなし。宅右去るに依つて。御歸參の上早速御祝言の盃をなさる。御親父への御孝行かと存じます。源五委細畏つてござります。ト菊野是を聞き腹立つるこなし。血相して這入らうとする。彌助申しお待ち。腹の立つは尤じやが。お前が今這入ると。源五兵衛様の爲にならぬ。夫よりはマアあの毛才六を去した跡で。存分云ふたが可い。菊野ほんに爾うじやな。したが如何したら去くさうぞいなア。彌助如何と云ふたら。ヲ、好い思案が有るぞ。幸ひの其頭巾で顔を隠し。お前は家主の婆になつて。家賃から米鹽まで。仕送の催促が可うムりませう。菊野滅相な事云はんせ。つひど那樣事云ふた事が無いわいなう。彌助其處は私がお前の息子になつて。ト菊野に囁く。菊野そんな無茶苦茶で云ふ程に。好いやうに頼むぞへ。彌助そりや呑込んで居ます。マア帯を前へ廻して。コウ腰を屈めて這入るのじや。ト婆の様にし見せる。菊野笑ひながら。帯を前へ廻し身拵へする内。彌助酒徳利の置所に困りし思入有りて。徳利を股倉へ隠し。紐を拵付けこなし。三味線箱を後へ隠し。此間内には源五兵衛宅右衛門宜しく有るべし。菊野免さつしやりませ。源五兵衛様は内にござるかな。ト云ひ腰を屈めて。彌助何でも今夜はお目に懸らにや成ませぬ。ト跡より彌助這入る。源五兵衛兩人を見て驚くこなし。菊野イヤイヤ何も恠りさつしやるな。高て借錢乞でござんすぞ。ト源五兵衛へ呑込すこなし。彌助ヲ、母者人の云る通り。何も彼も算用して貰はにや成ませぬぞ。菊野ヲ、爾うじや息子の長右兵衛が云ふ通りじや。爰へござんしてから。三十日餘りの座敷代。喃爾うじや有らうがの。ト彌助へこなし。彌助また夫斗り

じゃ無い、米代も有りと飯食ふ眞似して見せる。菊野ヲ、爾うじゃ飯代。ト彌助を見る。味噌摺る眞似して見せる。ト菊野見てこなし有り。菊野ヲ、おむし代。ト彌助を見る。彌助木を割る眞似をする。菊野木代爾うしてまた。ト彌助を見る。彌助醬油の仕方出来ぬ故困つた思入。菊野も困りしこなし。菊野爾うしてまたア、それヲ、爾うじゃ。廿四日廿五日天神様の約束。庚申様初午の日柄も。無茶苦茶にして貰ふては済まぬに依つて。何じや有らうと今夜中にせりふして。下さんせにや成ませぬぞ。ト思入有り。宅右兵衛門こなし有つて。宅右イヤ源五兵衛殿。最前のお家主は甚だの深切。夫に引換へ内方はハテ殿しい催促でござるの。ト源五兵衛思入有つて。源五そりや此等でござる。此内方は家付の後家てゐる。そこであれ〜腰も屈んでござる。即ち後に居らるゝ御子息と云ふも。此後家御の實子でござる。然る處へ仁兵衛がにじり込めましたとの事。御覽の通り仁兵衛殿は。甚だ結構人なれど。内方は生付いての爪長てござれば。斯様に度々の催促に拙者も困り入りました。宅右イヤモウ亭主の結構に。女房のわゝしいは今時の流行物でゐる。ハテ苦々しい儀でござる。彌助イヤ苦々しからうが甘々しからうが。こな様には構はぬ。親父の結構人と母者の爪長が。爰の事で毎日〜夫女喧嘩で亂騒ぎでえす。菊野こちの主のやうなせりふなしては。世帯がつまらぬによつて参じやんした。彌助是非とも今夜は算用して下さりませ。源五成程段々御尤の申分。併し手前も少しく工面致し居れば。菊野エ、工面と云へば無心の事でゐります。コレイナア無心を當にせぬが可うゐんす。今時のお客は悪洒落て。一向當には成うぬわいなア。ト源五兵衛彌助いろ〜紛らかす。菊野心付き。イヤ悪洒落な事を云はずと。サア早う譯立て、下さんせなア。彌助折角親子連で来たからは算用して貰ひませう。源五兵衛殿如何でゐります。ト思入。源五兵衛こなし。宅右衛門氣の毒の體にて。宅右イヤ最前より餘程長座。拙者お暇申さう。源五は折角お越下されしに。善らぬ事をお聞せ申し。氣の毒千萬に存じます。宅右何の〜。只今の御身分では有るべき事。御遠慮は御無用〜。ト立上る。源五然らばモウござりまするか。宅右近日お尋ね申しませう。源五ようお出下さりませ

た。ト宅右衛門表へ出る。ト皆々こなし有り。宅右家主の内室にしては如何か。ト菊野を見るこなし。○大坂は眞華はど有つて。借金を返が派手なものじゃ。ト歌になり。宅右衛門這入る。源五ヤレ〜じゆつない目をさした事では有るぞ。菊野私も婆様の眞似をしてしんどうで成らぬわいなア。源五イヤ〜欺して去したと思ふは不覺。今歸り懸に云ふた一言では。満更覺らぬでも無い。彌助左様でゐります。派手な借銭乞とは。少し狂言を殘して去んだものかい。源五夫は爾うと菊野。宅右衛門とは知つて居ながら。如何に面體を隠せばとて。つか〜と這入つて可いものか。嗜んだが可い。併し只今の婆様大出来て有つたわい。彌助イヤ夫は爾うと肝心の物を忘れた。ドレ〜持參の御酒を差上ませう。ト股倉より徳利を出して見せる。源五彌助そりや何じや。彌助白梅一瓶我等が御見舞。ト源五兵衛取つて。源五是は忝い。併しこりや内から燗でもして来たか。彌助イヤ〜冷酒でござります。源五夫にまた此暖まりは。彌助ハア、最前這入しなに隠し所に困り。私が酒藏へ忍ばせて置きました。爾んなら私が精分の強いので。燗が出来たのでゐりませう。源五道理で可笑しい歩行様じやと思ふた。菊野が燗ならば猶以て可らうてなハ、ハ、ハ、○先づ酒は出来たが肴は何處から出やうぞ。菊野彌助どん私が箱下んせ。彌助ハイ〜。ト小蔭より出し。引提げて往かうとする。菊野これ其やうにすると思わいな。彌助ヲツトこりや誤つた。ト三味線箱を目八分に構へ。菊野が前へ置く。菊野白梅は彌助殿。お肴は私が進上じやわいなア。ト云ひ〜風呂敷を解き蓋を明くる。内に延紙を敷き三味線の上に。大なる鯛鮫魚を載せてある。源五兵衛是を見て。源五鯛の濱焼に鮫の櫻煮。是は殿しいおもたせぶりじやな。菊野マア此方へ出さうかいなア。ト懐の延紙にて持添へ。鮫を引提げ難儀のこなし。菊野こりや如何せうぞいなア〜。ト持つて歩く。源五待つたり〜鮫の置所はト刀懸を見て引寄せ刀を退けて。それ爰へ引懸たり。菊野アイ。ト鮫を刀懸へ引かける。源五兵衛鯛を掴み。源五此鯛は如何せう〜。ト置所に困りし體。ヲ、有るぞ〜。菊野其挟箱の中に膳が有らう持つて来やれ。菊野アイ〜。ト挟箱より茶碗飯櫃を載せ。膳を出しこなし有り。ほん

にコリヤ好い物が有るわいなア。ト持つて来る。源五飯櫃を除けて此鯛魚直すじや。ト膳の上へ鯛を置き。彌助見りや飯も有るが貴方は御酒は上らず。此肉でおめし上りませぬか。源五イヤ、最前家主殿が持つてわせられたれど、望に無い故。取片付けて置たのじや。菊野そんなら何時お前様は飯を上つたへ。源五今朝茶漬を喫た儘じや。菊野其やうになされるとお毒でござります。些とばかりでも上れないア。ドレ私がお給仕致しませう。ト三味線箱の風呂敷前垂にして。茶碗に飯を盛り。鯛を載せ膳据ゑる見え。彌助菊野さんの給仕。コリヤ厭でも上りませぬば成ますまい。源五然らば身共は御飯頂戴仕りませう。イヤ最前家主の持つて寄せた香の物。其邊に有らう取つておじや。彌助イヤそりや私が。菊野彌助どん爾うして置いて下さんせ。爰へ来て這樣事するが私が樂み。お前は退屈に有らう。酒でも飲まんせいなア。彌助いかさま源五兵衛様の傍で。世話女房するのがお前様の樂み。そんなら我等は左平次せずと。手酌で徐々やりかけませう。菊野夫が可いわいな。ト彌助つゝ茶碗にて飲む。菊野其邊を尋ね。窓の繩に括付けし香の物に心付かず顔に行當て悔り。アレエ、ト飛退く兩人悔りし。源五なんじや。彌助何てムります悔りするわいなア。菊野夫でも誰やら冷たい手で。私が顔を撫てたわいなア。ト源五兵衛笑ふて居る。彌助何を云なざるやら。誰がマア冷たい手で顔を撫てて可いものか。ト云ひく右の香の物ふつかし。それでムります。菊野もし彼りや何じやへ。源五香の物の化物へ、鼠政道に難澁致し。引窓の紐に括付けて置いたのじや。彌助此香の物は如何なる科にや繩目の恥。嗚や苦うて有らうなアハ、と笑ひながら香の物を下し。菊野取つて見て笑ふ。此前より仁兵衛片手に小提燈。又片手に土瓶を掲げ出て内へ入懸り。此體を見て門口に窺ふて居る。彌助手酌にて引受け飲む。彌助イヤモウ恚うした所はとんとお二人の宿這入を見る様な。去らば祝ふて私が。ト表より。仁兵衛は其儘盡せぬ宿こそ目出たけれ。ト諷ふて内へ這入る。皆々見て。菊野彌助申し貴方は何處から。源五お家主様じや。仁兵衛前から表へ來懸り。餘り内が騒がしいので。何事をやらかすと思ふて立脚して居れば。宿這入の騒ぎ。於て我等が祝儀

の小説。盡せぬ宿へ茶の入花。女中申よう添添ける所の名は老松町。彌助九屋仁兵衛が座敷に。居くろめるやうにやしやりませ。源五ほんに見懸に寄らぬ氣の輕いお家主様。彌助お持せの入花で。家うつり茶漬は如何ござりませう。源五ハ、コリヤ面白い酒盛とやど這入。彌助ごつちやになつた此座敷。仁兵衛強者の交り。ト菊野指さして云ふ。彌助頼み有る中の茶漬かな。ト諷ふ。皆々ハ、仁兵衛下レ、我等も相伴せうかい。ト酒を飲む。彌助時に宵から餘程の間じや。俺が影が見えぬと菊野さんの爲にならぬ。私は最う歸りませうかい。菊野そんなら爾うして。又明日の朝平常のやうに。駕籠寄越して下んせや。彌助そりや呑込んで居ます。ト菊野を此方へ連れて來て。宵から云はうと思ふて居ましたが。場合が悪ふて云そゝくれて居ました。今夜で身印が。ト指五本。是丈でムりますが。可いかへ。菊野そりや二三日の中に。彌助サア其二三日がむちや附かうかと思ふのぢやか。ト故と源五兵衛に聞えるやうに云ふ。源五彌助。何じや。彌助イエ、何にも旦那のお聞なざる事じやムりませぬ。源五一寸聞いた處が。菊野が身せうさうなが。是に金壹兩貳分夫で可いやうに。ト抛りてやる。菊野イエ申し夫では。ト氣の毒なるこなし。源五ハテマア身次第にして置いたが可い。ト彌助金を取つて。彌助へ、とつともう這樣事を貴方のお耳に入ると。菊野さんが大體氣の毒がつてじやムりませぬけれど。私が此間は振廻しが悪ふてツイハ、そんならマア是をお預り申しませう。源五然らば夫で可いか。彌助よい段か可う過てムります。イヤよい序に仲人は宵の程。仁兵衛更けぬ間に我等もお暇申さう。源五左様ならばお歸りなさるか。菊野彌助どんようごんしたへ。彌助菊野さん。是から跡でしつぽりと。仁兵衛の用心を。ト源五兵衛菊野を見て。彌助と顔見合せ。二人ようなされや。ト表へ出る。仁兵衛橋懸りへ這入る。彌助花道よき所にて。彌助此金が一兩貳分。是から此方のも取るはカウツ。兩方擲む鏝儲け。トうなづき。チャント歌になり。彌助向ふへ這入る。源五兵衛菊野其邊片付け。源五菊野今日遣した文は届いたで有らうな。菊野アイ假令文はさんしぬと云ふても。毎晩來る事は知れて有るじやムんせぬかいなア。源五イヤ改

まつた事ながら。日外不圖した事が縁となり。夫から身共を如才も無う大切に致し呉れる其方。中々禮の云やうも無い仕儀過分なぞや。菊野ヲ、可笑しやの。お前様が厭がりなさるを。無理無體に此方から頼んで慥うなつた事。何のお禮に及びませう。心の届く丈は。御不自由はさせまいと思ふても。知つて居なさる通り座敷一通りの私。お客といふては拵へねば。何や彼や辛氣な事ばかり。其上却つて今のやうに。お前様に心遣ひをさせまして言譯も無い事。夫はさうと私を呼におこしなされた其用と云ふはへ。源五別義でも無い人に語らぬ一大事の事を。菊野エ、トこなし。源五厭て有らうが。何卒客を拵へてたもらぬかと云ふのじゃ。ト菊野しやんとして。姫御前の教へ草は幼少い時に寺子屋で聞いてよう覺えて居ます。何ぼう賤しい勤の身でも。此お人より外に一生連添ふまいと。心に錠を下してからは。小町の女中様や。お屋敷の娘御前も同じ事。お前より外に肌觸れまいと思ふて居る私。客を拵へてくれいと。源五合點が行かぬ筈。其仔細といふは。源五兵衛が身に取りては大切な事なれど。心底見抜いた和女に依つて。菊野イ、エ聞して下さるすな。源五何故に。菊野サアお前の身に大切な事を。私が聞いた其跡で。何處からどう廻つて。其大切な事が他處から外の人が云ふまいものでも無い。其時には道に勤の身。若しや私が口から洩れたやうに思ふてお呉なされはせまいが。どうも私の心が濟まぬわいな。源五其誠を聞くからは。如何有つても客を拵へてもらひたい。菊野客を拵へたも。菊野私が心を見届けた上。如何有つてもと云しやんすな。ト思入有つて。可うござります。いかにもお客拵へませう。假令どの様な厭なと思ふ人にも。源五帯解くか。菊野イ、エ、源五サア。菊野帯解いて抱れて寝る斗りがお客を拵へるでも有るまい。假令帯解かいても勤の一徳。口先斗りて何の、もの云紛らし。手管といふはお侍さんの計略とやらじやはいなア。源五ム、面白い其手管ではよもや仕損じはせまい。其客といふは外でも無い三五兵衛じやわい。菊野エ、ト合方になり。源五兵衛こなし有り。源五思入はかりては合點が行くまい。源五思入はかり。身共と三五兵衛が此大坂へ登つたは。千鳥のお家に無くてはね。大坂の御殿

の御殿の爲。服に其眞の証書を。三五兵衛が押して歸る所は。源五が庭意に落き工有り。源五の解。夫故源五解り登る此源五兵衛去ながら。是ぞといふ證據も無き故。迂迴に詮議も成らず。若し荒立て、詮議なさは。却つて劍を破却するか。人手に渡らば〇では合點が行くまい。ひよつとすると其劍を。打折るか又は海川。人の知らぬ所へ沈めて了へばお家の大事。サア客拵へたもと云ふは爰の事。下知から惚れて居るこそ幸ひ。何卒三五兵衛が口から云すか。是ぞと云ふ證據になるべき書いた物か。又は少しにてもそしり走り。和女が聞出してたもるならば。夫を手蔓に詮議し出し再び歸參。夫故頼むと云ふは爰の事じやわいのう。ト菊野思入有つて。菊野よう云ふて下さりました。夫程の大事を打明けて。下さります貴方の心が。起請誓紙を貰ふたより。嬉しうムりますわいなア。源五スリヤ合點が往たか。菊野アイ合點が往たが。息張りの強い彼の三五兵衛ついた事では。源五打明すが和女の働き。菊野命に懸けて。源五スリヤ帯解く氣じやな。トこなし。菊野思入有つて。三味線箱と硯箱を取つて来て。三味線を出し。裏皮へ五大力と書くと。五大力の歌になり書了ひ。菊野是見てお呉なされ。ト見せる。源五ム、總て女の人手に渡す文の封じに。開かすまいと認める五大力。菊野サイナア。お侍様の魂はお刀。源五町人の魂は算盤秤。菊野藝子の魂は三味線。其三味線の封じ目かうと心の誓ひ此五大力。源五外へ大事は漏さぬと云ふのか。菊野アイ。お前のお頼三五兵衛の胸の内。源五首尾よう聞いた其上で。菊野懸て逢ふぞへ語ろぞへ。源五マア夫までは暫しの内。菊野別れのやうに思はれて。源五何馬鹿な事を。菊野惜き筆とめ候かしくじやな。ト兩人思入こなし有つて。向ふより彌助駕籠一丁吊せ忙がしさうに走出て門口の戸を叩き。彌助菊野さん。菊野彌助どん何の用じやへ。彌助何じや有らうと一寸明けておくれ。菊野エ、けたまわしい。何じやぞいなア。ト云ひ。門の戸を明ける。彌助内へ這入る。彌助何じや所ではムりませぬ。最前内へ往んだ所が。親方が私を呼付けて。今夜は菊野を是非とも大重へやらにや成らぬ。汝が働きて今夜の揚を貰ふて来いと云れました。菊野爾うじやと云ふて。今時分から餘所へ行く事はこちや厭じや。如何なりと云

ふて下さんせいなア。彌助夫に如才が有らうか。ちよほくさやつても一向開かぬ鐵挺親爺。其上お前が爰に居てじや事をづいて居るやうな。若し親方が來ると重ねてからの爲にもならぬと思ひ。夫て迎ひに参りました。今夜の處は私に免じて。何卒戻つてお呉なされませ。菊野イエ〜何ぼうお前の云はんす事でも今夜はコレ拜むわいなア。彌助イヤ〜ツちから拜みます。爾うて無いと。中に立つた柱で迷惑なは私一人。何とせう知らぬ。トじゆつ無きこなし。源五彌助がああやうに云ふを片意地は悪からう。今宵の處は一先歸つたが可らう。彌助一遍戻つてさへお呉ると。又如何なりと致しませうけれど。親方のかうけには。さしもの私も降参でります。源五主と病には是非が無い。歸つたが可い〜。菊野そんなら去にや悪うムりますかへ。彌助目立つては悪いと。駕籠持して來ました。サア駕籠を持つて這入つて貰を。ト駕籠内へ持つて這入る。菊野腹立てながら駕籠に乗る。菊野モン七ツ時分に來る程に。敵かしてお呉なさんなへ。源五そりや合點じや。彌助太儀。彌助ハイ〜。ト此内駕籠昇上げる。彌助三味線箱を持ち。菊野モンほんまに來る程にツイ起なされや。源五サア〜可いてや〜。菊野ヲ、辛氣。ト歌になり。菊野駕籠の垂を下す。駕籠は向ふへ昇いて這入る。彌助源五兵衛へ捨臺詞有りて。駕籠に附いて向ふへ這入る。源五兵衛跡見送りて思入有り。源五ア、若輩な女に稀な者。一大事を明し頼んだれば。得心しました。爲果せませうと請合ひ。其上三味線に五大力と。誓書まで立つるとは。ハテ氣性な奴じやな。ト感心のこなしにて。

幕

第三段

造り物平舞臺。見附三間の間。真中より西へ障子家體長暖簾。東西に中二階折廻しの障子。例もこの所に門口出。菊野ア〜大盡様。一ツ上らぬいかなア。女房貴方は萬歳が強うお氣に入りましたなア。八左いかに〜。國元へ來る萬歳とは違ふて。藝子の歌ふ萬歳は中々面白い。藝子二人そんならお前は大和かへ。八左なに滅相もおらは西國九州者だ。小系夫でも國の萬歳より面白いと云しやんすに依つて。藝子夫て大和かへと云ふ事いなア。女房何のいなア。貴方は九州千鳥家の御家中。仲居源五兵衛様や。三五兵衛様と一所のお國。夫て菊野さんを御注文で今夜の約束じやわいなア。八左それ〜肝心の身共が望の菊野は如何じや何故遅い。畢竟菊野に逢はう計りに。飲とむ無い酒を飲んだり。藝子を呼んで待つて居る程に。早う逢して呉ぬ事か。女房さいな。菊野さんに逢たいと仰しやる故。廻しの彌助殿を頼んで。今夜は是非此方へ見えるやうにして置きましたわいなア。八左爾ういふ事なら一時も何卒早う。仲居イヤ。もう追付見えますするぞいなア。夫まで一ツお上りいなア。八左イヤ〜爾う酒飲んで云ふ事が云れぬ。皆々菊野さんに強い凝やうじやなア。八左こりか葛籠か知らぬが。何でも菊野に逢はうと最前からア、待つ身とも待つ身になるなどは好う云ふたなア。トきついつらいの歌になり。向ふより菊野を駕籠に乗せ。彌助附いて出て來て。彌助サア〜申し。是非ならぬ菊野さんを。此彌助が働きて貰ふて參じた。女房夫は忝い。彌助殿屹度恩に着る。待兼ねて居ればちやつと菊野さんを。彌助合點でムります。ト駕籠を内へ入れ垂を上げる。菊野お崎さん。約束は内方じや有つたかいなア。ト云ひ〜出る。お崎立寄つて。さきアイ〜お前に一寸なりと逢たいと待兼ねてござる。ちやつと向ふへ行きいなア。ト勸める。菊野こなしあつて。菊野三五兵衛さんかと思ふたら爾うでも無しさうな。トこちらへ戻る。藝子二人菊野さん老松町。菊野ア、老松やら飛梅やら。とんと分らぬわいなア。八左心を盡した効有つて。菊野殿のお出忝い〜サア〜是へ。トこなし有りて。彌助おさき様。菊野様を貰ふて來た代りに。何ぞ好い肴好い肴。女房酒所か新造様でも私が立てるわいなア。彌助そりや忝い。そんなら臺所で十兵衛様と一所に飲かけうか。

仲居サア〜大盡様。一ツ上らぬいかなア。女房貴方は萬歳が強うお氣に入りましたなア。八左いかに〜。國元へ來る萬歳とは違ふて。藝子の歌ふ萬歳は中々面白い。藝子二人そんならお前は大和かへ。八左なに滅相もおらは西國九州者だ。小系夫でも國の萬歳より面白いと云しやんすに依つて。藝子夫て大和かへと云ふ事いなア。女房何のいなア。貴方は九州千鳥家の御家中。仲居源五兵衛様や。三五兵衛様と一所のお國。夫て菊野さんを御注文で今夜の約束じやわいなア。八左それ〜肝心の身共が望の菊野は如何じや何故遅い。畢竟菊野に逢はう計りに。飲とむ無い酒を飲んだり。藝子を呼んで待つて居る程に。早う逢して呉ぬ事か。女房さいな。菊野さんに逢たいと仰しやる故。廻しの彌助殿を頼んで。今夜は是非此方へ見えるやうにして置きましたわいなア。八左爾ういふ事なら一時も何卒早う。仲居イヤ。もう追付見えますするぞいなア。夫まで一ツお上りいなア。八左イヤ〜爾う酒飲んで云ふ事が云れぬ。皆々菊野さんに強い凝やうじやなア。八左こりか葛籠か知らぬが。何でも菊野に逢はうと最前からア、待つ身とも待つ身になるなどは好う云ふたなア。トきついつらいの歌になり。向ふより菊野を駕籠に乗せ。彌助附いて出て來て。彌助サア〜申し。是非ならぬ菊野さんを。此彌助が働きて貰ふて參じた。女房夫は忝い。彌助殿屹度恩に着る。待兼ねて居ればちやつと菊野さんを。彌助合點でムります。ト駕籠を内へ入れ垂を上げる。菊野お崎さん。約束は内方じや有つたかいなア。ト云ひ〜出る。お崎立寄つて。さきアイ〜お前に一寸なりと逢たいと待兼ねてござる。ちやつと向ふへ行きいなア。ト勸める。菊野こなしあつて。菊野三五兵衛さんかと思ふたら爾うでも無しさうな。トこちらへ戻る。藝子二人菊野さん老松町。菊野ア、老松やら飛梅やら。とんと分らぬわいなア。八左心を盡した効有つて。菊野殿のお出忝い〜サア〜是へ。トこなし有りて。彌助おさき様。菊野様を貰ふて來た代りに。何ぞ好い肴好い肴。女房酒所か新造様でも私が立てるわいなア。彌助そりや忝い。そんなら臺所で十兵衛様と一所に飲かけうか。

ト云ひく奥へ這入る。其内八左衛門盃取上げ。八左先づ初めてなれば菊野。此方へお慮外申さう。菊野ハイお戴き申しませう。ト盃を取上げる。八左扱々聞いたよりは美しい。櫻屋の菊野と名に立つも理り。身共も初めて逢ふて。此様な嬉しい事は無い。トこなし有りて〇ほんにそれ。ト風呂敷包を取つて来て一ツく出し。是は龜末ながらお國の名物上布。此方は國分煙草。かう近附になる印まで身共が土産じや。何卒貰ふて下されてなら千萬悦びまする。菊野是はマア思ひ懸無い。初めて御目に懸りました私に結構な此お土産。忝うござりまするが。そんなら貴方は。八左千島の家。菊野エ、八左イヤ此方に些と折入つて頼みたい事が有る。菊野アノ私に、八左いかに。ト菊野こなし有つて。二品を八左衛門が傍へ持つて行き。菊野マア此お土産はお返し申します。私は藝子。些と譯が有つて假令何方でも。八左イヤく。これ身共が頼みたいと云ふは。全く色がましい義では無いぞや。菊野夫てもどうやら。八左イヤ此家の花車。菊野に些と咄が有れば。皆を連れて暫く爰を。女房ハイく合點てムります。藝子仲居。三人粹を通して。女房ドリヤ奥へ參りませう。ト合方になり。皆々奥へ這入る。跡に入左衛門菊野残り。八左衛門右土産物を。又菊野が前に置き。八左菊野今も云ふ通り。是は畢竟身共が志じや程に是非其方へ。菊野義理を懸けるがお客の常。高て藝子の私に。お侍さんの頼とは。八左成程尤。ト思入有つて立つて西の中二階へ向ひ。お二人とも苦しうムりませぬ。マア是へく。ト中二階よりなぎさ。振袖娘の形にて喜集院喜平太。羽織袴目付の形にて。兩人出て來ると。八左衛門まづく。と菊野か上手へ直し。菊野が下の方へ座る。合點行かぬこなし。菊野申し貴方はへ。喜平イヤ身共は千島の家。喜集院喜平太といふて。萬事の横目役を相勤むる者。なぎさは又なぎさといふて。萬太郎様とは徒弟同士。菊野何の事やらつんと合點が行かぬわいア。八左菊野合點が行かぬ筈。身共は何を隠さう其方が深う云交して居る色男源五兵衛が眞實の兄。菊野エ、そんならお前様は源五兵衛さんの。八左サア兄の身共が遠く來ぬ此本屋へ來る其難は。其方に折入つて頼みたいといふはアノなぎさ様の事。菊野エ、八左イヤ大抵な源五兵衛のお父

人。又なぎさ様にも。ト思入有りて。御前所共。菊野に一寸でもお遊なされたり宜しうムります。此上は御者が取斗らひ仕ります間。やはりアノ二階へお越下されませう。喜平然らば身共はなぎさ様を伴ひ二階に相待居る。なぎさ兎角宜しう頼むぞや。八左畏りました。なぎそんなら。トめりやすにて。なぎさ喜平太を連れ菊野にこなし有つて。元の二階へ連れて上る。八左衛門こなし有り。又菊野が傍へ往て。八左菊野彼のお侍はお國の横目役。又消縁といふは。今聞いての通り萬太郎様妹。御家門のお娘子。源五兵衛が爲にもお主筋。其なぎさ様を奥様のお指圖にて源五兵衛と許嫁。菊野エ、そんなら今のお娘子が。源五兵衛様と許許でムりますかへ。八左なんと冥加に叶ふた有難い事では無いか。菊野何の夫が。ト思入有つて。存じませぬわいなア。トこなし有り。八左菊野源五兵衛と縁が斷つて貰ひたい。菊野エ、ト大に悔りして。ヤ初めて逢ふた兄御様。私に折入つて頼たいと云しやんしたは。八左サア弟と縁を斷つて貰ふ爲。菊野そんなら今の嫁許の。なぎさ様とやらと。八左成程女夫にせねば。弟の源五兵衛は命が無い。菊野エ、く。そりや何て。如何いふ譯で。八左此度の役目。首尾よう爲果せ歸參すれば直に祝言。なぎさ様と夫婦になれば源五兵衛が身の大慶。親兄弟も一家共への面目。殊に主命重き仰せ。時に源五兵衛は。此大坂にて逗留の内。菊野其方と云交して役目も籠略。剩へ思しい萬太郎様のお機嫌まで損ひ。身持は散々と國元へ相知れ親人の御立腹。不届至極な源五兵衛め。國へ呼寄せ手討にせんと。老の一徹千島侍。留めても留らぬ義強いお生れ。其處を彼のなぎさ様が。段々親人を和めて。何卒祝言したい夫婦になりたいと有るお詫に。道の親人もお主筋なれば。やうく心得して。奥様よりの附人にて。横目の喜平太殿がなぎさ様を同道。身共諸共大坂へ登りたるは。源五兵衛に篤と異見を加へ。なぎさ様と夫婦にせねば。親人の御機嫌よりは。御主人へ申譯。さも無ければ。源五兵衛は手討に逢ひ。命を失ふ斗りて無く。親人も身共も腹を切らねば成らぬ仕儀。さすれば是迄千島のお家にて。數代續きし勝間の家も退轉。其元はと云へば菊野。其方に源五兵衛が迷ふた斗り。親兄弟から世の人。御一家中の思は

く。假令死んだ跡でも阿呆の馬鹿者。人て無しと笑はれるが口惜い。其處を篤り合點して。氏神よりは和女を頼む。何卒源五兵衛と縁斷つて貰へば。弟が心も自然と直り。なぎさ様と祝言して。國へ歸れば親人の悦び。腹切る所か出世の御加増。サア夫じやに依つて。菊野和女に此兄が別ての頼み。菊野縁を斷れとは。那樣胸欲な事を。八左何卒得心して。菊野源五兵衛様に云交したは未だ間は無けれど。大分譯の有る事じやわいなア。八左サア何うて譯が無けりや云交されまい。そりや身共もよく聞いて知つて居るが菊野。云交した源五兵衛が和女。よもや憎い事は有るまいが。菊野知れた事憎うて人に惚られるものかいなア。八左其可愛い源五兵衛じやに依つて。身共が云ふ通りに縁斷つても。菊野退く事は成ませぬ。厭でムんすわいなア。ト立上り。奥へ行かうとするを押留め。八左待つた菊野。其方が源五兵衛と縁を斷らねば。親人の手に懸つて死ぬる。又縁を斷れば命を助かり出世する。其善悪は心一ツじや。諄うは云はぬ何方へなりと返事が聞たい。菊野サア思ひ廻せば廻す程。一旦は退かねば成らぬ譯なれど。八左夫程合點が往てあるじや無いか。菊野じやと云ふても。八左源五兵衛が身の納つた上では。有る縁なれば妾めかけになりと。菊野エ、八左又其時は相談の爲様が有らう。是が眞の浮世の義理情思ひ斷つて。菊野そんなら一旦源五兵衛様の身が納つたら。八左身共が請合。ト此内三五兵衛橋懸りより出懸け。最前より様子聞いて居て。三五菊野コリヤ得心して。縁斷つてやらねば成るまい。ト云ひく内へ這入る。八左ヤア三五兵衛殿。三五御舎兄様子は承つた。段々のお心遣ひ推量致して。何とも氣の毒千萬。八左忝う存じます。ト菊野。三五兵衛を見て思入有つて。三五ヤア。菊野サア色々思案して見れば。源五兵衛様の御身の御爲になる事なら。最前から兄御様のお頼み。私やよう合點が行きましたわいなア。八左ヤア。そんなら眞實得心して。菊野アイ私が退けば。親御様の御機嫌も直り。なぎさ様とやらと夫婦にならしやんす。源五兵衛様の御身の納りと有れば。兄御様のお頼みの通り。推量して下さんせいなア。トいろく思入あり。八左道理じや。よう得心してたもつた。夫てこそ源五兵衛も命を助ける。身共も慰むる。三五菊野出

來した。道里に背つた故に毒に毒が有つて。三五兵衛も感心。身共も一匹葉が心を懸け。當市での世宜。誠でも源五兵衛めをと思ふたが。又得心して見れば竹馬の朋友。武道に拘る義でも高て色の道。當つて確けと今ではさつぱりと思ひ斷つて。兎角源五兵衛が爲になる事なら。共々に世話する。これさ御舎兄。逆もの事を源五兵衛に見せずは。なぎさどの滅多に夫婦になるまいぞや。八左成程左様。併し色里の事は不案内の拙者なれば。其處へ宜しうお指圖を。三五然らば菊野。ト硯箱を取つて來て。菊野にあてがい。源五兵衛へ退狀を書いて遣りや。菊野エ、三五ハテ恠ういふ時宜を。微塵芥子程も知さぬが秘密。何か無しに厭になりて退いて了ふといふ一通りの退狀を。八左書いた物で無けりや。弟が得心致すまい。菊野そんならアノ退狀を書くのかへ。三五縁斷つたといふ確な證據。菊野如何やら夫では。八左ハテ一旦國元へ立歸つた上では。身共が呑込んで居るわいの。菊野若し源五兵衛様が誠に。イヤアノ誠に縁を斷るのじやに依つて。三五退狀が肝心。ト菊野思入有り。菊野私や胸に痞へて如何書いて可いやら。一向書けぬわいなア。三五そんなら身共が云ふてやらう仰書にしたが可い。八左三五兵衛殿。お世話ながら弟めがナ。篤りと得心致すやう。三五承知でござるサア菊野。ト菊野筆と紙を取上げ。是より仰書にて菊野始終こなし有り。マア其處へちよと一筆申上り。是まではそもじ様の段々御深切の程嬉しく存じりへどもどういふ事やら。俄に秋風とんと厭になりかしく。七りけんはい此上は。必ず逢に來て。お呉なへ。八左成程。菊野是では。三五ハテ篤りと聞えるやうに書かぬと。源五兵衛が爲にならぬ。八左左様。ト菊野始終のこなし有り。菊野爾して如何じやへ。三五逢に來てお呉なへもいや私は弟つりと思ひ斷つて居るに候○を好かん。ヲ、厭ヲ、嫌ひ。縁斷つたぞへ○ア、是では如何やら可笑しい文句じやわい。菊野ア、暫く遠ざかりりて可いわいなア。三五ちよと遠ざかりり。菊野申し可いかへ。八左サア承知。三五一寸遠ざかりり。○書いたかモウ夫て可い恐々謹言。イヤ爾うでは無い目出度も。菊野何の目出たい事が有つて。ツイトで可いわいなア。三五ソリヤ如何なりと。時に宛名はしつかりと。勝

間源五兵衛様參る櫻屋菊野判。イヤ判には及ばぬ。ドレ〜。ト取つて篤と讀み。八左衛門に見せる。八左衛門仔細らしく。八左是て宜しいかな。三五大方可らう。ト取つて篤と封じ。サア上書をして急用。菊野ナンノ運うても大事無い事を。ト宜しく書く内。八左衛門三五兵衛顔見合せ宜しくこなし。爾うして此文は誰に持して遣るのじやへ。申し兄御様。お前のお頼み。源五兵衛様の御身の上。何卒無事にと思ふから。彼の通りの文を上げるもの。八左これ女の恩は一生忘れぬ。菊野ア、頼が差迄来てたわいなア。八左ヤアそれは。三五これ〜。其處をよわつては。ト八左衛門にかけて。三五菊野酒で押せ〜。御舎兄も心着かぬ。奥へ伴ひ齎しに一つお勧めなされ〜。八左いかに菊野大事無くば。菊野コリヤ酔はにや如何も成らぬわいなア。三五ヲ、夫が可い〜。ト騒ぎ歌になり。八左衛門こなし有り〇三五兵衛跡に残りていろ〜。思入。三五時に此状を〇幸に彌助が来て居る筈じやが。彌助〜。と呼ぶ奥より。彌助ヲ、〜俺を呼ぶは誰じや。ト云ひ〜出て。ヤア三五兵衛様。今の首尾は好うムりますか。三五大極上々まんまと退状は。是此如く書したてや。彌助そんならきくのが得心して。三五往生つくめ。ナントえらいかえらからうが。彌助イヤけうといふ物でムります。三五彌助太儀ながら。其方は是を菊野が渡したと源五兵衛に届け。先達て云合した通り。ナ篤りと合點か。と狀を渡す彌助取つて。彌助お氣遣ひなされますな。一旦請合ふた此彌助。さす物じやムりませぬ。三五忝いコリヤ。ト紙入より小判二兩出し。些少ながら。其狀の飛脚賃じや。彌助コリヤ貳兩では高い飛脚賃。三五大事無い取つて置け。彌助マア忝い。そんならまあ此狀早う源五兵衛に。三五それが肝心。彌助一走り往て參りませう。ト歌になり。彌助狀を持つて向ふへ走り這入る。三五兵衛跡見送り。三五是からが理詰で菊野は身共に靡かにや成らぬ。ト旨いと云ふこなしの所へ。橋懸りより伴右衛門侍にて来て。伴右はは三五兵衛殿。先程より松坂屋に相侍つて居ります。三五伴右衛門。先達て御身に申合したこれ此。ト我刀を教へ置き。ナ千里一飛。出のあたてコリヤ。伴右ア其殿に付いて。拙者方より手前有れば〜。ト伴右衛門又三五兵衛に置き。三五いかにも。夫は誠着。眞事は篤と後程。伴右然らば松坂屋に相侍居る。三五大が御光が好うなつた。今暫は身共が立入る處へ。奥より菊野最前の三味線提げ。菊野ヲ、三五兵衛様。まだ爰にかいなア。三五菊野何じや〜。三味線を持つて酔ふたな〜。菊野心は酔はぬけれどむしやくしやするので。トこなし有つて三五兵衛。三味線を見て。三五其三味線にはてんかう書か。菊野エ、是かへ。三五五大力とは。菊野コリヤ歌の外題今日晝餘所の藝子様に教へて貰ふた五大力。古い歌なれどんと知らずに居たわいな。夫を忘れぬやうに弾かうと思ふて。滅相な見やしやんせ。三味線へ書いて置いたわいなア。三五五大力とは住吉じやな。菊野げに住吉や淺澤の。尊き寺と聞くからに。ト歌にて紛らす。三五菊野源五兵衛を退いた其方が今の心は。菊野さつぱりとしたわいなア。三五何を嘘らしい。やつぱり心が残つて有らうが。菊野そりや満更残らぬても無いわいなア。丁度殿達でも爾うじやげな。何ぞ代りが出来るまでは。如何しても思ふて居るものじやといな。三五ハアあの代りが出来るまで。菊野私等がやうな者は大體の事では。三五イヤ出来る。菊野エ、。三五早速今爰で出来過ぎである。菊野一體此三五兵衛は其方に。イヤこりや云いでも是まで篤りと合點の筈。一旦武士の意氣づく。思ひ斷つたと云ふもの。源五兵衛さへさつぱり譯が立つたからは。身共が心に随ふても菊野大事有るまいがな。菊野サア私も是まで段々口説いて下さしたお前。いつそ面當に。三五ヤア〜。菊野トサア思ふては居るけれど。若し女夫になつて。お國へ往た折には。同じ家中で朋輩の事。源五兵衛様と顔見合さねば成らず。夫も一旦退いたに依つてわしや構はねど。お前は如何やらあぢいな物じや無いかいなア。三五イヤそりや氣遣ひは無い。事に寄ると身共は國取大名になる。菊野エ、。三五サア今迄の様に千島の家中では居ぬ。途方も無い出世をして見せる。若し又夫が行損うても。甚麽事が有つても源五兵衛が。ト云はうとする。ちやつと止め。サア。源五兵衛とは顔見合さしはせぬ、一ツにも居ぬわいの。ト菊野思入有つて。菊野ソリヤまあ耳よりな。事じや

かにも。夫は誠着。眞事は篤と後程。伴右然らば松坂屋に相侍居る。三五大が御光が好うなつた。今暫は身共が立入る處へ。奥より菊野最前の三味線提げ。菊野ヲ、三五兵衛様。まだ爰にかいなア。三五菊野何じや〜。三味線を持つて酔ふたな〜。菊野心は酔はぬけれどむしやくしやするので。トこなし有つて三五兵衛。三味線を見て。三五其三味線にはてんかう書か。菊野エ、是かへ。三五五大力とは。菊野コリヤ歌の外題今日晝餘所の藝子様に教へて貰ふた五大力。古い歌なれどんと知らずに居たわいな。夫を忘れぬやうに弾かうと思ふて。滅相な見やしやんせ。三味線へ書いて置いたわいなア。三五五大力とは住吉じやな。菊野げに住吉や淺澤の。尊き寺と聞くからに。ト歌にて紛らす。三五菊野源五兵衛を退いた其方が今の心は。菊野さつぱりとしたわいなア。三五何を嘘らしい。やつぱり心が残つて有らうが。菊野そりや満更残らぬても無いわいなア。丁度殿達でも爾うじやげな。何ぞ代りが出来るまでは。如何しても思ふて居るものじやといな。三五ハアあの代りが出来るまで。菊野私等がやうな者は大體の事では。三五イヤ出来る。菊野エ、。三五早速今爰で出来過ぎである。菊野一體此三五兵衛は其方に。イヤこりや云いでも是まで篤りと合點の筈。一旦武士の意氣づく。思ひ斷つたと云ふもの。源五兵衛さへさつぱり譯が立つたからは。身共が心に随ふても菊野大事有るまいがな。菊野サア私も是まで段々口説いて下さしたお前。いつそ面當に。三五ヤア〜。菊野トサア思ふては居るけれど。若し女夫になつて。お國へ往た折には。同じ家中で朋輩の事。源五兵衛様と顔見合さねば成らず。夫も一旦退いたに依つてわしや構はねど。お前は如何やらあぢいな物じや無いかいなア。三五イヤそりや氣遣ひは無い。事に寄ると身共は國取大名になる。菊野エ、。三五サア今迄の様に千島の家中では居ぬ。途方も無い出世をして見せる。若し又夫が行損うても。甚麽事が有つても源五兵衛が。ト云はうとする。ちやつと止め。サア。源五兵衛とは顔見合さしはせぬ、一ツにも居ぬわいの。ト菊野思入有つて。菊野ソリヤまあ耳よりな。事じや

たものじや。彼あ云ふ事を聞いては。俺でさへ胸がくら／＼と沸却るやうなわいな。これ又お山なら。千人萬人の中に誠を立つるは只た一人。其一人はと思ふ事も有れど。藝子だてら餘りむちやじや。同じ家中の御連中に是見よがしに。いかに源五兵衛様が。粹と云ふて餘りな仕方じや。如何も済まぬ／＼ぞ。ト舞臺を叩いてにへる。菊野エ、何じやいの彌助殿。何も知もせいで○これいなア。ト源五兵衛にかけて。段々様子の有る事。そりやお前も合點が行くまい。ト二階を見て。サア合點して退いて下さんせ。私しや弗つりと思ひ斷ツて居るわいなア。源五そりや。ノ、如何なりと其方が心任せに致して呉うが。又身共も頼んだ。イヤ其方が頼んで慥うなると。源五兵衛身にも命にも替へぬ大切な。イヤ大切な金銀を打込んで。其金の威光で。口説落す事何ほも有る格。身共は又其大切な。サア金銀が拂底故。菊野大切な金銀が無い夫故に其方○其方に迷ふて居る。ナ夫も首尾よう。イヤ三五兵衛殿と申好う添遂なりと如何なりと。菊野アイそりやお前の教へイヤお前の教への通り。ト八左衛門へかけて。教へられぬわいなア。わしや三五兵衛様に。ナアお前に。トこなし有り。彌助コリヤ最う釋迦でも耐へられぬ。源五兵衛様お前が了簡さつしましても。如何も此彌助がいつそ。ト掴み蒐りに行かうとするを。源五ハテ扱其やうに立騒がいても云ふ事は云れる。マ、静まつて居よ大事無い。彌助エ、これ。トこなし有つて。三五源五兵衛殿。お腹が立つなら。右云ふ通り身共を存分に。如何様とも／＼。源五三五兵衛殿。愈菊野と。三五互に心底打明けてしツぱりと。源五アノ心底を。菊野イエ爾うじや。ト寄らうとする。三五兵衛引廻し最前の三味線見せ。三五これ○起請代りの此三味線。ト源五兵衛是を見ても。源五三五大切ム。こりや五大力を直して。三五三五大切と菊野が身共へ。菊野これいなア。ト云はうとして二階を見る。八左衛門こなし有り○サア此三味線の○エ、胴燃な。ト思はず持つて居る煙管にて。三味線を叩いて皮破る。三五兵衛引まくりて。三五添い。ト懐へ入れる。菊野も心着きはつとこなし。源五三味線は藝子の魂○コリヤ誠に。彌助取う取れかおれじや。ト行かうとする。源五兵衛留めて。三五ム。是が無。身共も弗つりと思ひ斷つた。

ト立上る。菊野イエ／＼それでは。トこなし有るを。三五兵衛留めて。三五これ源五兵衛も思ひ斷つたと／＼。ト傍へかける。菊野エ、と泣く。サア是から誰憚らず。菊野を身共が女房にしても。點の打ち人は有るまいし。彌助イヤ有る此彌助が。ト掴み付に行く。源五兵衛じつと。源五コリヤ里の女は彼あした者じや。彌助ても看す／＼。ト又きつとなるをこなし。源五ハテ人では無いわい。ト歌になり。源五兵衛思入有つて。彌助を留めながら向ふへ這入る。菊野こなし有つて。つか／＼と嘔出やうとするを。八左衛門下りて来て。八左菊野忝い／＼。菊野イ、エ僅た一言源五兵衛様に。三五最う可い／＼心底見えた。菊野マア其心底を○如何せうぞいなア／＼。トうろ／＼する。八左衛門は無性に悦ぶこなし。八左是で源五兵衛が身の納り。なぎさ様も早く是へお出なされ。菊野へお禮仰しやれ。ト兩人も降りて来る。なぎ菊野殿忝うござる。喜平奥様の仰せつけられた。身共役目も相立ち。八左お國へ歸參。三五身共も又。トこなし有りて。皆々此やうに目出たい事が有らうか。菊野此やうな悲しいことが有るかいな。ト泣く。三五これ／＼御舎見。此上は一時も早うなぎさ様を○合點か。ト八左衛門もこなし有つて。八左成程／＼御祝言を。取急げば身共お暇。菊野禮は緩りと。先づお二人を旅宿へ。三五夫が可い／＼。八左然らばなぎさ様喜平太殿。三人そんなら旅宿へ。八左御供仕りませう。とこなし有つて。菊野見て立戻り。八左菊野さま／＼思ふまい。藝子に似合はぬ。其やうに泣いてア、愚痴な。これ身共請合ひ、此方の身分さへ納れば。先程も云ふ通り。又如何様とも夫を樂みに。必ず／＼煩はぬやうにナ○とは云ふものゝ一筋に。思ひ込んだを。三五コレ／＼。ト八左衛門思入有つて。八左ムム又逢はう。ト合方になり。八左衛門喜平太なぎさをつれて門口へ出て。花道へ行き半ばにて立留り。こなし有つて。三人申しまふと首尾よう。八左三五兵衛殿の指圖で二人を頼んだ。ト懐より紙入出し。金壹兩出して。二人を頼んだ履賃。ト貳分宛渡す。かご太郎助忝い履れ仲居のおなみもお國の娘子。お浪かごの太郎助殿に横目の役人。八左鹽梅よう往た上は。三人元の姿に。ト花道にて手早く上着を脱ぐ。二人ながら元の世話形になり。八左衛門も衣裳羽織脱